私のリリカル・まじカオスな転生記

KUMAZAKURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私のリリカル・まじカオスな転生記

【Ｎコード】
Ｎ６１２６Ｕ

【作者名】
ＫＵＭＡＺＡＫＵＲＡ

【あらすじ】
物心が付いたころに前世の記憶を思い出したミッド出身で才能そこそこな主人公が…空回りしながら頑張る物語です（現在はオリジナル風味なＳｔｒｉｋｅｒＳ）

この小説は一人称のコメディちっくな話を目指しています。
基本的にメインがリリカルですが、テイルズネタ（＋その他）もたくさんあります。
お読みになる場合はそこのところを理解してお願いします。

序章1〜ぷろろーぐ

爽やかな日差しが差し込む早朝。

あまり人通りもない並木道を一人の子供が走っている。

「はっ……はっ……はっ……」

見た目、まだ5〜6歳程度といったところの少年…というより幼児の方がしっくりくる。

息はあまり乱れておらず、そのまま並木道は駆け抜ける。

そしてその先にある公園で走るのをやめ、歩く速度で中に向う。

そして大きな木の木陰にて停止し、息を整える。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ようやく息が整ってきたところでポーチからスポーツドリンクを取り出しあおる。

「ゴクッ、ゴクッ……ぷはぁっ！！」

そしてそのまま幹に背を預け座り込む。

「あ〜疲れたぁ……でも体力は資本だから……」

若干幼児らしくないセリフを言いつつ休憩し

「よし！　朝食前に戻るとしましょうか」

と立ち上がり、帰路につく。今度はゆっくり歩きながら……

どうも。

とりあえず自己紹介をしておこうと思います。

私の名前は『アペリス・ウラノ』愛称は『リース』

だが言っておく！　私は男である！　一人称『私』だが男である！

重要だから2回言いました。　でも漢ではないのであしからず……

突然だが私には前世の記憶がある。

俗に言う『転生者（笑）』だ。

ちなみに神様やトラックなどではなかった。

物心が着いた時には前世の記憶があったのだ。

出産直後ではなく、羞恥プレイがなくて心底安心したものだ……

正直な話、前世ではしがないサラリーマン人生を詰らなく生きていたため

転生キタ――――――（゜∀゜）――――――！！だった。

『私ｔｕｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅ！』とか『私ｓｕｇｅｅｅｅｅｅｅ！』には左程興味はなかったが、絶対に勝ち組ライフを過ごしてやると思い情報収集したのだが……

「まさかのリリカルですか…ないです＼（＾ｏ＾）／」

そう！　この世界はリリカルに登場するミッドチルダだったのだ。

個人の資質がモノをいうあの世界である。

就労年齢がおかしいあの世界である。

三権分立？　なにそれおいしいの？な世　（ｒｙ

この世界は勝ち組と負け組がハッキリしており、下手すると人生開始時点で負け組な可能性があるのだ。

あせった。メッチャ汗った。冷たい汗が出まくってた。

がそれも杞憂で、どうやら両親とも魔導師であり先天的にＡランク以上はあるそうだ。

ちなみに両親は父が聖王教会所属の騎士で、母は元管理局員（現在は専業主婦）だ。

父のランクは陸戦ＡＡＡ＋、母は総合Ａらしい。中々の高ランク魔導師な両親なのだ。

なので自分も先天的に高い魔力値を持っている。

なの破産（何故かこう変換された）には到底及ばないが悪くはないのだ。

だがこの世界は死亡フラグが蔓延している……

弱いと何も守れない。

この世界を生きるには、暴力にしろ、権力にしろ、力が必要なのだ。

そのため、幼い身でありながら、できる限りの力を付けている。

現在も早朝ランニングを終えたところである。

「はぁ…勝ち組ライフは未だ遠く……ですか」

そう言って朝なのに黄昏る。

見た目は幼児だが黄昏る。

「ん～とりあえず早く帰って朝食としますか」

そう言い帰路を急ぐことにする。

「はぁ……これから先どうなることのでしょうか……」

正直、前途多難である……

序章2～決意する幼児

前世の記憶を思い出して一番初めにしたのは現状確認だ。

その結果わかったのが、現在は新暦６５年だということ、ここがミッドチルダ極北地区のベルカ自治領だということ。

家族構成は聖王教会所属で教会騎士団の騎士をしている父と、今は引退しているが元管理局員の母の３人暮らしだ。

両親を名前で呼ぶことはなさそうなのでここでは割愛することとする。

決して両親を軽んじているわけではないが、普通自分の両親を名前で呼ぶ人はそうそういないだろう。

さて、ここで重要なのが現在の新暦である。

そう、新暦６５年は『リリカルなのは』の始まりである『無印』が始まる年である。

「まぁ、かかわるつもりはないからいーんですけど……」

年齢：２歳。
魔力：あるかどうかわからない。
場所：ミッド（↑ここ重要）

どう考えても、２歳のガキが行けるわけありません！

てか行って何ができると……

超テンプレのご都合主義な展開があってもゴメンだ。

とゆーより、基本的に危ないことはイヤだ。

暴力なんて絶対ダメ！　とは言わないが、現代人感覚的にあまり好ましくない。

「どーしましょーか……」

そこそこ考えた結果

とりあえず将来に向け、広い範囲の知識・技術を身に付けることにした。

スペシャリストではなくジェネラリストを目指す。

ＲＰＧでは確実に２軍落ちの選択だがな！

明確に将来設計が決まってから選択肢を絞っても悪くはないだろう。

若いうちは選択肢が多いのだ（、・ω・、）キリ

それからまずは魔力制御の練習をすることにした。

２歳児が筋トレしてたら恐ろしいじゃん。

ほら、魔法ってなんだかんだ言ったってあこがれるじゃないですか！

『ＥＦＢ』とか『３０歳過ぎてなる魔法使い』はマジゴメンだが……

とりあえずスフィアをイメージしたところビー玉サイズの魔力球ができた。

理論はまったくわからんができた。

自分はロジカルではないかもしれない。

前世ではプログラムの授業とか嫌いだったし……

次は宙に浮くイメージをしてみた。

３ｍｍくらい浮いた気がする。

余談だが某タヌキロボットも足が３ｍｍほど浮いているため靴いらずで現代を過ごしているらしい。

ここまででわかったのは、才能は並以上あるらしい。

あまり訓練をせずに空を飛べるのは先天的にＡランク以上であったハズなので、少なくともＡランク以上の魔力資質はあるようだ。

理論はまったくわからんが。

とりあえず5歳くらいまで魔力制御と知識習得を集中的にやっておくことにした。

幼いころから身体を鍛えるのはあまりよくないから、基本は体力作りのランニングだ。

両親は父も母も若くして就労していたからあまり息子の行動を不思議に思わないらしい。

ありがたいが現代人の感覚では若干問題ある両親な気もする……

てゆーかお母様、男なのに愛称が『リース』ってなんですか？

それスカートだよ！？　（基本的に）女の子が穿くものだよ！？

何？かわいいは正義？

かわいければオールオッケー？

気持ちはわかるが本人にしたらたまったものではない！！

父親譲りの金髪とアメジストの瞳に母親似の顔立ち……

でも男の子なの！！　男の娘ではないの！！　まぁ漢でもないけど……

閑話休題

本日のランニングを終え、帰宅しシャワーを浴びる。

その後、家族3人で朝食をとる。

いつもの風景だ。

少し濡れた髪が鬱陶しい。

腰まである金髪。切りたいといったらお母様に猛反対された。

そこまで娘が欲しかったのですかお母様……

まぁDQNネームでなかったのは不幸中（？）の幸いだ。

名前は出せないがアレらよりは相当ましだろう……

なんだか父さんが空気だが、コレがウラノ家の日常だ。

序章3～龍に出会う幼児

突然だが家族旅行に行くことになった。

なんでも新婚旅行すらしてない両親だったらしい。

あんまり世間一般の常識は通用しない両親なのかもしれない。

それはともかく旅行だ。

行き先はとある管理世界の自然が豊かなところらしい。

きれいな風景を見ても何も感じないが……私は枯れているのだろうか？

正直な話、魔法世界の遊園地の方が万倍興味あったがそこは自重する。

横でお母様が「旅行なんて初めてだわ～」と浮れているところを見ると言えない。

言えるわけがない。

てゆーかお母様、旅行行ったことなかったのか。

閑話休題

やって参りましたとある世界の観光地！

自然が豊か！　というか自然しかない気がするよ！

ホテルはないが予約しておいたペンションがあるらしい。

とりあえず荷物を置いてから行動とのことで、転送ポートのあるステーションから大きな湖の畔にあるペンションへ向かう。

歩きで……

いやさ、大自然の中を車というのはアレだからわかるけど徒歩はないでしょ……

もちろんランニングで体力を鍛えているため問題はないのだが、荷物背負った６歳児に１０ｋｍも歩かせるか普通……

とりあえずトレーニングと思うしかない……うん、これはトレー

ニングなのだ！

……両親の常識が本当に心配になってきた。

と、途中休憩や寄り道をしながら3時間かけてペンションに到着した。

いくら荷物を置いてからでも来た道を戻って観光はしんどいゆえ、寄り道だ。

まぁ及第点はあげてもいいかな、というくらいは楽しめた。滝とかキレイだったし。

ペンションに到着して少し休もうとしたところ両親が釣り道具を準備していた。

釣りをするのか、と訊ねてみると

「夕食の材料を釣りに行くのよ～」

どうやら自給自足らしい……

旅行じゃなくてサバイバル訓練の間違いじゃないのだろうか？

またひとつ両親の常識が心配になった。

お母様から釣り竿を受け取り湖の畔に行く。

父さんはひと狩り行くそうだ。Tシャツとハーフパンツスタイルで。

そんな装備で大丈夫か？と聞きたくなったがいざとなったらバリアジャケットなり騎士甲冑なり出すだろう。

一応は聖王教会所属の騎士なのだから。

草の上に座り、糸と水面の境界面を眺める。

お母様曰く

「これは『すごいつりざお』なのよ～！」

らしい。

でっかい角生えた赤い金魚とか青い竜王とか釣れたらマジでドンビキだが、どうやらそっち方面の釣り竿ではないらしい。

てゆーかその場合は生命の危機だ。

何も持たず草むらに入るのが大変危険なのがよくわかる。

少し離れたところではお母様が

「17フィッッッシュ！　ふっ、釣り尽くしてしまってもモーマンタイね！」

アングラーになっていました。

てゆーかそれは大問題です。

環境破壊です。

まぁそこまで釣れはしないだろうから大丈ｂ「18＆ａｍｐ；19同時フィッッッシュッ！」

大丈夫だろうか？

両親の常識もそうだが、湖の生態系も心配になってきた。

そんなことを考えていると自分の釣り竿にも何か引っかかったようだ。

一瞬引っ張られたが、その後の抵抗はなかったのでゴミか何かと思い、ゆっくりリールを巻いていく。

以外と重かったが問題なく引き上げていく。

骨とかだったらやだなぁ、などと思いつつ糸の先にあるものを確認する。

「これはないです…」

タマゴだった。

針が引っかかるところなどなかったが、糸と針が上手く絡まり引っかかったようだ。

変な模様があり、人間の頭蓋骨以上の大きさはある。

明らかにヤヴァイだろ！エイリアンとか生まれてくるんじゃないの！？

怖いので見なかったことにして、そのまま湖に投げようとしたところタマゴから音が！！

慌ててタマゴを落としてしまったが割れなかった…どうやら丈夫らしい。

いや不思議なご都合主義に守られているのかもしれない。

それもつかの間、タマゴが揺れている。罅が入ってきた。

ヤヴァイヤヴァ「３１，３２，３３，３４，３５！！５連フィッッッシュ！」

生態系も現在進行形でヤヴァイかもしれない。

とゆーより５匹もどこに引っかけているのさ？

そんなことを考えているうちに罅は全体に広がっていき……

「きゅう〜！！」

光とともに気の抜けた鳴き声が聞こえた。

恐る恐る見てみるとそこには

つぶらな瞳
青くて長い胴体？
エラのような耳かざり？羽？いやエラか？
口なのか鼻なのかわからん白くて楕円の……口？鼻？

……これなんてミニリュウ？

その日、幼児はドラゴンに出会った。

序章４～龍を託される幼児

「お持ち帰りぃぃぃぃ！！！」

３桁を超える魚を陸へと誘ったお母様がミニリュウ（仮）を見てのたまった。

かわいいは正義らしい。

そんなお母様を見てミニリュウ（仮）は私の後ろに隠れてしまった……とゆーか足に巻きついた？

とりあえず持ち上げてみる。

ぬるっとするかと思ったがそうでもないらしい。

胴体が長くて全部は持ちあげられなく、体長は１．２ｍくらいありそうだ。

「きゅう～」

と鳴きながら頬ずりしてきよった！

もしかしたら親もしくはマスター？と認識されたのかもしれない。

ヤヴァくない？タマゴから生まれた以上は親がいるはず…

ハクリューが出てきて『はかいこうせん』してきたら……デッドエンドじゃねぇ？

……そっとミニリュウ（仮）を湖に帰す。

「きゅう！きゅう！きゅ～……」

振り返るな！　振り返っちゃダメだ！　行け！行くんだミニリュウ（仮）！

某アライグマの最後を彷彿させるやりとりだったが無事？帰すことができた。

ただ沈んでいっただけかもしれないが……

お母様は感涙していた。

「うちの子供が立派になって…」

……お持ち帰り宣言した人のセリフではないな。

それもつかの間、急に天気が変わって曇り空になる。

なんか『ゴゴゴゴッ』と効果音が聞こえてきそうな空だ。

選択肢を誤ったかもしれない。

さすがのお母様も……って既に臨戦態勢だった！

『すごいつりざお』を構えている！

ちょい待て、何を釣るつもりだ……

「この急激な天気変化は湖の主が現れる前兆なのよ！！」

ネッ〇ーか？〇ッシーなのか！？

そう言っているうちに湖の水が一部分だけ盛り上がっていく！

そのまま現れたのは……

「キュウゥゥゥゥゥゥ！」

先ほど湖に帰したミニリュウ（仮）を頭に乗せたハクリュー（推定４ｍ）だった。

初代ではチート王ワタルの２番手、３番手。

金銀では１匹リストラ。

ポケスペでは『はかいこうせん』で街破壊。
よくハクリュウと誤記されるアレである。

よくもうちの子を！！

『はかいこうせん』→『めのまえが　まっしろに　なった』

のデッドエンドかと思ったがハクリュー（推定４ｍ）が近づいてきた。

この泥棒猫！！

『たたきつける』→『めのまえが　まっかに　なった』

のデッドエンドかもしれない。

などと思っていたらいきなりミニリュウ（仮）を私の腕の中に押しつけてきた。

わけもわからず突っ立ったままミニリュウ（仮）を受け取ってしまった。

ついでに首の水晶も渡してきた。

とれるのかよ！
飾りなのかよ！
そもそもこれなによ！
このミニリュウ（仮）をどーしろと！

複数の同時思考がハクリュー（推定４ｍ）の行動に対してツッコミを入れていた。

どうやらここにきてマルチタスクを習得したらしい。

だがこっちの混乱などお構いなしにハクリュー（推定４ｍ）は湖の中に去っていく。

去り際の背中は『後は託したぞ』と語っているようだった。

とお母様が言っていた。

結局は育児放棄やん。

そう思った私はおかしいのだろうか？

てゆーかマジでミニリュウなのか？

仮に正式名が違っても最終的にはあそこまで育つことがわかったのだ。

「きゅう～♪」

……どうやら相当おそろしいものを託されたようだ。

ピロリーン！

【かけだしトレーナー】の称号を得ました！

ピロリーン！

【謎の水晶（母の愛）】を手に入れました！

ピロリーン！

【マルチタスク（４分割超高速思考）】を習得しました！

序章5～運命に出会う幼児

【かけだしトレーナー】

説明：トレーナーとして第一歩を踏み出した者の称号
条件：初めて自分のポケモンを手に入れたとき
効果：向上心→　好奇心→→　一般常識←←
備考：俺たちの冒険はこれからだ！！

ピロリーン！

向上心が上がったような気がします！
好奇心旺盛になりました！
おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

……いらんわ！

結局、ミニリュウ（仮）を連れて帰ることになった。

親公認のマスターになってしまったようだ。

そんなこんなで早めに旅行を切り上げることになり、ミッドに向うことになった。

まぁ帰りも大変だった、と言っておこう。

この両親に一般常識を求めるのはやめることにしょう……

そしてミニリュウ（仮）はどうやら魔法生物に該当するらしい。

施設行きかと思いきやそうでもなく、種によっては申請して講習を受ければ飼うことができるそうだ。

あまり魔法生物を飼っている例は少ないがゼロではない。

原作でのキャロとフリードみたいなものだろう。

教会で登録ができるようなので父さんが早速手続きをしてくれた。

それでお母様と共に聖王教会本部に行き、受付にて必要書類を書いていたのだが……

「名前ですか……」

正直考えていなかった。

ポケモンはニックネーム否定派であった。

だがいつまでもミニリュウ（仮）ではかわいそうだ。

進化してもミニリュウ（仮）ではもはや虐待の域だろう。

……進化キャンセルってどうやるんだろう？

不穏なことを考えているとお母様が思いついたらしく……

「よし！　この子の名前はブルーアイｚ「この子の名前は『ハク』にしようと思います！」ホワイト……」

あぶなかった、社長嫁はマズイだろう。

お母様はやや不満げだが無視する。

「きゅっきゅう～♪」

ミニリュウ（仮）改めハクも嬉しそうだ。

無事登録が済み簡単な講習に入る。

まぁ一般的な常識範疇の再確認である。

１時間ほどで無事に講習が終わった。

あとは帰るだけなのだが、せっかく教会にきたのだから見学していきたいとお母様に言うと許可を貰えた。

お母様は友人とお茶をしてくるとのこと。

６歳児に一人歩きを許可するのもアレだが都合が良いのでスルーする。

トレーニングを兼ねハクを抱きながら教会の周囲を歩く。

さすがに生き物抱えて聖堂内部に入るつもりはない。

ある程度の常識は弁えている……つもりだ。

聖堂の裏側に行くと屋外修練場らしきものがあった。

時間的に誰もいなかっ……いや、誰かいる。

小さい子供だ。

年は自分と同じくらいだろう。

そんな子供が装飾剣のようなもので素振り……いや型らしきものをやっている。

「……うわぁ」

ついつい声が漏れてしまう。

到底子供とは思えないほどキレイな型だった。

中には少々ぎこちない動作も感じられるが、それを補ってなお魅せる何かを感じる。

とさっきの声でこちらに気づいたようで型を中断した。

そしてこちらを振り向ｋ「誰だお前は？」

「いや、あなたこそ誰よ？」

そう返した私は悪くないと思う。

自分から名乗った上で尋ねるのが常識だと思います。

「ふん！なら別にいい。邪魔だからさっさと立ち去れ」

「ここは公共の場……とまでは言わないけれど、あなたの許可をもらうような場所ではないでしょ？」

ちょっとからかってみたくなったのでそう返答すると……

「そうだな……」

と言い……

「目ざわりなんだよ…僕の目の前から……消えろ！」

斬りかかってきやがった！

いや寸止めで脅しのつもりだろうが……

≪寸止めなら何もしない方がいい？≫

≪受ける？　それとも避ける？≫

≪てゆーか短気すぎだろ！？≫

≪今日の夕食はなんだろうか？≫

瞬時に思考がマルチタスクに切り替わる。

一部おかしいが気にしない。

≪寸止め？　本当に？≫

≪ハクを抱いているのに避けられるか？≫

≪誰かに似ているなこいつ…≫

≪昨日はシチュー（らしきもの）だったなぁ≫

左上方より首筋めがけて装飾剣が迫る！

≪無理！　受け止めろ！≫

≪左手を使って受けろ！　ハクはそのまま右手で支える！≫

≪イメージしろ！　この一撃を受けられるイメージを！≫

≪あっ今日は外食だって言ってたっけ≫

この間わずか０．１秒。マルチタスクまじパネェ！

キィィィィィィン！！

「なっ！？」

短気な子供の驚いた声が聞こえた。

向こうは寸止めするつもりだったが、不意打ちの一撃を受けられたのだ。

左手から展開した魔力刃によって。

受け止めるイメージが盾じゃなく剣だったためこうなった。

止められてよかったぁぁぁぁ！

攻撃は最大の防御ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！

とまでは言わないが、防御するくらいなら回避か攻撃の方が性にあってる。

形状はあれだ。

薬味な断罪の剣。

もちろん相転移な力はない。

なんちゃって断罪の剣だ。

イメージだけで再現できるとは……マジリリカル！

妄想乙！

左手を振り払う。

「くっ！」

短気な子供がよろける。

私は魔力刃（なんちゃって断罪の剣）を消しながら短気な子供に言った。

内心は超ビクビクだけどね！

「手荒いご挨拶痛み入ります。」

皮肉を込めて言い放つ。

「受け止めておいてよく言う……」

忌々しげに短気な子供が呟く。

「では自己紹介でもしましょうか？私はアペリス・ウラノ。この子はハクと言います。さてあなたのお名前はなんというのですか？」

お前絶対に６歳児じゃねぇだろ！

と外野からツッコミがありそうだが無視して、丁寧に自分の紹介をしてから相手に尋ねる。

これが一般的に相手の名前を尋ねる態度なのだよ！わかったか短気な子供よ！

「……失礼した。確かにそうだな」

反省したような自分の非を認めるセリフなのにどこか高圧的に感じる。

そもそも睨んでるし！

「ふんっ。僕はエミリオ・G・カトレットだ。覚えたらさっさと用を済ませて立ち去れ」

なんですと？

黒髪だ……装飾剣も良くみるとアレに似ている。

おまけにツンデレ（現在デレなし）な感じがする。

ついつい凝視していると……

「……まだ何かあるのか？」

そう言ってにらみ返してｋ【きっと坊ちゃんの美貌に慄いているんですよ！】

いきなり陽気な声が装飾剣から聞こえてきた。

「シャル！　お前、また……！」

【いやぁ～でも中々やりますね！　坊ちゃんの一撃を受け止められるなんてスゴイですよ！】

なんか褒められた。

でもはっきり言って偶然てゆーか奇跡というか……

【あっ僕は坊ちゃんのデバイスでシャルティエといいます！】

「シャル！　お前の自己紹介などいらん！」

【えぇ～ひどいですよ坊ちゃん！　横暴です！　出番下さいよぉ！】

二人（？）のやりとりは続いている。

言い方はあれだが仲は良さそうだが……

エミリオにシャルティエ……

……これなんてデスティニー？

この日、幼児は運命に出会った。

ちなみの今回の空気はハクだった。

ピロリーン！

【なんちゃって断罪の剣】を習得しました！

ピロリーン！

【ポーカーフェイス】を習得しました！

序章6～心友に出会う幼児

唖然として二人（？）のやりとりを眺めること３０秒ほど……

エミリオがようやく気付いたようで

「なんてアホ面をしている？　用がないならさっさと行け」

【坊ちゃん！　ダメですよそんな言い方！　お友達できませんよ！】

「黙ってろシャル！　そもそもそんなものはいらない！」

そうとう捻くれた性格のようだ。

「え～っと、エミリオ君にシャルティエ……さん？」

「気安く呼ぶな！」

【もう坊ちゃんったら！　あっ僕のことはシャルティエと呼び捨てで結構ですよ～】

「シャル！」

なんという凸凹コンビ……

「え～あ～さっきも言ったけど、私はアペリス。愛称はリース。まぁ好きに呼んでもらって構わないだけど、一応『男』だから……」

「……」

【……】

「きゅう～♪」

ハクが空気を読んでくれた。

こいつら勘違いしてやがったな。

「……一応聞いておくが「親の趣味です」……そうか」

ん？　エミリオの剣呑な雰囲気がなくなった？

なんか憐みというか同情というかそんな目をしている気がする。

そんなエミリオの心情を代弁するようにシャルティエが

【いや～まさか坊ちゃんと同じ境遇の人に出会え……】

それ以上は続かなかった。

エミリオがシャルティエを投げ捨てたからだ。

【坊ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁん！】

宙を舞いながら叫ぶデバイス。

正直ウルサイ。

とりあえずエミリオの態度とシャルティエのセリフから推測した

結果をエミリオに尋ねてみる。

「あの……あなたも「言うな！」……えっとごめん」

「「……」」

「きゅう～？」

相変わらず空気を読む相棒だ。

が気まずい空気だ。

「あの……あなたはどうやって……」

逃れたの？

気まずいのでそう聞いてみると

「……騎士になると、そう言って聖王教会で騎士をしている叔父夫婦の家に……」

「そっ、そうなの」

「ああ……」

また重～い空気が流れる。

「きゅうぅぅ……Ｚｚｚ」

空気を読んでくれる相棒も飽きて寝てしまったらしい。

「「……」」

そんな空気を切り裂くように……

【ひどいじゃないですか坊ちゃん！　いきなり投げるなんて！　せっかく…ってまたぁぁぁぁぁぁ】

飛んで来て飛んで逝った。

シャル乙！

「さっきのアレ……お前は剣か格闘技でもやっているのか？　いや、そんな動きではなかったか…」

今度はエミリオが訪ねてきた。

いやぁわかる人にはわかるもんなんだね。

「ううん、まだ特にやってないんだ。毎日ランニングとか柔軟の基礎はやってるんだけど……あっ魔力制御の練習もしてるんだけどね」

すなおにそう答える。

それを聞いてエミリオは驚いた表情をした後、下を向きぼそぼそと呟く。

「……そんな素人に受け止められたのか」

お前はそんな素人に（寸止めとはいえ）切りかかったんだよ。

と心の中でツッコミを入れておく。

っとようやくエミリオが顔をあげて

「ふん……悪かったな。僕は平日のこの時間は大抵ここで練習している。来るなら勝手にしろ」

「えっと、その……」

「来るのは良いが僕の邪魔はするなよ！」

デレ……た？

「あっ、ありが……とう？」

「ふんっ！」

そう言ってエミリオは後ろを向いた。

そしてシャルティエの方に歩き出しながらこう続けた。

「……話くらいは聞いてやる」

なんかフラグがたったらしい。

エミリオはそのままシャルティエを取りにいく。

そして……

【うぉぉぉぉ！　とうとう坊ちゃんにお友達ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ】

シャルティエが星になった。

ムチャしやがって……

まぁそんなこんなで、どうやら私にも友人（という名の被害者盟友）ができたらしい。

エミリオも行ってしまったので私も戻ることにする。

けっこう時間をくったようだ。

まぁ出会いがあったから良しとしよう。

しかしエミリオの剣（注：シャルティエではない）は本当にキレイだった。

てゆーかエミリオ何歳よ？

良くも悪くも同世代の子供の対応じゃねぇよ。

きっと相当苦労してきたのだろう。

苦労は人を育てると言うし。

私も体力作りだけではなく、そろそろ本格的に格闘技でも始めようか。

ついでにハクも鍛えるか。

そんな事を考えながらお母様のところに向う。

こころなしか軽やかな足取りで……

その日の夕食はコンビニ弁当だった。

さすがにペットが一緒じゃあ空気と化してもいてもダメだった……

ピロリーン！

【甲種準一級フラグ建築士】の称号を得ました！

序章7～修行を始める幼児

【甲種準一級フラグ建築士】

説明：ツンデレをデレさせフラグを立てた者の称号
条件：初めてツンデレをデレさせた
効果：主人公補正→　一般常識←←
備考：油断すると乙種（死亡フラグ）になるかも……

ピロリーン！

主人公補正が付きました！
おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

これもか！

エミリオに会うため、翌日にまた聖王教会本部に向う。

教会までは定期便が出ており、友達ができたので会ってくるとお母様に伝え、定期券と1人で行く許可を貰った。

お母様も会ってみたいと言っていたが、エミリオのトラウマを抉らないためにも連れていかない方がいいだろうと思い、もっと仲良

くなってからと言っておく。

残念そうだったがなんとか納得してもらえた。

エミリオの危機を未然に防ぐことができたようだ。

ハクを連れて教会裏手の屋外修練場に向かうとちょうど休憩中のエミリオがいた。

「こんにちはエミリオ君、シャルティエ」

「ふんっ……エミリオで良い」

【こんにちはリースさん！　いやぁ坊ちゃんにも……ってまだ何も言ってないじゃないですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ】

シャルティエが空を舞う。

「不用意な発言をしようとするからだ」

いや早すぎるでしょ？

まぁ昨日の言動を見るに言おうとしていたことは推測できるが……

「ところで昨日もいたが足元の生き物はなんだ？」

どうやらハクが気になる様子。

うん、なんか見た目よくわからない生き物だもんね。

「昨日もいったけどこの子はハクっていって、旅行先の管理世界で出会って飼うことになった……ドラゴン？」

「きゅう～？」

「自分で言っておいて疑問形で返すな……要はペットということか」

「まぁ概ねそんなとこだね」

進化するとペットの範疇ではないと思うが……

こっちからも気になってたことを訊くことにする。

「エミリオっていくつなの？私は６歳なんだけど……」

「僕もお前と同じだ」

どうやらエミリオは同い年のようだ。

絶対に態度とか言動とか６じゃないよね。

そんな怪訝そうな顔をしていると……

「必死に抗って生きてきたからな……」

「ゴメン……」

もう既に修羅の道を歩んできたようだ。

もうひとつ気になっていたことを訊いてみることにする。

「エミリオの型って凄いキレイだよね。どんな人に習ってるの？」

そう、この年齢であれほどなのだ。

もちろんエミリオ本人の才能の割合も大きいだろうが……

「それは……【よくぞ訊いてくれました！　坊ちゃんの師匠はこの僕！　ピエール・ド・シャルってまたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ】……はぁ」

良く飛ぶデバイスだ。

「デバイスが師匠なの？」

そう訊ねてみるとエミリオが教えてくれた。

シャルティエは古代ベルカ諸王時代に生きた騎士、ピエール・ド・シャルティエの記憶・人格を入れたインテリジェントデバイスらしい。

正確には当時はソーディアンと呼ばれる試作機だったらしい。

そもそも古代ベルカなのにインテリ型っておかしいしね……

うん、ですてぃに～だ。

休憩後エミリオはまた型の練習に入った。

邪魔するなと言われているので、少し離れたところで自分たちの修行を始めることにする。

この修練場は受付に言えば基本的に誰でも使用可能らしい。

平日のこの時間は業務のためか人はいないが……

「じゃあいくよハク！ちゃんと避けるんだよ！」

「きゅう！」

伝わったのだろうか？　心なしか戦闘態勢に見えなくもないが…

まぁいいか。

野球ボールサイズのスフィアを３つほど作成する。

「Ｇｏ！」

そのスフィアをハクに向け撃つ！

「きゅっ！　きゅう～きゅっ！」

そしてハクがそれをかわしつづける。

プチ弾幕ごっこだ！

スフィアは誘導弾で制御の修練も兼ねている。

３つだけだと修行にはならないので徐々に数を増やしていく。

自分意思で完璧に操作できるのは７つまでなのでそれ以上は増やさない。

今度はスピードを上げていく。その次は動きを複雑にしていく。

またスフィアの一部はハクになるべく当てないようにも操作して

いる。

そうやってハクと自分の修行をしていく……

ボンッ！！

「きゅきゅう～…」

あっピチュった。

さすがにまだ生まれて数日だもんね……

ハクは一応覚えていた治癒魔法をかけて寝かしておく。

ハクが寝ている間は魔力刃の制御練習だ。

左手でなんちゃって断罪の剣を発動する。

それを維持しながらエミリオの型を真似て振るってみる。

「んっ、気を抜くと消えそうになるかも……」

まだまだ修練が必要だ。

また、大きさや形状もイメージして変えてみる。

多少大きくなったり細くなったりする程度だった。

どうやら基本形からはあまり変えられないみたいだ。

「きゅう～？」

さて、ハクが起きたようなので第2ラウンドを開始することにしよう……

ピロリーン！

【初めての弾幕ごっこ】の称号を得ました！

序章8～水晶の謎にせまる幼児

【初めての弾幕ごっこ】

説明：初めて弾幕ごっこをした者の称号
条件：初めて弾幕ごっこを実践した
効果：集中力→　回避力→　忍耐力→　妄想力→→　一般常識←←
備考：ｖｅｒｙ　ｅａｓｙです

ピロリーン！

集中力、回避力、忍耐力が若干上がりました！
妄想力がぐいーんと上がりました！
おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

もういいよ……

再びハクがピチュッたので今日はここまでにする。

また治癒魔法をかけて寝かしておく。

エミリオも今日はもう終わりにするようで、型をやめてスポーツ

ドリンクを飲んで休んでいた。

一応帰りの挨拶をするため、寝ているハクを抱き抱えエミリオの方に向う。

「お疲れ様エミリオ。私も今日はもう帰ることにするよ。また明日も良いかな？」

「ふんっ。勝手にしろ。ここは公共の場なのだろう？」

素直じゃないな～さすがツンデレ剣士、口には出さないが……

「あっそうだ！　ねぇエミリオこれってなんだかわかる？」

この間ＧＥＴさせられた【謎の水晶（母の愛）】を見せてみる。

うちの両親もこれがなんなのかわからなかった。

無限書庫にでも行って調べようとも思っていたが、司書の資格がないと使用手続きが面倒なので、それは最終手段にしておく。

まぁ早いうちに資格は取っておく予定だが。

「なんだコレは？　見た感じは水晶のようだが……シャルわかるか？」

【えぇ～なんですかぁ？　営業時間は終わりましたよぉ～】

シャルティエはなんかやさぐれていた。

剣なのに飛んでばっかりだもんね。

「いいからどうなんだ？　知っているのか？　それともお前は僕の話を理解すらできないポンコツキ〇ガイデバイスなのか？」

エミリオひでぇ……

まぁシャルティエは自業自得だが。

【……泣いてもいいですか？】

「泣けるならな、ただし音は出すなよ」

擬音表現すら許されなかったようだ。

【・。・（つД｀）・。・】

器用な剣だな……

閑話休題

「え～っとコレなんですけどシャルティエわかる？」

【ん～どれどれ……ってこれエレメンタルスフィアじゃないですか!?】

「ほう、知っているのかシャル？」

「シャルティエ、エレメンタルスフィアってなんなの？」

どうやらシャルティエは知っているようだ。

てかエレメンタルスフィアってなんぞよ？

【簡単に言ってしまえば魔力ブースト効果のある天然の水晶なんですが……】

えっ魔力ブースト？それだけ？

【このエレメンタルスフィアは魔力ブーストと魔力を自然エネルギーに変換する能力があるんです】

「自然エネルギーに変換できるってことは、炎熱とか電気とか魔力変換資質持ちと似たようなことができるってこと？」

それなんてチート？

【理論上はそうですね。コレをデバイスのコアにするとあるいは……】

厨二まっしぐらやん!!

すると何やら考えていたエミリオが

「シャル、それほどのものならばロストロギア……とまではいかないが個人持ちは厳しいじゃないのか？」

そう！　確かにそんなもん研究とか利用とかできれば戦略兵器できるんじゃないの？

と思ったのだが

【いえ、確かにすごく稀少なんですが、研究に成功した例がなく、あくまで理論上に過ぎないので、そこまで重要視されていないんですよ。一説では水晶自体が意思を持っていて持ち主を選ぶとか……】

どうやら持っていても大丈夫のようだ。

【教会にもサンプルがありますしね】

「そっか。ちょっと残念だね。まぁわかっただけでも良しとしますか」

まぁわかっただけでも僥倖だ。

「んっ、ありがとうエミリオ、シャルティエ」

【どういたしましてぇ～】

「ふんっ、もしそれでデバイスを作る気があるなら言え。僕の父は考古学者兼デバイスマイスターをしている。まぁ水晶をダメにする可能性の方が高いかもしれんがな」

「そうなの？デバイスは欲しいけどタダじゃないから親と相談するね」

やっぱりデバイスは欲しいもんね。

「うん、改めてありがとうエミリオ、じゃまた明日ね！」

「ふんっ、勝手にしろ……」

はいはいツンデレツンデレ。

【いやぁ～坊ちゃんも……ってまだ何も言ってないじゃぁぁなぁいでぇすかぁぁぁ！】

シャルティエは再び星に帰った。

君のうっかりスキルがダメなんだよ……

未だ寝ている空気（ハク）を抱えて帰路につく。

うん、充実した1日だった。

帰ったらデバイスの話をすることにしよう……

ピロリーン！

【謎の水晶（母の愛）】が【エレメンタルスフィア】に更新されました！

序章9～デバイスを作る幼児

家に帰って早速お母様に水晶（エレメンタルスフィア）のことを話してデバイスの件を伝える。

二つ返事でＯＫがもらえた。

うん、もう少し悩んで欲しかった。

まぁせっかく許可が下りたのだからデバイスを作ってもらうことにしよう。

翌日も聖王協会本部に行き、エミリオにデバイスの件を伝えた。

「ふんっ、まぁいいだろう。明日紹介してやる」

【もう坊ちゃんったら！　頼りにされてうれｓ…ってまたぁぁぁぁぁぁ！】

ほんとに良く飛ぶデバイスだ。

さて今日も昨日に引き続き修行をすることにする……

その翌日、エミリオに会いに行くと

「ふんっ、案内してやるからついてこい」

練習をやめて案内してくれた。

シャルティエが言いかけたとおり頼りにされるのが嬉しいのだろうか？

てゆーか「ふんっ」から始まるのがクセなのか？

エミリオが案内してくれたのは教会本部の一室だった。

どうやら来賓控え室のような場所らしい。

「エミリオです。昨日お話しました件について参りました」

きちんとノックして丁寧に目的を述べてから入室する。

実の父親に対する態度じゃないなぁとは思ったが他人の家庭事情まで首はつっこまない。

てゆーかエミリオお前さ、目上にはきちんと対応できるのね。

こっちには最初斬りかかってきたクセに……

エミリオの後について入室すると、学者風だがダンディーなおじ様がおりました。

「やぁ、君がアペリス君か。私はエミリオの父でヒューゴという。よろしく頼むよ」

ヒューゴさんキタ――――（ 。∀ 。）――――!!

さすがにミクトランは……いないよね。

「初めましてアペリスといいます。今日はわざわざお越しいただいてありがとうございます」

挨拶はきちんとせねばな。

「早速で申し訳ないがエレメンタルスフィアを見せてもらえないだろうか？」

やはり学者として興味があるのだろうか？

とりあえず渡すことにする。

ヒューゴさんはしばらくそれを眺めながら何かを考えているようだ。

「その水晶でデバイス作りは可能なのでしょうか？」

エミリオがヒューゴに尋ねてくれた。

これでできなかったら無駄足だもんね。

「うむ。ブースト型デバイスとしては問題ないだろう」

おぉ！　どうやらデバイス作成は可能らしい。

が、ヒューゴは「だが」と続ける。

「自然エネルギーの変換まではできるかわからない。あれにはまだまだ解明されていないことばかりだからな」

厨二は先送りのようだ。

「君さえよければ早速デバイス製作にとりかかるが、どうするかね？」

「是非お願いします」

迷うことはないのでそう答える。

「では製作にとりかかるとしようか。ふむ、時間は1週間といったところか。できあがったらエミリオに伝えることにするから今日はもうおひらきとしよう」

何か嬉々としている感じがする。

根っから学者、研究者体質なのか？

まぁ何はともあれ1週間後が楽しみだ。

さて完成までの1週間だが相変わらずの修行だ。

ハクの回避も上達している。

しかも反撃の『でんじは』らしきものを撃ってきた。

もしかしてレベルが上がったのだろうか？

ちなみにシャルティエは相変わらず空を飛んでいた。

そんなこんなで1週間、ついにデバイスが完成したらしい。

今回はヒューゴさんが修練場に来てくれた。

試しに使用させながら説明するらしい。

「うむ、これが完成した君のデバイスだ」

そういって以前とあまり変化ない水晶を渡された。

いや紐というかチェーンというかネックレス型にはなっているのだが……

「水晶自体は加工できないので形はそのままだが、きちんとしたデバイスになっているので安心したまえ」

と補足してくれた。

「名前とかは決まっているのですか？」

ＤＱＮネームだったらいくら高性能でも使いたくはないからな。

「いや、君が決めてくれたまえ」

「わかりました。ちなみこのデバイスの特徴は……」

名前を決める上で重要なことだと思い訪ねてみると……

「うむ！よくぞ聞いてくれた！　このデバイスは基本的にはブースト型デバイスで補助魔法に適しているが、それだけではないのだ！

なんと！　なんと！なぁぁぁんと！！　一部ではあるが自然エネルギー変換の力を使用することができるのだぁぁぁぁぁぁぁっごほっごほっ！！」

キャラ崩壊しました。

そっとエミリオの方に見ると、目を逸らされた。

どうやら父親にも苦労しているらしい。

てゆーか自然エネルギー変換できるの？

厨二まっしぐら決定ですか。

とりあえず訪ねてみることにすると

「一部と言っても直接的魔力を炎や電気にできるわけではないのだ。エレメンタルスフィアはそれぞれ特徴があるようで、これの場合は大気中の『水分』と『温度』を操ることができるのだよ」

大気中の『水分』と『温度』？それって範囲を大きくすれば『天候』を操れるってことじゃないの？

確かハクリューの図鑑では天気を操れるとか書いてあったような…

「うむ！　天候とまではいかないが凍結や電気の魔力変換に近いことができるだろう」

どうやら厨二デバイスを手に入れてしまったらしい……

ピロリーン！

【エレメンタルスフィア】が【厨二デバイス】に更新されました！

ピロリーン！

【魔法使い始めました】の称号を得ました！

序章１０～ショッキングな出会いをする幼児

【魔法使い始めました】

説明：初めてデバイスを手に入れた者の称号
条件：初めてデバイスを手に入れた
効果：全ステータス→　一般常識←
備考：魔法使いの第一歩！さぁあなたも一緒にレッツ・リリカル♪

ピロリーン！

全ステータスが少しだけ上がりました！
おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

あきらめよう……

「さぁ個体名称を登録して起動してみたまえ」

私の心情など知らずヒューゴさんは起動を急かす。

とりあえず起動してみるか……

「マスター認証　『アペリス・ウラノ』」

手順に乗っ取って起動していく。

「正式名称……『セイクリッド・スカイ』」

なぜかその名が頭に浮かんだのだから仕方ない。

略して『セカイ』…自分で言っておいて後悔した。

どっかでヤンデレフラグを立ててしまったかもしれない……

【マスター『アペリス・ウラノ』デバイス名『セイクリッド・スカイ』登録完了しました】

登録されてしまったようだ。

うん、強く生きよう……

「セイクリッド・スカイ！　セット・アァァップ！！」

ヤケクソだ。

どうとでもなれ。

【セイクリッド・スカイ起動します。バリアジャケットのイメージをお願いします】

デバイスに冷静に返された。

……悲しくなんてないんだからね！

しかしバリアジャケットかぁ…選択肢（イメージ）をミスると終わりかも……

6歳児にはアレだが、無難に制服型にしておこうか。

「よし！　改めてセ～ト・ア～ップ！！」

一瞬だが光に包まれる。

光が収まった後に自分の姿を確認してみる。

「うん、イメージ通り？」

イメージしたのはとりあえず白い制服系統の格好だ。

髪は邪魔になるので後ろで括っている。

でもこれは…この姿は誰かに似ているような……

なんか僕っ子で男装ヒロインのような……髪も眼も……ぶっちゃけシャル……

いや、気のせいだ。

気にしたら負けなんだ……

無事起動を終えたところでヒューゴさんが試してほしい術式があるとのことなので早速試してみる。

「セイクリッド・スカイ！　試験魔法1発動！」

多少長くても『セカイ』とは呼ぶものか！

【拝承。試験魔法1発動します。ターゲットを選択して下さい】

ん？　ターゲット選択？

疑問に思っているとヒューゴさんがターゲットを指定。

サンドバックらしきものを狙う。

【試験魔法1発動】

うぉっと、ごっそり魔力を持っていかれた感じだ！

その一瞬だが目を逸らしてしまったため、改めてサンドバックを確認すると……

「……コレなんてぜったいれいど？」

サンドバック周辺が完璧に凍りついていた。

辛うじて砕けてはいなかったからＥＦＢではないだろう。

「うおぁおおおおおお！！　成功したぁぁぁぁぁ！！　私の理論はミッド一いいいいいいいいいいいいいっごほっごほ！！！」

ヒューゴさんがスゴイことになってる。

エミリオの顔を見ることができそうにない……

そして試験魔法1ということは2もあるわけで……

「……コレなんてインディグネイション……？」

魔力を使い果たしぐったりしながらサンドバックの行く末を眺める。

一発で魔力を相当持っていかれた。

ちなみにサンドバックは跡形もなく消滅している。

「ＨＡＨＡＨＡ

集まってきた人が帰っていく中で1人だけ頭を抱えながらこちらに向ってくる女性がいる。

纏っている空気が……表現できないくらい淀んでいる。

「……またですか……またあなたなんですねジルクリスト博士……」

逃げてほうが良いのだろうが魔力の枯渇からくる疲労感で動けそうにない。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ……んっ？　グラシア嬢ではないｋ……」

それ以上の言葉は発言すら許されなかったようだ。

見事なスカイアッパーだったとだけ言っておこう。

「また修練場を破壊して……」

修練場の破壊も複数回やっているらしい。

「あら？　あなたは？」

ヒューゴさんを華麗に葬った後、こちらに気付いたらしく訪ねてくる。

とりあえず事の顛末を話す。

話している内に纏っている空気がヤヴァくなってきた。

「……」

美人の無言ってすごく怖い……

「えっと……お、お姉さん？」

「……いいのよ。悪いのは全部このオッサンなんだから……ベルカが滅んだのもミッドに月がふたつあるのも管理局が黒いのも全部このオッサンのせいなんだからぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

スケールでけぇよ！

てゆーかメタな発言しないで！

「はぁはぁはぁ……取り乱してごめんなさいね」

一通り叫んで落ち着いたようだ。

「あの～あなたは？」

こちらの説明はしたが相手の話は聞いていなかった。

そういえばさっきヒューゴさんが……

「あぁ！　ごめんなさい！　自分の自己紹介を忘れていたわね。私は聖王教会　教会騎士団所属カリム・グラシアよ」

うっわぁあお！

あの年齢不詳で預言持ち、聖王教会と管理局を股にかけるお姉さ

ますよ！

ここにきて初めて原作キャラと（物理的にショッキングですが）出会いました……

ちなみにエミリオ、お前こうなることがわかってただろ……

エミリオには後で復讐することにしよう。

ピロリーン！

【厨二デバイス】が【セイクリッド・スカイ】に更新されました！

ピロリーン！

【オリ主候補生】の称号を得ました！

ピロリーン！

【なんちゃってぜったいれいど】を習得しました！

ピロリーン！

【なんちゃってインディグネイション】を習得しました！

序章11～えぴろーぐ

【オリ主候補生】

説明：初めて原作キャラとの接点を持った者に与えられる称号
条件：初めて原作キャラに遭遇した
効果：全ステータス→→　フラグ率→→　一般常識←←←
備考：オリーシュとは別物です

ピロリーン！

全ステータスとフラグ率がやたらと上がりました！
一般常識？なにそれおいしいの？

＼（＾ｏ＾）／

「ふふっ、お味はいかがかしら？」

「とてもおいしいですカリムさん」

「まぁ悪くはないな……」

現在カリムさんの執務室でエミリオを含め３人でお茶しています。

ヒューゴさんは目覚めた後、再びスカイアッパーからの空中コンボで沈みました。

惚れ惚れしそうなコンボでした。

気絶した（正確にはさせられた）ヒューゴさんはシスターに引きずられ運ばれていった。

その後、彼の行方を知る者は誰もいなかった……

冗談はさておき、カリムさんがお詫び（？）にお茶でもどうかと言ってきたのでエミリオを連れ戻し、ハクを噴水に入れてからここにやってきて今に至る。

さすがに生き物を連れて聖堂内部には入らないよ？

まだ残っている（と思われる）常識的にね。

（注：ミッドでは自分の所有敷地外でのペットの放置は基本的にダメです）

ちなみにカリムさんとエミリオは知り合いらしい。

とゆーよりヒューゴさんのせいで互いに苦労しているらしい。

うん、ドンマイ。

ところでカリムさんは何歳なのだろう……？

思い切って訪ねてみようとすると凄い悪寒がした。

どう尋ねてもデッドエンドしか見えてこない。

世の中には触れてはいけない法則（おきて）があるようだ……

穏やかな雰囲気でお茶会をしているとカリムさんが切り出してきた。

「エミリオ君のことは（被害者盟友のため）知っているのだけど、君のことも聞いていいかな？」

まぁ事の顛末くらいしか説明してないからな。

「あっはい！　私はアペリス・ウラノと言います。年はエミリオを同じく6歳です」

「ウラノ？　もしかしてウラノ卿のご子息……は男の子「私は男ですが」……そうなの!?　ごめんなさいね。ちなみに「母の趣味です」……そっ、そうなの……」

カリムさんがそっと目を逸らす。

「……あなたもエミリオ君と同様に苦労しているのね」

何が、とは言わないが伝わってきた。

悲しくなんてないんだから……

その後は他愛もない将来についてとかの話をした。

エミリオは騎士になると言って家出しているので騎士を目指すとのこと。

ただし、魔法学院に通うつもりらしい。

すぐに騎士を目指し修行するものだと思っていたからビックリした。

なんでも学歴もあった方が今後のためだと言っていた。

まぁ１０歳から管理局勤めとかはアレだよね。

もし再就職とかする場合は、行先あるんだろうか？

まぁ中卒もどうかと思うけどミッドの教育って水準高いしね。

ちなみに私も来年からＳｔ．ヒルデ魔法学院に通う予定である。

エミリオにそのことを伝えると

「ふんっ、どうでもいいが僕の邪魔だけはするなよ」

はいはいツンデレツンデレ。

カリムさんはそれを微笑ましそうに見ている。

そして爆弾を落とす。

「よかった～2人とも教会系列で。大変なことはみんなで頑張らないとねぇ～」

「「……」」

どうやら逃げ道はないようだ……

さて、入学まであと半年ほど。

それまでは修行と勉強に時間を費やすことにする。

平日は聖王教会本部の修練場で修行。

時折エミリオと試合もしている。

もちろんボロ負け。

素人が勝てるわけありません。

そんなわけで私もシャルティエに剣を教えてもらう。

正直才能は微妙とのこと。

何をやっても『なんちゃって』になってしまう。

できないのではない。できるけどそこそこなのだ。

相当器用貧乏らしい。

ＲＰＧなら最初から2軍確定だろう。

でもめげない！　だって男の子だもん！

それと並行してハクの修行も行っている。

この修行だと努力値は体力と素早さだけだな……

ハクも成長しているらしく脱皮して一回り大きくなりやがった。

皮は気持ち悪かったがな……

ついでに反撃の衝撃波『りゅうのいかり』も使ってくるようになった。

いずれは『はかいこうせん』まで使えるのだろうか……？

ハクの将来が怖くなった。

逆に休日は勉強三昧だ。

ランニングと柔軟だけであとは体を休め勉強に励む。

目下の目的は『無限書庫司書』の資格取得。

あそこが自由に使用できればいろんな幅が広がるハズだ。

ちなみに『セイクリッド・スカイ』の調整はヒューゴさんが行ってくれている。

なんでもエレメンタルスフィアの自然エネルギー変換が実用できたのは初めてだったので、研究ついでだが調整してくれるとのこと。

そのため、開発費及び調整費はタダである。

が、いつも通り騒ぎを起こし、カリムさんに粛清されている。

うん、これもまた日常の１ページだ……

ピロリーン！

【ＫＹ（偽）】を習得しました！

主人公設定（序章終了時点）（前書き）

一応書いておきました。

大きな章が終わった時点でまた上げていきます。

主人公設定（序章終了時点）

主人公設定（序章終了時点）

名前　　：アペリス・ウラノ
性別　　：男
生年月日：新暦６３年
出身地　：ベルカ自治領
容姿　　：腰まで届く金髪、アメジストの瞳
家族構成：父（父さん）と母（お母様）の３人暮らし
魔力資質：先天的ＡＡランク
才能　　：器用貧乏
備考　　：ハク（ミニリュウ）を拾いました
原作知識：アニメ版Ｓｔｒｉｋｅｒｓまで、Ｖｉｖｉｄ&ａｍｐ;Ｆｏｒｃｅは知らない

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）
【かけだしトレーナー】
【甲種準一級フラグ建築士】
【初めての弾幕ごっこ】
【魔法使い始めました】
【オリ主候補生】

技能（スキルっぽいモノ）
【マルチタスク（４分割超高速思考）】
・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃって断罪の剣】

・ぶっちゃけただの魔力刃

【ポーカーフェイス】
・ただのハッタリ

【なんちゃってぜったいれいど】
・試験魔法１

【なんちゃってインディグネイション】
・試験魔法２

【ＫＹ（偽）】
・場の空気を読み、（死亡フラグを）危険予知できる……かもしれない

デバイス
【セイクリッド・スカイ】
種類　　：ブーストデバイス（ＡＩは搭載していない）
待機形状：レイハさんと一緒
戦闘形状：なし、バリアジャケットは白い制服系統をイメージ
所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）
使用魔法：『試験魔法１』『試験魔法２』

学院編1～プロローグ

入学式

それは学び舎に通う者が最初に通る洗礼。

新しい生活に小さな不安と大きな希望を持って臨む式典。

一般的にはね！

私たちにとっては入学式とは『親バカ』という人種にとって恰好の餌食だと言える。

始まりは入学式の1週間前に遡る……

今日も今日とて聖王教会本部の修練場で修行を終えたところ、『セイクリッド・スカイ』の調整でいつも通りハメを外したヒューゴさんを華麗な空中コンボで沈めたカリムさんが、お茶でもどうかと誘ってくれたのだ。

とりあえずホイホイとカリムさんの後に続く。

ちなみにエミリオも一緒だ。

でも何故かエミリオの表情は暗い。

父親がアレだからかとも思ったが、正直ソレは今更だ。

エミリオからは「あと1週間……時間がない……」とか聞こえてくる。

ホントどうしたんだろ？

ちなみにハクは噴水に投げ込んできた。

シャルティエも一緒に投げ込まれていた。

今日のエミリオにシャルティエの軽口は通じなかったようだ…

シャル乙！

カリムさんの部屋につき、お茶をいただく。

うん、今日もていすてぃ～だ。

そしてカリムさんがお茶を一口飲んでカップを置き……

「それでは1週間後に迫ったＳｔ．ヒルデ魔法学院入学式における

ジルクリスト博士（＋α）対策会議に入ります」

カリムさんは某ネ〇フの司令のように腕を組み真剣の表情でそう言った。

なんですと？

そんな表情でカリムさんを見返すと

「あのジルクリスト博士が息子の入学式という大イベント（という名の餌）に喰いつかないハズがありません！！」

いやっまぁ……うん。

正直あの人は絶対何かやらかすだろう。

対策が必要なのはわかるが私を巻きこまないでほしい。

「あの～私は「あぁ！　アペリス君に渡すものがあるのよ！　ちょっと待っててね！」関係な……」

先手必勝、喋らせて貰えなかった。

するとカリムさんがどっかから段ボールを持ってきた。

「さぁ開けてみてね☆」

有無を言わせない迫力を感じました。

とりあえず開けてみた☆

中身を見てみると、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院初等科の制服（男Ｖｅｒ）だった。

なんで？　制服は既にお母様が注文しているハズなのに……

そこまで考えていると

「あなたは制服の試着はしたかしら？」

「……えっ？」

「お母様が全部準備してくれたんじゃないかな？」

「……」

「ちゃんと半ズボン、ネクタイ……だったのかな？」

「何でも協力させていただきますカリムお姉さま！！」

「はい、素直でよろしい」

マジで関係ないから勝手にやってくれとか思ったりして申し訳ありませんでした！

ちなみにエミリオの横顔を覗き込んでみると……

『ざまぁ！』って感じの笑みを浮かべていた。

こいつ！　デバイスの件でヒューゴさん紹介したのは絶対ワザと

だ！

エミリオを非難した目で見てやる。

「なんだ？　スカートで入学式に出たかったのか？」

言い返せない自分が悔しい。

大きな借りを作ってしまった以上、断ることはできない……

「異論はないようですね。それでは第１回入学式対策会議を開催します」

ないのではなく、言えないだけだが。

第１回親バカ対策会議が始まった。

そもそも（物理的に）出席させなきゃいいんじゃね？

開始１分で終了しました。

学院編2～少年は出会いをするようです

新暦６９年春　Ｓｔ．ヒルデ魔法学院に無事入学することができた。

お母様が用意していた制服は案の定だったと言っておこう。

当日に渡されたが、カリムさんに入学祝いにもらった（ことにした）制服で無事に入学式に出席できた。

半ズボンの制服を見てお母様は「なん…だと!?」と驚いていた。

そして、スカートじゃなくてもこの破壊力だと!?　これが男の娘か!?　と続けた。

更にスカウターがどうとかも言っていた。

うちのお母様はもうダメだ……

ヒューゴさん?

教会の一室で見事な氷像（アイススタチュー）になっています。

第１回会議で不穏分子（ウイルス）は予防しておくことに限ると結論が出たからである。

さすがに息子さんの（ある意味）一生に一度の晴れ舞台を見られないのは可哀そうなので、入学式の様子は録画しておいて後で見せてあげる予定だ。

エミリオはそれすらも拒否していたがな……

入学式も無事に終わったので各教室で簡単なホームルームがあるらしい。

保護者は別室で懇談会中。

ちなみにクラスはエミリオと一緒だ。

ご都合主義という名のカリムさんの権力（ちから）だ。

戦力分散の愚は犯さないとのこと。

何に対してとは言わないが……

「ふんっ、僕に迷惑はかけるなよ」

主に迷惑をかけてるのは君の父親なんだけどね☆

でも口には出さない。

「うん、まぁこれからもよろしくエミリオ」

「……ふん」

はいはいツンデレツン（ｒｙ

おや？　担任がきたようだ。

「うむ、みな入学おめでとう。私は1年間このクラスの担当をするヴァン・グランツだ。主に担当する教科は初等科では音楽、中等科では古代ベルカ史だ。とりあえずは1年だがよろしく頼むぞ」

担任は先生(せんせい)じゃなく師匠(せんせい)だった。

その渋いヴォイスと老け顔の原因であるヒゲが音楽なんてトラウマもんだろ。

でもなんでだろう……このとんでも世界も慣れてきた。

「では軽くみなの自己紹介をしてもらおうか」

いきなりきました自己紹介。

でも何を言えばこの人的に満足するのだろうか？

「ヴァン師匠（せんせい）！　質問です。どんなことを言えば良いのでしょうか？」

ちゃんと挙手してから発言する。

「ふむ、師匠（せんせい）か……良い響きだ。なに、自分の名前と一言言っておきたいことで良い。なんなら将来の夢などでも良いだろう。私も幼いころは……」

勝手に回想入りました。

ここで『若いころは～』で始めなかったのは、老け顔なりの意地なのかもしれない。

そこまでまだ若いと主張したいならヒゲ剃ればいいのに……

師匠（せんせい）の回想も終わり前から順に自己紹介が始まる。

うん、１年生だとみんなかわいいね。

執務官とか艦長とか夢がいっぱいだ。

そんな空気に合わせ自分も無難なあいさつに努める。

エミリオはというと

「ふんっ、僕はエミリオ・カトレットだ。将来の目標は聖王教会騎士団に入ることだ。よろしく……」

それだけ言って座った。

GはどうしたG？

そんなに名乗るのが嫌になったか？

順調に自己紹介が進み現在最後から2番目である自分の隣の子の紹介が……

「あたしはリタ・モルディオ。興味があるのはデバイスと魔導学だけだから、必要時以外は話しかけるんじゃないわよ。以上」

はい、関わらないことにします☆

だって厄介そうだもん。

エミリオと同じツンデレ臭がプンプンするのだ。

ちなみにそんな紹介のせいで最後の子がかわいそうだった。

「うむ、みな中々に夢を持っているではないか。夢に向け精進するように。では連絡事項の書いたプリントを配るので前から……」

自己紹介を終えたので師匠（せんせい）が事務連絡をする。

リタの件はスルーしてやがる。

大人って汚いな……

そんなことを考えながら連絡を軽く聞き流し、明日からの学院生活に思いを馳せる。

窓の外は晴れ空が続いている。

「明日からも良い日々が続きますように」

うん、これくらいバチあたらないだろう。

「あんた、それエレメンタルスフィア？　珍しいもの持ってるわね？しかもこれってデバイス！？　ちょっと見せなさいよ！」

ソッコーでバチがあたりました……

学院編3～まさかのエピローグ

「なにこのムダな設計？　全体出力の7割は損してるじゃない！？　ありえないでしょ！？　てゆーかコレ作ったやつバカでしょ！？」

どうやらヒューゴさんはバカらしい。

「ありえない！　こんな希少なモノをムダ使いするなんて！！　ありえない！！」

どうやらヒューゴさんはありえないらしい。

大事なことなので2回言ったようだ。

うん、そこは同意します。

「こんなの見てられないわ！　今すぐ最適化してやるわよ！」

じゃあ見るなよ、ついでにそんなこと頼んでいませんが。

そのまま風のように立ち去ってしまった。

……普通に窃盗じゃねぇ？

明日には会えるだろうがこのまま帰るわけにもいかないのでリタを追わねばならない。

が既に視界の範囲にはいない。

とりあえず師匠にリタについて尋ねてみる。

「ヴァン師匠、リタさんが私のデバイスに興味を持ったみたいでその……持ってちゃったんですけど……」

要は窃盗だ……

「ふむ、モルディオが……おそらく研究室に向ったのだろう」

「研究室……ですか？」

「うむ、モルディオは優秀でな。５歳で博士号を取っているのだ。それ故に研究室が与えられている」

まじパネェな！！

「すごいのですね。でもそれなら何で学院の初等科から……？」

まぁ高等科でも物足りないだろうがな。

「うむ、まぁこれ以上は言えぬが強制ではない……一応は本人の意思だ」

一応ね……まぁいいけど。

とりあえず研究室を教えろやヒゲ。

「ここですか……」

学院の外れにある研究室棟。

そこの一角にリタの研究室があるらしい。

研究室棟に入りボードを確認。

どうやら一番奥らしいので向ってみる。

「……あった。ここか」

扉には『無礼者は洗濯』と書いてある。

意味はわからないがとりあえず怖いのでノックしてからにする。

予想はしていたが返事はない。

さてどうするか……

いるはずなのにノックしても無反応…普通ならここで開けてみるところだが『洗濯』という言葉が怖い。

1分ほど悩んでいたが、ここで立ち止まっていてもしょうがないので勇気を振り絞る。

いざゆk「これが完全版よ！！　天光満る処に我は在り……」

ありったけの魔力を足に込め逃げました。

まさに疾風迅雷。

腕を顔の前でクロスし窓を突き破る。

2重の自動ドアでは間に合わないのだ。

だが窓は割れなかった。

実は強化ガラス仕様だったらしい。

「そんな……そんなバカな……！！」

絶望に打ちひしがれる。

自分でこのセリフを言うとは思わなかった……

そして世界は極光に包まれた。

【全治1年】

まさか入学式当日に学院生活が終わるとは思わなかったわ……

ちなみにデバイス出力の7割はリミッターだった模様。

後日ヒューゴさんがマジレスしてくれた。

それを聞いたリタは

「ふ、ふん！　そんなのわかってたわよ！！　そこに境界線が見えたら踏み越えるのが科学者でしょうが！！」

それはただの鬼畜マッドだ。

殴ってやろうにも腕が動かない。

全身ミイラ状態だ。

ちなみにリタも同じ状態だ。

「うん……アホでしょあなた」

口に出してしまったが反省も後悔もしない。

こっちは完全に被害者だ。

「ぐぐぐ……」

唸っているが完全にお前が加害者だからな。

しばらくは何もできそうにないようだ。

この際だ、入院中は読書魔法でも使いながら本を読み漁るか……

入院中は資格取得を目指して勉学に励むことにした。

動けるようになったらひらすらリハビリ。

時々エミリオも見舞いにきてリハビリに付き合ってくれた。

リタも罪悪感からか色々と魔導学について教えてくれた。

まぁ同じ部屋のため仲良くはなれたと思う。

出会いはマジ最悪だったが……いや、絶対にいつまで経っても良い思い出にはならないだろう。

カリムさんも良く見舞いに来てくれたのだが基本的に愚痴ばっかり。

対ヒューゴ戦線が一人脱落したためストレスがマッハのようだ。

予言で『自分の頭皮が……』という件が出てきたら、絶対にヒューゴさん消すねこの人。

んっ？　お母様はどうしたかって？

毎日世話してもらっていますよ。主に下の……ね。

嫌々やられるのもアレだが嬉々としてやらないで欲しい。

ハク？

エミリオに任せ修行を付けてもらっています。

そうでもないと忘れ去られて、野生化という名の空気になってしまうからね。

なんでも最近は『こうそくいどう』を覚えたとか。

もうすぐ進化するのだろうか？

結局進化キャンセルってどうやるんだろう……

謎だ。Ｂボタンってスゴイな……

ピロリーン！

【時を駆ける男（笑）】の称号を得ました！

ピロリーン！

【なんちゃってインディグネイション】が【インディグネイション】

に更新されました！

ピロリーン！

【基礎魔法一式】を習得しました！

リハビリ編1～少年は原作事件に巻き込まれるようです（前書き）

どーにでもなーれー

リハビリ編1～少年は原作事件に巻き込まれるようです

【時を駆ける男（笑）】

説明：あのセリフでインディグされた者に与えられる称号
条件：あの迷セリフにてインディグされた
効果：全ステータス→→　ネーミングセンス←←
備考：未来（明日）に向って戦略的撤退！

ピロリーン！

全ステータスがやたらと上がりました！
おきのどくですがネーミングセンスが皆無になりました！
また、ご都合主義により時間経過を省けるようになりました！

＊'、、・＊　。
｜　　、＊。
，。∩＜＿，，＜　　＊　　もーどうにでも
な～れ～

＋　（´・ω・`）　＊。＋　。
、＊。　、、　つ　＊　。＊
、・＋。＊・'　　。⊃　＋　。
☆　　∪~　。＊　。
、・＋。＊・　　。

あのインディグ（ｒｙ　から8か月がたった。

現在は退院しており自宅療養中だ。

とは言っても相変わらず教会本部に行ってカリムさんの愚痴を聞いたり、エミリオとリハビリがてらの稽古をしていたりする。

ちなみに入院中は勉強しかすることがなかったため、退院後すぐに『無限書庫司書』の資格も無事取得することができた。

無限書庫を初めてみた感想はまじカオス。

いやこれでも大分片付いたとのこと。

そこら辺は有能な司書長（ユーノー　ユーノ）におまかせしておこう。

さぶっ。

とりあえず無限書庫に来たのだから調べものをする。

これと言って今すぐに欲しい情報はなかったため、適当にソーディアンについて調べてみることにした。

シャルティエ以外にもあるのかと気になったのだ。

探索、探索っと……

その結果、これといった情報はなかった。

思いつきだったため、検索方法が悪かったのだろう。

次回以降にやることにする。

しかし、中には興味深い古代ベルカの資料もあった。

その中でも真正古代（エンシェント）ベルカという術式についての本があったのだが……ありえんだろうの一言。

弾幕は投げ返すとか、バインドもシールドも意味をなさないとか……

砲撃魔法も理論上は返せるらしい。

それなんて罷落とし？

超人テニヌの連中並みだな。

真正古代（エンシェント）ベルカまじパネェ。

まぁ今度じっくり読んでみよう。

そして今日はリタの魔導学講座の時間。

退院後も定期的にリタは魔導学について教えてくれいる。

本人曰く

「あたしのせいで授業に遅れてるんだから、その分の面倒みてあげてるのよ！」

とのこと。

ちなみに私とリタはリハビリで未だ休学中だ。

復学は2年になってからの予定なのだが、そもそも初等科の1年でこんな内容習わないだろう。

まぁ厚意（？）は受けとっておこうと思う。

エミリオも興味があるらしく一緒にリタの授業を受けている。

同じツンデレ同士で反発力を起こしてしまうのではと危惧したが、今のところ特に問題はない。

せいぜいおやつのプリンで揉めるくらいだ。

うん、今日も平和だな。

リタの魔導学の授業を終え、エミリオと別れ、帰宅する途中だったが、新しい本屋が目に入りついつい寄ってしまった。

お金がなかったため見ているだけだったが、そこそこ時間を使ってしまったようだ。

立ち読みした内容を思考にて反芻しながら歩いていると後ろから急に腕を掴まれた。

そして首に腕をまわされホールドされる。

いきなりのことだったので唖然としていると……

「それ以上近づくんじゃねぇ！！　このガキの命がどうなってもシラネェゾォォォ！！」

典型的な犯罪者の人質にされたようだ。

そのまま連れ去られ工事中のマンションへ……

そこには共犯者と思われるもう一人と、人質と思われる女の子がいた。

「さっさと要求通りにしやがれ！！　ガキ共の命がどうなってもいいのかぁぁ！！」

誰だ今日も平和なんて言ったやつは！！

思いっきり厄日じゃないか！！

犯人の要求は典型的なものだったため割愛する。

薬とかやってんじゃないの？

そして人質の女の子にナイフを向けながらベランダに出て行った。

私？

何もできないと思われているようでナイフを向けられているだけである。

人質の女の子がいなければ犯人はすぐに氷像（アイススタチュー）なのだが……

地上本部の管理局員と思われる人が犯人を説得という名の時間稼ぎ中だが、あまり効果は見られない。

むしろ、犯人煽ってどうする？

そんなやつに現場任せるなよ……

女の子も今までは我慢していたが、とうとう泣き出してしまった。

「ぐすっ……おにいちゃん……うぇぇぇん、おにいちゃぁぁぁん！」

そろそろヤバイだろう……

犯人側も限界かもしれない。

見せしめに人質を…やりかねないかもしれない。

「ひっぐっ……ヴァイスおにいちゃん……」

女の子がお兄さんの名前を呼ぶ。

はてヴァイスとな……ん？

……なんですと？

もしやこの子はラグナ……そんな名前だったっけ？

これって……ヴァイスの誤射（ミスショット）事件！？

どうやら原作に関わる重要な場面に出くわしてしまったようだ……

リハビリ編1～少年は原作事件に巻き込まれるようです（後書き）

どーにでもなったぁ

リハビリ編2～少年は無事（？）に事件を乗り切るようです

ヴァイスの誤射（ミスショット）事件。

ヴァイスが武装隊に所属していた頃、立てこもり犯を狙撃する任務で、人質（ラグナ）の左目を潰すというミスショットをした事件だ。

その後、それがトラウマとなり武装隊を辞職し、妹とのギクシャクした関係になったらしい。

確かに自分のミスで妹の片目を失明させるのはトラウマもんだよね。

正直トラウマなんて簡単な言葉で言えるようなことではないと思うが……

この事件が原作通りなら…まぁ人質（ラグナ）は死ぬことは……ない。

私というイレギュラーがいる分アレだが、多分なんとかなるのだろう。

だから……何もしなくてもいい。

……だから…何もしないほうがいい。

――――だけど！

救えるかもしれないのなら……それを簡単に見捨てられるほど人間できていない！！

高速思考展開！

≪どうする？　犯人1人だけだったら一瞬の隙があればなんとかなるが……≫

≪その場合は人質（ラグナ）の安全が……≫

≪むしろ最初から1人に絞るか≫

≪新世向けな氷像（アイススタチュー）にしてやんよ！≫

相変わらず変な思考があるがスルーする。

≪自分に刃物を向けてる奴を無視して……≫
≪人質（ラグナ）を引き離して犯人から距離を取る≫
≪むしろ飛び降りるか？≫
≪芸術的な氷像（アイススタチュー）にしてやんよ！≫

方向性は決まった……のか？

自分側の犯人が一瞬目を離した隙に人質（ラグナ）を犯人から引き離す。

そして距離を取り氷像（アイススタチュー）にしてやる。

もしくは武装隊突入まで耐えるか……だ。

とりあえず人質（ラグナ）を犯人から引き離してしまえば……なんとでもなる！

そう決意しポーチに入れていたデバイスを……

……アレ？

デバイスが……ない？

代わりに紙が入っていて……

『試してみたことがあるから、デバイスを借りるわ。　リタより』

ファッキン！！！

こんなオチか！？

決意だけではどうにもならない現実がここにあった……

おそらくもう時間がないだろう……

目の前で起こる（かもしれない）ことがわかるのに……何もできないジレンマ。

途方に暮れていると……

≪おいっ！　聞こえているか！　後４０秒で人質抱えて飛び降りろ！≫

突然エミリオの声が聞こえた気がした。

もしかして念話？

えっ……なんで……てか後４０秒で飛び降りろって……

≪わかったら早くしろ！　特大のがいくぞ！　また入院したいのか！！≫

こっちの回答なんてお構いなしにそう続ける。

特大……また入院……ってまさか！？

≪後２５秒！！　さっさとしろ！！　飛び降りた後はこっちでフォローしてやる！！≫

こっちの話も聞けよな！

ああもうヤケクソだ！！

「アストラルベルト！！」

某花の名の少女のパクリ技。

前方に突進しながら左右両手に発生させた魔力刃（なんちゃって断罪の剣）で犯人を切りつける。

大したダメージなどいらない。

一瞬だけ人質（ラグナ）から手が離れればいい。

「ぐぁっこのガキィィィィ！！」

1人目を吹き飛ばし、2人目が激昂し人質（ラグナ）から手を離した瞬間、そのまま人質（ラグナ）を抱えベランダから……飛び降りた！！

飛び降りる瞬間に一瞬だが向いのビル屋上にリタの姿が見えた。

既に準備万端だったようだ。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

少女（ラグナ）の悲鳴が耳元で鳴る。

くっ！　デバイスがなければ、この速度と高さを無事に降りられるほどの技術はない！

エミリオの言葉を信じるしかない……だから！

「エミリオォォォ！！！」

そう叫んだ瞬間、何か柔らかいものの上に落ちた。

それと同時にあたりが極光に満ち、マンションに神雷が落ちた。

おそるおそる目を開けて見ると未だ上空にいるようだった。

てっきりネットか何かの上に落ちたと思ったのだが……

「ふんっ、ようやく気付いたか。まったく世話のかかるやつだ」

「エ……ミリオ？……ここは……なんで……」

未だ上空にいるのか？

エミリオはいつも通り「ふんっ」と言ってから答える。

「こいつに感謝するんだな。主人のピンチに文字通り空を飛んで駆け付けたんだ」

「えっ……」

主人のピンチって……まさか！

「キュウゥゥゥ！」

青と白の長い胴体と頭の羽根のような飾り……そして首元についている水晶……

「ハクリュー！？　もしかしてこの子ハクなの！？」

えぇぇ！　進化したの！？　決定的瞬間を見逃したぁぁ！！！！

「そうだ。なぜか急に光だしてこの姿になった。そしてお前のピンチに駆け付けたんだ」

そのおかげで助かったけど……けど！

「それで助かったんだ。感謝はすれど文句を言える立場ではないだろう」

エミリオは容赦なく言い放つ。

悔しくなんか……ぐすっ

ちなみに少女（ラグナ）は極光と轟音、飛び降りで絶賛気絶中。

マンションは……ただの瓦礫の山だ。

犯人大丈夫だろうか……

てゆーか相手が犯罪者でも、ここまでしでかしてお咎めなしとはいかない気がするぞリタよ……

特にマンションなどは仮にも建築中だったのだから。

後が怖いが事情聴取を受けねば…落ち込みながら地上に降りていく。

私の明日はどこだろう……

気が重い……

ピロリーン！

【ミニリュウ】が【ハクリュー】に進化しました！

ピロリーン！

【オリ主属性】の称号を得ました！

ピロリーン！

【なんちゃってアストラルベルト】を習得しました！

リハビリ編3～少年は…一応被害者だよね？

【オリ主属性】

説明：初めて原作事件に遭遇した者に与えられる称号
条件：初めて原作事件に遭遇した
効果：全ステータス→→→　フラグ率→→→　ご都合主義→→　その他諸々←
備考：目指せ真のオリ主！

ピロリーン！

全ステータスとフラグ率が劇的に上がりました！
ご都合主義？どんとこい！
何か大切なものが無くなった気がします！

失くしたもの……それは平穏。

結論、怒られたがなんとかなった。

地上に降りて第一声は罵声だった。

「何を勝手な真似を！」とか「どうしてくれる！」とか。

先に人質の安否を確認しろよ……

まぁマンション崩壊はやりすぎだとは思うが、説得という名の挑発で犯人を煽った指揮官（あんた）にだけは言われたくない。

あんたのせいで選択肢（時間）が無くなったのに……

そう思っているとエミリオが

「ふんっ、キサマの無能をフォローしてやったんだ。感謝はされど非難される覚えはない」

いや、少なくともマンションの件は非難されるだろう？

「マンションも建築途中で会社が倒産し、そのままで解体もままならない状態だったんだ。むしろ解体費がかからなくて済んだじゃないか」

そうなの？　でもそーゆー問題ではないと思うんだよ……

現に……

「そういう問題ではない！！　子供が出しゃばって現場を荒らすなど言語道断！！　公務執行妨害で……」

無能さんが逆ギレしてヤバイこと口走っていると…

「ふむ、マンションの件はともかく、あの時の状況では犯人が人質に手をあげる可能性が高かった。犯人も複数いたのだから、あの状況であの判断はそう悪いものではないだろう」

そう言いながらヴァン師匠が現れた！

「ヴァン師匠！？　なんでここに！？」

久し振りに見たなこのヒゲ。

「なに、弟子の安否が気になったのだよ。無事で何よりだ」

なんか変な響きだったが気にしないことにする。

「なんだお前は！！　ここはまだ一般人が入っていい場所ではない！！」

突然の乱入者に無能さんが激怒。

だからこんなやつに現場やらせるなよ……

ヴァン師匠にはそんなのどこ吹く風みたいで……

「私はこの子たちの師匠（たんにん）だ。弟子（せいと）を保護しにきた」

担任の責任って以外と重たそうなのね……

てか私は休学中なんだが……

「こいつらの教師か。ふん！　生徒が生徒なら教師も教師だな！
まったく管理局をなんだt……」

「自己紹介がまだだったな。私はヴァン・グランツ。聖王教会・教会騎士団・団長と時空管理局理事官を兼務させてもらっている」

「思って……えっ？」

えぇぇぇぇ！？

ヴァン師匠（せんせい）ってそんな偉かったの！？

そりゃぁヒゲでもないと貫禄ないよね。

てゆーか何で教師やってんの？

しかも音楽……

「貴公の言い分と現場の状況はわかった……次の査定を楽しみにしているがいい」

こわっ！

無能（ナンセンス）さんが超絶に青ざめてるよ！

権力ってすごいな……

「まったく、４月の研究棟消滅事件に続いて……よく事件に巻き込まれるものだな」

いや、ほんとにね。

そして現場から離れたところでリタと合流した。

てゆーかこいつがデバイスを勝手に拝借したせいじゃねぇ？

まぁ結果オーライだから今回はアレだが、次やったら絶対泣かしてやる。

「あら、よかったじゃない。結局無事だったんだから」

ぜってー泣かす！！

そう心に誓った。

「あのっ……ここは……？わたし……」

んっ？少女（ラグナ）が目覚めたようだ。

……忘れてたわけじゃないよ？

「ふむ、目が覚めたか。安心していい。もう大丈夫だ」

「えっ？あ、はい……？」

混乱しているようだ。

「ラグナっ！！」

そこへイケメンの管理局員と思われる青年が少女の名を呼びながら駆けつけてきた。

「おにいちゃん！！」

そう言って少女も青年を呼び、抱き合う。

うん、素晴らしき兄妹愛だ。

過程は正直褒められたものではなかったが、結果として兄妹の絆を壊さないで済んだのだから良しとしよう。

……私は勝手に暴れ、少女（ラグナ）抱えてベランダから飛び降りたという

暴挙しかしてないけどね！

「失礼しました！　自分は武装隊所属のヴァイス・グランセニックと言います！　妹を救出して下さってありがとうございます！」

うん、よくできた青年だ。

エミリオにも見習って欲しいものだ。

そーなったら正直キモイがな！

「なに、貴公の妹が無事であって幸いだ。それと今回の件について私は特に手を出していない。この子たちの判断だ」

そういってヴァン師匠（せんせい）は私たち3人を見る。

「ふんっ、多少の無茶はしたが無理はしていない……だが、あんな手段になって悪かったな。妹さんを危険な目に合せた……」

「あたしも怖がらせて悪かったわ……」

こいつらもずいぶんと殊勝な態度だな……一応は反省しているらしい。

てゆーか私に謝罪はないのかお前ら。

「いや……ありがとよ。俺は今回の狙撃手を担当していたんだが……正直ブルってた。狙撃の腕には自信があったが、いざ自分の身内が人質になると……かっこ悪いが手が震えて照準が合わせられなかった。多分あのまま撃ってたら妹（ラグナ）を傷つけていたかもしれなかった……だからよ、妹（ラグナ）を助けてくれてありがとなボーズ共」

うん、中々に好青年だ。

「ほらっラグナ……」

「うん、少し怖かったけど……助けてくれてありがとう」

青年（ヴァイス）に続き、少女（ラグナ）からも礼を言われる。

エミリオは「ふんっ」と、リタは「そっ」とそれぞれ素気なく返しそっぽを向いたが耳が赤かった。

まったくこのツンデレ共め。

それを見た兄妹も苦笑している。

「キュウゥゥ♪」

おっと空気（ハク）を忘れていた。

ったく！　勝手に進化しよって！

おや？ハクのようすが……とか言ってみたかったのに！

ついでに進化キャンセルの秘密を知りたかったのに……

「あのっ！　この子はわたしたちを乗っけてくれたんだよね？」

少女（ラグナ）がハクについて尋ねてきた。

「うん、私の……ペット？　のハクって言うの。たぶんドラゴンか何かだと思う」

ポケモン図鑑でもあればいいのだが……

「ドラゴン！　すごいのねこの子！　……ハクちゃん、わたしたちを助けてくれてありがとうね」

そういってハクの頭を少女（ラグナ）が撫でる。

「キュウゥゥゥ♪」

ハクも嬉しそうだ。

私が撫でた時より嬉しそうだな……さては♂かお前！

いずれは番いでも見つけてやらねばならないのだろうか……

そして……

「ふむ、ではそろそろ説教の時間に移ろうと思うのだが」

そんな空気を引き裂くかのようなヴァン師匠（せんせい）の口撃（こーげき）がきた。

不意打ちであったため、まともにくらってしまった！

騎士のくせに不意打ちなんて！

まぁ何のお咎めなしにいくわけないとは思っていたが……

兄妹は「礼はまた後日改めて！」といって退散しやがった。

今回の件について私は『前門の犯人、後門のインディグ（リタ）』で、どちらかというと被害者なのだが……

「問答無用、連帯責任だ」

だそうです。

説教と反省文です。

結果的に良いことをしたのに……どうにも締まらない終わり方だこと……

リハビリ編3～少年は…一応被害者だよね？（後書き）

しばらく書く時間が取れそうにないです。

多分次は土曜日になると思います。

復学編1～少年は様々な経験をするようです（前書き）

なんか更新できました。

復学編1～少年は様々な経験をするようです

あの誤射（ミスショット）事件になるハズだった『T（立てこもり犯）・M（マンションごと解体）事件』から数か月が経ち、私とリタも無事に復学した。

ラグナはミッドの私立学校に通っており、現在はメル友だ。

まともな友人が初めてできたのだった。

また、ヴァイスさんに付き添ってもらって遊園地なども行ったりした。

エミリオは乗り物酔いでダウン、リタはアトラクションのダメダシ。

お前ら何しに来たの？

魔法世界の遊園地まじパネェのに……

ちなみに私たちの学院の方だが

ヴァン師匠（せんせい）が引き続き私たちの担任となった。

ちなみにヴァン師匠（せんせい）は時空管理局理事官を後任のカリムさんに任せたらしい。

未だ聖王教会騎士団長ではあるのだが教師を続けている。

理由も、そしてなぜ兼任できるかも不明だ……

本人曰く、

「未来ある若者たちに多くの可能性を教えてやりたいのだ」

とのこと。

そして

「迷う事無く、未来は私達が生み出していかなくてはならんものなのだから……」

そう続けた。

渋いね……だから年齢以上に老けて見えるんだ。

……でもなんで音楽なの？

結局、謎は謎のままだった……

授業の方だが、基礎は前世を含め勉強してきているし、魔導学も授業よりもかなり進んだ応用をリタに教わっているため、特に問題はなかった。

とゆーより退屈だ。

リタなんぞ授業を聞かずに別の作業をしている。

エミリオも聞いているだけで板書すらしていない。

妄想（イメージトレーニング）でもしているのだろうか？

教師涙目だよ……？

私？　もちろん聞いているフリをして別の勉強をしている。

もちろん教師にはバレないように。

時間は効率的に使わないとね！

放課後は、研究室でリタの研究の手伝い（モルモット）をしたり、エミリオと稽古したり、聖王教会本部に行ってカリムさんの愚痴聞いたりと……

ラグナからの普通のメールが一番癒される……そんな毎日だ。

休日などは無限書庫に行き、ランダム検索でよくわからない本を見つけて読んだりするのが趣味になっている。

そのおかげで雑学や用途が微妙だったり、実践で使用するのが難しい魔法や技術ばかり習得してしまった。

まぁ戦闘ばかりに重点を置くつもりはないのでいいだろう。

目指すはジェネラリスト！

万能で選択肢いっぱいの未来……なのだが

「あまりお金が……」

そう、お金がないのだ！

様々な資格を取得するにはお金がかかる。

例えば免許関連だったら、その対象も欲しいだろう。

その他にもこの世界は未知なものに溢れているため、興味があるものばかりだ。

つまりお金がやたらとかかる。

でもこの年の子供が自ら稼ぐには、管理局入りとかしなくてはならないだろう。

それでは本末転倒なのだ。

なんとか今のうちからお金を稼ぐ手段を確保しておきたいが……

「デバイスマイスターとか……無理だよね……」

独学では無理あるし、周りはマッドだ。

そもそも相当それ系が好きでもないと、この年齢で取得はまず無理だ。

しかもプログラム関係は前世からの苦手分野でもある……

「はぁ、どこかにお金になる話はないかなぁ……」

前途多難だ……

そんな話をカリムさんにしたところ

「じゃあ、ひとつアルバイトをお願いしようかしら」

「アルバイトですか？」

教会なのにアルバイトって……

いいのそれ？

聖王教会がどう成り立っているかは不明だが……

とりあえず金になる話なので聞くことにする。

なんでも教会が保管している（どーでもいいレベルの）ロストロギアの目録を作って欲しいとのこと。

また、ロストロギアの細かい資料も無限書庫で調べて添付して欲しいらしい。

うん、やりたがる人はいないだろうな……

やっても「できました！」→「そこおいといて」で終わりそうなんだもん。

まぁお金は欲しいし、ロストロギアにも多少興味はあるのでＯＫしてしまった。

その場所に案内されて絶望した。

どこのゴミハウスだよ！

しかもついでに部屋の片づけもよろしくと。

泣いてもいいですか……

期限は1年ほどを目安に、それ以上かけると更に増える可能性があるとのこと。

ようは雑用じゃん……

道は険しく先が見えない……

……やるけどね！

だってお金は欲しいもん！

前金もポケットマネーから頂いてしまった。

意外と高い金額だった。

まぁ勉強にもなるし頑張ろう……

悔しくなんて……

それから平日は聖王教会本部、休日は無限書庫、夜にラグナから

の普通のメールで癒される日々が続いた。

まぁ、リタのモルモットにされていないだけまだマシか……

カリムさんは作業中でも愚痴ってくる。

仕事させる気あるんだろうか？

そして半年かけ、ようやく7割程度が終わった。

ホントにくだらないものばっかりだった。

なんでこんなものがロストロギアなの？　ってモノばかりだ。

ポケギアとロストロギアはギアしか合ってないよ？

期限までに余裕ができたため、ストレス発散も兼ね、ヴァイスさんに射撃場に連れて行ってもらった。

感想……ヴァイスさんまじパネェ。

百発百中やん。

長距離も一発、シミュレーターのヘリで飛びながら射撃も満点。

正直舐めてたわ。

ヴァイスさんに撃ち方を習い私もチャレンジしたが難しい。

何度か修正していくうちに的（ターゲット）にも当たるようになった。

どうやら射撃の腕はそこそこ良さそうだ。

まぁ弾幕ごっこやってるもんね。

「おぉ、中々に筋は良いんじゃないか？」

ヴァイスさんも少し褒めてくれた。

『なんちゃって』以上の才能有りは初めてかもしれない。

将来的な一つの選択肢に入れておこう。

これからも定期的に射撃場に来ることにしようか……

はぁ、気は重いが残りの作業も頑張りますか……

復学編1～少年は様々な経験をするようです（後書き）

次回はあの原作事件に進みたい…
それを書こうとなると早くて土曜日になるかと…

復学編2～少年は弟子入りするようです

「なんとか終わった……ホント長かった……」

あのロストロギアの目録作り（という名の倉庫整理）がようやく終わったのだ。

期限（タイムリミット）の1年より早い9か月で終えた。

カリムさんに報告したら舌打ちされた。

どうやら最初から1年で終わる量ではなかったようだ。

定期的な愚痴相手の確保が目的か……

1年かかれば増えるので、その分を期間延長させるつもりだったらしい。

そろそろ原因（ヒューゴさん）をなんとかした方が良いのではないだろうか？

「それができれば苦労はしていません」

「まぁ、そうですよね」

ごもっともだ。

無事終えることができたので、かなり高額なアルバイト代をゲットできた。

子供に払って良い金額ではないと思うが……

また、今回のロストロギア情報を調べるに当たって、古代ベルカ語について相当知識を深めた。

そのせいでカリムさんの預言解読を手伝わされたが……（別料金）

今度、語学検定でも受けてみようか？

理数より文系の方が向いている気がするし……

しばらくはそっち方面の勉強をしてみようと思う。

うん、中々広い分野で知識を深めていけてる。

順風満帆だな。

入学式初日で入院したり、犯罪に巻き込まれたり……

……考えていて切なくなった。

初等科2年も終わりの3月、学年末試験を問題なく終了した日のことだ。

私とエミリオ、リタの3人はヴァン師匠（せんせい）に呼び出された。

進路指導室に。

「ふむ、良く来たな。まぁ、座りなさい」

自分で呼び出しておいて、その言い草はどうかと思うがスルーする。

進路指導室はイメージと異なり、まるで応接室みたいだ。

なんでソファーなんだろう？

そんな無駄なことを考えていると…

「早く要件言ってちょうだい。こっちは試験期間が終わってようやく研究に戻れるんだから」

「ふんっ、同感だ。さっさと済ませてくれ」

自己中極まりない連中だな。

「なに、ここは進路指導室だ。ならば内容は自（おの）ずと見えてこよう」

いいからさっさと言えヒゲ。

「ふむ、モルディオ、ジルクｒ「カトレットだ！」…カトレット、ウラノ、お前たちの進路（しょうらい）についてだ」

進路（しょうらい）？

まだ８歳なんですけど私たち…

「ふんっ、今更だな。僕は騎士になると言って家を出（にげ）てきた。その言葉を曲げるつもりは……ない」

「あたしは自由に研究さえできればいいわ」

こいつらは……

「ふむ、お前はどうなのだウラノよ？」

私？

私は……

「あたしの実験台（モルモット）でしょ？」

ブッチキルぞリタ？

「私はまだこれといった進路はありません。今は自分に何が合っているかを探してみてる途中……です」

とりあえずそう答えておく。

「ふむ、お前たちの考えはわかった……その上で問おう」

ひと呼吸おいて……

「私の弟子（でし）になるつもりはないか？」

と、のたもうた。

なんですと？

「どうゆう風の吹きまわし？……あたしたちを確実に教会側に引き込んでおきたいの？」

リタがど真ん中ストレートの直球で尋ねる。

いやもっと探り入れようよ？

そう思ったのだが

「ふむ、その通りだ」

ヒゲはそのまま打ち返してきやがった！

お前ももっとオブラートに包めよ！

「うむ、私が騎士団長（トップ）である間に次代への継承をしたいのだ。なに、お前たちにとっても悪い条件ではないだろう」

そう言ってメリットを説明していく。

騎士を目指すエミリオは言わずとだが、リタにとっても聖王教は禁忌や制約が少なく緩いため、研究はしやすいだろうとのこと。

また、管理局では望まぬ研究を強いられるかもしれないだろうと続けた。

私にとっては権力のコネができるだろうとのこと。

将来的に考えれば悪いことはない。

「僕は騎士を目指す以上、その選択肢は悪くない……むしろ破格だろう」

「何かに属するのは好きじゃないんだけど……後ろ盾はあった方がいいか……」

エミリオ、リタ共に肯定的のようだ。

私としても父は聖王教会所属だし問題はないだろう。

結局3人とも是と答える。

「でもさ、一教師が生徒を弟子にするってのは贔屓って見られるんじゃないの？　そこんとこどうなのよ？」

そうなのだ。

このヒゲは騎士団長でありながら教師などやっているのだ。

そこんとこホントどーなのさ？

「ふむ、私は今年度を最後に教職から引退する予定だ。元々一般の教師ではお前たちを持て余すだろうと判断したため、私が師匠（たんにん）になったのだ」

明かされる真実。

どうやら入学前から特別視されていたらしい。

リタやエミリオはわかるが私もか？

「お前たちの可能性を大人という立場だけで潰したくはなかったのだ」

らしい。

まぁ私はともかく、リタやエミリオは一応子供だから、周囲の環境に影響される可能性があるもんね。

「ふ～ん……まぁわかったわ。こっちとしても悪い条件じゃないし……この件、呑むことにするわ」

「……僕もだ。騎士を目指すには……悪くない」

「私も賛成です……よろしくお願いしますヴァン師匠（せんせい）」

3人とも弟子入りを承認した。

「ふむ、こちらもよろしく頼むぞ、リタ、エミリオ、アペリスよ」

こうして私たちはヴァン師匠（せんせい）の弟子（でし）になりました。

……そーいえば具体的に何やるのさ？

聞く前に了承してしまった……

そして……

「あぁ！　これで身内価格利用できるわね！」

……カリムさんの罠が待っていた。

ピロリーン！

【元ラスボスの弟子】の称号を得ました！

原作序章編1～あのお方に出会うようです（1）（前書き）

メンタルをやられ、しばらく執筆できませんでした。

皆さんも言動には気を付けて下さいね。

原作序章編1～あのお方に出会うようです（1）

【元ラスボスの弟子】

説明：ヤヴァイ人に師事した者に与えられる称号
条件：かつてラスボスを担当した者に師事した
効果：成長率→→→
備考：アビス仕様ではなくレディアント仕様ですのでご安心を

ピロリーン！

成長率がヤヴァイくらい上昇しました！

あれっ？　まともだ…

ヴァン師匠（せんせい）に弟子入りして最初にやったのは実力を確かめるための模擬戦だ。

とりあえず3人まとめてかかってこいとのこと。

エミリオとリタはそれを聞いてプッチン（プリンじゃないよ？）

ブッチキル気満々だ。

とりあえずこの2人が連携なんてまず無理だ。

巻き込まれないように援護（と解説）に徹しますか……

「魔神剣！！」

牽制の意味も兼ね、エミリオがシリーズお馴染みの剣技をヴァン師匠（せんせい）に向け放つ。

剣圧なんて飛ばせたら人としてどうなんだろう？

まぁ実際は魔力を伴った衝撃派なのだが。

それと同時に別方向からヴァン師匠（せんせい）に向けリタもシューターを放つ……って多っ！？

正面の魔神剣以外の範囲を全部覆っている。

よくもまぁ簡易なストレージデバイスでそこまでできるもんだ。

私も時間差を付けて誘導弾でも放とうとも思ったが、とりあえず様子見することにする。

さてヴァン師匠（せんせい）はどう出るのか……

「閃空剣」

自分の周囲に剣のひと振りで衝撃派を発生させ、迫りくる全てをかき消しました。

まさか防ぐでも避けるでもなく、衝撃でかき消すとは……

「どうした？この程度か？」

再び2人がプッチンした。

沸点低すぎるだろ……

とりあえず2人の援護頑張りますか……

結論、一撃も与えられませんでした。

まっ連携のレの字もないもんね。

エミリオの剣技や魔法、リタの鬼のようなシューターも一切通じなかった。

ちなみに私は基本フルバックで2人のブーストやエミリオが魔法

を使う時だけ前衛になり、なんちゃって技で応戦した。

相手にならなかったがな！

ヴァン師匠（せんせい）の感想はと言うと、

「ふむ、エミリオはもう少し全体を見るのだな。剣と魔法で多彩な手段があるのだから周囲に合わせ行動するように。まぁあとは実践で経験していくのだな」

もっとはっきり協調性皆無野郎！と言ってくれれば良いのに……

「リタはデバイスのせいか戦術の幅が限定されているな。まぁ狙いは悪くないが……それだけだ。今度お前専用のデバイスを作ることにしよう」

まぁシューターしか撃ってないからね。

「アペリス、お前は援護に徹した方が良いな。近接戦闘の才能は……ないだろう」

うっせ、わかってら！

「まぁ護身程度ではわるくないだろうが……それよりは援護か後方指揮の方が向いているだろう。実際にブーストは及第点をやれるし、周囲を良く見れていた。または折角ドラゴンを飼っているのだから、それを使ってはどうだ？」

近接は頑張れば1流までいけるかもしれないが、超1流には届かないので、あくまで補助や護身程度にしておくべきとのこと。

それにハクか……竜騎士にでもなれと？

様々な課題はあるが、とりあえず最初の実力確認の模擬戦は終了した。

それからは生活サイクルにヴァン師匠（せんせい）との稽古が加わり、休日が皆無になってきた。

有意義ではあるんだが……正直なんとかならんかねぇ。

リタはデバイス開発にのめり込んでいるし、エミリオもヴァン師匠（せん）修行三昧の日々だ……

もっと気楽にいこうよね。

相変わらず癒しはラグナの普通なメールだけだ……

そして時折だがヴァン師匠（せんせい）の出張にも一緒に連行される。

ヴァン師匠（せんせい）曰く、良い経験になるだろうとのこと。

まぁそうなんだが…別にお前の秘書でも小姓でもないんだぞ？

単位でもよこせ。

今回連れてこられたのが第６管理世界。

なんでもロストロギアの調査とか。

ちなみにリタは研究、エミリオは別件で不在のため、今回のお供は私一人だ。

そもそも騎士団長自ら行く任務ではないのでは？

そんなニュアンスで尋ねて見ると

「ふむ、イスに座って偉そうにしているのが仕事ではないからな」

どっしり構えているのも上司（トップ）の仕事だとは思うが……

そして移動すること1時間、目的地の遺跡に到着。

管理世界なのに未だ謎めいた遺跡がある方が不思議な気もするのだが。

既に調査隊は中に入っているので悠々と行くことに……

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と思ってたら悲鳴が中から聞こえてきた！

なぜだ！　今日は特にフラグを立てていないぞ！？

中から調査隊と……民間人？　いやなんか賊っぽい連中が飛び出してきて……

「……マジですか？」

「ふむ、中々に壮大だな」

遺跡を内部から突き破るように巨大な竜が飛び出してきました。

「シュァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」

手の部分が翼となっているワイバーンのような白系の色をしたドラゴンだ。

唖然としていると……こっちに向ってファイアブレスぶっ放してきた!?

「守護氷槍陣!!」

ヴァン師匠(せんせい)が氷柱結界を張って防ぐ。

それ以外の範囲は火の海だが。

ヴァン師匠(せんせい)が周囲を隔離結界で覆い剣を竜に向け構える。

確かにこの人なら竜の一匹二匹は簡単にヤりそうだ。

すると遺跡内部から人影が出てきて……

「もうやめてぇぇフリードォォ!!　もう大丈夫だからぁぁ!!」

と、ピンクの髪の女の子が泣き叫びながら竜に叫んで出てきた。

……フリード?

ピンクの髪の女の子と竜のフリード……って!?

「もう戻ってぇぇ!　わたしは大丈夫だからぁぁ!　フリードォォ!」

もしかしてキャロ!?　とフリードリヒ?

「ふむ、何やら事情がありそうだな。とりあえず竜は気絶させるこ

とにしよう」

絶対強者なセリフですね。

とりあえずは賛成だが。

殺してなんてしまったら……ヴォルテールとか出てきそうだ。

エンドロールが見えた気がしたよ。

気絶か、気絶させるならば……

「ふむ、アペリス……可能か？」

普通ならやらせるな！　と思うところだが気絶させるだけならば……

「まかせて下さい。さぁ飛竜よ、覚悟はいいですか？」

シャルティエ直伝の奥義……

「尽く臥せよ！　不殺の鉄鎚――――」

決めます！

「ピコハン！！」

……自分で言っておいて凹んだ。

効果的なのはわかるが……コレはちょっとね。

どっから召喚された物質なんだか。

「きゅるくぅぅぅぅ……」

とりあえず気絶させるのは成功した。

するとみるみる姿が小さくなっていき、原作サイズまで小さくなった。

「フリード！」

キャロ（仮）が竜の元に向う。

「ふむ、どうしたものか」

ホントね、遺跡なんていつ崩れるかわからないし。

そして周りは既に鎮火されているが焼け跡が目立つ。

原作キャラに会えたのは良い……わけでもないが、どうしたものか……

「前途多難ですね。いつものことながら」

「まぁそれこそが人生そのものだ。苦もない人生に価値など見出せんよ」

できれば楽に生きたいものです。

はてさて一体どうなることやら……

ピロリーン！

【ピコハン】を習得しました！

原作序章編2～あのお方に出会うようです（2）（前書き）

今回は前回の続きのお話。

書きたいことはあるのにそこまで中々持っていけないんです。

いっそ一気に数年分を飛ばしてしまいますか…

原作序章編2～あのお方に出会うようです（2）

どうやら調査隊と一緒に遺跡から飛び出してきたのは賊だったらしい。

キャロは部族を追放され当てもなく彷徨い、遺跡内部で雨宿りしていたところ賊に遭遇したようだ。

そして賊は二重の意味で犯罪者だったようで、キャロ暴走に繋がったらしい。

ナニをしようとしたかは想像にお任せするが……

そのキャロだが、過剰防衛ではあったが被害者であり、部族を追放され、行く当てがなかったため、とりあえずヴァン師匠（せんせい）が……とゆーより聖王教会で保護した。

そして今回の件を受け調査は中止になり、ミッドに戻ることになった。

で現在、聖王教会本部のいつもの訓練場にキャロと共にいるのだ

が……

「わたしなんていらない子なんだ……いちゃいけないんだ……」

暗い！　ＣＲＹ！　クラスギル！

対ヒューゴさん時のカリムさんより纏っている空気がヤヴァイ。

そして目のハイライトが……

確かにわずか６歳で部族を追放され、各地を転々と彷徨い、賊に出会い、暴走して……

うん、よく考えるとスッゴク悲惨な人生歩んでるよねこの子。

正直かける言葉がありません。

「わたしなんてわたしなんてわたしなんてワタシナンテ……」

なんかこっち方が楽に生きててマジごめんなさいな気分になったきた。

あぁ生きててごめ「なにをアホ面している」なさい？

振り返ると救世主（エミリオ）がおりました。

どうやらエミリオはヴァン師匠（せんせい）との稽古にきたようだが、忙しかったようなので、いつものここで自主錬をしにきたようだ。

とりあえず事の顛末を説明する。

【今のご時世で里を追放とかあるんですねぇ～まぁ僕のオリジナルの時代では珍しい話ではないですけど】

なんか久し振りにシャルティエの声を聞いた気がする。

「ふんっ、くだらないな」

ってうぉい！　いきなりかよ！？

エミリオのくだらない発言を聞いてキャロも反応を示した。

「……なにがですか」

怒っているような……縋っているような、色んな感情が入り混じった声色でキャロがエミリオに問う。

「ふんっ、全部だ。過去（かつてのこと）はどうあっても変えられない。だが未来（これからさき）なんてまだ決まっていない…自分で創っていくものだ」

それは正論だろうし真理かもしれない……でも所詮キレイゴトだ。

世界中の皆がそこまで割り切っていられたら世界はもっと……

「少なくとも僕はそうやって生きてきたし、これからもそうだ。お前達にそれを強制するつもりなんて更々ないが、いつまでも引き摺って周囲を不快にさせる真似だけはやめろ」

「……あなたは」

感情が読み取れない声色でキャロがエミリオに尋ねる。

「この世界が……今の生活が好きですか？」

ん？何かどっかで似たようなフレーズを……

「わたしはかつての生活がとってもとっても好き……でした」

あれ？

「でも……みんな変わってしまった。楽しかったこと、うれしかったこと全部……全部変わってしまいました」

これは……

「それでも……」

「ふんっ、見つければいいだろう」

まさか！？

「次の楽しいこと、うれしいことを。ただそれだけの話だ」

長い坂道を登り始めるやりとりですか!?

中の人違うだろ!?　ゴホンっ取り乱してしまいました。

「ふんっ、どうするかはお前の自由だ。僕は僕自身の選択に一片の後悔もない」

そう言ってエミリオは去っていった。

お前自主練に来たんじゃなかったのか?

その後、ヴァン師匠(せんせい)から念話で呼ばれたので、教会の応接室へキャロを連れていった。

きちんと扉をノックして……

「アペリスです。キャロ・ル・ルシエさんを連れてきました」

「うむ、入りなさい」

扉を開けるとヴァン師匠(せんせい)、そして……

「初めまして。時空管理局本局執務官のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

まさかの2浪でホームランな執務官だった。

キャロに会ったから、もしかしたら会うんじゃないかと思っていたが……

なんでもフェイトさんは冒頭の二重の意味での犯罪者を追っていたらしい。

それで聖王教会に来ていたところキャロの件を耳に挟み今に至ると。

「ねぇキャロ？　私と一緒に行かない？」

どこへさ？　心の中でツッコミを入れておく。

結局のところキャロはフェイトさんが保護することになった。

運命（フェイト）は変わらず……

いや、違う運命（デスティニー）に出会ったのだから、未来（さき）なんてわからない。

もしかしたら原作なんてとっくにブレイクしているのかもしれない。

「わたしは……何をしたら……どこにいけばいいんですか？」

疑心暗鬼というか、絶望しかないのか……キャロはフェイトさんにそう尋ねる。

「それは君がどこに行きたくて、何がしたいかによるよ。キャロはどこに行って何がしたい？」

中々に難しい質問だと思うがな。

「わたしは……」

助け舟を出しておきますか。

決して今回ロクに話してないからじゃないよ？　出番がなかったからじゃないよ？

「キャロ……さん。さっきエミリオの言っていたことをよく考えてみて。過ぎ去ったものは……辛いことも幸せだったことも変えられないから。だから楽しいこと嬉しいことは……また見つけていくしかないんだよ」

ホント、世界はこんなハズじゃなかった、そんなのばかりだ。

さすがにこれは口に出さないが。

「……色々と考えてみることにします」

そう言ってフェイトさんに手を引かれ退出していった。

「ふむ、過去と記憶、未来と予言……世界は常に流動している。結局は自分が何をしたいか、何をすべきか……いや止めておこう」

ヴァン師匠も何か思うところがあったようだ。

それはさておき、この邂逅がどんな未来を紡ぐのか……

まぁ、いつも通りの前途多難な日々だろう。

窓の外は憎らしいほど晴れ渡っている。

「アレルヤ」

そんな気分な一時でしたっと。

あっヤベ！　学院の宿題（レポート）忘れてた！？

結局いつも通りの締まらない終わりだった……

ピロリーン！

【もしかして脇役？】の称号を得ました！

原作序章編2～あのお方に出会うようです（2）（後書き）

フラグを立てちゃったのはエミリオさんでした。

そして主人公が脇役道に…

原作序章編3～あのお方に出会うようです（3）（前書き）

とりあえず切りがいい話まで上げることにしました。

原作序章編3～あのお方に出会うようです（3）

【もしかして脇役？】

説明：主人公の座が危なくなった者に与えられる称号
条件：イベントシーンを他人にとられた
効果：出番←←
備考：いつかきっと良いことあるよ……

ピロリーン！

おきのどくですが出番が減ったような気がします！
頑張ってオリ主に帰り咲いて下さい！

をゐ！

「Ｄｅｓｔｉｎｙ」と「Ｆａｔｅ」

どっちも「運命」と訳す言葉だがニュアンスは異なっている。

変えられない、避けられない宿命か

自ら行動し切り開いていく未来か

何が言いたいかというと……

「この度Ｓｔ．ヒルデ魔法学院の初等科に編入することになったキャロ・ル・ルシエです……これからよろしくお願いします先輩方」

キャロの運命は変わってしまったようだ。

今日もヴァン師匠（せんせい）の稽古で3人揃って聖王教会本部に来ていた。

今回は空気（ハク）も連れてきている。

3人揃ってでのリベンジマッチなのだ。

リタは試作デバイスのテストを兼ねてヴァン師匠（せんせい）に挑むと意気込んでいる。

エミリオは……まぁいつも通りだ。

そして訓練場に行ったら、ヒューゴさんが何か怪しい装置を弄りながら笑っていた。

エミリオに視線を向けると逸らされた。

うん、絶対碌なことじゃないな。

そもそもなんでこの場所で実験（？）しているんだろう？

いつもカリムさんに沈められているのに……ドMなのか？

【多分ですが坊ちゃんに会いたくて、毎回ここでやらかしているんでしょうね】

シャルティエが絶望的な回答をくれた。

息子と仲良くしたいなら、更生しろよ……

一応ヒューゴさんは聖王教会の運営に多大な貢献を……しているらしい。

それである程度は目を瞑ってもらっていると。

カリムさんお疲れ様です。

【まったく……ベルセ…オ…に手……して…まう…ら…】

シャルティエが何か呟いていたが聞き取れなかった。

まぁシャルティエもエミリオ同様に苦労しているようだ。

さてカリムさんが来る前に片づけてしましますか。

ヒューゴさんをいつも通りの氷像（アイススタチュー）にしてからしばらくするとヴァン師匠（せんせい）がやってきた。

「ふむ、よく来たな。では早速だが稽古に取り掛かろうか」

ヒューゴさんのことはスルーですか。

「えぇ、覚悟しないさいヒゲ。今日をあんたの【ヒゲ剃り記念日】にしてあげる」

「ふんっ、覚悟はできたか？　敗北の言い訳でも考えておくんだな」

なんで君たちそんなに傲岸不遜なの？

前回まったく歯が立たなかったでしょ？

「ふむ、まずはその鼻っ柱を折るとしよう」

そう言ってヴァン師匠（せんせい）は最初からＯＶＬ（オーバーリミッツ）状態になってしまいました！

おかげで私の心情はＯＴＬ（ごめんなさい）状態だよ！

なんで格上の相手を煽るかなこの２人？

そんなんで隙ができるような相手じゃないのに……

そして絶望的なリベンジマッチが始まった。

結論、ヴァン師匠（せんせい）まじパネェ。

本人の前でヒゲ呼ばわりは禁句らしい。

あまりに一方的過ぎたので描写（解説）はしないでおく。

「ふむ、リタは……医務室で寝かしておくか。エミリオ、アペリスは動けるな？」

「……ふん」

なんかエミリオも返事に覇気がないな。

まぁ大見え切ってアレだもんね。

「ふむ、リタは私が医務室に運んでおく。２人は汗を拭いたら応接室にいきなさい」

反省会……というわけではなさそうだが。

とりあえず汗を拭き、空気（ハク）に治癒魔法をかけてからエミリオと応接室に向う。

そこにいたのは……

「こんにちは、君に会うのは２度目で、もう１人の君は初めまして

だね。改めて自己紹介するけれど私はフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。時空管理局本局執務官です。そして……」

「先日はどうも……キャロ・ル・ルシエです」

フェイトさんとキャロでした。

今日は先日の礼と、これからの挨拶に訪れたらしい。

そしてこれからの挨拶というのが冒頭のキャロのセリフに戻る……

どうやらキャロは魔法学院に通うことにしたらしい。

でもこれって確実に原作ブレイクだよね？

確かに魔法学院なら魔法制御についても学べるし、常駐というわけではないけれど聖王教会の騎士も数人いる。

それに今のキャロは原作と違って、暴走による管理局の部隊タライ回しもないから心情的には……まぁどうなんだかね？

「まだ……やりたいことわかりませんけど、これから探していきたいと思っています」

「ふん、それがお前の選択なら僕は何も言わない。好きにすればいい」

このヒーロー属性野郎め。

「何はともあれ、こちらこそよろしくキャロ…さん？」

「キャロでいいです。よろしくお願いします……えっと」

「あぁ、私はアペリス・ウラノ。Ｓｔ．ヒルデ魔法学院初等科３年生だよ。気軽にリースって呼んでもらっていいから。そしてこっちが……」

「ふんっ、同じく初等科３年のエミリオ・カトレットだ。好きに呼べ」

だからＧ（ジルクリスト）はどうした？　そんなに嫌いになったか？

「あっ……はい。えっとリースさんにエミリオさん。これからよろしくお願いします」

学年が違えばあまり遭わない気もするが……

「うん、よかった。ふたりとも学年は違うけど仲良くしてあげてね」

フェイトさんにも念押しされました。

「それと今日ここには来られなかったんだけど、私が保護責任者をしている子でもう1人編入する予定なの。エリオっていう子なんだけど、その子とも仲良くしてあげてほしいの」

エリオもか！？

2人とも学院に編入！？

完全に原作ブレイク……六課フラグばっきばき？

まぁキャロだけ学校行かせてエリオだけずっと保護施設というのも変だし……

フェイトさんは原作で2人が管理局の魔導師になったのを快く思ってなかったようで、JS事件後は2人に学校へ通わないか持ちかけていたからな。

だけどこれでJS事件がどうなるか予想がつかなくなった。

関わらなくても大丈夫かとタカをくくっていたが……

カリムさんの預言解読（レアスキル）に協力して事前になんとかするしかないか……

誰かの幸せは、きっと誰かの苦労なんだろう。

そんな気がした邂逅でした。

原作序章編3～あのお方に出会うようです（3）（後書き）

2人の六課フラグばっきばきです。

とりあえず前書きに書いたように切りがいい話まで。

これからは相変わらず不定期になります。

原作序章編４～あのお方に出会うようです（４）（前書き）

ようやく原作１話のあの事件…

とりあえず書けたところまで

原作序章編４～あのお方に出会うようです（４）

先日、正式にキャロとエリオがＳｔ．ヒルデ魔法学院に編入してきた。

エリオは素直で良い子だ。

うちのツンデレ２人にツメの垢を飲ませてやりたい。

キャロも出会った当初よりは明るく前向きな印象だった。

そしてフェイトさん……教室ドアの隙間から覗き見はやめましょう。

見つかってもソニックムーブで逃走しないで下さい。

あなた執務官でしょ？

証拠がなければＯＫ？　動機も目撃証言もあるんだが……

執務官相手に法で勝ち目はないのでスルーするしかない。

管理局の闇の一旦を垣間見た気がした……

閑話休題

キャロとエリオだが順調に学院生活に馴染んでいるようだ。

しかもエリオは騎士を目指しているようで、よくエミリオと稽古をしている。

ちなみにキャロの授業以外による魔法制御の訓練は私とリタで見ている。

竜といい補助系といいなんかキャラが被っているからね！

……もう少し頑張ろうか。

決して出番が少なくなるのを恐れてではないよ？

ゴホンッ。

そのエリオとキャロだが連休を利用して、現在ミッドチルダに来ているフェイトさんの元に遊びに行っている。

その際にフリードは連れていけないそうなので私が預かることになった。

そして珍しく何の予定もない休日をテレビを見ながら過ごしていると……

「こちらミッドチルダ臨海第８空港です！！　現在原因不明の火災が……」

あっ……そーいえばそんな事件あったよね。

確か死者は奇跡的に０だったハズ……

ここからは遠過ぎるし、そもそも出張るつもりはない。

自分の力量は弁えているつもりだ。

？気にテレビを見ていると……

「んっ？　これは魔法陣……！？」

足元に魔法陣が！？　これは確か召喚魔法！？

「キュルクゥ～！？」

えぇぇぇぇ……

そして……

「フリード！　と……リースさん！？」

周りは火の海、目の前にはキャロとエリオがおりました。

「……キャロ、エリオ？　ここは……？」

大方予想がつくが……

「あのっ！　ここは臨海第８空港で！　火が、爆発が……あのっその……」

うん、おもいっきり巻き込まれたようだ……

おぉ神よ、聖王さまよ……私が嫌いなのですか？

最近はこんなんばっかりだ……

どうやら2人はフェイトさんの元に遊びに行く途中で巻き込まれたようだ。

そしてフリードによって壁をぶち抜き脱出しようと考えており、フリードを召喚したところ近くにいた私も巻き込んでしまった……らしい。

「ごめんなさい！」

いや、この状況でキャロが悪いわけではないので

「いや、しょうがないよ。とりあえず冷静になろうか。……周囲も含めてね」

ここは暑いのだ。　空気もアレだが。

なので……

「セイクリッド・スカイ行くよ？」

なんか久し振りに名前（セカイ）を呼んだ気がする。

まぁそれは置いといて……

「――無慈悲なる白銀の抱擁」

あれから【なんちゃってぜったいれいど】の術式を見直し作り上げた新魔法……

「――アブソリュート・ゼロ！！」

まぁ意味は同じだが。

周囲の全てを凍らせ、フロア全体の鎮火と周囲の温度を一気に下げてしまう。

が威力は予想以上で……

「「寒いです……」」

ごめん、やりすぎた。

凍死の危険性が出てきた……火災なのに凍死は勘弁して欲しい。

結局、周囲に結界を張り、温度を一定に保ちながら救助を待つことにした。

下手にフリードが暴走すると更なる災害になるかもしれないからね。

とりあえず家族と知人に巻き込まれた旨の連絡をする。

セイクリッド・スカイの通信機能はヒューゴさんの魔改造でキチガイレベルなのだ！

だから災害現場だろうと平然と使用できる。

ケース？　両親

「よく巻き込まれるわねぇ～無事に帰ってくるのよ？　あっハクはこっちでおさえておくからね」

ややこしかったため、比較的問題はないと伝えておいた。

また前回のＴ・Ｍ事件時のようにハクがくると後始末が面倒だし。

ケース？　ヴァン師匠（せんせい）

「ふむ……救助が来るまでは動かないことだ。ただし近くに救助が必要な者がいた場合はお前の判断にまかせる……健闘を祈る」

珍しく心配していたが、若干呆れていたようだ。

また巻き込まれたのかと……

こっちだって好き好んで巻き込まれているわけじゃないんだよ！

ケース？　エミリオ（＋シャルティエ）

「ふん、２人を無事に連れてくるんだぞ？」

【混乱に乗じて盗みを働いたらダメですよ？】

私の心配は？

ケース？　リタ

「研究の邪魔！」

あれ？　目から汗が……

ケース……後は事後報告でいいか。

気分も←←だし……

通信を終え凹んでいるとエリオが話しかけてきた。

「あのっ！　フェイトさんにも連絡をとりたいんですけど……」

あぁ、２人の保護者に連絡するのを忘れてた。

確か救助に当たっているハズだよね。

一応連絡をとってみますか。

通常の連絡端末じゃなく緊急時のデバイスを通じた連絡先があるようなので、そちらに連絡をしてみる。

「――こちらアペリス・ウラノと言います。フェイトさん応答お願いします」

「――こちらフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。……アペリス？　どうして私の緊急連絡先を？」

ここから先はエリオに任せるか。

「――フェイトさん！　ぼくです、エリオです！　ぼくたちは今、火災の起きている空港の中にいるんですが……」

エリオがフェイトさんに現状を伝え……

「――中に!?　今どこなのエリオ!?　もしかしてキャロも一緒!?」

フェイトさん冷静に……

「えっとあの！」

エリオも一気に聞かれたら……もう仕方ない。

「――こちらアペリス。現在地はエントランス奥の待合ロビーと思われるフロアでキャロも一緒です。現在は周囲を完全に鎮火し結界を張って救助待ちの状態です。怪我もありません」

周囲は比較的安全で、ある程度余裕を持てるので冷静に答える。

「――そっか……エントランスの方なら、なのはの方が近いから向ってもらうよ……無事でよかった」

魔王さま待ちか……

あの天井抜きをリアルで拝むことになるのか。

ん?　天井抜きとエントランス?

……もしかして近くにスバルいる?

そして、もしなのはさんが先にこっちに来たら……女神さまのボディプレス？

「……」

うぉぉぉおい！！

それはなんか色々まずいよ！！

「キャロ、エリオ！　私は救助が来るまで近くに人がいないか確認してくる！　対物の結界（アンチ・マテリアル）を強化・追加しておくから、ここで救助がくるまでおとなしくしてるんだよ」

既に救助されていれば良いが……

「あっハイ！　わかりました！　気を付けて下さい！」

「ごっ、ご武運を！」

「キュルク～！」

２人（＋１匹）に見送られエントランス方面に向かう。

「――間に合え……！」

ピロリーン！

【なんちゃってぜったいれいど】が【アブソリュート・ゼロ】に更新されました！

原作序章編４～あのお方に出会うようです（４）（後書き）

続きは近いうちにあげたいとは思っています

原作序章編5～あのお方に出会うようです（5）（前書き）

すぐ上げるつもりだったのに…

中々上手くいかないですね

原作序章編5～あのお方に出会うようです（5）

チートは努力で越えられない壁なんだと思う……

いや、別に超えるつもりはないんだけどね。

進んで苦労する将来（みち）を歩むつもりはないし。

……ホントだよ？

スバルを探してエントランスホールの方へ駆け抜けていく。

もし、なの破産（何故かこう変換された）が先にキャロとエリオの救助に行ったら、スバルは高確率で女神のボディプレスだからだ。

もう救助されていればいいが……砲撃による破壊音（聞こえるか怪しいが）や魔力を感知していないため可能性は低い。

探査魔法等は一通り習得しているので、サーチャーを用い人影を探しているが見つからない。

ここではない……？

エントランスはここだけではないのか？

さすがに空港の詳しいマップは持っていないのでわからないが……

案内表示でも探すか……っん？

前方のサーチャーに人影が写った！

確認のためサーチャーを近づける。

「ビンゴッ！」

スバルと思われる少女だ！

こっちに向って泣きながらよろよろと歩いてくる。

ん？　こっちに向って……？

一瞬何かが頭をよぎったが無視して叫ぶ。

「そこのあなた！！　大丈夫ですか！？」

「……えっ？」

こちらに気付いたようだ。

そして足を止めこちらを確認する。

「今そちらに行きます！」

そう言ってスバルの元に駆けつけようとして……

「――グァッ！」

いきなり側面から爆風がきて吹き飛ばされた。

「えっ……き、きみ！　大丈夫！？」

一応助けにきたのに心配させる始末、いつものことながら……

なんとか受身はとれたため致命的なダメージはない。

「いたた……あのっ！　私は大丈夫で……」

そう言いかけて、ふと目に入ったのは女神像。

位置的に私の後ろにある……なんかヒビが入ってますよ？

……えぇぇぇぇ！？

私が原作のスバルの位置ぃ！？

まずいセイクリッド・スカイ……あれっ！？　ない！？

もしかしてさっき吹き飛ばされた！？

――そして女神さまが無慈悲なるボディプレスをかましてきた。

「きゃあぁぁぁぁ！！」

スバルの悲鳴が聞こえる……リアルにヤヴァイ！！

こんな時こそ高速思考展開！！

≪≪≪≪　乙　≫≫≫≫

……人生終了のアナウンスのみでした。

我が思考ながら役に立たねぇぇぇぇ！？

迫り来る女神が……よく見るとオッサンに見えるかも。

これが辞世の句かと思うと激しく後悔した。

ヤヴァイ死ねない。

こんな辞世の句を残してたまるかぁぁ！！

現実は厳しいが物語は続くようで……

「……あれ？」

生きてる？

女神像が空中でバインド系魔法により拘束されている。

「――よかった……間に合った」

そんな声が聞こえてきた。

そして……

「――助けにきたよ！」

白い戦装束（バリアジャケット）に黄金の戦槍（レイジングハート）を持った女神（なのは）さまでした。

なのはさんマジ魔王（まおう）！　とか思っててスミマセンでした！

てゆーか、まさか私がこの役を演じてしまうとは……

「よく頑張ったね……偉いよ」

ごめんなさい。

ただ暴走しただけで今回も……何もしていません。

「もう大丈夫だからね……安全な場所まで一直線だから！」

おっと、キャロとエリオのことを伝えないと。

「あの！　奥の待合ロビーにまだ2人が……キャロとエリオって子がいるんです」

「もしかして……君がフェイトちゃんの言ってた……うん、わかったよ！　すぐ近くに反応があるね……今2人を連れてくるから君たちはここで待っていて！」

そう言って私たちの周囲に結界を張り2人の救助に向かった。

「あの……これ」

どうやらセイクリッド・スカイはスバルの方に転がっていた模様。

「あっ、拾ってくれてありがとうございます……お怪我はありませんでした？」

吹き飛んだのはこっちだけどね。

「うん……大丈夫」

そして会話が途切れる。

スバルは泣きそうな……何かを耐えるような、悔しそうな、色々な感情が入り混じったような表情をしている。

何か話しかけようとしたが、なのはさんがキャロとエリオ（とフリード）を連れて戻ってきたのでやめた。

ここからの脱出が最優先だ。

「一撃で地上まで抜くよ……ディバイィィン……」

ピンク色の超高密度な魔力がデバイスの先端に収束する。

そして……

「バスタァァァァ！！」

ピンク色の魔力の奔流が天井を抜き、夜空を駆け抜ける。

うん、まじパネェ。

直径数十メートルはありそうな大穴を開けて下さいました。

将来、これ以上の砲撃を味わうことになりそうなメガネさんに合唱。

「みんな私につかまってね。一気に……」

さすがに厳しいだろう。

でもいくら結界を張ってもここに残すのは……それ故の判断だろう。

なので

「あの！　私は自分で飛べます！　それとキャロかエリオ1人くらいなら抱えて飛べます！」

なるべく負担はかけない方がいいだろう。

今回もまともな活躍をしてないからじゃないよ……？

「……うん、わかったよ。一応私が下を飛んでフォローするからお願いね」

なのはさんも了承したのでキャロを抱えて大穴から外へと脱出する。

なぜキャロかというとキャロの方が軽いためだ。

邪な理由はないのですよ？

「――ヒドイ……空港が……」

キャロが夜空から災害現場を眺め呟いた。

最終的には都市ひとつが廃棄されるくらいだもんな。

いったいどれだけの被害損額なんだか。

なのはさんが通信本部と連絡している間にこちらもフェイトさんに脱出した旨を連絡しておく。

「――こちらアペリス。局の魔導師の救助によりみんな無事脱出できました」

「――よかった……私も救助活動をしているからまたあとでね……2人をありがとう」

そして私たちは西側の救護隊に引き渡され、なのはさんは救助活動に戻っていった。

その飛んでいく後ろ姿は……見えそうで見えないな。

何がとはいわないが。

ゴホンッ！

さて今回の件を省みてみると……

巻き込まれる→吹き飛ばされる→潰されそうになる→助けられる

なんていうか……いつも通りだな。

いい加減慣れたものだ。

しかし今回の件でよくわかった。

おとなしくしていても巻き込まれるのだ。

チートオリ主ではないのに……どのみちオリ主なのか？

「修行にも……もう少し力を入れていきますかね」

未だ燃えている空港を眺めながらそう呟く。

チートが無いなら無いなりに頑張っていくしかない。

そんな決意をした序章（はじまり）でした。

ピロリーン！

【略してオリ主】の称号を得ました！

原作序章編5～あのお方に出会うようです（5）（後書き）

とりあえず原作事件は終了。

次回この件のエピローグ的な話を予定。

原作序章編6～あのお方に出会うようです（6）（前書き）

今回で原作序章編の空港火災事件終了です。

原作序章編6～あのお方に出会うようです（6）

【略してオリ主】

説明：新たなる決意をした者に与えられる称号
条件：大きなイベントでこれからについて覚悟を決めた
効果：全ステータス→→→　成長率→→→　フラグ率→→→
備考：主人公補正が付きます

ピロリーン！

ようやく主人公補正がかかりました！

なんでだろう……あまり嬉しくない。

てゆーか今まではなんだったんだ？

空港火災の事件は原作通り、負傷者は多数だったが死者は0だった。

現在は鎮火しており原因調査中とのこと。

まぁ原因はレリックだと思われる。

公にはされないだろうが……知る権利はないだろうか？

やっぱり三権集中は歪んでいると思う……

閑話休題

目立った外傷はなかったが念のため病院に行き検査を受けることになった。

いつもの聖王医療院ではなかったが担当医は一緒だった。

今回の件で応援に来ていたようだ。

そして呆れられた。

「医者としてこういうことは言いたくないが……呪われているのではないかね？」

ほっとけ！

自分が一番実感してるわ！

検査も問題がなかったためすぐに終了した。

健康な人にかけている時間はないもんね。

キャロとエリオも問題なかったようで合流してフェイトさんの元に向う。

ちなみにスバルにはあれから会うことはなかった。

戦闘機人だから一般の病院ではないのかも……

まぁどっかでまた会うだろう……確実に。

自分の巻きこまれ体質のせいでな！

……切なくなってきた。

まぁ会えないものは…いや会うつもりはないのだが……ゴホンッ！

それはともかく！　キャロとエリオと一緒にフェイトさんがいる

ホテルへと向かう。

そしてホテルを見て一言。

「なんですかこの高級ホテルは？」

一般人なめてんのか？

キャロとエリオも苦笑いしている。

どうやら2人とも金銭感覚は普通のようだ。

どうかそのまま育って下さい。

この規模のホテルだと直接部屋を訪ねるわけにもいかないので、フロントから連絡してもらい案内された。

部屋の内装もスゲェ……このブルジョア共め。

まぁその分の仕事はしているんだろうが……

部屋には魔王さま、2浪さん、歩くセクハラ……ゴメン訂正します。

なのはさん、フェイトさん、多分はやてさんがいた。

祝福の風2号機さんは寝ているのが見える。

3人ともある程度は着崩しているが、さすがにスカートは穿いてた。

別に悔しくなんてないんだから……

とりあえず自己紹介とあの場でのことを説明した。

巻きこまれた旨を説明すると、なのはさんとフェイトさん苦笑い。

はやてさんウンウンと1人納得顔……なんで？

「カリムの言っとった通りの子やな」

あの人は……！

そしてスバル救助に向かった件は少し怒られた。

無茶はしないで、と。

9歳から魔法少女しているあなた方にだけは言われたくないセリフだ。

ミッドの就労年齢が低いこともあるが、この人たちのような英雄譚も子供を無茶させる要因のひとつなのではないだろうか？

まぁ口には出さないが。

一通り報告も終わったところでヴァン師匠から連絡がきた。

断りを入れてから通信を繋ぐ。

3人ともあの恰好じゃマズイしね。

「――ふむ、無事でなによりだ。私もこれから現地入りをして調査に参加する」

「――ヴァン師匠がですか？　もしかして今回の件は……」

ロストロギア関連……知ってはいたが濁して尋ねる。

「――そうだ。お前もくるか？　低レベルとは言え管理主任者の資格もあるし大丈夫だろう」

をゐコラ！

「――そんな資格初耳なんですが！？」

どうゆーことだ！

「――ふむ、以前に騎士カリムの依頼を受けただろう？　その実績から彼女の方で申請していたようだ」

聞いてないぞコラ！

これだから権力者は！

「――今回はやめておきます。カリムさんに用事ができましたので……」

「――そうか。では迎えをよこすからそれで帰りなさい」

そう言って通信を終える。

場所も指定していないが……まぁなんとかなるだろう。

なのはさんとフェイトさんはまたもや苦笑いをしていた。

はやてさんは「カリム乙」とか言って合掌していた。

こんなんばかりだ……もう慣れたけどね。

「……しかし聖王教会が動いたんか」

はやてさんが皆には聞こえない音量で呟くが、位置的に聞こえてしまった。

どうやらはやてさんは今回の件にて聖王教会が動いたことで、ロストロギア関連の災害だと感づいたようだ。

それに私たちがここにくる前には六課フラグを立てているハズだから、今回の件について色々と思うところがあるようだ。

しかしキャロとエリオの件を含め、六課はどうなることやら……正直見通しがつかない。

「――未来は私達が生み出していくもの……か」

不意にヴァン師匠（せんせい）の言葉が思い出された。

フェイトさんと笑いながら話しているキャロやエリオを見て、今まで選んできた選択肢が間違っていたとは……思いたくない。

まぁ実際のところ、私は何もしていない気がする……いつものことですが。

「……とりあえず帰ってカリムさんを問い詰めますか」

資格取得申請の手間は省けたが絶対に善意からではない。

あの人のことだから、これからも面倒事を押しつけるためだ。

そう思い窓から外を眺める。

さすがは高級ホテル、景色も良い。

「アレルヤ」

いつぞやも呟いた一言。

どうか未来も今日のように晴れ渡っていますように……

そんな祈りを込めて。

しかし現実は無常で、課題(じかん)提出は待ってくれませんでした……

原作序章編6～あのお方に出会うようです（6）（後書き）

今回で原作序章は終了です。

次回からは原作……ではなく幕間（個人サイドのお話）とフラグ回収編など。

せっかく遺跡やお宝がある世界観なのにあの人たち（テイルズキャラ）が出ないのは寂しいので。

原作ＳｔＳ時代はしばらく先になります。

しばらくはリリカルからテイルズよりになりそうです。

興味がある方は読んでやって下さい。

主人公設定（原作序章編終了時点）（前書き）

久々に設定を更新

主人公設定（原作序章編終了時点）

主人公設定（空港火災終了時点）

名前　：アペリス・ウラノ
性別　：男
生年月日：新暦６３年
出身地　：ベルカ自治領（ミッドチルダ）
容姿　：腰まで届く金髪、アメジストの瞳
家族構成：父（父さん）と母（お母様）の３人暮らし
魔力資質：先天的ＡＡランク（現在値ＡＡ＋程度）
才能　：器用貧乏
備考　：ハク（ハクリュー）を飼っています
原作知識：アニメ版Ｓｔｒｉｋｅｒｓまで、Ｖｉｖｉｄ&ａｍｐ；Ｆｏｒｃｅは知らない
現在所属：Ｓｔ．ヒルデ魔法学院　初等科３年
取得資格：無限書庫司書、Ｃ級遺失物管理主任者（本人は知らなかった）

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）
【かけだしトレーナー】
【甲種準一級フラグ建築士】
【初めての弾幕ごっこ】
【魔法使い始めました】
【オリ主候補生】
【時を駆ける男（笑）】
【オリ主属性】
【元ラスボスの弟子】
【もしかして脇役？】

【略してオリ主】

技能（スキルっぽいモノ）

【マルチタスク（４分割超高速思考）】
・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃって断罪の剣】
・ぶっちゃけただの魔力刃

【ポーカーフェイス】
・ただのハッタリ

【なんちゃってぜったいれいど】→【アブソリュート・ゼロ】
・絶対零度の空間凍結魔法（やたら寒い）

【なんちゃってインディグネイション】→【インディグネイション】
・撃っていいのは撃たれる覚悟のある人だけ、現在トラウマなため使用不能

【ＫＹ（偽）】
・場の空気を読み、（死亡フラグを）危険予知できる（※回避できるわけではない）

【基礎魔法一式】
・治療、結界、弾幕等の基礎魔法

【なんちゃってアストラルベルト】
・左右の手に魔力刃を展開させ前方に突進しながら斬りつける技

【ピコハン】
・ＨＩＴすると気絶させることができるシャルティエ直伝不殺の奥義

デバイス
【セイクリッド・スカイ】
種類　　：ブーストデバイス（ＡＩは搭載していない）
待機形状：レイハさんと一緒
戦闘形状：なし、バリアジャケットは白い制服系統をイメージ
所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）
使用魔法：『インディグネイション』『アブソリュート・ゼロ』『各種ブースト』

人間関係（登場順）
【エミリオ】　→心友だと思っていたのに……
【シャルティエ】→乙
【ヒューゴさん】→マッド
【カリムさん】　→仲間だと思っていたのに……
【ヴァン師匠】　→師匠（ししょう）兼ヒゲ
【リタ】　→もしかして私って実験動物（モルモット）？
【ラグナ】　→メル友（唯一の癒し）
【ヴァイスさん】→気のいい兄貴分

【キャロ】　↓不幸な人生を歩んできた後輩

【エリオ】　↓よくエミリオと入力（タイピング）を間違える……

【三人娘】　↓魔王、２浪、歩くセクハラ

主人公設定（原作序章編終了時点）（後書き）

人間関係はテキトーです。

そもそもシャルなんて人間じゃないし（笑）

S～あなたと響きあいたい…（1）（前書き）

暑さにやられていました…熱中症には気を付けて下さい。

個人サイドの話はシリアスにしかならなかったので封印しました（笑）

ここからはテイルズノリ的な話が続いていく予定です。

S～あなたと響きあいたい…（1）

長いものには巻かれろ。

なかなかの名言だと思う。

天才や馬鹿、社会不適合者でもない限り、少なくとも凡人にとっては。

何が言いたいかと言うと……

「じゃあよろしくね☆　管理主任殿？」

結局カリムさんには勝てなかったよ☆

しかも余計な面倒事のオンパレードだ……

あの後だが聖王教会本部に向かった。

カリムさんに話を聞くため……

一応受付にて手続きをしようとしたら既にカリムさんが御呼びと

のこと。

この展開を読んでいた……？

どうやら向こうの方が何枚も上手のようだ……わかっていたけどね！

悲しくなんてないんだから……

「あら？　団長と調査に向かわなかったのですか管理主任殿？」

執務室に入って第一声がこれだった。

そもそも自分で受付に話を通してる時点でわかってんだろ！

それよりも気になるのが……

「なんなのですかその『管理主任』というのは？」

何勝手に決められているのさ！？

そんなこっちの心情を知らずにカリムさんは語る。

「えぇ実は……」

そこから始まるカリムさんのサクセスストーリー。

衰退した世界を救済するため、神子が旅立って行く物語……

どこのシンフォニアだ……要約するとロストロギアの危険性と管理のお話だった。

「管理主任の名前だけでも必要なのよ」

「……今まではどうしてたんですか？」

「それが……その人が冒け…じゃなかった、長期出張から帰ってこないのよ。だからしばらくは代理を立てようと思って……」

をゐ！　冒険といったぞ今！

「じゃあその人をさっさと探してくれれば良いじゃないですか！」

そう言って後悔した。

カリムさんが某新世界の神のような顔に見えた気がした。

「じゃあ捜索お願いね☆　グランツ団長に伝えておくわ。これも修行の一環ということで」

謀られたぁぁぁぁ！！

【捜索クエスト（強制）】がエントリーされました！

そんなアナウンスが聞こえた気がした……

そんなわけでやって参りました無人世界。

なんでも前任者は休暇でここの遺跡調査に行ったまま帰ってきていないとのこと。

普通に捜索隊とか出せよ……あんまり心配されていないのかな？

ちなみに今回もエミリオとリタは来ていない。

別に休みでもなんでもないからね。

学院には一応ヴァン師匠（せんせい）やカリムさんから話が通っている。

聖王教会の依頼だと融通は利くらしい。

もちろん単位なんてでないがな！

そんなわけで今回も例の空港事件調査を終えたヴァン師匠（せんせい）と一緒だ。

「キュウゥゥ！」

おっと忘れていたが今回は空気（ハク）も一緒だ。

無人世界なら役に立つかもしれないし、制限もなさそうだし。

「では遺跡に向うぞ」

ヴァン師匠（せんせい）がそう告げる。

飛行魔法で行くのかと思いきや徒歩でだった。

距離もそこまで離れているわけでもなく、魔力温存にとのこと。

さすがに山道は辛いが……

「なに、これも修行だ」

正直しんどいわ……

2時間ほど歩いただろうか、ようやく目的地の遺跡に付いたのだが

「……なんですかこのお城は？」

どこが遺跡だよ！

なんとも立派な古城だ。

「なに、見た目だけだ。中身はただの瓦礫の山だ」

「以前にも来ているのですか？」

そういえば迷わずにここまで来たが……

「最初の調査の際にな。まぁ何も得られなかった調査ではあったが」

ん？

じゃあ何で前任者が遺跡調査なんてしてるのさ？

そんな顔をしていたつもりはないがヴァン師匠（せんせい）が疑問に答える。

「ふむ、自分で見たものこそを信じる者でな……調査不十分だと言いだして飛び出していったのだ」

自分が納得できないことをそのままにしておくよりは良いが……

「自分勝手ですね」

「ふぅ、学者というものはそういう人種だ」

ヴァン師匠（せんせい）が珍しく溜息をつきながら言った。

「しかし、まぁ……どんなに優れた文明であろうと滅亡を迎えるのは、世の摂理なのですかね？」

後世に謎を残すばかりか、ロストロギアなんていう危険物すら投げっぱなしだ。

「ふむ、断絶された歴史、後世に残される負の遺産、その影響による滅び……か。人とは愚かで救いようがない生き物なのかもしれな

いな……」

あれぇ？

何かネガティヴモードに入ってます？

もしかしてキチガイラスボスムスカ…じゃなかった、栄光を掴むヒゲフラグが立ってます？

「いや、だからこそ…か。陽の下では星の輝きはわからぬか……」

なんか自己完結しましたよこの人。

その台詞もポジティヴに考えていいのかな？

なんか心配事が増えた気がするな。

そんな師匠（ヒゲ）は無視（スルー）して、とりあえず古城に入ろうと思って近づいていくと……

「揺れていませんか？」

「ふむ、揺れているな」

辺り一面が揺れている。

そして古城から全速力で出てくる人影が……

「ぬぉぉぉ！！　私としたことがぁぁぁぁ！！　な〝ぁぁあっ！！」

その人がすごい形相で断末魔を上げ古城から脱出（？）した瞬間……古城が吹っ飛んだ。

あるぇぇ？

「木端微塵ですね」

「ふむ、見事消え去ったな」

自爆装置でもいじくったのだろうか？

出てきた人をそっちのけで考えていると……

「むっ！　淀んだ魔力が跡地に流れ込んでいるな。これは……」

なんかよくわからんが頭の中をアラートが……

【ＫＹ（偽）】がビンビン逝ってる……『ヤヴァイ』と。

そして飽和した真っ黒な魔力が形を作っていき……

「……なんですか、このセンスの欠片もなさそうな化け物は？」

カリムさんの話がシンフォニアだったせいか、イメージ的にはエクスフィギュアのすんごいでっかいやつに見える。

もう大抵のことには驚かないつもりだったが……いや、むしろ呆れ気味なのだが、これはちょっとね。

「――悠長に眺めているわけにもいかないようだな」

大剣（デバイス）を構え、（割と）真剣な顔でヴァン師匠（せんせい）が呟く。

とりあえず……神さま、聖王さま、どっちも私のこと嫌いでしょ？

今回もいつも通りにトラブルが始まった。

S～あなたと響きあいたい…（1）（後書き）

遺跡から出てきたのはあのお方。

わかる人にはわかると思いますが…

次回はバトルかも…

S～あなたと響きあいたい…（2）（前書き）

相変わらず暑い日々が続いております……

とりあえず前回の続きを……

シンフォニアのお話は次回で最後です。

S～あなたと響きあいたい…（2）

目の前にセイバ…じゃなかった、金髪で虹彩異色（オッドアイ）なお姉さんがいました。

「あなたの望みはなんですか？」

優しくそう問うてきた。

「平穏です」

なので迷うことなくそう答える。

「そうですか、では頑張って下さい」

えっそれだけ！？

平穏は頑張らなきゃいけないものですか！？

「そうですね……些か無責任でしたか。ならばそのための技能（すべ）を伝授しましょう」

まさかのサトラレ！？

てゆーか結局頑張らないとダメですか！？

「いいですか、右手に魔力を、左手に……根性を」

できるかぁぁ！！

どこの咸卦法だぁぁぁぁ！？

そもそも根性でどうにかなるかぁぁぁぁぁぁ！！

そんな現実逃避という名の白昼夢を見た気がした……

……意識を取り戻して現状把握。

すぐさまハクに乗って空へ撤退した。

絶対ヤヴァイよアレ。

ＲＰＧ風に言うならイベントボスって感じだ。

「ＧＹＡａａａａａａａａａａａａａａａ！！」

凄まじい雄叫びを上げながら腕と思われる部分を地面に叩きつける。

「ワーオ」

ものごっつ地面が抉れました。

だがしかし、向こうがイベントボスならこちらには（元）ラスボスがいるので……

「――魔を灰燼と為す激しき調べ……ジャッジメント！！」

さすがに野太い声で詠わないか……ちょっと聴いてみたかった。

そんな心情を無視（スルー）するように、上空から光の束が雷となって降り注ぎ、エクスフィギュア（仮）に全弾ＨＩＴした。

……てゆーか全弾ＨＩＴって鬼畜仕様だな。

「ＧＡａａａａａａａａａａａａａａａａ……」

倒し……っ危ない。

フラグを立てるところだった。

「ふむ、やったか……？」

無駄な努力でした。

あんたがフラグ立ててどうする……

あぁエクスフィギュア（仮）がみるみる再生してゆく……

「ふむ、中々の再生速度だな……どうしたものか」

凍らせればいけるかもしれないが、標的（ターゲット）にされたら嫌だし、あの大きさの的だと一発で魔力がピンチなので自重する。

ヴァン師匠（せんせい）も一旦、上空まで避難してきた。

狙われるからこっちくんなよ……

「で、アレはどうするんですか？　いえ、そもそもアレはなんなのでしょうか？」

「ふむ、アレが現れる前に淀んだ魔力の流れを感じた。おそらくだがアレは「ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！　遺跡が跡形もないだとぉぉぉぉ！！」……そういえば忘れていたな」

おそらく件（くだん）の前任者と思わしき女性が叫んでいる。

古城から脱出と同時に吹き飛ばされていたようだ。

それにしてもよく叫ぶ人だこと。

「この遺跡の価値もわからぬ木偶の坊がぁぁぁぁ！！　貴様もこの遺跡のようにしてやるぞぉぉぉぉ！！」

そもそもあなたが内部で何かやらかしたせいでこうなったんじゃ

ないのか？

どうやら自分のことは棚に上げているらしい。

「――生命を糧とし、以下略！　セイクリッドシャイン！！」

その台詞と共に光が収束していき……大爆発しました。

「ＧＹＡａａａａａａａａａａａａａａａ！！」

凄まじい爆音と雄叫びが辺り一面に響き渡る。

正直凄くウルサイ……

そして極光が直撃したエクスフィギュア（仮）から球体の何かが垣間見えた。

「あれが核（コア）だな――光龍槍！！」

ヴァン師匠（せんせい）が大剣（デバイス）からビームを出してエクスフィギュア（仮）の内部にあるエクススフィア（仮）を破壊した。

そもそもエクスフィギュアはエクススフィアを要の紋なしに取った場合になるんだっけ。

いくら（仮）でもいい加減過ぎたか。

まぁどーでもいいが……それにしてもなんかシュールだな光龍槍（笑）

エクスフィギュア（仮）は今度は再生しないで崩れていった。

「ハーハッハッハッハッハ！！　この遺跡の～（以下略）～相応しい末路だ！！」

てゆーか結局この人、自分で遺跡を更地にしたよ……

「キュウゥゥ！！」

ん？　空気に徹していたハクが何かに気付いたようだ。

「……雪？　いやこれは光でしょうか？」

砕けたエクススフィア（仮）から雪のように……だが天に向かうように光の粒が流れていく。

それはとても儚く、まるで……

「――ようやく解放されたのだろう……フッ、我ながら非科学的なことを言っているな」

自嘲するかのようにヴァン師匠（せんせい）が呟く。

「……どうやらこの古城は、まともとは言えないモノだったのですね」

だから滅亡したのか……今となってはわからんが。

「人間は罪深い生き物だな……いや、だからこそ救いを求めるのか」

またネガティヴモードに入って勝手に自己完結しましたよ……

もしかしたらＪＳ事件よりもこの人の方が厄介かも。

「ぬぉぉぉぉぉ！！　遺跡がぁぁぁぁぁぁ！！　何も残ってないだとぉぉぉぉ！！」

とりあえず今は自分の所業に悶絶している件（くだん）の前任者、銀髪美人の遺跡マニアさんをなんとかしますか。

まぁ大方予想はついているが。

そんなてんてー達を横目にもう一度だけ空に向って逝く光を眺める。

アレがなんなのかは想像の域を出ないが、今回の行為は正しかったのだと思いたい。

「――アーメン、せめて安らかなれ」

らしくない台詞を呟き……ふと思い返す。

「私って今回……何もしてない？」

「キュウ～♪」

それもまたいつも通りだが……何か釈然としない終わり方だった。

S～あなたと響きあいたい…（2）（後書き）

次回はこの続き……とゆーかあとがき。

一緒にできればよかったのですが暑くてダレました。

なるべく早めに次をあげたい……とは思っています

S～あなたと響きあいたい…（3）（前書き）

前回の続き…でもシンフォニア関係ない。

迷走しております…

S～あなたと響きあいたい…（3）

とりあえず絶叫の果てに唖然と佇んでいるてんてーを連れて帰還した。

一体あの古城内部で何を見つけたのやら。

それを尋ねたら超長い講義が待っていそうなので自重するが……

そして聖王教会本部に着いたので、カリムさんの執務室に直行する。

「任務お疲れ様でしたグランツ団長、無事に回しゅ…見つけられたようで何よりです」

おい、回収って言いかけたぞこの人。

「若干トラブルはあったがな……それは報告書に書いておこう。アペリス頼んだぞ」

「私がですか！？」

おいこら！

一般人（と思っているのは本人だけ）にやらせるでない！

「なに、何事も経験だ。では次の仕事があるのでな、後は頼んだぞ」

そう言ってヴァン師匠（せんせい）は去っていった。

「そうですか、では明日までに作成しておくようにお願いね」

しかも期限短っ……今日は徹夜コースか！？

まぁそれはともかく、今回の発端である『管理主任』について相談しなければ。

「それで？　前任者は連れてきましたので『管理主任』についてはやらなくて良いんですよね？」

「そうねぇ……『今回』は前任者の継続という形でいいでしょう」

やたら『今回』を強調しているように聞こえたが……まぁ将来的にはやってもいいんだけどね。

そして燃え尽きているてんてーに話しかける。

「聞いていますかアーヴィング女史？　引き続き聖王教会の遺失物管理主任お願いしますね」

攻略王（ロイド）おぉおぉ！？

「あぁ……遺跡、遺跡が……」

しかしこの人、話を聞いちゃいねぇよ。

「では了承も得られたのでこの件は終了ね。これからお茶でもいかがかしら？」

絶対に聞いていないし頷いてないよね……まぁいいか今回は。

しかしお茶か……報告書の件があるから今回は遠慮しますか。

「折角ですが報告書の作成が「では用意させるから先に中庭で待っててね」…なので今日は遠慮……」

もうどうにでもなれ……

「ふふっ、お味はいかがかしら？」

「とてもおいしいですカリムさん……」

中庭に移動してお茶会です。

いつぞやと同じやりとりだな。

お茶も茶菓子も美味いのだが……

「それで……要件はなんなのですか？」

今回はこちらからストレートに尋ねることにした。

「あらあら、すっかりお見通しね」

さすがにね……慣れたわ。

「えぇ、実は……」

今回はサクセスストーリーではなかった。

要約すると、なんでも今後しばらくは忙しくなり、予言解読に時間を割けなくなるため、解読に協力して欲しいとのこと。

おそらく六課新設に向けた件のことだろう。

こういうことをオープンな場所で話して良いのだろうか？

まぁ後ろめたいことではないとのアピールかもしれないが……

この件だがもちろんタダではなく正式な依頼だ。

こちらとしても六課の戦力不足フラグが立っているため問題はない。

お金も入るし、翻訳のコネもできるかも。

「実績が証明できれば予言解読の専門チームもできるかもしれませんね」

「えぇ、この件お願いできるかしら？」

「わかりました。私でよければ喜…ゴホンッ！　謹んで協力させて頂きます」

危なかった……言動には気をつけないと。

喜んでなんて言ったらどんな無茶を要求されるか……

「……そう、じゃあお願いするわね」

微妙な沈黙があったな……

【翻訳クエスト（任意）】がエントリーされました！

翻訳クエストってなんだ？

この件で少しだけカリムさんに感謝したのは秘密だ。

「そういえばアーヴィングさんは？」

「彼女なら旦那さんが回収していったわ」

来たのか攻略王（ロイド）……ちょっと見てみたかった。

「ご結婚されていたのですね」

予想はついていたが。

まさかの攻略王攻略……奇跡の所業だな。

「ちなみに……」

ついつい以前にやらかしそうになった禁句を訪ね……

空間が凍りついた。

背筋に刃物が当たっている（気がする）

息ができない。

冷汗が出まくっている。

少しずつ侵食されていく感じ……

ヤヴァイヤヴァイヤヴァ…

「？　どうしたの」

「ハッ！！」

以前より明確なデッドエンドが視えた。

ＫＹというより、もはや未来予知レベルだな……

最後の最後でやらかしそうになるとは……まぁいつも通りだが。

何かと最近は諦めの境地に達しかけている気がする。

それにしても報告書どうしよう？

ヴァン師匠（せんせい）もサンプルくらい渡していけよ…

結局、徹夜で頑張るハメになりました。

ピロリーン！

【ＫＹ（偽）】が【直感（偽）】に更新されました！

S～あなたと響きあいたい…（3）（後書き）

コレットさんは中の人がアレですので出場前に退場しました。

むしろＴＯＳＲでは攻略王を攻略しているのは彼女なのに…

F～美しいは正義？（前書き）

今回も題名は関係ありません（笑）

しばらくゲームに集中しており執筆しておりませんでした。

とりあえずクリアしたのでぼちぼち書き始めるかと…

F～美しいは正義？

面倒事も厄介事も基本的にゴメンだ。

まぁ既に相当アレだが……

チートなんてものは非日常（デッドオアアライブ）への片道切符だと思う。

自ら進んで苦労はしたくない。

それは今も変わらない。

変わらないのだが……

――強くてカッコイイのに憧れたっていいじゃん！

だって男の子だもん！

カリムさんとのお茶会の帰りに、ふと最近の行動を客観的に省みてみた。

『自発的には何もしておらず基本的に巻き込まれ』

『それなのに原作ブレイクのフラグが立っている』

『助けようとしたら逆に救助された』

『訴えにいったら何故か異世界へ』

『そこでも結局何もしていない』

正直ひどい有り様だった……

「……」

これはマズイ。

主にアイデンティティと言うか何というか……とにかくマズイ。

相棒の空気具合もマズイと思うんだ。

なので……

「セイクリッド・スカイの改造…フレームか……」

空港火災の時なんか爆風で吹き飛んでいったしな。

デバイス強化とは短絡的だが未だフレームがないのは虚しいしな。

その依頼を出すとしたらヒューゴさんか……

頼む相手としては不安極まりないが……一応デバイスの製作及び

メンテナンスをしてくれているため信用はできる。

普段の言動から信頼はまったくできないがな。

「うむ！　その言葉を待っていたぞ！　既に構想は練ってあるから3日もあれば完成させれるぞ！　ハーハッハッハッHAHAHAHAHAHAHAHA……ゴホッゴホッ！！」

うん、どっから湧いてきた？

「うむ！　ついでにリミッターも何割か外すことにしよう！　なに、今の君なら大丈夫・無問題（モーマンタイ）だ！」

一体何が大丈夫なんだ？

選択肢というか、選択すらしてない気がする。

まだ頼んでませんよ？

今回もまた流されてしまった……

ただでさえ報告書の件で頭がいっぱいなのに……

そして期限までの比較的平和だった3日間……これが嵐の前の静けさ、か。

そんなことを考えながらヒューゴさんに呼ばれた……聖王教会本部の修練場。

なんでここでやるのかな？

そんなにカリムさんにボコられたいのか？

ヒューゴさんのドM疑惑が再浮上した。

「うむ、きたか……」

修練場に行くと既にヒューゴさんがスタンバっていた。

「それで依頼（？）していた件ですが…」

「うむ！　まぁ実演込みで説明するから起動させてみなさい」

実演って……何をする気だ？

疑問は多々あるが待機状態のセイクリッド・スカイを渡される。

待機状態は以前と変わらずだ。

「では機動します。セイクリッド・スカイ、セット・アップ」

【セイクリッド・スカイ・ファンダム起動します】

名前が既にアウ…いやギリセーフか？

デバイスが起動しフレームが現れる。

セイクリッド・スカイの見た目が短剣になった。

美しい装飾がなされた護拳（ナックル・ガード）、握に鍔（キヨップ）。そして刀身（ブレイド）は白い翼のようなデザインになっている。

核（コア）であるセイクリッド・スカイは刀身の刃根本（リカッソ）に組み込んである。

イメージは上記特徴のシャルティエミニチュア版だ。

「――キレイです」

そう、思わずそう口にしてしまうほどだ。

だけど……

「これを振り回して使用して大丈夫なのですか？」

なんてゆーかヴァン師匠（せんせい）と正面からやりあったら一発ポッキリな気がする。

もしかしたら儀式剣とかそーゆータイプなのかな？

補助に特化しているとか？

まぁ本来はブーストデバイスなのだが。

「うむ、そこまで頑丈ではないな。直接斬りかかる等には使用しない方が良いだろう。まぁ魔力刃を展開すれば使えないこともないが……」

つまりは補助特化型か。

「ちなみに機能的な追加はない。あくまで見た目だけだ」

「……え゛っ？」

「まぁ2割ほどリミッターを外したから出力は上がっているが、これは次のモードへと至るために用意されたものである。一応これからは起動時デフォルトがこれになる」

まさかの見た目だけ！！

「……そこまで言うからには次のモードには期待できるんですよね？」

すんごく怪しいが……

「うむ！　早速起動してみたまえ！　次はモード『ガーンディーヴァ』だ」

ガーンディーヴァって……

とりあえず起動してみる。

「セイクリッド・スカイ、モード『ガーンディーヴァ』」

【モード『ガーンディーヴァ』起動します】

短剣モードのセカイが2つに分身し、弓の形を形成する。

刃身の翼部分が伸び、弓の押付（アッパーリブ）と手下を美しく形成している。

確かに美しいのだが……弓ってどうなんだろう？

遠距離攻撃の手段を持っていれば必要なくない？

そんなことを考えているとヒューゴさんが回答をくれた。

「うむ。このモード『ガーンディーヴァ』の特筆すべき点は遠距離用ではないのだ」

「えっ？　どういうことですか？」

「本来このデバイスはエレメンタルスフィアを改造して作りあげたブーストデバイスだ」

「まぁ、そうですね」

「ブーストデバイスの主な特性は魔力射出・射出魔力制御の補助だ。このフレームにはそれを最大限に引き出せるよう回路を組み込んである」

「？　ということは遠距離攻撃用ではなく補助用？　回路を組み込んでいるだけで弓である必要は……ない？」

え？　なにそれ？

「うむ。弓を用いた射撃・砲撃魔法はない。まぁ補助・治癒魔法なら射ってもいいかもしれないな。だが特筆すべき点はそこではないのだ」

よかった、まだあるのね。

このままではどっかのおっさんみたく「愛してるぜ～」とかいいながら治癒効果のある矢を撃つだけの存在になってしまう。

「このフレームと回路にはエレメンタルスフィアの特性を更に引き出せるようになっているのだ」

「特性というと大気中の『水分』と『温度』を操れるという性質ですか？」

「うむ！　今まではそれを利用した魔力変換であったが、これからはもっと直接的に大気中の『水分』と『温度』を操ることができるだろう……ハーハッハッハッHAHAHAHAHAHAHA……ゴホッゴホッ！！　まぁ限度はあるがな」

それはすごいが……

「……弓の形状である必要はないですよね？」

「うむ！　美しいは正義だ！」

「……そうですか。ならその正義に殉じて逝って下さい……セイクリッド・スカイ・ファンダム起動……モード『ガーンディーヴァ』」

「うっ、うむ、少々待ってく…」

「氷と雷のコラボレーションです。美しいものを目にしながら逝けるなんてヒューゴさんは幸せ者ですね？」

「いやっ、その……遊び心でな、決して無駄な…」

聞く耳持たん！！

どんだけ人をおちょくるつもりだ！！

今までの出来事の鬱憤（ストレス）……ここで晴らす！！

「絶氷と断罪！　いい加減その身に刻んで下さい！　セルシウス・キャリバー（仮）！！」

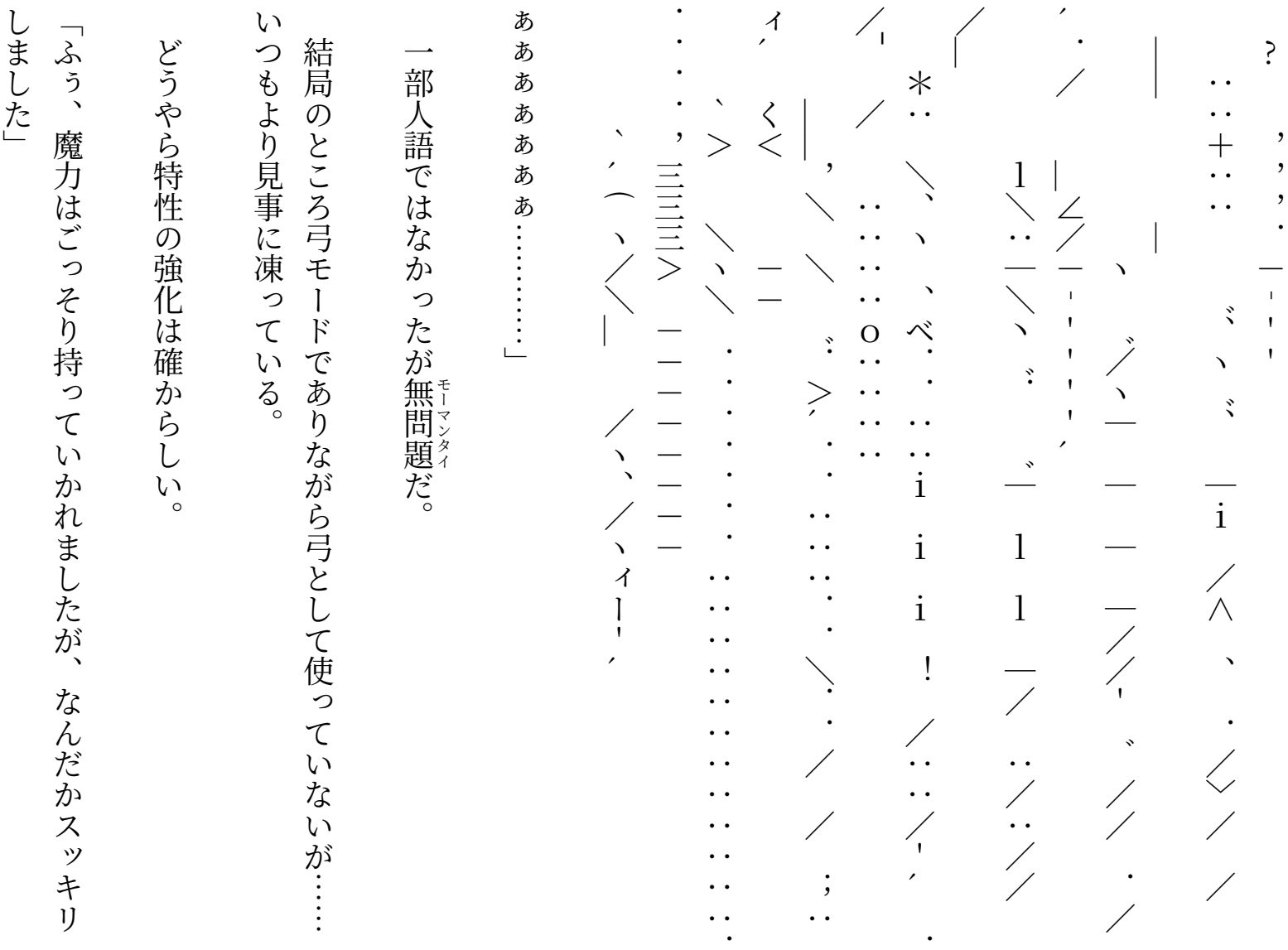
右手に冷気を纏った魔力刃、左手に雷を纏った魔力刃をそれぞれ展開・合体させ、敵対象（ヒューゴさん）を一閃する。

いつぞやの白昼夢で出会ったセイバー似のお姉さんの根性発言を参考にしたのだ。

まぁ元ネタは『君と殴りあうＲＰＧ』からだが。

「ぬおぉぉぉぉ！！　よさんかああぁぁ

ヾ　　ｉ―！　＜　　：：ｏ：：：　ｉｌ　／―
／／
：＊：：　＞　／＼　ｌ＜　―／
＞ｌ　＋　―：ｌ　―　―　ｉｌ―　，、



あぁぁぁぁぁぁぁ……」

一部人語ではなかったが無問題（モーマンタイ）だ。

結局のところ弓モードでありながら弓として使っていないが……いつもより見事に凍っている。

どうやら特性の強化は確からしい。

「ふぅ、魔力はごっそり持っていかれましたが、なんだかスッキリしました」

ストレスを溜めるのはやっぱりよくないね。

これからは定期的に何らかの形で息抜きもしなくては……

結果はいつも通りしょうもないが、今回は珍しく何かやり遂げた感に満ちた終わり方だった。

ピロリーン！

【セイクリッド・スカイ】が【セイクリッド・スカイ・ファンダム（ＳＳＦ）】に更新されました！

ピロリーン！

【なんちゃって断罪の剣】が【絶氷の剣】と【断罪の剣】に更新されました！

ピロリーン！

【セルシウス・キャリバー（仮）】を習得しました！

ピロリーン！

【魂のセカンドステージ】の称号を得ました！

F～美しいは正義？（後書き）

集中してゲームする以前に書き始めていたお話…時間を空けるとその時に何を考えていたのか忘れますね。

何が書きたかったのか今になってはわからなくなってしまったお話です。

だいぶ迷走してまいりました…

D～たまにはほのぼのを（前書き）

ほのぼの？　な話です。

面白さなんてありませんのでご了承おきを…

D～たまにははのぼのを

【魂のセカンドステージ】

説明：厨二（チューニ）ングデバイスを手に入れた者に与えられる称号
条件：やらかしちゃったＺＥ☆
効果：魔力→→　妄想力→→　羞恥心←←
備考：俺たちの黒歴史はこれからだ！　ちなみに名前に深い意味はない

ピロリーン！

魔力がかなり向上したような気がします！
妄想力が「もういらんわ！！」

デバイス（正確にはフレーム）の件については現在見直し案を作成中だ。

作成から改造までヒューゴさんが行ってきたものだから中身が半ブラックボックス化しているため他には依頼できないからだ。

とりあえず短剣としても弓としても使えないことはないので取り急ぎというわけではないが……

件（くだん）のヒューゴさんはこれから別件で多忙になるらしく時間を見つけて考えておく、とのこと。

一体いつになるやら……

そして相変わらずの日々を過ごし、季節は流れた。

いつの間にか夏も終わり秋が近づいてきたこの頃、見事な晴れ空、お出かけ日和な休日。

今日は新作の甘味（スィーツ）巡りの予定だ。

なんとカリムさんが一流パティシエ新作スイーツ試食会の招待券（てゆーか賄賂？）をくれたのだ。

「私は忙しくて行けそうにないから楽しんでらっしゃい。あとお土産は忘れず」

「丁度休みの日ですね、この日なら行けそうです。ありがとうございますカリムさん。でも腐るのでお土産は無理です」

まぁそう簡単には腐らんだろうが品質は落ちるだろうからお土産なんて無理だ。

「当日に悩んで何を買ってくるのか楽しみたかっただけよ。気にしないで」

鬼畜だな！！

そんなやりとりがあって試食会の招待券をゲットしたのだが限定３０組で１組２名までと書いてあった。

しかも注意事項で『甘味ニウルサイ人求ム』と書いてある。

試食会というのだから意見を求める場なのだろうし当たり前か。

最初はラグナでも誘おうと思ったのだがＳｔ．ヒルデ魔法学院の休日（祭日）であって他にとっては平日なのだ。

どうしょうかと悩んでいる矢先に出会ったのがエミリオだった。

ヴァン師匠（せんせい）に用事があったようで聖王教会本部まで来ていたそうだ。

早速スイーツの件を話すと……

「ふん、別に甘味（スイーツ）などに興味はない……が、どうしてもと言うなら行ってやる」

はいはいツンデレツンデレ。

「じゃあ今週の休日に駅前１４時で、昼食は取り過ぎないようにね」

そう約束して解散した。

なんかデートの約束っぽいなと思って後悔したのは内緒だ。

今更だがなんで野郎（エミリオ）を真っ先に選んでしまったんだ……

まぁ甘味（スィーツ）にウルサイのは確かなのだが。

はぁ、今回は友人と甘味（スィーツ）を楽しむということにしますか。

閑話休題

件（くだん）のお店は華やかなイメージではないが、どこか洗練された印象を持っており、ウェイトレスに招待券を渡し歩道側のテラス席に案内された。

とりあえず準備に１０分ほどかかるため、先に紅茶を入れてもらい一息つく。

「ふぅ、こんな休日は久しぶりです」

いつ以来だろうか、こんな穏やかな休日は？

まぁ依頼（アルバイト）を受けたり、無限書庫に行ったり、修行だったり……

「ふん、自分で選んだ結果だろう。だったらウダウダ言うな」

ごもっとも。

「あれ？　そういえばシャルは？　やけに静かなのだけれど……」

うん、一言も喋ってないな。

「最近調子に乗っていてな。待機状態では喋れないようにしてある」

その分修行中にうるさいがな、とのこと。

うるさいのもシャルのアイデンティティだと思うのだが……

「まぁ外出時だけだ。普段はそこまで律していないさ」

よかったねシャル、まだ救いがあって。

シャルがいないとエミリオも基本冷静だな。

折角の機会だし、踏み込んだ話をしてみるか。

「ねぇエミリオは騎士になってどうしたいの？　最初は家出の理由だったかもしれないけれど、いつまでもそうじゃないよね？」

「……なんだ唐突に？」

「単なる興味と参考です」

目指すのは別にいい、だがそれを叶えてどうしたいのか、次はどうするのか。

ただそれが気になったのだ。

「ふん、多くの人を救いたい、なんてことはない。僕の望みは「もっかい言ってみやがれゴルァァァ！！」……なんだ？」

なにやら歩道の方で喧嘩騒動が……

「何度でも言ってやるよ！！　てめーがごぶわぁぁあぁぁっふ！！」

おいおい言う前に殴ったよ今。

てかそのままこっちに突っ込んできた！？

咄嗟にテーブルから離れなんとか回避！

飛んできた人はテーブルに突っ込み、おまけで頭から紅茶（ＨＯＴ）を被って悶絶している……ちなみに顔面も痛そう。

殴った人を見ると……なんか世紀末なヒャッハーを連想させる人であった。

なにこれ不良（チンピラ）？

「おうおうわりぃなボーズ共、廃棄物（ゴミ）の不法投棄をしちまったぜ、ヒュファァ！！」

いや廃棄物（ゴミ）ってあんた……

「廃棄物（ゴミ）は「焼却処分だな」…おうおうボーズわかってんじゃねぇか！」

エミリオが割って入ってそう答える。

でもエミリオが言いたいのは多分あなたがたのことで……

「シャル出番だ」

【やっと出番が回ってきましたね！　もう退屈でしたよ！】

エミリオがシャルを抜き……

「廃棄物（ゴミ）は貴様だ――――塵も残さん！！　浄破滅焼闇！！」

「ヒュファァァァァァァァァァァァァ……」

エミリオがシャルに黒い炎を纏わせ振りかぶり――振り抜いた。

見事に周囲に被害を出さずに対象だけを燃やしているようだ。

これって炎熱変換の応用なのだろうか？

今度聞いてみようか……それはともかく実際に塵も残さないほど燃やし尽したら大変だろうが……

まぁ実際は生きているし気絶しているだけのようで大丈夫そうだが。

「――闇の炎に抱かれて消えろ」

いや、生きているからその人。

「っ痛ぅ、ハンッ、ざまぁねぇ「喧嘩両成敗です」へぶっ！！」

テーブルに突っ込んできた人の第一声が腹立ったので、顎を蹴ってこちらも気絶させておく。

「シャル、待機状態（モードリリース）」

【えっ！？　出番これだけでぇぇ……】

シャル乙！

「まったく……食べている時じゃなかったからよかったものの」

でもなんでだろうか、自分一人だったら絶対に食べようとした瞬間に吹っ飛んできた気がする。

結論、どっちにしろ食べ損ねた。

あの後事情聴取で警防署へ……

エミリオが派手にぶっ飛ばすから……ほっといて絡まれるのは嫌だが。

そのおかげで新作スイーツを食べられなかった。

まぁあのまま通常営業というわけでもなさそうだが……

「穏やかな休日なんて幻想だったのでしょうかね？」

少し自嘲気味に嘆く。

「僕にもお前の悪運がまわってきたか……」

失礼だな。

「そういえばあの時の続きは？　僕の望みは～っていう件（くだり）のところ……」

ふと、あの時遮られた続きが気になった。

「ふん、あそこで横やりが入ったのも何かの『運命』だ。続きは胸の内にしまっておくことにするさ」

あらら、はぐらかされたよ。

運命というよりただの悪運？

「今回はアレだったが機会があれば声をかけろ……付き合ってやらんこともない」

はいはいツンデレツンデレ。

結局は何も食べられなかったけど、そこまで不満というわけではなかった。

これがプライスレスというやつかな？

何がとは言わないが。

時刻は既に夕方、互いに悪態を付きながら帰路につく。

歩きながらふと紅く染まった夕空を眺める。

自然が彩る美しさはどこも変わらず、か。

「――今日は「ふん、疲れる休日だった」……ソウデスネ」

……今回は言う前にエミリオに締められました。

D～たまにはほのぼのを（後書き）

そろそろリリカル（原作準備編）に戻ろうか悩み中…

原作準備編1～主人公は調べものをするようです（1）（前書き）

今回はギャグオチではありません。

（ほんの）少しだけＳｔＳに向けた準備のお話。

原作準備編1～主人公は調べものをするようです（1）

己を知り、敵を知ればなんとやら。

まぁ己はともかく……

季節は更に流れ秋から冬へと移り変わった今日この頃。

ようやく時間もとれそうなのでＳｔＳのラスボス（？）『聖王のゆりかご』について調べてみようと思った……のだが

「そもそも聖王について全然知らないですｏｒｚ」

以前、シャルの件で真正古代（エンシェント）ベルカについて調べたことがあったが、肝心の聖王については調べたことがなく、ヴィヴィオの複製母体（オリジナル）で『最後のゆりかごの聖王』としか知識がなかったのだ。

既に聖王教会にだいぶ入り浸っており、教会系列のミッションスクールに通っているのに聖王に関して知識がないのは……マズイな。

まぁ聖王教自体が緩いため、学院でもあまり徹底していないのか？

まずは無限書庫でゆりかごについて調べるより、学院の図書室で聖王や教会のルーツについて調べるところからだな。

今日は午前授業であったため、午後から学院の初等科校舎図書室に行き、聖王について調べようと思ったのだが……

「『聖王』の項目多すぎます……」

そりゃそうだよね。

この学院は聖王教会系列だもん。

ここでは検索魔法を使うわけにもいかないので途方に暮れていると……

「あれ、リースさん？」

誰かに呼ばれ振り向くと、つい先日も会ったハズなのに何故か久々に会った気がするエリオがおりました。

「こんにちは。リースさんとここで会うのは珍しい…というより初めてですね。今日は何か調べものですか？」

相変わらず礼儀正しい子だこと。

ツンデレ共に見習わせたいね……気持ち悪いだけか。

「うん、少し調べてみたいことがあってね。エリオこそ調べもの？その言い方だと頻繁に来ているようだけれど？」

エリオは真面目だが、あまり勉強とはイメージが合わない気がするが……

「はい、放課後はよくキャロとここで宿題をやったりしてるです」

何気に青春の1ページだな。

「今日はキャロとは一緒じゃないの？」

キャロともしばらく…いや、つい先日会っているんだけどね。

なんでだろうか……しばらく会っていない気がする。

気のせいか？

「今日はリタさんに連れて行かれまして……」

リタに連れて逝かれた……だと？

魔（リタ）の研究室にか！？

極光のトラウマがぁぁ！？

「……研究室？」

「違いますよ、何でもこれからショッピングだとか…僕も誘われた

んですが、以前シャルティエさんに【女の子の買い物に付き合うには決戦に臨む覚悟が必要なんですよ？　敗者に待っているのは別れのみです】って言われたことがあるんですよ。意味はよくわかりませんが今日は課題があったのでこっちを優先したんです」

シャル……お前は剣（デバイス）なのに何を経験してきたんだ？

それにしても仲良くショッピングとは……ちょっと…いや、かなり意外だ。

「最近はよく『猫』派か『竜』派かで2人で盛り上がっているんですよ」

なんだその二択（チョイス）は？

まぁきっとキャロの髪がピンクだから気が合うのだろう、そう思おう。

「そういえば何を調べているんですか？　確か司書の資格を持っているんですからココより無限書庫の方が調べものには向いているんじゃ……」

「あっ、いや、たいしたことじゃないんだよ。ちょっと聖王教会のルーツについてね」

この際、正直に話しておく。

「あっそれなら前回の課題で使ったオススメ本があります！　よければ持ってきますよ？」

１年生の課題レベルの話だったのか！？

そーいえば入学式から１年間休学してたっけ……

そりゃあ知らないわな。

「じゃあそれお願い。他にもオススメがあったら教えてもらえる？」

「はい！　今持ってきますのでちょっと待ってて下さい！」

元気なのはいいけど図書室では静かにね。

エリオが持ってきた本のおかげで聖王教会について基本的なことはわかった。

なんでも次元世界最大規模の宗教組織で『聖王』と『血族』、彼らの傍にいた『騎士』たちが信仰の対象らしい。

もしかしてシャルも信仰対象の騎士なのだろうか？

……嫌過ぎる。

「そういえばどうして聖王教会のルーツを？　この内容は１年生の授業でやったハズじゃあ……？」

エリオが痛いところを突いてくる。

極光のトラウマが……

「……入学式当日に全治1年の重傷でね、1年間休学していたんだよ」

「あっ、えっと…ごめんなさい！」

「気にしないで、ただのトラウマだから」

「そうは言っても……ってトラウマ？」

おっと失言だったか……さっさとキリあげよう。

さて、今後はもう少しだけ歴史について調べてみますか。

それから『聖王のゆりかご』について調べるとしよう。

図書室でエリオと別れ、借りた本を鞄にしまって外に出るとチラチラと雪が降っていた。

それは積るような量ではなく、まるで景色を彩るグラデーションのようだ。

それにしても雪か……どうりで普段より暖かいハズだ。

これでウチの自宅警備獣（ハク）も活動すればいいのに……

冬はトグロを巻いて暖房の傍から離れないからな。

ただでさえ空気なのに自ら活躍の場を放棄するとは。

まぁ、どーでもいいんだが。

雪景色に少しだけ浮かれながら帰路につく。

確かにＪＳ事件は六課フラグが怪しいので不安だらけだが、幸い時間的に余裕はあるので今の生活を、将来目的も含め犠牲にしてまで無理はしたくない。

自分にできる範囲で、できることをやっていくしかないのだ。

「少しずつ、少しでも前へ」

そんな思いを胸に抱きながら……

何気にギャグオチ以外の終わり方は久しぶりかも……ちょっとだけホロリときた。

原作準備編1～主人公は調べものをするようです（1）（後書き）

もう一話似たような話が続きます。

原作準備編2～主人公は調べものをするようです（2）（前書き）

前回の続きのようなお話です。

まじめではないけどギャグでもない。

そんなお話。

原作準備編2～主人公は調べものをするようです（2）

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト

『最後のゆりかごの聖王』でヴィヴィオの複製母体（オリジナル）にあたる人物。

古代ベルカ戦争終結後、他国を制し、ベルカ統一を図った人物……？

その辺の記載は本によってバラバラで歴史研究でも諸説あるようだ。

中には後世でも有名で、物語にも出てくる英傑『覇王イングヴァルト』とも関わりがあったとか、そういう説もある。

ちなみに覇王イングヴァルトの伝記『シュトゥラ戦記』は以前に読書レポート用で読んだことがあったが、オリヴィエの話は出てこなかった。

歴史は正確に伝わらないからこそ、ロマンが溢れるのだろうか？

一体どの説が正史なのやら……考えても仕方がないか。

とりあえず今は『聖王のゆりかご』について調べることにしよう。

冬も終わりが見え始めた3月。

学年末試験を問題なくクリアし、長期休みに入ったある日のこと。

まとまった時間がとれたので無限書庫に向い、以前調べてみようと思っていた『聖王のゆりかご』について調べることにした。

試しに『聖王のゆりかご』の単語で検索してみたが膨大な数がヒットしてしまった。

そのほとんどが歴史書であんまり役に立ちそうにない。

原作で司書長（ユーノ）は短時間でよくあそこまで調べられたものだ……

仕方ないので検索ワードを変更してみるが上手くいかない。

検索方法が下手なのか、対象が探しづらいのか。

どうやら長期戦の覚悟で臨む必要があるようだ……

と挑み始めたのが2日前……もう既に挫けそうだ。

連日、無限書庫に来て調べているが成果は得られていない。

「聖王と覇王のキャフフなお話はもうおなかいっぱいです……」

覇王自身の回顧録とか相当貴重な本も見つけたが、もはや感動できないくらい精神的に消耗していた。

もう諦めようかと真剣に考え始めていたところ、後ろから声をかけられた。

「キミ、大丈夫？　連日ここに来て何か調べものをしているようだけれど……困っているのなら僕でよければ手伝うよ？」

おぉ、有能な司書長（ユーノ）さんだ……もはや自分にすらツッコム気力もないわ。

さすがに疲れたのでユーノさんに簡単な経緯を説明し手伝ってもらうことにした。

自分も忙しいのに見知らぬ子供の趣味（一応そういうことにしている）にまで手を貸してくれるとは……

ユーノさんマジ有能（ユーノ）！！

うん、少しは気力も回復してきたようだ。

自分の今まで集めた情報をユーノさんに教えキーワード及び除外項目を絞ってもらい、調べ始めて15分ほど……目的の資料が出てきた。

目的の資料が見つかった歓喜とスペック差を見せつけられた絶望感が心に響く。

「うん、これだね。しかし、この『聖王のゆりかご』はすごいね……」

ユーノさんが『聖王のゆりかご』のスペックを見て驚いている。

古代ベルカにおいて既にロストロギア扱いの戦略兵器だもんね。

何か使えそうな情報はないか見てみるが、原作以上の情報は得られそうにないようだ。

ゆりかご内の『王座の間』と『駆動炉』くらいの位置は把握しておくか……

てゆーか、大質量の氷塊でも急襲してぶつけてやれば堕とせるんじゃないかな？

まぁ、周囲の環境や内部の安全、『鍵の聖王（ヴィヴィオ）』＋αを気にしなければの話だが。

最悪はその方向も検討してみるか……そんなことを考えているとユーノさんがＡＭＦの項目を真剣な表情で調べていた。

「これは……もしかして……いや、まさか……でも……」

何かブツブツと呟きながら思案している。

もしかしてガジェットの件との関係性を考えているのだろうか？

「あの～おにいさん？」

「あっごめんね！　中々興味深い内容だったからつい……」

「いえ、こちらこそありがとうございました。おかげで知りたいことが知れました」

原作以上の情報は得られなかったが。

「うん、役に立てたならよかったよ。それとこの資料は僕の方で預かってもいいかな？　ちょっと調べてみたいんだ」

「ええ、かまいません。私の調べものは終わりましたので」

ユーノなら情報が『敵』側に漏れないと思われるし……これはもしかしてプラス方向の原作ブレイクフラグか？

ちょっとだけ希望が見えてきたかも。

「あっそうだ。僕は無限書庫（ココ）の司書長をやっているユーノ・スクライア。キミの名前も聞いていいかな？」

なぬ？

何か厄介事の臭いがそこはかとなくするが……手伝ってもらって

おいて答えないわけにはいかないし、司書の資格もあるから嘘付いてもバレると思われるので正直に話しておく。

「Ｓｔ．ヒルデ魔法学院３年…いえ今度４年になるアペリス・ウラノです。一応ですがここの司書資格も持っています」

「そうなんだ。これからもここで会ったらよろしくね」

「はい、では今日はここで失礼させていただきますね」

「うん、またね。今日は貴重な資料をありがとうアペリス」

礼を言うのはこちらだが……まぁいいか。

ユーノにもう一度礼をしてから無限書庫を後にする。

未来（さき）はまだまだわからないが、少しずつは進んでいる……ような気がする。

少しだが希望も見えてきた。

「一歩一歩を着実に……」

そう自分に言い聞かせながら……

「キュウ～♪」

帰宅するとウチの自宅警備獣（ハク）も暖かくなってきたからか、中々活発的になっている。

だからといって出番があるかは別の話であるが……

そして季節は冬から春へ

原作開始まであと3年

原作準備編2～主人公は調べものをするようです（2）（後書き）

そこはかとなくＶｉＶｉｄのフラグが…いずれ回収したいとは考えています。

次回はまたコメディ路線を予定。

次のキャラ（予定）は…

原作準備編3～主人公はあの人とすれ違ったようです（前書き）

当初予定の話と変わってしまいました…が連載2か月記念ということであげることにしました。

ちなみに、すれ違い＝ニアミスでは使い方おかしいんですね。

おかげで変なタイトルになってしまいました…

原作準備編3～主人公はあの人とすれ違ったようです

無事に4年生になることができた。

昨年を振り返ると色々とあったものだ。

……うん、色々とあり過ぎたな。

振り返るのはやめておこう……ただの自傷行為だ。

こうやって過去を切り捨て大人になっていくんだな……

ミッドでは色々な資格の受験資格が10歳から与えられるようだ。

魔法世界の就労年齢が低いだけはあるわ……

とりあえず講習のみで取得できるものから受講、単位になる魔法技術関連の資格を取得し、少しだけだが授業に出る時間を減らすことに成功した。

ちなみに他の生徒はほとんど知らない方法だ。

学院側としては授業に出て欲しいもんね。

まぁ私たちはヴァン師匠（せんせい）やカリムさんの件で授業に出られない場合もあるので、特別に裏ワザを教えてもらったのだ。

今回はその空いた時間を有効利用し、遺失物管理の勉強をしてＢ級遺失物管理主任者の試験を受験することにし、見事合格することができた。

Ｂ級といっても結局Ｃ級に色が付いた程度といえるが……

ちなみにロストロギア専門の研究者や聖王教会の管理主任であるてんてーは基本的に皆Ａ級だ。

いずれはとっておきたいものである。

さて、季節は春から夏に移り変わろうとしている６月。

上記の話とはまったく関係ないが、今日はキャロ、エリオと一緒に第四陸士訓練校の見学にきている。

なんでもフェイトさんが昔ココの校長にお世話になったとか。

今日はその校長への挨拶と相談があるらしい。

せっかくの機会なので以前から訓練校に（ちょっぴりだけ）興味を抱いていたエリオに声をかけたようだ。

キャロもフェイトさんと会える機会なので一緒についてきている。

ちなみにフリードはお留守番。

ウチのハクと遊んでもらっている。

ドラゴン（？）同士なかなかに仲が良いようで、ある日突然タマゴでもできないか心配な位だ。

さておき、フェイトさんも中学卒業したのだから、ミッドに住居を構え3人で暮らせばいいのに。

まぁ今の実家は地球だし、本局勤めだから簡単な話ではないのだろうが。

てゆーか家族団らんの空間は部外者にとっては居心地悪い……

なぜ私が一緒についてきているかというと、フェイトさんからの要望だ。

なんでも2人の学院生活について聞きたいとのこと。

まぁ、私自身も訓練校に少しだけ興味があったからOKしたのだが……正直この空気は辛い。

3人の後ろで一緒に来ていたフェイトさんの副官シャリオさんと苦笑いせざるを得ない。

それにしてもこのシャリオ…改めシャーリーさん、人懐っこいと

いうか、なかなか話しやすい人だ。

なんでシャリオをなぜわざわざシャーリー（酢飯）と呼ぶのか激しく疑問ではあるが、見た目で判断して※子供扱いしないのでなかなかに会話が弾む。

（※実際はまだ１０歳の子供です）

デバイスマイスターの資格も持っておりセイクリッド・スカイにも興味津々で尋ねてきたのだが、製作者（ヒューゴさん）のことを話すと「まさか…あの伝説の…」と呟きながら目を逸らされ、謝られた。

それ以上デバイスの話題には触れてこなかった……公式メカオタ眼鏡を黙らせるヒューゴさんの伝説って……

フェイトさんが校長と話している間にシャーリーさん引率で訓練の様子を見学する。

シャーリーさんも専攻は違うがココの卒業生らしい。

道中懐かしみながら歩いている。

そして屋上からグラウンドで行っている訓練の様子を眺める。

どうやら今は障害突破の訓練のようだ。

連携して壁を突破する訓練のようだが……

「飛んでいますね……人を投げる訓練なのでしょうか？　なかなか斬新ですね」

「なるほど！　投げ方を練習する訓練なんですね！」

「ふえぇぇ、怖そう……」

「いやいや違うからね！？　いや、投げるのは一理あるけど……一応連携して壁を越える訓練だから！！　間違って覚えないでぇぇ！！」

上から、私→エリオ→キャロ→シャーリーさん。

冗談だったのだが……お姉さん涙目。

ツッコミ役がいると楽だな、と思ったのは内緒だ。

障害突破の次、今度はグループで別れ射撃訓練と打撃訓練を行うらしい。

「せっかくだから近くで見てみようか？（間違って覚えられる前に確実に説明しなきゃ！）」

シャーリーさんからそう提案があり、そこに鬼気迫る何かを感じたので一同頷き、射撃訓練場の方へ足を延ばす。

どうやら木々の奥に設置された的に誘導弾を当てる訓練のようだ。

「すみません。見学の者ですが近くで見せていただいてもよろしいでしょうか？」

「むっ見学だと？　……まぁいいだろう。未来の候補生を無碍に扱うわけにもいかないからな」

興味があっただけで誰も入校するつもりはないのだが……

担当と思わしき金髪美人の女性教官の許可を貰って近くで見学する。

「よし！　最初に私が見本を見せる！　皆、見学者もいる手前、情けない姿は見せるなよ」

何気にハードルを上げてしまって申し訳ありません。

エリオわくわく、キャロおどおど、シャーリーさん苦笑い。

「よく見ておけ……いくぞ！」

どうやら見本が始まるようだ……とゆーかそんなに気合いを入れるものなのか？

「光の欠片よ、的を撃て！！」

えっ？

「プリズムバレット！！　終わりだ！！」

……うん、確かに的を撃ったよ。

ちょっとダイジェストに説明していこうか。

『光の欠片よ』で足元に魔法陣が出現、周囲の訓練生を発生した衝撃波で吹き飛ばす。

『的を撃て』で二丁拳銃デバイスによるバレット連射、それにより障害物となる木々を吹き飛ばす。

『プリズムバレット』で障害物の無くなった的に向け極太レーザーを放つ。

『終わりだ』でレーザー着弾、爆発。そして的を消し飛ばす。

確かに『的』は撃った。

「吹き飛ばしましたね……これも障害突破（＋的の撃破）の訓練でしたか。弾幕の数と威力、双方を重視しているのですね」

「なるほど！　ジャブとストレートの使い分けをする訓練なんですね！」

「ふえぇぇ、スゴイです……」

「違うから！　違うから！！　違うからぁぁ！！！！　ただの誘導弾で的に当てるだけの訓練だからぁぁ！！　お願いだから間違って覚えないでぇぇ！？」

ヤヴァイ、何かクセになるかも……ごめんねシャーリーさん。

それにしても魔にゅ…じゃなかった、魔弾さんがいらっしゃるとは……ヴァン師匠（せんせい）とフラグは立っているのだろうか？

今更だがこの世界は一体どうなっているんだろう……？

カオスだ……

すっかり消沈してしまったシャーリーさんを連れ、フェイトさんと合流し帰路についた。

それにしても訓練で2回とも吹き飛ばされていた人に見覚えがあるような……

まっ気のせいか。

さて、休日はおしまい。

明日からまた学業に励むとしますか。

原作準備編3～主人公はあの人とすれ違ったようです（後書き）

漫画版は知らなかった主人公。

まさかのティアナさんと…すれ違い？

そしてティア繋がりであの人が登場。

ティアナ強化フラグが立ちました～

ゆかなさんはツヴァイさんだが…モーマンタイ！

原作準備編４～主人公は勝負に勝って試合に負けるようです（前書き）

少しずつだけど原作に向け時間は流れます。

今回は一気に時間を飛ばしたかったが、飛ばせなかったための小話。

原作準備編4～主人公は勝負に勝って試合に負けるようです

夏も終わり秋といえる季節になったころの放課後、ヴァン師匠から呼び出しの連絡が入った。

呼び出し場所は来賓用の応接室。

ソファの座り心地がハンパない、憧れのサボタージュスポット。

指定された時間に行ったがヴァン師匠はおらず、エミリオしかいなかった。

どうやらヴァン師匠は若干遅れている模様だ。

「ふん、呼び出しておいて遅れてくるとは……何様のつもりだあのヒゲは」

きっとあなたと同じ俺様だよ。

「ヒゲはどうせまだ来ないんだろう？　喉が渇いたからお茶を入れろ」

うん、お前も俺様確定だな。

てゆーか私はお前の茶坊主でもねーんだが……まぁせっかくなので高級茶葉でも使わせていただきますか。

ちゃっかり高級茶菓子もいただきながらヴァン師匠（せんせい）を待つこと30分、ようやく件（くだん）のヒゲがきた。

「うむ、遅れてすまないな。手短に話そうと思うが、なにぶん先ほどまで音楽の講師をしていてな。悪いが茶を一杯入れてもらえるか？」

ヴァン師匠（せんせい）は教師をやめてからも非常勤講師として音楽を担当している。

そんなに音楽が好きなのかこのヒゲは？

てゆーか私はお前の茶坊主でもねーよ。

師弟揃ってなんてゆー俺様だ……まぁもう一人の弟子（リタ）も唯我独尊だが……あれ？

「師匠（せんせい）、今日の用事にリタは呼んでいないのですか？」

いつもは3人揃ってが多いのだが……

「うむ、リタには先に話してあるのでな。来週の休日の話なのだが……」

要約すると来週に知人の結婚式を聖王教会本部で行うため、来週

は稽古なしで式の準備を手伝ってくれとのこと。

「それは構いませんが具体的には何をするのですか？」

「なに、指輪を持っていく仕事だ。昨今の式ではＳｔ．ヒルデ魔法学院の生徒がその役をやることが多くてな」

あぁいわゆるリングボーイ……

「あぁいわゆるリングガールでな……」

ヴァン師匠（せんせい）がそう言った瞬間、私は屋外に飛び出ていた。

以前の研究棟（トラウマ）消滅事件より習得していた物質透過跳躍魔法だ。

これも無限書庫でのランダム検索で見つけた戦利品だ。

スマン、エミリオ……式を挙げるカップルに幸せを届け……

「逃げ切れると思ったか！！　墜ちろ！！　デモンズランス！！」

一瞬でもエミリオに謝ったことを後悔しまし……

「なにを勘違いしている？　その役は既にリタに頼んである」

要は雑用ね……無駄にダメージを受けたよ。

でもなぜだろうか、あの時は逃げた方が良いと直感（偽）で感じたのだが…？

「ふん、面倒だがまぁ良いだろう」

エミリオはＯＫ、てゅーかリタがＯＫ出したのだろうか？

激しく疑問だ……

そして式の当日、私たちの仕事は主に来客の案内だ。

とゆーかビックリ！！　今日はＫＹ……じゃなかった、クロノさんとエイミィさんの結婚式のようだ。

着飾ってはいるがドコかで見たことある人たちばっかりだもん。

聖王教というか、ミッドの習慣というか、結婚式といえど厳密に親族だけではなく上司、友人と思われる人たちがたくさんいる。

「あれっアペリス？　今日は手伝いなのかい？」

声のする方を向くとばっちり礼服で決めているユーノさんが来ていた。

ちなみに私たちの恰好は学院の制服（長ズボンＶｅｒ）だ。

「えぇ、こんにちはユーノさん。今日は案内係ですが」

ユーノさんとは半年前の無限書庫での出会い以来、ちょくちょく話す仲になった。

「そっか。あっ、式を挙げるクロノなのだけど僕の友人でね。よかったら君も式を見ていって祝ってあげて。じゃあ、お仕事頑張って」

そう言って中へ入って行った。

来客の案内をしている途中だったが、ヴァン師匠（せんせい）から呼ばれていると教会スタッフに言われたので、残りは中等科生徒の手伝いに任せ教会スタッフがいる控え室に行くと……

「うむ、来たか……少しトラブルでな」

ヴァン神父（せんせい）とカリムさんがおりました……激しくツッコミを入れたいところだが今日はめでたい日なので自粛する。

いつものパイナッポーヘアーではなく髪を下ろし、なんだかいつもよりキリッとしている。

なぜだろうか、この声この姿で某マーボー神父を連想した私は悪くないと思う。

「それで……トラブルとはなんだ？」

エミリオがそう尋ねる。

目線は微妙にヴァン神父から逸らしているが……

「うむ、リタが交通事故による渋滞でこられないらしいのだ」

絶対ウソだ、エミリオと視線を交差させ頷く。

初めからくる気なんてなかったんだろうアイツ……本気でくる気があるなら転移魔法とか絶対使っているハズだ。

「……それで？　僕たちを呼んで……どうすると？」

薄々と感づいてはいるが一応尋ねるエミリオ。

あの時の直感（偽）はコレのことだったか……

カリムさんがヴァン神父の代わりに答える。

「最初は中等科の生徒にでも代理を頼もうと思ったのだけれど、何分用意したドレスのサイズが合わなくて……なので……」

それ以上の言葉はいらなかった。

エミリオと向かい合い、互いにデバイスを起動する。

そう、これは男と男のプライドを賭けた聖戦だ。

「――覚悟はできたか？」

【覚悟はできましたか？】

「――あなたの晴れ姿を眺めて笑いを堪える覚悟？」

【それもいいですねぇ～】

「「……」」

【誰か構って下さい……（泣）】

一瞬の沈黙……そして……

「遠慮はしません！　アストラルベルト！！」

片やデバイスを使うと見せかけ、逆の手で発生させた魔力刃による抜刀術の如く高速の薙ぎ払い。

「くっ、散れ！　月閃光！！」

片や三日月のような軌道を描く斬り上げと魔力による衝撃波を伴った剣技。

一瞬の交差、結果は……

「くっ、この僕がっ！」

魔力刃がシャルを吹き飛ばしエミリオの肩にヒットしている。

デバイスと見せかけた不意打ちの分こちらの方が早かったようだ。

「ごめんなさいエミリオ、男には絶対に負けられない戦いがあるんだよ」

エミリオは肩を押さえ俯いている。

スマン、恨むならリタを……

「エミリオくん大丈夫？　あぁ痛そうね、これじゃあ指輪運びは厳しいかも……」

なぬ？

「ふむ、ならばアペリス、申し訳ないが頼んだぞ？」

あれっ？

今回は勝った……よね？

【オワタ＼（＾ｏ＾）／】

シャルうっさい。

勝負に勝って試合に負けた。

ピロリーン！

【なんちゃってアストラルベルト】が【アストラルベルト】に更新されました！

結論、なんとか回避できた。

なんでも身内（？）ということでエリオが花撒き、キャロがベールガールを務める予定だったので急遽変更してもらい、キャロがリングガール、キャロの代理にアルフ（幼女）がベールガールを務めることになった。

最初からそうしろよ！　と思った私は悪くないと思うんだ。

普通は身内とかでやるもんだろうに……カリムさんは確信犯だろうが。

無駄な聖戦（たたかい）を繰り広げた自分（バカ）たちは後方の席で式の進行を眺めている。

すっかり意気消沈……とゆーか精神的にまいった。

ヴァン神父（せんせい）の普通の台詞では「誓いますか？」のところ、「汝は誓うことができるか！！」とかツッコミどころ満載の台詞にも反応する気がしない。

式は滞りなく進み披露宴へ、自分たちお手伝いの生徒はここでお開きだ。

はっきり言って今日も碌なことをしていないが……めげない。

だって主Ｚ「さっさとリタを探しにいくぞ」……言えなくたって泣かないし。

ちなみにその後の『外道なるタイダルウェイブ』と『仁義なきピコピコハンマー』は別の物語（おはなし）……

原作準備編4～主人公は勝負に勝って試合に負けるようです（後書き）

実はクロノとエイミィの結婚式である必要性がないお話でした。

会ったのユーノだけですし…しかも挨拶のみ。

ちなみにヴァン神父とマーボー神父は中の人が同じなので…

ちなみにクライド（クロノ父）も同じらしい。

そのネタを書きたかったが無理でした…

次回は原作2年ほど前のお話を予定中。

中々原作が見えてこない…

原作準備編5～主人公は超展開についていけないようです（前書き）

どうしてこうなった？

原作準備編5～主人公は超展開についていけないようです

旧い結晶と無限の欲望が交わる地
死せる王の下、聖地より彼の翼が甦る
使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち
それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる
――預言者の著書より

確かこんなんだったっけ？

明らかに管理局がヤバイと思われる内容なのに、トップの好き嫌いで蔑ろにしていいものではないだろう……まぁ今の段階では漠然とした管理局システムの崩壊程度しか読み取れないが。

大規模災害などに関しては的中率が高く、管理局や聖王教会からの信頼度はお墨付きなのにね。

新暦７３年、春から夏に移り変わろうとしている季節のこと。

預言はさておき、カリムさんの紹介で文芸翻訳の仕事を少しだがやらせてもらっている。

なかなか大変だが……訂正、凄くハードだ。

正直、最初の依頼で朽ち果てかけたが、そこそこの評価を貰え、そのクライアントの紹介で別のクライアントから少量だが仕事をもらっている。

現在の仕事内容は主に古代ベルカの書物について、本質を失わない程度に面白可笑しくコメディチックな翻訳をしている……もちろんクライアントの依頼だが。

なんでも、正確な翻訳なら自分でできるが、あえて他人の意見（面白い解釈）を聞いてみたい、という考えらしい。

なめてんのか？　そう思ったこともあったが古代ベルカ語は正確な解釈の方が難しいので、こっちの方が性に合っている……気がする。

ちなみに評価はなぜか上々、クライアント曰く「娘たちが気に入っている、独創性があり（過ぎて）もはやマジキチ」らしい。

決して褒められてはいないのがミソ。

クライアント名は『オレンジ博士』……期待には全力で、か？

どーにでもなれ。

最終チェックが完了し、クライアントに送ったのが今朝方。

いわゆる完徹状態だ。

幸いにも今日の授業は午前で終了だ。

理由はなんだったか忘れたが……早く下校しろとは言っていた気がする。

とりあえず図書室から借りていた本を返却して帰ろうと思ったのだが、あまりの眠たさに少し仮眠をとっていくことにした。

２０～３０分程度でも睡眠をとるだけで大分違うのは実証済み、図書室隅っこの目立たないところで仮眠を……おやすみなさいＺｚｚ

「――そんなことはありません！！」

何か言い争うような声が聞こえて目を覚ました。

時間を確認すると既に１５時を回っていた。

「寝過ごしましたか……」

まぁ帰っても今日は寝るつもりだったので別にいいが……

とりあえず声がした方を見ると人影が……大人と子供？

片方は見たことがある、確か新任教師の糸目野郎だ。

確か歴史が専門で良家の出だとかなんとか……どーでもいいが。

もう片方は……見覚えがない幼女だ。

碧銀の髪に虹彩異色（オッドアイ）……どこのオリ主だよ！　って感じだ。

ミッドでも虹彩異色（オッドアイ）は非常に珍しいのに……

「――その解釈は正しくありませんよ？　まったくこれだから子供は……」

なんだかよくわからんが良い雰囲気ではないようだ。

てゆーか教師がそんな台詞を言うな。

このまま帰るのもアレなので、ついでに話を聞いてみるか……スルーも辛いし。

「何をもめていらっしゃるのですか先生？　それにそちらの子は？」

「ん？　なんだ、まだ生徒が残っていましたか……今日は来年度入

学予定者の見学会で早く帰るよう連絡があったでしょう？」

あぁ、そういえばそうだっけ……忘れていたのはそれだった。

「お恥ずかしい話ですが、疲れていて眠ってしまったようです。何やら言い争う声で目が覚めたので気になりまして……」

「ならばさっさと帰りなさい。本日の下校時間はとっくに過ぎているのですよ」

あらら、取り付く島もないよ。

しょーがない、こっちも切り出してみるか……

「えぇ、帰りたいのは山々ですが少し気になりまして……見学会ということはこの子1人だけではないですよね？　もう時間が時間ですし、他の子は帰っているのかもしれないですけど、女の子と2人きりで図書……」

「少し歴史について講義していただけです！　変な勘違いはやめていただけますか！？」

どうやらニュアンスは伝わったらしい。

「そうなのですか？　その割にはもめていたようですが……？」

今度は幼女の方に尋ねてみる。

んっ？　この特徴的な髪と瞳の色についてどっかで見たような……

「……わたしが図書室を見ていきたいと頼んだんです。シュトゥラの歴史について知りたかったので……」

幼女がそう答える……この年齢でシュトゥラの歴史についてとはなかなかに渋いなこの子……まぁここは聖王教会系列だから、古代ベルカ関連の本もたくさんある。

「えぇ、そうです。それで案内をして少しばかり教鞭を振らせていただきましてね……まったく、この子は聖王と覇王の関係について間違った解釈していましてね。ですから正しい歴史について教えていたのですが……」

「――ですから覇王と聖王は同じ時代で……！」

何やら歴史うんぬんの考えでもめているようだ。

でも確か古代ベルカ諸王時代の話は……

「そもそも現代の歴史研究でも明確になっていない事項では……？」

ギロリ！

2人に揃って睨まれました……

どうやら2人には譲れない持論があるようだ。

2人の目が『お前はどっちだ！』と語っている気がする。

「……まぁ私はどちらかというと聖王と覇王の姉弟仲説ですね」

以前に回顧録を読んだことあるし……

「――いいでしょう……ならば決着をつけましょう。聖王と覇王、どちらが優れた王であったかを！」

えっ？　何言ってるのこの教師？

「――わかりました。あなたに覇王の悲願を受け止められるかわかりませんがお相手いたします！」

えぇ！？　この子も何言ってんの！？

てゆーか何この超展開！？

レッドクリムｚ「ほら、あなたも行きますよ！　わたしたちの説が正しいと証明するんです！」ドナドナァァ～！

そう言って幼女に引っ張られる自分……

なんだか（超展開な）厄介事に巻き込まれたようだ。

聖王マンセーな糸目教師（狂信者）ＶＳ覇王幼女（＋主人公）

始まる……のか？

「――ん？」

ふと目が覚め、時間を確認すると既に１７時を回っていた。

「寝過ごしましたか……」

まぁ帰っても今日は寝るつもりだったので別にいいが……

「何か理不尽で超展開な夢を見ていたような……」

思い出せない……まぁ夢ってよく忘れるし、気にすることでもないか……でもなぜだろうか？　体の節々が痛い気がする。

「ふぁぁ～、早く帰ることにしますか……ん？」

よく見ると一冊の本が机の上に置いてあった。

「はぁ、誰か知らないですけど、ちゃんと片付けていって欲しいですね……」

そう呟きながら本棚に戻す。

「それにしてもシュトゥラ戦記ですか……懐かしいですね」

背表紙を見て懐かしんだが、時間が遅いのでさっさと帰路につく。

――本に挟んであったメモには気づかず……

原作準備編5～主人公は超展開についていけないようです（後書き）

ＶｉＶｉｄまでいけたら語ります（笑）

原作準備編6～主人公は盗み聞きしてしまったようです（前書き）

原作準備編では常に称号『時を駆ける男（笑）』が発動中！

おかげで時間が勝手に進んでおります。

原作準備編6～主人公は盗み聞きしてしまったようです

マイナスも極端な値であれば『いっそのこと』と思える。

何事も中途半端なほど扱い難く、大変だ。

いや、ホントにね……

新暦７４年の春、無事に中等科に進学することができた。

これでようやく短パンからの卒業だ。

時が経つのはホントに早い……まるで時を駆けているようだ。

言いえて妙だと思ったが気にしない。

今年に入って聖王教会が保管するロストロギアが増えてきたので、目録作成を再依頼された。

別にいいのだが……なんで他にやる人がいないんだろう？

確かにやり甲斐はないが……やれよ教会、そう思った私は悪くないだろう。

今回は量が少なかったので休日に無限書庫で徹夜し、目録を完成させた。

その足で聖王教会本部のカリムさんのところへ向かう。

「依頼あった目録の件ですが完了しましたので報告します……ふぁぁ……」

話している相手には申し訳ないが眠いものは仕方ない。

「あら、徹夜かしら？　今日は午後からグランツ団長との稽古でしょう？」

そうなのだ……どっかで仮眠をとらなければやってられん。

「仕方ないわね、横に仮眠室があるからそこを使いなさいな。その調子では稽古にも身が入りませんしね」

珍しく優しいな、と疑問に思いつつも睡眠欲には勝てず仮眠室を借りることに……

仮眠室は執務室の隣であり、どちらかというと執務室の付属部屋といった感じだ。

中に入ると眠気に拍車をかけるように簡易ではあるがベッドが設置してあった。

いざ飛びこまん！　と思ったが、直感（偽）が警告を上げる。

なぜだかわからないがベッドは危険という信号を発している。

まぁベッドで眠ると時間までに起きられる自信がないので、仕方なくデスクに腕を枕代わりにして顔を伏せ眠ることにする。

「おやすみなさい……Ｚｚｚ」

意識が朦朧としてきた中、そういえばここはカリムさんの執務室付属の仮眠室だと思いだした……ベッドも普段は……それをネタに……あぁ意識が……

何気にカリムさんへの信頼感０だな、眠りに落ちる寸前に思った……

「――そーなんよ。お上は頭が固くてたまらんわ」

ふと、隣の執務室から話声が聞こえてきて目を覚ます。

稽古の時間には……まだ余裕があるようだ。

今出ていくのも躊躇われたので、どーしよーかと悩んでいると会話の続きが聞こえてきた。

「――えぇ、それでも試験的とはいえ、新規部隊の発足を認めてくれたのだから……」

「――それはわかってるんやけど……」

この独特なイントネーション&話し方は……もしかしてはやてさん？

話の内容は六課のことについてだろうか？

てゆーかこれって盗み聞きだよね……

「――保有制限に関しては仕方ないわ。リミッターはあくまで裏ワザに過ぎないもの」

「――せやけどな……結局思った通りにはいかんか……」

リミッター……六課メンバーについてか……

「――確かに偏り過ぎとるし、無理言ってるんはわかるんやけど……」

「――今回は相手の方が正論ですしね」

「――なにが『戦力を遊ばせておいて、いざという時に全力を出せないなど言語道断！』や……正論な分辛いわぁ～」

えっ？　もしかして裏ワザは認められなかった？

「――その分、私やなのはちゃん、ヴィータのリミッターは無いから、完全に詰んだわけではないけど……やっぱフェイトちゃんやシグナムがおらんのはな……新人もＢランク程度を２人までしか獲れんし……」

えぇぇえぇぇ！！　六課戦力に変更あり過ぎじゃねぇ！？

「――まぁ、正式な事件となればリミッターのないフェイトちゃんやシグナムとも合同で調査に当たれるから、致命的なマイナスではないんやけど……」

そーなんだ……しかしなんでこんな差異があるのだろうか？

「――仕方ないわ、正論は向こうにあり、しかも相手はアレクセイ・ディノイア閣下……海の英雄ですもの」

ま　い　た　け　政　権　か　！？

まさかいたのか、セン＝ハラン星人……しかも海の英雄って……

「――設立自体は賛成しているのだからポジティヴに考えないと」

「――夢の部隊が……」

どうやら差異はＤＱＮな鬼畜閣下のせいらしい。

リミッターという裏ワザが認められなかったため、発足前にライトニング分隊の消滅が確定したようだ。

「――現実は厳しいな……」

いやホントにね。

始まる前からＳｔＳは詰んでしまっている気がするのは私だけだろうか……

はやてさんが帰った後、何食わぬ顔でカリムさんに礼をして稽古に向う。

「どうしたものでしょうか……」

正直な話、六課は原作より戦力不足だろう。

それが決定的なマイナスかというと微妙だが……

自分にできること……戦力？　……あり得ない。

原作時、エミリオやリタなら専門・得意分野でＡＡＡ～Ｓランクはありそうだが、私は頑張っても総合でＡランクくらいだろう……まぁ限定的にならＳランク相当の魔法も使えないことはないが……

管理局員の平均を考えると高いのだが……その程度のランクでＪＳ事件に関わるには危険過ぎる。

本気で氷塊作戦でも考えようか、いっそのことロストロギアでも使って……でも調べたらアレって『限りなく黒に近いグレーな魔法』なんだよね……ロストロギアも基本的にアウトだろうし……周囲の被害も甚大じゃないだろうし……

「とりあえず今日こそはヒゲを燃やしてやりますか」

考えてもすぐに答えなど出ない。

楽観的だが、今はＶＳヒゲに集中しよう。

……原作まであと１年。

原作準備編6～主人公は盗み聞きしてしまったようです（後書き）

別の黒幕（と思われる人物）が出現しました。

次回もまだ原作前のお話です。

（多分原作時間まであと1～2話です）

積ゲーがハンパないのでしばらくはそっちに集中するかも…です。

原作準備編7～主人公は男同士で語らうようです（前書き）

会話がメインなお話。

割とまじめ？　と見せかけて…

原作準備編7～主人公は男同士で語らうようです

あまり悩み過ぎるとゲシュタルトがマッハだったので切り上げた。

結論、様子見。

新暦７４年の8月のこと。

とうとうバイク免許を取得することができた。

１２歳でＯＫなのかは激しく疑問だったが……

まぁ転倒防止のための非常用オートジャイロや衝突時の防護フィールド発生装置が搭載されており、かなり安全な仕様らしい。

せっかく免許を取得したのにバイクがないというのは悲しいので、バイクに詳しいと思われるヴァイスさんに相談したところ……

「おっ、もう免許をとっちまったのか……しかも自分のバイクだとはガキのクセに生意気だな～おい」

そりゃあね、１２歳のガキが自分のバイクなんて生意気そのもの

だろうが……

「まっ、俺もガキのころから単車いじってるからな……いいぜ、俺の中古を格安で譲ってやるよ」

なんでもヴァイスさん新車購入予定があるようで、中古を格安で譲ってくれるとのこと。

「とりあえず走ってみてからだな。よし、今度ツーリングに行くぞ。予定空けとけよ？」

ちなみに妥当でリーズナブルな値段でした。

翻訳と目録作りで稼いだ額の半分近く持っていかれた……まっ、もう半分は免許取得の際、既に消えていたが……おかげで残高が……

次の休日の昼前、予定通りヴァイスさんとバイクの見定めを兼ねツーリングへ。

件（くだん）のバイクは黒がメインのどちらかというとシンプルなイメージだった。

個人的には見た目だけで８０点以上はあげられる、といったところだ。

ちなみにヴァイスさんのバイクは赤がメインの新車だったがな…

…多分だけどゆりかごに突入するやつだと思われる。

ヴァイスのバイクはティアナのモノ、ティアナのバイクはティアナのモノ、そんなフレーズが一瞬頭をよぎった……うん、きっと気のせいだな。

「おぅ、きたか。さっさと用意しな。すぐにでるぜ！」

ヴァイスさんも新車が楽しみなのかノリノリだ。

まぁ私も同じ気分なので、ヴァイスさんの言葉に従い準備する。

「――これより私は風になります」

ドキがムネムネしたきたぜ！！

ヒャッハー！　と叫びたくなる気持ちがほんの少しだけわかった気がした。

「――少しばかりはしゃぎ過ぎたみたいです……」

「――だな、だがいいもんだろバイクは？」

1時間ほど走ったところでドライブインと思われるところがあったため、食事も兼ね休憩に立ち寄った。

軽食を済ませ、食後のコーヒーで一休み、ヴァイスさんがバイクの感想を求めてきた。

「どうだったアイツは？」

「気に入りました。流石はヴァイスさんがチューニングしていたバイクですね」

「当たり前だろ？　どれだけ費やした愛車だったと思うんだ？」

まぁ、あなたはそれを売ろうとしているじゃないですか……

「一括で……よろしいでしょうか？」

「おう、商談成立だな」

しかも面倒な手続きはやってくれるとのこと。

ピロリーン！

【ヴァイスのバイク（中古）】を手に入れました！

そんなフレーズが聞こえた気がした……

そしてツーリングを再開し……時刻は夕方。

最初の場所まで戻ってきて、ヴァイスさんがバイクの調整を行ってくれている。

今日の走りのデータより私に合わせセッティングしてくれるとのこと。

何気にデバイスでデータを取っていたらしい。

やるなストームレイダー……さすがはインテリ型。

ヴァイスさんが調整している間にバイクから離れ、朱色に染まった空を眺める。

今日は楽しかった。

そんな日々が続けばいい……でも

「――ＪＳ事件……そんなに楽観視はできないんですよね」

あれから自分はどうするべきなのか考えた……その結果は……

「――な～に黄昏てんだ？　顔に悩んでます！　って書いてあるぜ」

おっと、調整が終わったであろうヴァイスさんが缶コーヒーを両

手に、そして片方を私に投げながら話しかけてきた。

う～ん、ポーカーフェイスには自信があったんだけど……

「まっそれでも飲んどきな。あんまり悩んでるとおっきくなんねーぞツルペタ？」

もともとねーよ。

「すみませんね、朝に『悩みの多い人には見えないマジック』で書いてきてしまって……」

「なんだ皮肉か？　俺がノーテンキな奴って」

皮肉に対して皮肉で返しただけだ。

「俺にもでっかい悩みがあるっつーの。まっ、それで？　何悩んでんだ？」

「いえ……結論は出ています。結局はしばらく様子見です」

考えた結論だ。

「なんだかわからんがえらく消極的だな。もっとこう……俺がやってやる！　ってのはないのかよ？」

「ないですね。そもそも不確定要素が多すぎて……当事者になると最悪を招きかねないですから」

キャロの件とかは微妙だが、少なくとも六課リミッターの件につ

いて自分は関係ないだろう。

つまり、関わらなくても世界は最初から原作通りではないということ。

まぁ変な生物（ハク）が出てきた時点で既にアレだったが……

「まぁアレだ。やらないで後悔するより、やって後悔した方がいいんじゃないのか？　まっキレイゴトだとは思うがな」

ごもっともだが……

「――頑張った結果がバッドエンドでは嫌ですから……」

何事も報われるわけではない、そんな世界だから……

「はぁ、好きにすればいーんじゃないか？　俺としてはラグナさえ泣かせなければ
文句は……最小限にとどめてやる」

この人、地味にシスコンだった……まぁいくら様子見とはいえ、最悪を起こすつもりはないし、いざという時は動く覚悟も……って結局は文句を言うのかよ！

まったく……文句を言われないように頑張りますか。

「そうですね、ヴァイスさんに文句を言われない程度には頑張るとしましょうか……ところで、ヴァイスさんの『でっかい悩み』というのはなんなのですか？」

せっかくなので切り返して尋ねておく。

「ん？　あぁ……いや、その……なんだ……アレだ……」

えらく歯切れが悪いな、そう思いながら缶コーヒーを飲み……

「――実は今度……結婚するんだ」

吹き出した。

うん、この世界はなかなかにカオスだ……改めてそう思った瞬間だった。

原作準備編7～主人公は男同士で語らうようです（後書き）

世界が変わっても歩く死亡フラグ男は変わらず…

とりあえず積みゲーは準備編が終わってから消化します。

ちなみに準備編は次がラスト…

原作準備編8～主人公は覚悟を決めるようです（前書き）

原作準備編ラスト…

最初の予定から3回は書き直して、結局別の話になりました（笑）

「俺、今度の新部隊への出向任務が終わったら結婚するんだ……」

――その後、彼の行方を知る者は誰もいなかった……

……ならばいっそ先に入院させておこうか？

そう考えた私はだいぶ焦っていたんだと思う。

新暦７５年、冬も終わりを告げ、春の足音がヒタヒタと聞こえてきそうな2月のこと。

時刻は昼過ぎ、場所は聖王教会本部中庭にある噴水前。

着崩した黒いＹシャツに赤いネクタイ、黒のスラックスといういつもより（ちょっぴり）決めた格好で佇んでいる自分（わたし）。

なんでこんな恰好＆amp;場所にいるかというと……

「お・ま・た・せ☆　もしかして待ったぁ～？」

「……イイエ、イマキタトコロデス」

これだけ聞けばまるでデートの待ち合わせのようだが……

「もうっ！　このっ子たらぁ～☆　ちゃんと待ち合わせの常套句をわかっているじゃない～お母さん嬉しいわ～☆」

待ち合わせの相手はお母様だ。

「じゃあ早速行きましょう～☆」

「……ハイ逝キマショウカ」

そう言いながらノリノリで腕を組んできた……

唯一の救いは意外と年相応の落ち着いた恰好であったこと……言動はアレだが。

なぜこうなったかというと数日前に遡る……

ＪＳ事件のことやヴァイスさんの死亡フラグ発言、カリムさんの……まぁ、色々な件で悩んでいたある日のこと。

「――リース！　今度お母さんとデートするわよ☆」

「……はい？」

お母様がいきなりそう宣言した。

「だって最近は難しい顔ばかりしているし……それに２人でお出かけなんて数えるほどしかないじゃない！！　お母さんも寂しいのよ～ハッ！！　もしかしてこれが反抗期なのかしら！？　ど～しましょう！！　ウチの子がグレ……」

「別にグレてませんから！　ただ色々と考え事というか……」

「じゃあ決定ね☆　今度の休日にしましょうか、場所は……」

……流されました。

それよりも【検閲削除】歳で☆（キラッ）はやめてホシい……星なだけに。

さぶっ！

まぁ結局いつも通り流されただけなんだがな！！

「この服なんてリースに似合うかも～試着してみない？」

「しません」

現在、絶賛ウィンドウショッピングしている。

てゆーかそれレディースやん……

「もう～似合うと思ったのに～」

お母様とは顔立ちこそ似ているが、髪色も瞳の色も異なるため、ギリギリ親子として見えるようだ。

てゆーかこの世界は妙齢の婦人が多すぎるというか……お母様も未だ２０代前半くらいにしか見えない……

「せっかくカッコイイんだから可愛い恰好しないと損だぞ～☆」

その理論は変だろ？

「仕方ないか～じゃあ次行くわよ～☆」

はぁ、先が思いやられる……

それから2時間後……

さすがに歩き疲れたので休憩を兼ね喫茶店へ。

いつぞやの新作スイーツを食べ損ねたお店だ。

あの時と同じように紅茶を飲んで一息つく。

「いっぱい見てまわったわね～☆　でも一着くらい買ってもよかったのに……リースも遠慮ばかりじゃダメよ～」

全部レディースだったろうが！！

「はぁ、疲れました……」

正直な感想だ……

「あら？　そんなんじゃ『いざ』という時にダメダメよ～☆　もっとこう全てを許容できるデカイ器を持たないと！　お母さんとお父さんなんてね……」

昔話というかノロケが始まった……マジ勘弁して下さい。

「……それでね、あの人ったら……って、聞いているのリース？」

聞いていません。

「まったく……」

注文していたパフェがきたので一旦ノロケ話は切り上げ……

「――それで？　アペリスは何を悩んでいるの？」

真剣（マジ）な顔でお母様が訪ねてきた……ただし口元にクリームをつけて。

なんか色々と台なしだった……

「将来の不安というか……まぁ思春期ならではの漠然とした悩みですよ」

そうテキトーに言っておく。

「厨二病ってヤツね☆」

それは断じて違う！！

「大丈夫！　黒歴史も大きくなれば笑い事よ☆」

大人になって思い出したらイタ過ぎるわ！！

「はぁ、もういいです……」

そもそも答えなんてないことに悩んでいるんだし……

「――自分の思ったように生きればいい……後悔したっていいの……だってそれはあなた自身が選んだ未来（みち）なのだから」

ふいにお母様がそう呟いた。

「――ただ、疲れたら帰ってきなさい？　抱きしめて話を聞いてあげるから」

「――――」

言葉が出なかった……そもそも何て返せばいいかもわからない。

ただ……

「お母様……」

「な～に？」

「どうして私のパフェまで食べているのですか？」
最後まで台なしだった……

休憩後も引き続きショッピング。
ただし、先ほどより心なしか軽やかに感じる。
時と空を隔てた世界でも母親というのは……なのかな？
時刻もだいぶ遅かったので夕食も済ませ、帰路につく。
「今日は楽しかったわ～☆　リースも楽しめたかしら？」
「えぇ、ただし少しばかり疲れましたが……」
今日は久々に母子（おやこ）水入らずの時間を過ごせた。
実際に問題は解決していなし、案のひとつも浮かんでいない状態だが不思議と穏やかな気分だった。
「もう～そんなんじゃダメよ～☆　いつかリースの隣で歩く子のためにもね」
それまではお母さんが隣をもらうわね、と言いながら腕を組んで

きた。

いつの間にか並んだ身長。

それだけ時間が流れたという証拠だ。

それも1年後には一気に追い抜かしているだろう。

1年か……追い抜かすのが先か、世界が滅びるのが先か。

そればかりはわからない。

事件に関わって自分のせいでバッドエンドなんて結末はもちろん嫌だ。

でも……

「せっかく、後押しをもらったのだから……裏方、やってやりますか」

「ん～何か言った～？」

「いいえ、ただ……今日は楽しかったと、それだけですよ」

これから先もこんな穏やかな日々を過ごせるように……そう、小さく決意をした春の日の夜のこと。

――原作開始まであと僅か……

すっかり忘れ去られていた父さんとハクの夕食はカップ麺と缶詰だったらしい……

スマン……

ピロリーン！

【脇ｙ…影で頑張る主人公】の称号を得ました！

ピロリーン！

【ＯＶＬ（オーバーリミッツ）】を習得しました！

原作準備編8～主人公は覚悟を決めるようです（後書き）

次回からはようやくＳｔＳ原作時間へ

しばらくは予定通り積みゲー消化に励むので遅れるかも…

主人公設定（原作開始時点）（前書き）

久々に追加しました

主人公設定（原作開始時点）

主人公設定（原作開始時点）

名前　：アペリス・ウラノ
愛称　：リース（母親命名）
性別　：男
生年月日：新暦６３年
出身地　：ベルカ自治領（ミッドチルダ）
容姿　：腰まで届く金髪、アメジストの瞳、ツルペタ（笑）、身長は１５０ｃｍ程度
家族構成：父（父さん）と母（お母様）の３人暮らし
魔力資質：先天的ＡＡランク（現在値ＡＡＡ程度）
才能　：器用貧乏＋ぷち不幸体質（魔導師ランク的には総合Ａくらい）
備考　：ハク（ハクリュー）を飼っています※最近は空気感が激しい
原作知識：アニメ版Ｓｔｒｉｋｅｒｓまで、Ｖｉｖｉｄ＆ａｍｐ；Ｆｏｒｃｅは知らない
現在所属：Ｓｔ．ヒルデ魔法学院　中等科２年
取得資格：無限書庫司書、Ｂ級遺失物管理主任者
　　初級魔法インストラクター、バイク免許

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）
【かけだしトレーナー】
【甲種準一級フラグ建築士】
【初めての弾幕ごっこ】
【魔法使い始めました】
【オリ主候補生】

【時を駆ける男（笑）】
【オリ主属性】
【元ラスボスの弟子】
【もしかして脇役？】
【略してオリ主】
【魂のセカンドステージ】
【脇ｙ…影で頑張る主人公】

技能（スキル）

【マルチタスク（４分割超高速思考）】
・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃって断罪の剣】↓【断罪の剣】・【絶氷の剣】
・電気と冷気を纏った魔力刃

【ポーカーフェイス】
・ただのハッタリ……最近はサトラレ気味

【なんちゃってぜったいれいど】↓【アブソリュート・ゼロ】
・絶対零度の空間凍結魔法（やたら寒い）、魔力消費もやたら凄い

【なんちゃってインディグネイション】↓【インディグネイション】
・撃っていいのは撃たれる覚悟のある人だけ、現在トラウマなため使用不能

【ＫＹ（偽）】↓【直感（偽）】
・（ヤヴァイフラグのみ）未来予知できる（※必ずしも回避できるわけではない）

【基礎魔法一式】
・治療、結界、弾幕等の基礎魔法

【なんちゃってアストラルベルト】↓【アストラルベルト】
・近接用の魔力刃による居合い、高速の薙ぎ払い

【ピコハン】
・ＨＩＴすると気絶させることができるシャルティエ直伝不殺の奥義

【セルシウスキャリバー（仮）】
・右手に断罪の剣、左手に絶氷の剣……合体！
対象を完全氷結させます（笑）

【ＯＶＬ（オーバーリミッツ）】
・感情とか魔力とかストレスなどが溜まると発動する無敵状態（笑）
おそらく秘奥義とか出せます
凹んだ人のポーズや土下座に見えるのは気のせい

デバイス
【セイクリッド・スカイ・ファンダム】
種類　　：ブーストデバイス（ＡＩは搭載していない）
待機形状：レイハさんと一緒
戦闘形状：翼をイメージした短剣と弓、バリアジャケットは黒スーツに新調しました
所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）
使用魔法：『インディグネイション』『アブソリュート・ゼロ』
『各種ブースト』『物質透過跳躍魔法』など

主人公設定（原作開始時点）（後書き）

さて、これでドコまで暗躍できるのやら…

原作時間軸～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

とりあえずゲーム１本だけクリア…

合間を縫って書いていきたいと思います（笑）

原作時間軸～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

【脇ｙ：影で頑張る主人公】

説明：舞台裏に徹する者に与えられる称号
条件：脇ｙ：影で頑張ることを決意した
効果：全ステータス→→→　影の薄さ→　ＯＶＬが使用可能！
備考：ＯＶＬのご利用は計画的に！

ピロリーン！

以下略！

ちゃんと言えよ！？

私って意外と幸せ者なんじゃないかって時々思うんだ。

家庭環境は良好だし、学院生活も悪くない。

ちょっと（？）大変なトラブルもあるけど、それもまた経験だ。

自分の糧としてきっと将来に活きてくるだろう。

うん、なかなか贅沢者です。

それじゃあ今日も張り切って逝きましょうか！

魔法厨二リリカル・まじカ「気は済んだ？」……始まりません。

「いつまでも現実逃避してるんじゃないわよ」

したくもなるわ……

「さっさと行くわよ、はぁ、日が暮れる前には寝床くらい確保したいわね」

それはともかく……

「ここは……どこ？」

「……さぁ？」

もうイヤ……（Ｔ　Ｔ）

新暦７５年５月、そろそろＳｔＳ原作時間軸に入ったところだろうか？

以前にお母様より後押しをもらったので、自分にも出来そうなこ

とを色々と考えてみた。

もちろん六課が事件を片付けてくれるのがベストだとは思うが、最悪だけはならないよう保険は欲しい。

つまり『聖王のゆりかご』だけは破壊か停止手段が欲しい、という考えだ。

三脳はむしろ滅んでしまえ。

地上本部は……一旦再構成した方が良いのかもね。

我ながら酷いエゴだ……

だけどこの世界にとっては意外と好機なのかもしれない。

「――言わば劇薬ですか……より良い未来のための」

ここで悩んでいても仕方無い。

事件が終わってから……たくさん悩むことにしよう。

それから、件（くだん）の『聖王のゆりかご』を止める方法としていくつか検討してみた。

最悪をイメージしているため『聖王のゆりかご』は起動すること

が大前提な案だが……

まぁ、起動させずに終わらせられればベストなんだけどね。

以前の氷塊（案）は、周囲の環境への被害も大きく、許可も大変……事後申請でいけるものではない。

というわけで保留。

次の案を検討し、多少内容をぼかしてリタに相談した。

なぜリタに相談したかと言うと、ヴァン師匠（せんせい）やヒューゴさんでは事態が大きく成りかねないからだ。

決して出番が少なかったからというわけではない……あくまで水面化、最悪の場合を想定しているため……だと思う。

「――できるんじゃない？　まぁ現物があればベストだけど……」

そこはご勘弁……てゆーかそんな権限はない。

まぁ、こっそり入手できれば……それも難しいな。

「……いいわ、あたしも多少思うところがあるから、この件やってやるわ」

別に検討した案が使えるものか相談しただけなのだが……

「べっ、別にあんたの為じゃないんだからね！　これはあたしも気になったことであって……」

はいはいツンデレツンデレ（笑）

なかなかに心強い味方ができたようだ。

リタ曰く3日もあれば試作機を作れるとのこと。

ただし質と安全を気にしなければ、とこっそり付け加えて。

そして3日後、リタから呼び出しがあった。

実験で使うため、低レベルでいいのでロストロギアをかっぱらってこいとのこと。

ムチャ言うなよ……まぁ教会から正規手段で借りることができたが。

こういう時に資格とか案外役立つものだ、そんなことを考えながら……

「トラウマが……」

研究棟消滅事件いっぱい魔（リタ）の研究室へ。

頑張ろう……

「来たわね」

ドアを開けるにはなかなか勇気が必要だったがな。

「じゃ早速始めるわ、持ってきたロストロギアはそのケースに入れて」

指示された通りに準備を手伝う。

「……最後、部屋全体に結界。まっ、ないとは思うけど一応ね」

部屋全体に結界まで？　リタにしては慎重だな。

「やるわよ……」

実験は対象ロストロギア（エネルギー結晶）への干渉が目的だ。

これはレリックに外部から強制的に干渉して、止めるなり破壊するなりできないか考えた結果だ。

これができれば聖王化自体を止められるし、最悪は内部から……

ボン！だ。

魔力ダメージで内部から取り出して破壊しているシーンを思い出して考えついた案だ。

まっ、あくまで『案』に過ぎないが……この事件はレリックから始まったのだからレリックで終わらせてやるのが乙というもの。

そのためには現物のレリックがあればベストなのだが……さすがに無理。

とゆーわけで代替のエネルギー結晶型（極弱）のロストロギアで実験している。

「……今のところは問題なし、さて……」

なんかフラグを建てそうな台詞だな。

んっ？　なんか紅くなってきた？　しかもかなり光を発している。

「大丈夫、それは想定の範囲内……実験自体は概ね成功よ」

無問題（モーマンタイ）らしい……どうやら実験は成功……えっ？

ロストロギアが急に青白くかなりの光量で発光し出した！！

「リタ！　これは！？」

これも実験の一部！？　そう訊ねたら……

「……失敗ね、なんか別のロストロギアに干渉したみたい」

「……それって大丈夫……なわけないですよねぇぇ！？」

2人揃って青白い光に呑まれ……目を開けるとそこは……

――見知らぬ森、いや山の中でした。

「……どこ？」

「……さぁ？」

そして冒頭に至る。

どうやら干渉した謎のロストロギアによって異世界に飛ばされたようだ。

なぜ異世界かというとリタ曰く、空気中の魔力素が低く該当する管理世界がないということ、ヒューゴさん作のキチガイ通信ができないという点からだ。

まぁ魔力素が無いわけではないが、適正値より低いため魔力回復は時間がかかるかも、らしい。

魔法の運用も慎重にしないといけない。

もし魔法圏の世界でなければ更に厄介だ。

「それにしても一体、何に干渉したんでしょうか？」

もしかしてレリック……？　それはヤヴァイよね、主にガジェットが。

「はぁ、コレね、とりあえず封印するわ」

そう言ってリタが足元にあったロストロギア（仮）を拾って見せて……

「――えっ？　ちょ、ちょっと見せて下さい！！」

「今封印するから待ちなさい！！」

怒鳴られた……それよりも気になったのはリタが持っているロストロギア（仮）、植物の種子のような形状の青い宝石だった。

これって……もしかして……

「――封印完了、ハイどーぞ」

リタから渡された宝石には番号が書いてあった『０５』と。

「エネルギー結晶型のロストロギアね……それもかなり強力な」

「――ジュエルシード？」

一体全体、何がどーなってるのさ？

――こうして私のリリカル・まじカオスな物語が幕を開けた。

原作時間軸～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

ようやく幕開け…

ただしオリジナル展開が続きます。

原作時間軸～神さまがいないなら、お猫さまを崇めればいーじゃない☆（前書き

Ａｍａｚｏｎでまたゲーム（２本）を買ってしまった（今日届く予定）

積みゲーばかり増えていく…

もちろんプレイはしますけど

１００と１０１は大して差がないように見える。

だがそれが０と１になると明確な差が見えてくる。

『ある』か『ない』か。

『経験がない』か『経験がある』か。

失敗は成功の母、という言葉を聞いたことがあるだろう。

失敗、マイナスの経験は次に活きてくる、活かすことができる。

無駄なことなんて……意味のないことなんてない。

だからこそ「もういい？」……もうちょっと時間が欲しいです。

「ハイハイ、タイムオーバー。だいたい人生における失敗なんて学んだとこで大抵の場合やり直せないでしょ？」

人がポジティヴに考えているのに容赦なく蹴り砕いてくれますね。

「まっ、実験における試行錯誤は価値あるけど」

何事も経験だ！　とはよく言うよ……

誰か助けて……ぐすん。

とりあえず現状確認。

リタの研究室で実験→失敗、何かに干渉・転移→どっかの異世界……そしてジュエルシード。

ジュエルシードの件は一旦保留にしておく。

まずは……

「一旦、空から見ましょ？　ここにいても埒あかないし」

「そうですね、一応認識阻害もしておきましょうか」

魔法圏の世界ではなさそうだし。

空に上がる……自分だけ……

魔力の節約、とは言っていたが高いところが苦手なのだろうか？

そうなるとT・M事件の時って……いや、本人が言わないのならそれはそれでいい。

ちょっぴり改めて感謝を……まったくツンデレなんだから。

まぁそれはさておき、そこから見えたものは……

「……海、それに割と近代的な都市…いえ、街かしら？」

サーチャーで見ているリタがそう呟く……てか、初めからそーすれば良かったじゃん！？

無駄に魔力を消費してしまった……

「とりあえず文明は進んでいるように見えますし、行ってみましょうか？　いきなり取って食われることはないでしょう……多分」

ここにいても仕方ないし。

「はぁ、めんどくさ……仕方ないか」

息のできる場所であっただけ良しとしよう。

「……着替えた方がいいわね。制服だと補導されやすいし」

確かに2人とも今はＳｔ．ヒルデ魔法学院中等科の制服だ。

先刻までは学院にいたんだし当たり前だが。

「……何驚いた顔してんのよ？」

「いえ、リタにしては至極まともな意見だと……」

「失礼ね！　まっ、以前に徹夜明けの休日朝帰りで補導されたの、そーいうとコレも経験が成せる業（ワザ）ね」

何やってんだか……とは言ったものの……

「着替えなんてないですよ？　精々バリアジャケットくらいなものです」

その場合は常時魔力を食うので、魔力素が適正値ではない場所での長時間使用は却下だ。

何か案でもあるのか？　そう尋ねる。

「何着かデバイスに収納してるわ。いちいち着替えるの面倒だし」

リタの私服なんて今まで見たことないのだが……

「たっ、たまにキャロと買い物に行った時に買ってるのよ！　……着てないけど」

そういえばエリオも2人がよくショッピングに行っていると言ってたっけ……

「あんたが着れそうなの貸してあげる、着替えたらさっさと行くわよ」

そう言ってチョイスしてくれたのは……七分丈の黒いパンツと白くてちょっぴりフリフリなブラウス……

着れそうなのを合わせた結果なのだが……いかせん葛藤が……

そう思ってリタを見ると……ねこねこウェイターでした。

むしろそっちのYシャツよこせよ！　そう思わざるを得なかった。

てゆーかねこみみと尻尾（＋前掛け）は外しなさい。

別の意味で補導されてしまう……

背に腹は代えられず、借りた服に着替え下山する。

私は空を飛んで、リタは短距離転移魔法で……お前さっき魔力の節約って言って空飛ばなかったクセに……転移の方が魔力を食うだろ？

さておき、無事下山できたので街に入ることにする。

「――何ここ？　街に入った途端に魔力素が適正値になった……」

私も同感、街に入って最初の感想だ。

魔力素は空気中に含まれるもの……なので急激な変化はおかしい。

「あの山がおかしかった……いえ、あたしたちの転送反応になんらかのアクションもなかった、ここは魔法圏の世界じゃない……ならアレくらいが普通のハズ、つまり……」

「――この街がおかしいかもしれない、ってことでしょうか？」

リタの言葉にそう続ける。

「……そうね。思い過ごしであることを祈るわ」

少しリタらしくない台詞だ……はぁ、一体どんな魔窟なんだか……

そんな思いとは裏腹に街中を探索。

見た感じはミッドの都市とあまり遜色はない……てゆーか

「――日本じゃないですか」

うん、どうやら日本のようだ。

コンビニで北海道や沖縄と書いた旅行雑誌があったし。

見た目が外人なのでちょっぴり奇異な目で見られたが。

だか肝心の県や都市名がわからない……あんまりそういうのって書いてないのだ。

コンビニも○○町店とかは書いてあるのだが……道路標識も知らない名称しか書いていなかった。

まぁそれがわかったところでどうしょうもないが……

時刻は既に夕方、歩き疲れたので公園のベンチで休憩中……もう無印のように無差別での広域念話を試してみようか？

どのみち望み薄だが……

「はぁ、ここがどこかわからないし、お金ないし、ＳＯＳ出せないし……翻訳魔法があるから言葉くらいは通じるけど字が読めないし……最悪ね、あんたもそー思わない？」

リタは公園で見つけた子猫に話かけている。

「にゃにゃ～にゃん……」

「そっか、あんたも迷子なんだ～」

えっ？　会話できてるの？

「にゃにゃ～ん……」

「ホント世知辛い世の中よね～」

ツッコミを入れたら負けだ……

「――にゃっ！？　にゃ～ん」

「えっ飼い主きたの？」

……ツッコミは負け。

そんな葛藤をしていると子猫の飼い主らしき女性がこちらへ走ってきた。

子猫も女性に向って走っていく。

「にゃ～ん！」

「こんなところに……もう心配したんだよ？」

はぁ、無事に見つかってなによりです。

「にゃにゃ！　にゃにゃにゃ～ん……にゃ！」

「えっ？　あの子がかまってくれたから寂しくなかった？　そっかじゃあお礼しないとね」

「にゃ～ん！　にゃにゃ……にゃ～ん？」

「えっあの子たちも迷子なの？」

……もう負けていいかな？

「にゃにゃにゃ～ん！　にゃにゃ！？　……みゃー」

「えぇ！？　異世界からの迷子なの！？」

ええい！？　一体どーなってるんだ！？

特に最後の『みゃー』はなんだ!?　なんで最後だけ『みゃー』なんだ!?

「この子のこと、ありがとうございました……あっ言葉は通じるのかな？」

子猫との会話を終えた女性……お姉さんがこちらを向いて話しかけてきた。

「……その子のことは特に何もしてないわ、ただちょっと話してただけよ」

そう、子猫に関しては別に何もしていないんだが……えっ？　ホントに会話してたの!?

「それでその……あなたたちは異世界からの……」

えっ？　信じるの？　ここって魔法圏の世界じゃないでしょ？　てゆーかお姉さんもなんで普通に猫と会話してるの!?

そんな心情を無視するようにお姉さんは続ける。

「異世界からの……『魔導師』なんですか？」

……魔導師、魔法使いとかではなく魔導師とハッキリ言った。

つまりこの人は……

「――えぇ、転送事故でここにきてしまった魔導師よ。逆に尋ねるわ、ここは魔法圏の世界じゃないハズ……どうして『魔導師』とい

う単語が出てきたわけ？」

魔法、異世界についてある程度知識がある人！！

「えっと、友達が魔導師でミッドチルダにいて……」

えっ？　日本で魔導師、ミッドチルダ、さらにジュエルシードという因果律を考えると……

「にゃ～！」

そして猫……まさかこの女性（ひと）は……

「あっそうだね。わたしは月村すずか、あなたたちのお名前を聞いてもいい？」

……にゃんですと？

とゆーことは……ここ海鳴市？

……ご都合主義万歳。

――とりあえずはお猫さまに感謝を……ニャ～メン☆

「みゃー☆」

原作時間軸～神さまがいないなら、お猫さまを崇めればいーじゃない☆（後書き）

海鳴市は魔窟…とらハ的に。

むしろ猫ネタが書きたかっただけ（笑）

なんとか連絡手段をゲット！

そして…サウンドステージへ☆

原作時間軸～世界はいつだって…こんなハズじゃないことばっかりです（前書き

久し振りにリリカルなのは（原作）をプレイしました。

感想…泣けた（感動的な意味で）

思ったのですが『なのちゃん』と『なのはさん』は完璧に別人ですよね…

ギャップが激しすぎました…

あとイデアシードって厨二な黒歴史集めれば良かったんじゃないだろうか？

多分みんな喜んで分けてくれるよ。

ヒドゥンとは比べ物にならない災害を引き起こしそうだが（笑）

並列世界に来たら……まず何を確認するだろう？

歴史？　政治？　それとも文化？

なんにせよ、共通して言えるのは『差異』を探すことだ。

まぁ調べてみたいことは色々あるが、私が最も気になるところと言えば……原作知識にある場所とか『昔』の記憶にある景色……だろうか。

この世界は「やめときなさいよ」

「これは師の受け売りだけど……『個人が一生で知りうることなどたかが知れている、ならばどう行動すべきか自ずと見えてこよう』ってね」

そういえばいつのことだろう？　なんでも出来ると思っていた時代は。

「だから一時的にしか関わらない世界に肩入れなんてしない……思い入れが強いと後悔するだけ」

そういえばいつからだろう？　人間の可能性が有限だと思い知ったのは。

「目的があるけど時間は少ない。なら寄り道は不要……そうでしょ？」

至極まともな意見だ……だからこそ訊ねたい。

「――その本はなんですか？」

『ネコネコ大百科～これであなたも猫マスターにゃん☆（～2，500＋消費税）』

「……にゃー」

……台なしだった。

世界単位の迷子になすすべもなく、とりあえず案内されたのが……

「……喫茶店？　なんて読むの？」

「あ～『翠屋』かと……」

魔王……じゃなかった、なのはさんの両親が経営している喫茶店『翠屋』。

どうしても魔王イメージが抜けないな……気をつけないと。

「中にいるエイミィさんっていう人に相談してみて、先に電話で話

してあるから……ごめんね、一緒に行ってあげたいところだけど店内に動物はダメだから……」

「いえ、ありがとうございました。正直、右も左もわからない状態でしたから……」

「あんたも……もう迷子になるんじゃないわよ？」

「にゃにゃっ！　にゃーん……みゃー」

「はいはい、気をつけるわ……じゃあね」

……もう気にしないことにしよう。

「うん、この子のことありがとう……じゃあね」

「にゃーん」

そう言ってすずかさんとお猫さまは去って行った。

「じゃ、さっさと行くわよ」

そう言って扉を開ける……やっべ何か緊張してきた。

「いらっしゃいませー♪　あっ、可愛らしいお客さま♪　……日本語は大丈夫かな？

Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｊａｐａｎｅｓｅ？」

店内に入ると、ウェイトレスらしき『眼鏡・黒髪・おさげ』の３点が揃ったお姉さんに声をかけられた。

多分、なのはさんの姉（正確には従姉妹）の美由希さんだろう。

日本語が大丈夫かと言われたら……微妙だな。

多分、翻訳魔法なしで話したら発音がスゴイことになりそう……あとで試してみよう。

「あっ来たね～♪　美由希ちゃん～その子らあたしのお客さんなの～」

奥の席から声がかけられた。

確か３年ぶりくらいだろうか……直接話したことはないがエイミィさん本人だろう。

「エイミィの？　ふむむぅ、何か飲み物はいる？」

「ん～じゃあ紅茶２人分追加で～♪」

「かしこまりましたー♪　じゃあ案内するね」

２人って確か同い年くらいだっけ？

そんなことを思いながら案内された奥のテーブルでエイミィさんと向き合う。

「え～と初めまして、エイミィ・ハラオウンです。すずかちゃんから連絡もらってるけど2人とも『漂流者』ってことでいいのかな？」

「……そうよ、転送事故でこの街の近くの山中にね」

本当はロストロギアを使用したのだが……それを話したらややこしくなりそうなので黙っておこう、と事前にリタと相談しておいたため転送事故ということにしている。

それにジュエルシードの件は正直きな臭い……なので管理局より先に教会側に相談する予定だ。

ついでに実験の件をもみ消してくれたら万々歳なのだが……

「なになにエイミィ？　この子たち『魔導師』なの？」

そう言いながら紅茶を持った美由希さんが現れ、私たちに紅茶を入れてくれた。

……お金はないんだが……これが好意だったら無下にするわけにはいかない。

そう葛藤している自分を無視してリタは飲んでいるが……少しは躊躇しろよ。

そして自分の分を入れて美由希さんもエイミィさんの隣にかける。

仕事はどーした？

不審な動きをしたら斬られるのだろうか？

「そうみたい……あぁ、ごめんなさい、名前しか言ってなかったわね。あたしは時空管理局に務めているの、今は育児休暇中だけどね……あなたたちの名前と出身世界を教えてもらえれば連絡するけど……」

渡りに船とはこのことだろう。

とりあえず一難は去ったようだ。

≪どーする？　信用できる？≫

リタが念話でそう話しかけてきた。

≪大丈夫でしょう。直接の面識はありませんが知っている人です。まぁ先に管理局より教会に連絡したいところですが……≫

≪それは同感ね、この人知ってたの？≫

≪ええ、3年ほど前に聖王教会本部で結婚式を挙げていかれた方です……リタがリングガールをさぼった時のね≫

≪あっそ≫

こんチクショー！

「えっと……相談は終わった？」

あっバレテーラ。

そして美由希さんはちょっぴり警戒している？　気をつけよう……

「すみませんでした……2人とも出身世界はミッドチルダです。私はアペリス・ウラノ、それでこちらが……」

「リタ・モルディオよ」

とりあえず先に警戒を解くことに専念しよう。

「そっか、2人ともＳｔ．ヒルデ魔法学院の生徒だったんだ～」

自己紹介ついでに色々と札を切っていく。

これで警戒心は薄くなるハズ……

また、当時の結婚式の教会スタッフ（お手伝い）と辺境世界で会うなんて思ってもみなかっただろう。

エイミィさんは驚きと少しばかりの羞恥心がこみ上げてきているようだ。

「しかもグランツ騎士団長のお弟子さんとは……世の中意外と狭いものよね～」

そういえば知人の結婚式とは言っていたが……まぁ後で聞いてみ

よう。

「それで申し訳ないのですが、管理局より先に聖王教会に連絡を入れて相談したいのですが……」

「あ～うん、わかったよ。そもそもあたしも育児休暇で休職中の身だし、あまり強く言える立場じゃないから……」

連絡手段の確保はできた……ついでに警戒心も取り除けたと思う。

「へぇ～キャロとエリオの先輩なんだ～あの2人の学院生活ってどうなの？」

ここ翠屋からミッドまでそのまま通信を繋げてくれるそうなので、翠屋の閉店時間までとりとめのない話を続けている……

「普通に楽しんでいると思いますよ？　キャロの生い立ちは知っていますが……それでもです。エリオは詳しい事情を知りませんが2人とも楽しいキャンパスライフを過ごしているように思えます」

まぁ素直な感想だ。

放課後に友だちとショッピングに行ったり、図書室で一緒に勉強したり……なかなかの青春を送っているじゃないか。

「……そっか。うん、それならよかった♪」

さすがに2人の事情は知っているようだ……うん、頃合いか。

この際なので少しばかり10年前の事件に関して聞いてみよう……

「えぇ、ですが2人ともフェイトさんと頻繁に会えなかったのは寂しかったようです。フェイトさんも以前はこの世界に住んでいたそうですが、この世界の出身なのですか？」

「ん？　ここって魔法圏の世界じゃないでしょ？　……ありえない」

リタの言うこともわかる。

あんな高い魔力資質を持った人が魔法の無い世界で生まれるとは考えづらいだろう。

「あ～ちょっと違うんだ～昔にロストロギアを巡る事件でこの世界と関わってね。それ以来、あたしたちもフェイトちゃんもこの世界で暮らしていたの……まぁ10年くらい前の話なんだけど」

よし、ロストロギアという単語さえ出れば……

「10年前といえば……ジュエルシードというロストロギアによる次元断層が起きかけた事件があったと記憶しています……もしかして？」

「そーいやあんたって遺失物管理の資格持ってたっけ」

おっ、リタがフォローしてくれるとは……てゆーかお前、忘れてたのに実験用ロストロギアをパクッてこいって言ってたのか？

ただの犯罪者になるだろうが……

≪てかジュエルシードって……≫

≪えぇそうです。ちょっと聞き出したいことがあるので話しを合せて下さい≫

「あ～うん、知ってるなら仕方ないか……あまり公(おおやけ)にはできないけどこの街で起こった事件でね。フェイトちゃんもそれに縁(えん)があってここで暮らしていたの」

縁(えん)ね……言い得て妙だな。

「そうだったのですか……あっ、その時はジュエルシードを無事回収できたのですか？　確か複数個あるロストロギアと記憶していたのですが……」

≪なんか白々しいわね≫

≪ほっといてください≫

「うん、ホント色々トラブルがあったけど『２１個全て』回収できたんだよ～」

……なんですと？

「いや～ホント大変だったんだけどね……主にクロノくんが」

確か原作では回収できたのが『１２個』、プレシアと共に虚数空間に落ちて回収できなかったのが『９個』のハズ……まぁエイミィさんが一般人（？）相手にホントのことを言っているかどうかまではわからないのだが……

≪じゃあ、あたしたちが拾ったコレって……≫

≪……管理局は一枚岩ではありませんから……まぁ、それは聖王教会にも言えるかもしれませんが≫

≪……はぁ、頼りたくないけどヒゲを頼るしかないか……メンドくさ≫

どうやら思った以上に大きい原作との『差異』があったようだ。

これが大きな影響を出さなければいいのだが……望み薄だろうか？

――世界はいつだって…こんなハズじゃないことばっかり、か……

名言だよね、まったく……はぁ、冷めた紅茶が身に染みるや。

翠屋ってシュークリームと『コーヒー』が自慢のお店じゃなかったっけ？

そう思ったのは内緒だ……

原作時間軸～世界はいつだって…こんなハズじゃないことばっかりです（後書き）

ようやく原作との『差異』が…

そして書く時間がない…

原作時間軸～ご存じですか？　ラスボスからは逃げられないのです（前書き）

早く先の話を書きたくなったので海鳴編をさっさと終わらせるべく
…執筆頑張ります☆

原作時間軸～ご存じですか？　ラスボスからは逃げられないのです

逃げることは悪いことだろうか？

戦略的撤退と言うくらいなのだから目的のための逃走は有りなのだろう。

未来（さき）がわかっているのならば「以下略！！」……モノローグもどんどん短くなっていくな……

てかモノローグくらい最後まで言わせてよ！

「いつまでダラダラしてるのよ？　さっさと覚悟しなさい」

そうは言っても……確実に怒られる未来（ビジョン）しか視えないんだよ。

はぁ……

「――この愚か者が！！」

ヴァン師匠（せんせい）に事の顛末と現在の状況を伝えた結果だ。

第一声がコレでした。

場所はお店を閉めた後の翠屋なので、エイミィさん、美由希さん、そして美由希さんから状況を聞いた高町夫妻が同席……とゆーか聞いていたのだが、みんな苦笑いでアチャーな顔をしている。

夜に大声は近所迷惑だろうが……

「――まったく、無事だったから良いものを……わかっているのか!?　一歩間違えれば無人世界の可能性もあったのだぞ!?　管理外世界で知り合いに出会える確率など……」

はい、説教が始まりました。

これは長くなりそうだ……きっと反省文も書かされるんだ。

被害者だろうが問答無用の連帯責任だ！　だもんね……

≪あ～これは長くなるわ……しかも反省文付き。なんとか切り上げられない？≫

かつての経験よりリタもそう判断したようだ。

はぁ、仕方ない……

≪なら協力して下さい……少しばかり話を合わせて≫

≪いいけど失敗したら洗濯するわよ？≫

退路はなくなった……覚悟を決めよう。

「――そもそも「少し補足をよろしいでしょうか？」……なんだ？」

ヴァン師匠（せんせい）の説教を遮ったのだが……正直怖い。

「この世界……いえ、この場所であったことが『偶然』ではない、としたら？」

≪……言うの？≫

≪背に腹は代えられませんよ≫

あまりこの場では言いたくなかったが……やむを得ない。

「……どういうことだ？」

ヴァン師匠（せんせい）、声が低くて怖いです。

「ごめんなさいエイミィさん、実は先ほどの説明で『言っていないこと』があります」

「えっ？　あ～うん。そーいえば転送事故の原因とか聞いてなかったね？」

あっ、わかってて聞いてこなかったのね。

≪『言っていないこと』ね……≫

≪嘘はついていませんから……一応≫

詐欺みたいなもんだが……嘘はついていないもん！

「私たちはロストロギアでの干渉実験を行っていたんです」

「――っ！　この馬鹿者が！！」

ですよね～怒りますよね～師匠（せんせい）が怖くて泣きそうだ……

「勿論、ロストロギアは正式な貸出を受けましたし、実験も細心の注意を払い行いました。そして……」

「待つのだ！　そもそも何故、そんな実験を行ったのだ！？」

≪あたしも理由聞いてなかったわ、なんで？≫

≪それについても話します、ついでにフォローお願いします≫

そして話した……カリムさんの預言に出てきた『旧い結晶』がレリックだと思われること、そのレリックが４年前の空港火災を起こした原因だと知ったこと、そのための干渉実験だったこと。

「「「「「……」」」」」

みなさんの沈黙が痛い……

ちなみに美由希さんと高町夫妻は話についてこられない模様……

ただ雰囲気的に事の重さを感じており沈黙している。

「……理由はわかった。だが何故私や騎士カリムに相談しなかった？　お前ならば個人でどうにかできる問題ではないとわかっていたであろう？」

まぁ普通はそうなんだが……

「信用できなかったんですよ、師匠（せんせい）方ではなく『管理局』が」

そう言って持論を述べる。

預言について対策がイマイチということ、信頼性は担保された能力なのに対策が成っていない、管理局の腰が重すぎるのでは？　それはつまり邪魔している者、内通者がいるのでは？

ならばヴァン師匠（せんせい）やカリムさんが動いたら……怪しまれる、バレるのではないか？

そして……

「――そもそも、管理局は秘密主義過ぎます。重大な事件ですら正しい内容が報道されず、偽りの情報を平然と流す……そもそも空港火災の件ですら原因について報道されていないではないですか！！　そんな不透明な組織など信用できません！！　……ですから今回は秘密裏にリタへ相談してその実験を行いました」

うん、一呼吸も入れずに言うことができた。

≪思ってもないことをよくペラペラ言えるわね？≫

人が頑張って語っているのに……！

心臓バックバクいってんぞ！

ポーカーフェイスをなめんなよ!?

≪この局面を乗り切るためです！　ついでに実験の件をもみ消してもらいましょう≫

外で偉そうに持論を述べているが、内心は酷く打算的な2人だった……

「「「「「……」」」」」

また静寂が訪れていた。

ヴァン師匠（せんせい）もそうだが、管理局員のエイミィさん、家族が管理局に務めている高町家にとっても重たい話だからだ。

「ねぇヒゲ、あんたも最初に言ってたでしょ？　管理局では望まない研究を強いられるかもしれないって……それもつまり同じことでしょ？」

静寂を切り裂いたのはリタだった。

そしてそれは弟子入りの際にヴァン師匠(せんせい)がリタに向けて言った言葉だった。

てゆーか第三者がいる場面で師匠(せんせい)をヒゲと呼ぶな……

「……そうだったな。そう言っていたハズだったが、どうやら私も年を取ったものだな……いや、そういう『上』の思考に染まっていたということか……」

ヴァン師匠(せんせい)が苦笑いしている……ようやく落ち着いたようだ。

まぁ世界を混乱、不安にさせないため事件等を公表していないと推測できるし、ある程度理解もできるのだが……そう考えると管理局ってめっちゃブラックだな。

企業だったら確実にアウトだろ。

やはり三権集中は歪んでいると思う……

「ふむ、わかった、今回の件は不問としよう……幸いに怪我人も被害も出ていない。それにお前たちの言いたいこともわかった」

おっ！　説得できた？

≪おぉ、やればできるじゃない！≫

失礼だな！

周囲がアレ過ぎるだけで、もともと私はやれば出来る子だったんだよ？

ふふーん♪

≪ふぅ、一時はどうなるか……≫

「ただしリタは反省文を書くように……帰ったらすぐにだ！」

すっかり安心して油断しきったリタにヴァン師匠（せんせい）の容赦なき口撃（こーげき）がきた！

「なんでよ！？」

他人の前でヒゲ呼ばわりするからさ。

ザマァ☆

≪あんた後で洗濯ね☆≫

私刑（リンチ）宣告受けました……

「ところで……その場所が『偶然』ではないとはどういう意味なのだ？」

あっ、ジュエルシードの報告忘れてた。

よりにもよって難題を残してしまったようだ……

原作時間軸～ご存じですか？　ラスボスからは逃げられないのです（後書き）

次はジュエルシード件について…

なるべく早くあげます…

原作時間軸～さようなら脇役（じぶん）、こんにちは主人公（じぶん）（前書き

サウンドステージＸとＶｉＶｉｄって繋がりが微妙だと思うんです。

ルーテシアの物静かな印象がＳｔＳより変わらず。

ノーヴェの印象とかも…

やっぱり最初はＶｉＶｉｄは考えていなかったのかな？

原作時間軸～さようなら脇役（じぶん）、こんにちは主人公（じぶん）

『偶然』と『必然』について、それは各々の考え方次第だろう。

この世に『偶然』などなく全ての事象は『必然』の重なりから成り立っている、そう考える人もいれば、自分の人生は生まれた時からの『偶然』の重なりだと言う人もいるだろう。

確かに……どんな出来事も『必然』すなわち『運命』だと、その一言で片付けられると堪ったものではない。

では自分が歩んできた過程（みち）は……？

それは『自分自身で選んできた進路（みち）』だとハッキリ言えるだろうか？

私は……「ハイハイ、厨二病乙」……今までで一番痛い一言でした。

「どうでもいいわ、そんなこと。科学者にとっては自分の選んできた結果（みち）が全てよ、くだらない」

今回のモノローグ全否定でした。

もう慣れたけどね……

ジュエルシードの件は……（自分たち以外の人が）驚きの連続だったと言っておこう。

どうやら１０年前に確実に『２１個全て』封印していたようだった。

一体何があったんだろう？

１０年前のことも後で詳しい話を要求してもいいよね？

それと確かＳｔＳでは地方の研究施設にいくつか貸し出していた物をスカリエッティに奪われたという設定だったハズ……でもそれはガジェットの動力として使っていた……だっけ？

そこはあまり覚えていないが……

なんでまたこの世界にあるのだろうか？

これが『偶然』の事故だとしたら……もの凄い確率だ。

つまりは『必然』何者かの意思が働いていると考えるのが道理か？

だとしたら……

「ふむ、早急に調査せねばな……」

ヴァン師匠もいつも以上に険しい顔をしている。

まぁ、仕方ないか、対象のジュエルシードは次元断層をも引き起こしかねないロストロギアなのだ。

正式な調査となると艦隊クラスがくるのではないだろうか？

もしくはこの世界に詳しく、１０年前の事件の関係者が……ん？

なんだろう少しだけ……『何か』が引っかかる。

ん～違和感の正体がわからん……

「うむ、本件は早急に管理局に問うことにする。お前たちには別の任務でその世界に行った際にジュエルシードを発見したということにしてもらう。ちょうど騎士カリムの方に低レベルのロストロギアがその世界で発見されたとの報告が入っていてな……」

実験をもみ消してくれたのはいいけど……任務って。

「聖王教会の騎士団か管理局の遺失物管理チームが動けるまでジュエルシードの管理と捜索を頼む……無茶は許す、だが無理だけはするな……」

緊急事態だから仕方ないが……危ないことはしたくないのだが。

≪メンドくさ……≫

リタの言うこともごもっともだ。

てゆーか私たちの立場ってどうなんだろう？

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院の生徒……民間人だよね？　聖王教会関係者ではあるが……

ヴァン師匠（せんせい）に連れていかれた異世界任務などはあるが……これってＯＫなんだろうか？

「こちらも明日の夕方には母さんが……リンディ総務統括官が休暇で帰宅するので事情を説明して協力を仰ぎます」

エイミィさんがヴァン師匠（せんせい）にそう告げる。

まぁ、あのリンディさんがいるというなら……大丈夫だろう。

それにしても違和感が拭えない……一体なんなんだろうか？

うーん……何だろう？

「学院と親の方にはこちらから連絡しておく。それとその世界での拠点となる場所だが……」

学院と両親に師匠（せんせい）から連絡してもらえれば万々歳だ。

そして拠点、寝床とお金は重要だしな。

「あっ、それならウチを使ってもらえれば……」

エイミィさんがそう言ってくれたが、確か子供がいるんじゃ……

「その申し出はありがたいのだが、幼子がいるのであろう？　ウチの馬鹿弟子共に幼子の相手が務まるとは思えなくてな……」

失礼だな！　まぁ、その通りだと思うが……

≪幼児の世話なんて嫌よ≫

予想通りの回答ありがとうございます。

ただ野宿だけはゴメンなのだが……ちなみに子供だけでホテルとか無理じゃね？

「う～ん、そうなると「ウチを使うのは？」……美由希ちゃん？」

今度は美由希さんがそう言ってくれた。

「いいでしょ父さん、母さん。今は恭ちゃんもなのはもいないから部屋も余ってるし、無関係とは言いきれないでしょ？」

おっ、まさかの高町家か？

「んっ、了承（一秒）♪」

桃子さん、それはキャラが違う！

邪夢（ジャム）はやめて！？

「こんな可愛いお客様ならＯＫよ♪」

「あぁ、この街で起こっている事件なら俺たちだって無関係じゃないだろう？　こんなことでいいなら喜んで協力するさ、それに近頃ウチも寂しくなってきたからな♪」

高町家はＯＫらしい……いいのか？

「ふむ、聞きそびれていたが……この方たちは？」

あっ、説明してなかった……

「あっ、こちらの方たちは機動六課に出向中である高町戦技教導官のご家族で、魔法文化に関しても理解ある方々です」

エイミィさんが補足説明してくれた。

「あのエースオブエーズの……ふむ、不肖の弟子共ですがよろしくお願いできますか？」

あれっ？　私たちの意思は？

まぁ反対ではないのだが……

「はい♪　承りました～♪」

どうやら拠点は高町家で決定のようだ。

……いいのか？

ヴァン師匠との連絡終え、入れてもらった紅茶を飲んで一息つく。

「……厄介事になったわね、あたしにもあんたの悪運がまわったか」

エミリオと同じことを言われた……てかお前もそう思っていたのか！？

なら少しは助けようと……思わないなコイツ等は。

なんでこんな友人しかいないんだろう……なんか泣けてきた。

「あっ、自己紹介がまだだったよね。あたしは高町美由希、こっちが……」

「その母の高町桃子で～す♪　それとこちら士郎さん♪」

「よろしく2人とも」

高町家にご紹介もらいました。

みんな見た目若いよね……ウチのお母様もそうだが……いつか自分の方が老けて見えるのではないのだろうか？

……嫌過ぎる。

「あっ、私はアペリス・ウラノ、こちらはリタ・モルディオです。短い期間だと思いますがお世話になります」

「……よろしく」

「は～い♪　よろしくね2人とも♪」

今更だが期間くらい指定していけばよかったのに……ヒゲめ。

とりあえず異世界での拠点をゲットできたので良しとしよう……厄介事には変わりないのだが……

こうして私たちの海鳴市でのロストロギア捜索クエストがスタートした。

ピロリーン！

【勇者爆誕（笑）】の称号を得ました！

原作時間軸～さようなら脇役（じぶん）、こんにちは主人公（じぶん）（後書き）

まさか六課の代わりにサウンドステージをこなすことになりました。

頑張ってちゃっちゃと書き上げます。

原作時間軸～海鳴クエスト（旅立ち編）（前書き）

ＴＯＤ　ＤＣをプレイ中…オート稼ぎ中に執筆してます（笑）

原作時間軸～海鳴クエスト（旅立ち編）

【勇者爆誕（笑）】

説明：爆誕してしまった勇者に与えられる称号
条件：ナニ気ニスルコトハナイ
効果：成長率→→　邪気眼→→　フラグ率→→→
備考：勇者様は絶対正義です☆　きっと新しいナニかが目覚めます！！

ピロリーン！

住居不法侵入および家宅「いらんし、やらんわ！！」

海鳴クエスト～ロストロギアを求めて～

これは１０年前に封印されたハズのロストロギア『ジュエルシード（不特定多数）』を集める冒険である。

そして現在はサブイベントとして謎の低レベルのロストロギア回収を「もう片付けたけど？」……えっ？

「昨日あんたが寝ているうちにサーチャーに引っかかってさ、空間

ごと遠距離殲滅しておいたわ。まったくゴミみたいにうじゃうじゃ増殖して……」

え～と……

「一応残骸は回収しといたから任務完了、後任がくるまでのんびり捜索しましょ～ＺｚｚＺ」

……出番なし？

異世界生活２日目の朝は某戦闘民族な高町家にて向えた。

とりあえず５時には起床し、昨晩急ピッチで作成した運動用のバリアジャケット（ジャージタイプ）に着替え日課のランニングへ。

バリアジャケットは常時魔力を食うが、この街は魔力素も適正値だし、適度な魔力消費もした方が良いと考えたため作成することにした。

ちなみにランニングは士郎さんと美由希さんとは別々だ。

いや、朝からランニング３０ｋｍとか勘弁して。

夜の分を減らしたから朝に走り込むのだ、とは言っていたが……

とりあえず１０ｋｍくらいを目標に街並みを眺めながら走ろう。

１時間くらいかけ高町家に戻ってきた。

思いのほか色んな箇所に目移りしてしまったようだ。

既に士郎さんと美由希さんは帰宅しているようで、道場から音が聞こえてくる。

てか１時間程度でホントに３０ｋｍを走ってきたのだろうか？

それって世界新じゃね？

そう思った私の感性はおかしいのだろうか……？

最初は道場の方を覗いてみようかとも思ったが、見世物ではないだろうし、空いているうちにシャワーを使った方が良いと思い、見学はやめることにした。

まぁ、どこかで機会があるだろう……

やはり御神の技は見てみたいものである。

先にシャワーを浴びて、一旦部屋に戻り布団を畳む。

今回借りた部屋はかつての恭也さんの部屋らしい。

ちなみにリタも一緒で問題ないと言ったため同室だ。

部屋も広いし良いのだが……まぁ、気にしないことにしよう。

ついでに寝ているリタにも声をかけて……やめとくか。

昨晩（自分が寝ている間）に（一応）任務のロストロギアを回収してくれていたようだし……そもそも実験の準備であまり寝ていなかったのだろう。

寝かせておくか……

昨晩のうちにエイミィさんから借りたクロノさんの御下がりの服に着替えリビングへ向かう。

ちなみに着れそうだったのは基本的にYシャツ類、スラックスと言ったところだ。

なんてゆうか枯ｒ……うん、落ち着いた人だったのだろう。

リビングに向い朝食の準備をしている桃子さんに挨拶、手伝えることがないかとは聞いたが……食器の準備すら他人様の家では勝手がわからないのでここでも出番なし……

さすがに居たたまれなくなったので、リタが昨晩封印（破壊）したロストロギアの残骸でも眺めることに……ってなにこれ？

既に原型を一切留めていなかった。

別に無傷で回収しろとは言われていないし……大丈夫だとは思うが。

うん、ロストロギアを簡単に紛失して自分で回収する気もないような奴なんてロクでもない奴だろう……無問題（モーマンタイ）だ。

回収できたのだから幸先は良いハズなのだが……

「はぁ……」

溜息の一つ二つくらい許して欲しいものだ。

朝から黄昏ているうちに朝食の時間になったようだ。

「はい、あ～ん♪【注：脳内イメージです】」

「あ～ん♪　うん、今日も桃子のメシは最高だな♪【注：脳内イメージです】」

「もう、士郎さんったら♪【注：脳内イメージです】」

ラブラブイチャイチャ……

うん、なんていうか……約2名ほど仲良が過ぎだろ？

確かに原作なのはさんの疎外感が…なんとなくだがわかる。

現在は美由希さんがその役なのだろう……もしかしてウチを使えと言ったのはこのためではないだろうか？

そっと視線を美由希さんに……あっ、逸らされた。

「『幸』という字と『辛』という字は良く似ているよ……ホント悲しいくらいね！」

後に美由希さんはそう語ってくれた……強く生きて下さい。

高町家における魔王生誕秘話の一端を垣間見た気がした……

「ところで今日はこれからどうするんだい？」

朝食も終わり、皆それぞれが仕事の準備に入ろうとしているころ、士郎さんがそう訊ねてきた。

「そうですね、フィールドワーク、というわけではありませんが、街に出てみようと思います。一応、常時サーチ…探索魔法の類を飛ばしているので必要ないと言えばないのですが……」

他人様のお家でグータラしているのも常識的にダメかと……

「リタの方はもう少し寝ているかと……色々と疲れているみたいですし」

「ふーん、色々か……最近の子は（ｒｙ」

美由希さんがブツブツ何か呪詛のようなものを呟いている。

ナニを想像してるんだか……

「そうか、外は十分気を付けるんだよ？　お昼には一旦翠屋…昨日の喫茶店においで、昼食をご馳走しよう♪」

ええ人や……自分の周囲には一切いなかったタイプだ。

ふむ、ついでにすずかさんへ昨日のお礼もしたいな。

どうせなので聞いてみることに。

「あっ、そうです。もし知っておられるなら月村すずかさんの住所か連絡先を教えていただけないでしょうか？　昨日のお礼をしていなかったので……」

恩は返さねばな、自分の場合は返された覚えが少ないが……なんか虚しくなってきた。

「そうか、すずかちゃんが案内してくれたんだ……うん、こっちから連絡をいれておこう。都合が合えばお昼にでも会えるかもしれないし」

お昼に翠屋で、か。

それなら心置きなく…はないが、海鳴を散策することに。

「いってらっしゃい～またお昼にね♪」

「はぁ、若いっていいなぁ……」

桃子さんにそう笑顔で（美由希さんには複雑な眼差しで）見送られ、いざ街へ。

「まぁ、そもそもジュエルシードがこの世界、この街にあるとは限らないのですが……」

ぶっちゃけ、ヴァン師匠（せんせい）の連絡待ちだ。

正直な話、ないこと祈りたいのだが……

「まっ、なるようになれですね」

昨日もなんとかなったのだから、今日もなんとかなるだろう。

そんな超楽観的な考え……でもないとやってられんな。

こうして私の長い1日（冒険）が始まった。

原作時間軸～海鳴クエスト（旅立ち編）（後書き）

海鳴クエスト続きます。

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇？編）（前書き）

まだゲーム中…短いのでタイミングを見計らって書いています。

ちゃっちゃと続きを書きあげれるよう（一応）頑張ります。

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇？編）

海鳴クエスト～ロストロギアを求めて（その２）～

さぁ、冒険という名の散策に飛び出した主人公（アベリス）！！

彼の行く先にあるものとは！？

そしてついに本編最大の謎である……はぁ……

虚しい……ツッコミの大切さを失ってから気付くなんて……

いや、寝ているだけなんだけどね。

さっさと散策に行こう……

いざ散策と言っても実際はただの散歩に過ぎない。

常時サーチャーを飛ばしているし、反応があれば自動で結界まで張るという超スグレものだ。

むしろ散歩という名の逃げか……

他人様の家に残っているのもいたたまれないし。

「何か異変でも感知できれば万々歳といったところでしょうか……」

ヴァン師匠（せんせい）に依頼された件は片付いているので実際は連絡待ちなのだが……何もしていないとなると、なんというか沽券に関わる気がする。

出番がないのは割といつものことだが……うん、なんか釈然としない。

「……はぁ、少しばかり広域探査に力を入れてみますか」

オートより少しはマシ、といったところだが他にすることもないし……

それにリタが（一応）仕事を片付けたのに自分だけ遊んでるわけにもいかない……

「とりあえず適当に歩いてみますか」

行先は……人の多い所から行ってみるか。

「目標……大きなショッピングモールで」

いざ……！！

「……人多すぎです」

忘れていたが今日は休日だったようで、家族連れのお客がわんさかいた。

……うえ、人波に酔いそうだな。

どこかに避難を……てかデパート屋上とか高いところがいいのだが……今のご時世、屋上付きとかあるのだろうか？

とりあえず通路真中に設置してあるベンチで休憩……携帯端末を模擬したデバイス（セイクリッド・スカイ）を弄る。

まぁ幻術の応用なのだが……まぁ、ヒューゴさんに頼めばそんな機能も付けてくれるかもしれない……

結果は……サーチャーに異常なし、この区域での反応もなし。

昨日に封印したジュエルシードのデータを反映し、封印状態でもヒットできるレベルのサーチャーなんだが……

「この周辺にはなしですか……いえ、こんな所で反応がなかっただけ御の字ですか」

まっ、そもそもジュエルシードがこの街にあるかもわからないのだが……

「それにしても、こんな世界まで来て、私は一体何をしているんでしょうか……」

少しばかりの自嘲……あの時リタに相談なんてしないで、じっとしていれば良かったのだろうか？

それとも危険を承知でヴァン師匠にでも頼ればよかったのだろうか？

または……いや、そんな『ＩＦ』ばかり並べても意味はない、か……

そんなネガティヴな思考に陥っていると……

「……ごめんなさい、友達と約束……」

「……ならさ、その友達も一緒で……」

「……その、困ります……」

「……いーじゃん、いーじゃん……」

なんか典型的なナンパのやりとりが聞こえてきた。

別にどうでもいいので無視することに。

そもそも出しゃばるような正義感があるわけでもないので、むしろナンパ君に頑張れと応援してやる……むろん犯罪者にならない程度に、だが。

「……じゃあ、その子が来るまで一緒に……」

「……あの、だから……あっ！　……もう来てたみたい……」

次はどこに向うか……

「……えっあの子？　かわい…じゃん外人さ……ぜひ紹介してよ……」

臨海公園……は遠いか、河川敷を歩きながら適当に散策して翠屋に……

「……もう、だいぶ待ったんだよ？　早く行こう？」

急に声をかけられた……って私？

顔を上げると……

「昨日約束したでしょ？　さっ、買い物に行こう？」

……昨日会ったばかりのすずかさんがおりました。

……なんでさ？

だがそこは空気が読める主人公（アベリス）、なんとか話を合わせます。

すずかさんも困り顔で『お願い』と目で訴えていたし。

相手はチャラチャラなヤングボーイ（推定２０歳前後）の野郎が２人、顔は……普通じゃね？

よくすずかさんに声なんてかけられたものだな。

２人だと勇気も２倍なのだろうか？

「え～買い物なら一緒に見てやるよ、そのあと一緒にカラオケ行こうぜ！」

常識は２人で２分の１な気がするが……午前中からカラオケってどんだけハードなんだよ？

「そうそう、そっちの『彼女』も一緒でさ、いわゆるダブルデート！　うん、完璧！」

うん、完璧だな、お前らの脳のイカレ具合が……

どうしても母親似の顔なので見た目は仕方ないが……まぁ髪も原因か。

以前に幻術で髪を切ったバージョンを作って見たが……なんていうか想像以上に似合わなかったのだ。

とりあえず余程な切欠でもない限り切ることはないだろう。

まぁ、身長が伸びて声変わりするまでの辛抱だが。

……てゆーか見た目が中学生にナニ言ってんだコイツラ？

どうやら色々と『アウト』かもしれない輩だ。

「あの、だから……」

すずかさんならこーゆー輩の振り方とか心得てそうだけど……仕方ない。

ハッキリ言ってやりますか。

「――ｓｏｒｒｙ……ｓｈｏｐｐｉｎｇの邪魔ナのデ、ッぅテこ『にゃ』いデくラさァい」

翻訳魔法使わないで言ったら凄い発音になった。

いかにも日本語が苦手な外人を装ってハッキリと『拒否の言葉』を示すつもりだったのが……

「……ぷっ、ついてこ『にゃ』いでくらさい、だってさ！　かっわいい～♪」

神は死んだ。

いや、むしろ神さまにも聖王さまにも既に見捨てられている気はするが……

すずかさんも『あちゃー』という顔をしている、笑われていないだけマシだが。

仕方ない、こういう時は……戦略的撤退だな！！

「――しツレい！」

「えっ、きゃっ！？」

すずかさんの手を取り、人波の中に消えることに。

「あっ、おい！？」

もう遅いわ！！

勝手に『にゃ』の余韻にでも浸っているがよい愚か者どもが！！

異世界生活2日目の午前は、成果なしの探索結果と痛恨の発音ミス、そして女性の手を取り逃走することから始まりました。

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇？編）（後書き）

海鳴クエストまだ続きます

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇！編）（前書き）

モチベーションが低下気味…

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇！編）

人は生まれながらにして罪を背負っている。

そんなフレーズをどっかで聞いたことがあるだろう。

確かに人が、というより生き物が生きていくためには他の命が必要だろう。

そう考えると人生とは『救う』より『奪う』の方が圧倒的に多いのではないだろうか？

まぁ、だからと言ってどーしたわけでもないのだが。

ツッコミ不在のためテキトーなこと言いたい放題だが……寂しい。

……リタ早く起きて。

「ハッ、ハッ、ハッ……ちょっと止らない？」

結局、当初予定していた河川敷辺りまで走ってきてしまった。

ずっとすずかさんの手を引いて……

「あっ……すみません、つい……」

いくら戦略的撤退のつもりでもこれは……

それにだいぶ走らせてしまった。

まぁ、私もすずかさんもほとんど息を切らしていないが……

私は体力には自信があったが、すずかさんも凄い。

色々と気になるが……触らぬ神になんとやら、気にしないことにしよう。

「すみません……確か友人と買い物の予定があったのでしょう？」

そんなこと言っていたような……

「えっ？　あぁ、大丈夫だよ。あれは嘘だから♪」

……そうですか。

「でも君を探してたのはホントだよ？」

なんですと？

「なのはちゃんのお父さん……えっと、翠屋のマスターさんから連絡もらって……」

お昼に翠屋ではなかったのか？

「ちょっと散歩気分だったのから、居場所は……そう、女の感だよ♪」

女の感ってスゲーな。

「ちょっとお話してみたくって……時間いいかな？」

「そっかアペリス君っていうんだ……」

ひとまず河川敷の土手らしき草の上に座りながら自己紹介を……今更だが。

「……空？　解…どういう意味なんだろう？　ブツブツ……」

「どうかしましたか？」

「えっ、うん、なんでもないよ……えっと変わった名前だね？」

名前か、一応名づけは父さんらしいが（愛称はお母様だが）……そういえば由来とか聞いたことがなかったな……今度聞いてみよう。

とりあえず今は昨日のお礼を言うのが先だ。

「昨日はありがとうございました。おかげで路頭に迷わずに済みました」

「ううん、わたしにできることはそれくらいだから……」

ん？　若干トーンが落ちたような……

「それで話したいこととはなんでしょうか？」

特に話題もないので要件を聞き出してみる。

「発音上手だね……それも魔法なのかな？　うん、聞きたいことは魔法……ううん、魔法世界についてなの……」

なんですと？

要約すると親友が住んでいる世界はどんな世界なのか、現地の人に聞いてみたいらしい。

どう、と言われると……

「日常生活においては『この世界』とも大差はないかと。文化は……まぁ、差異はあれど方向性の違いというか……」

なんてゆーかもっと具体的な質問にして欲しい。

「あっ、要領を得ない質問でごめんなさい……えっと、じゃあ『魔法』を使って戦う、というのは常識の範疇というか……割と当たり前の考えなのかな……？」

……そーゆーことか。

親友が命を賭してまで頑張ることに心配を……いや、疑問を持っているのか？

確かに魔法圏の世界でもないのに才能が『たまたま』あっただけの普通の少女が、巻き込まれたとはいえ世界のために戦い、傷ついて、他人のためにその力を振るって……

それは自分で選んだ進路（みち）であり、行動理念も立派だが……やはり周囲はそう簡単に納得しないのだろう。

現にこうして会えない親友の心配をしている女性がいるのだ。

「……日常で使用できる魔法もたくさんありますが、やはり戦闘向けも多いと思いますね。人によってはリンカーコアがなく……最初から魔法を使うことのできない人もいますから、才ある者にとっては割とそうなのかもしれません」

リンカーコアの有無でだいぶ選択肢が変わるのは事実だろう。

実際にとある別世界ではリンカーコアの有無で差別もあるらしい。

「その中でも有無大小というのは人生における大きなウェイトです。

それを活かせる場となったら自ずとそうなっているのが現状でしょう……人は才能の奴隷ではないのに」

私も魔力値だけは高いから、聖王教会側じゃなかったら管理局にあの手この手で勧誘されていたかもしれない。

「……そっか「ただ」……えっ？」

すずかさんが何か言いかけたようだが遮る、折角だから切りの良いところまで話すことに……これはそう、滅多にない『私のターン』な気がする。

「過程があるなら結果は付きものです。魔法によってあった出会い、痛み、喜び、そして救い……それらを否定はしません。それは全部私自身の大切な経験ですから」

確かに痛みとか苦労とか『非常に多い』が、魔法によって救うことができたこともあったし、救われたこともあった。

まぁ、元凶が魔法のせいだと言われると黙るしかないが……

それらをひっくるめて私自身を構成する一部となっているのは事実だ。

いや、ホント苦労はいっぱいなんだけどね。

「まぁ、私にはそのご友人の考えまではわかりませんが……」

ただの持論だが、と言いまとめる。

やはり魔法圏の世界はこの世界の常識と比較すると歪んでいるだろう。

だけど何が正しくて何が間違っているなんて問答をするつもりなんてない。

結局は……

「結局は個人の考え、行動次第なんだね……」

まぁ、そうなるわな。

「うん、少し考えてみて……話してみるかな、こっちばかり心配するのも不公平だよね♪」

そーゆーもんだろうか？

それで納得するならそれでいーんだが……

その他、あーだこーだ話している内にほどよい時間に……

「そろそろ翠屋に向おっか。今から歩けばちょうど良い時間だし」

すずかさんがそう提案し、特に異論もないので翠屋に向うことに。

「お手をどうぞ、お嬢様？」

そう言って草むらに腰かけているすずかさんに手を差し伸べる。

男子たるもの紳士であれ、とヒューゴさんが言っていた。

それを見習ったわけではないが……てゆーかヒューゴさんはカリムさんに気を使って下さい、マジで……そのうち円形脱…ゴホン。

「あら、なら翠屋までエスコートお願いしようかしら♪　小さな騎士（ナイト）さん？」

すみません、道がイマイチわからないのでそれは勘弁して下さい。

と、手を繋いだ瞬間……隔離用封時結界が自動発動した。

範囲広っ！？　発生源は……海だろうか？

ここからでは目視は不可、サーチャーで確認を……

「――ってデカッ！？」

場所は臨海公園だろうか？

なんかやたらでっかい海洋生物……えっとテイルズ風に言うならクラーケン？らしきものが暴れている映像だった。

ちなみにこのクラーケン（仮）ってタコとイカどっちを取り込んだのだろうか？

まぁ、それはどーでもいいか……

とりあえず現場近くに向って確認と報告をした方がいいのだろうか？

正直、嫌だな……危なそう。

結界が持つ限りはほっといていーんじゃね？

生憎と戦うつもりは一切ないので……任務外、任務外。

そんなことを考えていると……

「あの～？　わたしはどうしたらいいのかな？」

「……えっ？」

その声に振り向くと、手を繋いだままのすずかさんがいました。

……あれ？　もしかして巻き込んだ？

どうやら私の悪運は割と伝染するようで……

ちなみにこの結界は私の張ったものではないので脱出させるのは地味に困難だ。

……リタ早く起きて（泣）

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇！編）（後書き）

忙しくなってきたので、またゆっくりペースになります。

原作時間軸～海鳴クエスト（激闘？編）（前書き）

相変わらずモチベーションは低く…

なんとか週一くらいにはあげたい…

原作時間軸～海鳴クエスト（激闘？編）

ただ『生きたい』と思うこと、願うことは罪なのだろうか？

それは生物の本能そのもの……言うならば自然の摂理、か？

逆に『死にたい』と願うことのある人間とは摂理の反逆者なのだろうか？

そう考えると人間はなんて傲「えっと厨二病って言うんだっけ？」

……海鳴クエスト始まります。

「えっと、今回のツッコミは月村すずかで御送りしました……コレ次回もやるの？」

やりません。

「えっと……どうしよう？」

すずかさんがそう訊ねてくるが……ホントどうしよう（汗）

まさかジュエルシードが実際にこの地にあって発動するとは……

仕方ない、こんな時こそ高速思考展開だ！！

≪結界からの脱出は？≫

≪内から外は難しい、てゆーかほぼ無理！！≫

≪結界を一旦解除するのは？≫

≪クラーケン（仮）が一般に見られる≫

≪ほぼタイムロスなしでは？≫

≪あの質量の相手だと物理的な損傷が現実に出る≫

≪いっそリタを起こすのは？≫

≪≪≪　殺される！？　≫≫≫

≪いや、半殺しだろ？≫

≪≪≪　トラウマがぁぁぁぁ！？　≫≫≫

≪洗濯かも≫

≪むしろインディグ？≫

あぁ、もう！　我が思考ながら役に立たない！！

≪とりあえずエイミィさんに連絡してみれば？≫

≪≪≪　……　≫≫≫

おっ、どうやら結論がでたようだ。

この間まさかのジャスト1秒。

「とりあえずエイミィさんに相【こちらエイミィ・ハラオウン！ジュエルシードの反応あり！　アペリス君は今どこにいるの！？】……結界内です」

言う前に連絡がきた。

【よかった、ジュエルシードなんだけど……って、なんですずかちゃんがいるの！？】

かくかくしかじかうーまうま。

「えっと偶然巻き込まれちゃって……」

ちょっと視線を逸らしながらエイミィさんにそう答えるすずかさん。

【偶然、ね～】

2人とも意味深な言動しないで……

「……とりあえずアレはどーするんです？」

あのクラーケン（仮）はほっといていーんだろうか？

【おっと、そうだね。うん、単刀直入に聞くよ？】

エイミィさんがやたら真剣な表情で……

【――アレ封印できる？】

そう問うてきた。

……正直、その言い方はずるい。

アレの封印を『できる』『できない』かと聞かれれば、おそらくできるだろう。

『できる』と言えば、自ら危険に飛び込むもの。

『できない』と言えば、安全かもしれない選択。

正直、危ないことはしたくないが……

「――できます」

なんてゆーか……格好悪い姿は見せたくないものだ。

他にも理由を付け足すならいくらでもあるが……たまには最後まで恰好良くいきたいものである。

【……うん、お願い！　こっちも緊急職場復帰！　全力でサポートするよ！】

やるっきゃないか。

久々に全力で「あの～わたしはどうしたらいーんでしょうか？」……早速出鼻を挫かれた気がしたよ。

【あっ、ずっとそこで待機してもらうのも危ないかもしれないね。普段だったらこっちから転送するところだけど……この結界、ずいぶんと強力みたいで干渉できないんだよね……】

リタさんマジパネェっす。

「わぁ～！　すごいね！　わたしたち生身で空を飛んでるよ！」

結局、すずかさんも一緒に近くまで連れていくことに。

いざという時、すぐ連れて逃げれるように、と。

封印手段が遠距離なので、こちらとしても問題はないのだが……

「うわぁ～！　大きいね！？　あれはイカなのかな、タコなのかな！？」

私の腕の中でずいぶんとはしゃいでいるご様子……まっ、強張っているよりはマシか。

腕の中ということはご察しの通りの『お姫様だっこ』だ。

その状態で目的地まで飛行している。

役得かもしれないが……ある種の拷問でもある。

【あらあら、まぁまぁ】

外野（エイミィさん）の視線がとっても痛い。

映像なんかは消してもらわねば……後で酒の肴になってしまうだろう。

……覚悟しろよクラーケン（仮）

木端微塵にしてくれるわ！！

その後、数分程度で臨海公園上空まできたのだが……

「あの子、もしかして泣いている……の？」

すずかさんがクラーケン（仮）の姿を見てそう呟く。

私にはそこまでの感受性がないのでわからんが、クラーケン（仮）を見ると……いたるところに傷痕が見受けられる。

もしかしてジュエルシードに願ったのは……

「……だとしてもやることは一緒です」

アレの願いがどうであれ、ジュエルシードなんてものは封印する。

そもそもあの姿では碌な事にはならないだろう。

ならば……

「ならばいっそ……すずかさん、今足場を作りますので」

魔法で空中に足場を作りすずかさんを下ろす。

「あの……頑張って」

「はい…せめて一瞬で決めます」

うん、久々に全力で魔法を使うことに……いくぞ！

「――解放します！！」

ＯＶＬ（オーバーリミッツ）！！

魔力とか鬱憤とかストレスとか、とりあえず色んな物を放出し半無敵状態で体中に力を漲らせる。

「……あなたはただ生きたかっただけなのかもしれませんね」

目下で暴れ続けているクラーケン（仮）を見下ろし呟く。

そしてセイクリッド・スカイを起動させる。

「……でも私は詫びませんよ？　だから恨んでもらって結構です」

クラーケン（仮）に恨まれるのもなんかシュールな気がするが……そう思いながらモードを切り替え、ガーンディーヴァ、弓形態へ。

「――さようなら……無慈悲なる白銀の抱擁」

久々の全力全壊……！！

「――アブソリュート・ゼロ！！」

瞬間、世界は白銀に包まれた。

目下には巨大な氷像（アイススタチュー）がある。

悲鳴も雄叫びも全てを空間ごと一瞬で飲み込んだ。

このデバイスは相変わらず厨二性能だ。

【――すごっ、クロノくんやはやてちゃんの氷結魔法の比じゃないねコレ！？】

「――あの巨大な体が一瞬で……これが本場の魔法……？」

エイミィさんもすずかさんも相当驚いているようだ。

ちなみにコレは場合によって封印まっしぐらな魔法だ……威力デカ過ぎだもんね。

そして今回は前回の失敗を踏まえ、周囲に温度調整用の結界を張っているので寒くはない。

さて、後は氷像を砕き、ジュエルシードの封印といこうか。

「――続けていきます、混濁に沈め！　憤怒の撃鉄……」

「ピコピコハンマー☆」

巨大なピコハン☆が氷像（アイススタチュー）に振り落とされ、氷が木端微塵に砕け散る。

うん、効果は抜群なんだが……なんか色々と台なしだ。

だってこれしか思い浮かばなかったんだもん。

あっ、ジュエルシード出てきた。

「【……】」

2人の沈黙と視線が凄く痛いけど、なに気にすることはない。

そして弓を構える。

あれからこのモードにも色々と追加したので……

「――シーリングアロー」

封印術式を含んだショットを撃つなんてこともできるのだ。

これでもう意味のない弓形態なんて言わせない。

一閃、剥き出しになったジュエルシードを射抜く。

ちなみに誘導性も威力もバッチリブーストしているので無問題（モーマンタイ）！

なんかようやくブーストデバイスらしくなってきた。

そして封印付加を伴った射撃はジュエルシードを射抜き……

「――ジュエルシード封印、シリアルナンバー13」

無事に封印完了……しかし、よりによって13、なんか不吉だな。

「あっ、えっと、お疲れ様?だよね」

【あれっ……終わったの?】

なんてゆーかピコピコハンマーが相当シュールだった模様……シャル帰ったらメる。

「一応、無事に回収完了です」

ひとまず任務……ではないんだよねコレ。

ただ『任務外作業＋シュールな印象＝今回の活躍＝プライスレス』だろうか?

なんか締まりのない終わり方だな……結局いつも通りだが。

海鳴クエスト午前の部、無事終了。

ピロリーン!

【ピコピコハンマー】を習得しました！

原作時間軸～海鳴クエスト（激闘？編）（後書き）

普段目立たないキャラが急に活躍するのも死亡フラグらしいです。

主人公にまさかの死亡フラグが…

でもちょっぴりだけモチ上がりましたv

原作時間軸～海鳴クエスト（休息？編）（前書き）

とりあえず早く新章にいくべく頑張ります。

海鳴クエストは次回が最期です。

そして今回はいつもの倍です。

原作時間軸～海鳴クエスト（休息？編）

忘れない、あの涙も痛みも悲しみも……って負の方向ばかりかよ！？

いい思い出が少ないな……

ゴホン……『始まり』と『終わり』はワンセット、物理的に永遠なんてものはない、あったらいけない。

行く川の流れはなんとやら……不変なものなんてない。

終末の時計は動き出した、もう誰にも……

臨海公園でのクラーケン（仮）を撃破後、道中すずかさんに魔法に関してアレコレ聞かれながら当初予定の翠屋へ。

どうやら魔法技術に大層興味があるようで……根っからの技術屋というかなんというか。

わかる範囲で回答しながら目的地に到着した。

「さすがにお昼は混んでいますね」

「あっ、予約席にしておくって言ってたから大丈夫だよ」

至れり尽くせりだこと。

「いらっしゃいませー♪　あっ、2人共きたんだね、奥へどうぞー♪」

美由希さんに案内され昨日と同じ奥のテーブルへ、そこには既に先客がきていたようで……

「お疲れ～♪　いや～なんてゆーかシュールだったねピコハン☆」

「……良い御身分だこと、待たせた挙句に……まぁ、あたしには関係ないけど」

先ほどまで通信をしていたエイミィさんと、ずっと（ツッコミを）待ち望んでいたリタにちょっぴり心抉られる挨拶をいただきました。

昼食…といっても喫茶店ならではの軽食を済ませ事務連絡へ。

「2人ともお勤め御苦労さま。これグランツ騎士団長からなんだけど……」

そう言ってエイミィさんから渡されたデータは正式な遺失物管理者の辞令と今回の任務における依頼、そして……

「――総合Aランクの証明書？　……特に試験を受けた覚えはないのですが？」

なんでさ？

「あぁ、それに関してはグランツ騎士団長から伝言があって『私の方で申請しておいた。なに、これはまっとうな手段であり、身内贔屓のない審査に基づく考えだ。任務に就く以上は持っておきなさい。ただしそれ以上のランクは自己申請し試験を受け、資格取得をするのだな』だってさ」

要は辻褄合わせか。

リタの方も同じく総合Aランクだが……

「そっちにも伝言あって『お前ならSランクはいけるだろうが、試験もなしにそのランクの申請は無理でな。段階を追って受けてみるのだな』だって、凄いね～グランツ騎士団長にそれだけのことを言わせる実力者なんだね！」

……わかってたことだし、面倒な柵は欲しくないから別に悔しくなんてないよ？

「それと連絡用端末にコレをインストールしてね、これでミッドと

も通信できるようになるんだよ♪」

おぉ、それは便利な……早速インストールを実施する。

「とは言っても今日の夕方には捜査としてフェイトちゃんがくるから、この件はバトンタッチなんだけどね」

そして一瞬で割と不要な代物に……なんでそんなに上げて落とすのかな？

ん？　『捜査としてフェイトちゃんがくる』と言ったか？

「この件はフェイトさんが担当するのですか？」

「うん、すぐに動ける人材の中でジュエルシード事件に関してはフェイトちゃんが適任だからね」

……なんとなくだが繋がってきた。

ただしそれは原作を知っているからこその差異であり、この世界が根本的に異なっていたらアウトだが。

ここらへんで決定打が欲しいところなのだが……

「――適任ね……それって１０年前の事件ってやつ？」

ナイスリタ！　それとなく（ど真ん中ストレート）で聞いてくれた。

それがわかれば……ある程度見えてくるのだが。

「あ～うん、ごめんね～１０年前の件はちょっと話せなくてね……」

……だめか。

じょうがない、帰ってから何とか調べてみるか。

そうしているうちにソフトインストールが終了した模様……新着メール１３件。

また１３かよ……今日やばいんだろうか？

とりあえず上から流し読みすることに……

？　送信者：ラグナ

『リースへ、なんとボーイフレンドができました／／　もっと仲良くなったら紹介するね』

？　送信者：ヴァイスさん

『ラグナにボーイフレンドができたらしいんだがどこから狙撃すべきだろうか？　返答求ム』

？　送信者：ラグナ

『お兄ちゃんに話したら何故かストームレイダーを磨き始めました。今度リースと一緒に狩りに行く予定なんだって？　どこの世界まで行くのかな？　その時はお土産よろしくね♪』

？　送信者：ヴァイスさん

『ラグナにお前と狩りに行くと嘘付いちまった、聞かれたら話を合

わせてくれ』

？　送信者：ラグナ

『実は明日、初デートしてきます♪　返信がないからリースは忙しいのかもしれないけど、勝利を祈ってくれると嬉しいな♪　じゃあ、おやすみ～』

？　送信者：ヴァイスさん

『聞いてしまった……ラグナが明日デートらしい、事態は一刻を争う。俺は……』

？　送信者：お母様

『リースへ、グランツさんから話は聞きました。異世界とはイキナリですが、体調を崩さずにね。それとナンパされてホイホイついていかないようにね？』

？　送信者：カリムさん

『管理主任殿へ、グランツ団長からあったロストロギア回収の件ですが、できる限り無傷でと依頼がきています。このメールを見ているころには既に無事確保できているころでしょうか？』

？　送信者：エリオ

『リースさんへ、お疲れ様です。どうも大変なことになったようで……なんて言えば良いかわかりませんが頑張って下さい』

？　送信者：キャロ

『リースさんへ、リタさんと一緒に事件に巻き込まれたとお聞きしました。どうかご無事で、帰ってきたら連絡して下さいね』

？　送信者：オレンジ博士

『やぁ、いつも面白い作品をありがとう。代金は指定の口座に振り込んでおいたよ。今後は私も娘たちも忙しくなるから申し訳ないが次回依頼は当分先になるね』

？　送信者：ユーノさん

『こんにちはアペリス、ジュエルシードの事件に巻き込まれたって聞いたよ？　アレはとても危険なモノだから扱いには慎重にね。帰ってきたら話を聞きたいから連絡もらえるかな？　お願い…そして気を付けてね』

？　送信者：ラグナ

『お兄ちゃんが入院しました』

……ってヴァイスさんに何があったんだ！？

以前に死亡フラグよりは入院した方が良いんじゃね？　とは思っていたが……

てゆーか六課大丈夫なんだろうか？

それにしてもお母様……気にしないことにしよう。

そしてカリムさん、ロストロギアは既にリタが破壊済みですよ？

カリムさんだから絶対に無理だってわかっていて言っている気がするな……

ちなみにエミリオからメールがないのは、異世界では連絡が通じず、それに皆同じようなメールをしている、といった無駄なことはしないという考えからだろう。

……わかっているから悲しくなんてないもん。

「ところで午後はどうすんの？」

事務連絡後、食後のティータイムをしている最中、リタがそう訊ねてきた。

「今のところ特に予定はありませんね、もう少しだけ街中を散策してみようかとは思いますが……」

午前中に予定していたショッピングモール→河川敷→臨海公園は終わってしまったのだが……

「あっ、予定がないのならわたしと一緒に買い物にいってみない？さっきのお礼もしたいし、まだ聞いてみたいこともあるし……どうかな？」

お礼って……むしろ巻き込んだのだが？

そう口に出そうとした瞬間……

≪こら！　お姉さんに恥をかかせるんじゃないぞ！　むしろ誘う勢

いで言わなきゃだめだよ！≫

≪勝手すれば？　あたしは自由にうろつかせてもらうけど≫

外野（てか念話なので内野？）から口撃（こーげき）が……

まぁ、私としても予定があるわけではないので……

「私でよろしければお供致します」

男子たるもの紳士であれとな。

≪ん～でもその格好じゃねぇ、なんか地味……あっ少し破けてる！　そういえばさっきバリアジャケット展開してなかったもんね≫

≪あの時は空間殲滅でしたし…それに自分だけ、というのも気が引けまして……ってこの服はクロノさんの御下がりなのですが？≫

それを地味ってあなた……

≪ふふ～ん！　こんなこともあろうかとさっき急ピッチで発掘してきたのだ！≫

「美由希ちゃ～ん、ちょっと奥借りるね？　すずかちゃん、リタちゃん、少しだけ待っててね～♪　アペリス君はこっちきてね」

なんなんだ？

エイミィさんに連れられ奥のスタッフルームへ。

そこにあったのは……

「お・ま・た・せ～♪」

エイミィさんノリノリ。

「ぷっ、くっ、にっ似合ってるじゃない？」

リタぬっころ。

「あぁ～懐かしい♪　劇でフェイトちゃんが着ていた衣装ですね？」

コレはフェイトさんの御下がりだったのか……

ご察しの通り、Ｙシャツは少し破けていたので、エイミィさんが用意していた服に着替えることに……それが……

「……これなんて蒼☆石ですか？」

一応ズボンというかハーフなパンツというか、その辺に救いはあったが……

「いやぁ～昨日もヒラヒラしたブラウスだったから抵抗感ないのかな～と思ってたんだけど～♪」

昨日の自分に言ってやりたいわ、ヒラヒラはやめておけと。

そしてお世話になっている手前、断れない自分が悲しい。

「はい、帽子も忘れずにね♪　いや～これを見てると昔の劇を思い出すわね～え～と、確か題名は『マリサゲーム』だっけ？」

なにそれこわい。

エイミィさん曰く、この服を着て語尾が『なの』口調の姉役（なのはさん）を守る鋏の騎士フェイトさん、ひたすらヤク○ト空容器を積み上げるすずかさん、とっても真紅でバーニングなアリサさん、ひたすら出番のない地味な策士はやてさん……カオスだ。

「じゃあ騎士（ナイト）さん、すずかちゃんの護衛よろしくね～♪」

この格好で外を歩けと？

翠屋を出たら即効でバリアジャケットに着替えよう……魔力消費なんて気にしない。

「あっ、そうだ。セイクリッド・スカイでデカイ魔法使ったでしょ？　データ欲しいから借りるわよ？」

リタにデバイスを取りあげられた……これで退路はないと。

ふと助けを求める視線を美由希さんに送るが……目線が『このリア充が！！』と語っていた。

高町夫妻（マスターたち）は忙しそう……孤立無援とはこのことか。

「あっ、これ餞別」

そう言ってリタに傘を渡された……どうやら夕方から雨らしい。

≪ほらほら、ここまで御膳立てしたんだから男らしくいっちゃいなさい！≫

既に格好が男らしくないんですが？

……しょうがない、ここにいてはからかわれるだけだ。

「――では行きましょうか、お姫様？」

「――じゃあお願いね、小さな騎士（ナイト）さん♪」

この格好で街中を歩くのはもの凄く辛いが……なに、あと数時間後には帰るのだから……そう思えばなんとでもなる。

どーとでもなれ。

ピロリーン！

【蒼き星騎士（せいきし）】の称号を得ました！

原作時間軸～海鳴クエスト（休息？編）（後書き）

色々煮詰めすぎた話になってしまいました。

そして主人公の行く末は…

今週中には次話投稿したいものです。

原作時間軸～海鳴クエスト（青春？編）（前書き）

何度も書き直すハメに…

どーしても主人公を格好良くするとR指定とか違和感とか出まくる…

なので報われないのはデフォで（笑）

きっと新章では良いところがあります。

原作時間軸～海鳴クエスト（青春？編）

【蒼き星騎士（せいきし）】

説明：黒歴史を恐れない物に与えられる称号☆
条件：蒼☆石のコスプレをした☆
効果：バリアジャケットに蒼☆石コスが登録されました☆
備考：鋏は別売りです☆

ピロリーン！

バリアジャケットにコスチュームが登録されました☆

……えっ？　それだけ！？

てゆーかいらぬぇぇぇぇ！！

「あんたって重度の厨二病？　なに『終末の時計は動き出した』って？」

えっ！？　まさか前回分のツッコミをここで！？

「いや、その前の『救う』とか『奪う』とか『生きたい』だの『死

にたい』だの……」

やめてぇぇ！？

不在回の分までツッコミを入れないでぇぇ！？

「――厨二病乙」

ぐはぁっ！！

外に出て激しく後悔した。

想像以上に視線を感じる……そりゃ目立つよね、外人のコスプレって……

そこ！　写メとるな！！

でも得意のポーカーフェイスで表面は比較的穏やか。

心の中は涙で海ができているがな！

それはともかく

「どこまで行きますか？　街中のショッピングモールではまた絡まれるかもしれませんよ？」

精神的にもだいぶ参っているので面倒事は勘弁して欲しいのだが……

「あら？　小さな騎士（ナイト）さんは守ってくれないの？」

すずかさんは楽しそうにそう切り返す。

正直な話、デバイスなどなくとも街のチンピラとかナンパ野郎が複数相手でも、身体強化とか魔力放出とかすればどーとでもなるが……

「――私にできることは『逃走』か『誠心誠意の謝罪』くらいですよ？」

暴力沙汰はダメだ。

異世界の国家権力のお世話になるわけにはいかない。

「立場上、問題は起こせませんし……正当防衛すら危うい身ですよ？　なにぶん身分証明が難しいですから」

だから出来るのは精々逃走と謝罪の二択だけだ。

「この格好もありますし、できればあまり人の多くないところがありがたいです」

視線が痛い……

「そっか、そうだね。じゃあ、予定変更して散歩にしよっか？」

お礼も言葉で十分、むしろ巻き込んだくらいだ。

美人さんと一緒に歩けるだけ良しとしよう。

「ねぇ、異世界に…急に見知らぬ場所、勝手のわからない所に来て不安じゃなかった？」

午前中からの引き続き、色んな質問に答えながら人通りが少ない道を歩く。

ふと、その中ですずかさんが問うてきた。

不安じゃなかったと言えば嘘になるだろうが……

「色んな要素がありましたからそこまで不安ではなかったですね。そもそも私1人ではなかったですし……それにすずかさんに救われましたから」

ジュエルシードが関わっている時点でいずれ管理局が……そんな楽観的な考えもあったし……まぁ、自分1人ではなかったしね。

まぁ、途方には暮れていたが。

「……そっか、強いんだねアペリス君は。わたしだったら不安で泣

いちゃうんじゃないかな？」

「そんなことはありませんよ。表情（おもて）に出さないだけで内面（うら）では散々です……」

自分で言っていて悲しくなってきた……

今までを振り返るとホントそんなのばっかりだ。

「それでも、だよ……わたしには出来ないもの」

そう言って急に黙り込んでしまう。

何か悩み事でもあるのだろうか？

こちらも何を言えば良いのかわからないので、２人並びながら人通りの少ない道を沈黙とともに歩く。

いや、どーしろと……気まずさのあまり視線を上に仰ぐと……

「……猫？」

「えっ？　本当……降りられなくなったみたい」

公園通りの木々、その枝の上から降りられなくなっていると思われるお猫様が……

「にゃぁぁ……」

昨日に引き続き同じ公園でお猫様に出会うとは……

「アペリス君……あの……」

皆まで言わずとも。

「申し訳ないですけど……」

「あっうん、やっぱり危な「後でエイミィさんに服を汚してしまった理由、説明を一緒にお願いしますね？」……もう！　……ありがとうねアペリス君」

この位のことなら……

「もし枝が折れたら危ないので近づかないで下さいね？　あの子は……なんとか着地できるでしょう……あっ、傘と帽子お願いします」

そう言ってすずかさんに傘と帽子を渡し、木を眺める。

はっきり言って登れる箇所が……手足をかける場所がない。

でも目立つ魔法を使うわけにもいかない、だったら……

「――だた一息で駆け上がるのみ！」

魔法による身体強化を施し、助走をつけ、木に衝撃を与えないように根本を踏み切り……一気に枝まで駆ける！！

そして……

「――にゃぁっ！？」

「――キャッチ！！」

そのまま猫をキャッチして……着地する。

その間ジャスト４秒。

「……ミッションコンプリートですね」

「にゃぁぁ……」

「……えっ？　えぇぇぇぇ！？　登るんじゃなかったの！？」

うん、結果オーライだ。

「にゃあぁぁ……」

うん、お猫様もそう言っている気がする。

「えっ？　捨てられちゃったの？」

……全然違ったみたい。

「にゃにゃにゃ～ん……」

「……そっか、行くところがないならウチにおいで？」

「みゃー」

「うん♪」

……どーとでもなれ。

すずかさん曰く、このお猫様は飼い猫だったのだが、飼い主のお婆ちゃんが亡くなって息子夫婦にポイされたらしい。

本当かどうかはわからんが……

飼い猫に野生は厳しく、餌を求めて木の上まで登ったが降りられなくなったらしい。

典型的なアレだな。

で、このお猫様はすずかさんが飼うらしい。

「じゃあ更に予定変更してウチに向おっか？」

「みゃっ？」

公園のベンチに座りお猫様を撫でながら、すずかさんがそう提案する。

まっ、特に予定はないので異論はない。

「あれっ？　……雨かな？」

気づけばもう15時を回っていたため、天気予報通りポツポツと雨が降ってきたようだ。

「リタに感謝ですね、まぁ、窮屈で申し訳ありませんが……」

そう言って傘を開きすずかさんを招く。

「ふふっ、じゃあ行きましょうか？」

「みゃぁぁ」

いざ月村家へ……？

ふむ、道を知らんな……

なんか情けなくなってきた。

雨の中、傘を差し2人（＋1匹）並びながら道を往く。

そして住宅街が一望できる大きな橋へとかかったところ

「ねぇ？　アペリス君はフェイトちゃんがきたらすぐに帰るの？」

ふと、すずかさんがそう聞いてきた。

「そうですね。本々イレギュラーというか、事故で来ていたものですから。多少の心残りはありますが本業はあくまで学生ですからね」

御神の技を見られなかったし……今朝のウチに見ておくべきだったな。

「そっか、もっとお話ししてみたかったけど仕方ないか……」

そう呟いて再び沈黙へ……

何か気のきいたことでも言えれば良いのだが……生憎とそんな言葉は出てこない。

口先だけの野郎でもこーゆー時は羨ましくなるな。

こんな時こそ……我等がお猫様

「にゃっ？　にゃにゃ！？　にゃにゃーん！！」

何を言っているのかさっぱりわからんがな。

「えっ？　違うよ～もう！　ただ切っ掛けになればな～とは思うけど……」

「にゃにゃ？」

「そう、勇気を持てないわたしが新しい一歩を踏み出す切っ掛け……」

さっぱりわからん。

「……みゃあぁぁぁぁ！！」

「きゃっ！？」

えっ？　お猫様が突然すずかさんの腕から飛び出して歩道から……車道へ！？

なんでさ！？

そしてテンプレの如くでっかい輸送用トラック（推定８０ｋｍ／ｈ）が……！？

――咄嗟に身体強化を施し、足元から魔力放出、更にデバイス制御なしの覚えてから一度も使ったことがなかったソニックムーヴ（仮）で飛びだす！

間に合えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

「――だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

悲鳴だけが辺りに響き渡った……

原作時間軸～海鳴クエスト（青春？編）（後書き）

主人公死んだー！？　いや死んでないけど。

海鳴クエストはこれで終了。

続きも書きあがっているので確認と修正したら上げます。

原作時間軸～ｅｐｉｌｏｇｕｅ（前書き）

ある程度は予定通りの進み具合なのですが、ここまで５０話もかかるなんて…早く本編に入りたいと連呼していた割に本当に時間がかかりました。

文章を書く難しさと言いますか…長かったです。

原作時間軸～ｅｐｉｌｏｇｕｅ

「ふむ、右足骨折、肋骨４本に罅、全身打撲、急激なＧによる内臓負荷ｅｔｃ……全治４か月といったところか……何か言い分はあるか？」

……ありません。

ここは懐かしの聖王医療院、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院初等科の入学式当日に入院して以来だ。

まぁ、入院以外でもちょくちょくお世話にはなっていたが……

そして現在、個室でヴァン師匠（せんせい）のお叱りを受けております。

「まさかジュエルシード関連ではなく、猫を助けようとして重傷を負うは思わなかったぞ？」

自分も同感です。

「しかも、トラックに撥ねられたのではなく『跳び出した勢いで橋から落ちる』とは……」

まさか最後の最後でやらかすとは……

確かにお猫様は無事救出できた。

ただ跳び出した勢いが不味かった。

ダイジェストに説明していくと……

？　身体強化、魔力放出、ソニックムーヴ（制御なし）の急激な跳び出し

？　お猫様救出

？　歩道の段差に躓くのを避けるためほんの少しだけジャンプ

？　勢い余って跳び過ぎ＆ａｍｐ；飛び過ぎで橋の欄干に右足の脛が激突（この際に骨折）

？　その際にお猫様を手放し、お猫様は『なぜか』無事歩道に着地

？　慣性の法則というか見事に空中何回転もしながら橋の外へ

？　そして２０ｍ以上下の川に落下（この際に水面強打、全身打撲と肋骨に罅）

？　そこで気絶、ようやくソニックムーヴ状態が解除（過負荷による内臓ダメージ）

？　雨で勢いの増した川に流される（？～？まで１０秒もかからなかった）

？　なんとか海まで流される前にすずかさんに救出された（らしい）

ちなみにすずかさん自ら川に飛び込んで救出してくれたみたいで、病院ではなく個人の医者を呼んで診てもらったらしい（すずかさんスゲー）

そして気付いたら懐かしの聖王医療院でした、っと。

とりあえずジュエルシード等の件はリタから報告を受けるから安静にしていろ、そう言ってヴァン師匠（せんせい）は病室を出ていった。

そして入れ違いでお母様が病室にきた。

「もうリースったらおっちょこちょいね？　入院セットは持ってきたから他にも必要なものがあったら言ってね？」

おっちょこちょいって……

「お医者様の話だと入院2か月と半分、通院1か月と少しみたいね」

なんかもう『ゆりかご』とか無理っぽくね？

途方に暮れているとコンコンとノックの音が部屋に響き渡った。

「はぁ～い、開けても大丈夫ですよ～？」

色々とアレな私に代わりお母様が返答する。

「よう！　お前も入院したって聞いてな。なんだ？　可愛い女の子かと思ったか？　それは残念、同じく入院中のヴァイスお兄さんでしたっと」

ＨＡＨＡＨＡＨＡと笑うヴァイスさん……なんだろう今のフレーズに何か殺意を抱いた気がする。

「おっと！　これから診断でな、じゃあな！」

えっ？　それだけ？

そして再び締まるドア。

「――ファッ○ン……」

とうとう心の声が表に出るようになった。

そしてまたノックの音が……

「はいはい、空いていますよ？　冷やかしならご免ですからね～」

超投げやり（なんかヤケクソ）でそう返答する。

「あっ、えっと、月村すずかですけど……こんにちはアペリス君……その、タイミング悪かったかな？」

……とりあえず確信した、私には神さまや聖王さまの加護なんてない。

「じゃあ、お母さんは荷物の整理をしておくから、２人で散歩でもしてらっしゃい♪」

そう言って車椅子を渡され、すずかさんと一緒に中庭までいく。

「アペリス君はお母さん似なんだね？　そっくりでびっくりしたよ」

「そうですね、見た目が若いままですと、いつか自分の方が老けて見えるのではないかと結構不安なものですよ？」

「あぁ……うん、それわかるなぁ……」

そんな他愛もない会話しながらの中庭を歩く。

「――話は聞きました、川に飛び込んでまで助けていただいた、と」

２人揃って中庭に咲いている花を眺めながら、そう切り出す。

「お礼……言わせて下さい。危険を省みず私を助けていただいたこと感謝致します、ありがとうございました」

「ううん、元々わたしのせいであの子が飛び出しちゃったから……わたしからも言わせて？　あの子のこと助けてくれてありがとう」

「そんなこと……ない……です、わっ私が、勝手に……ウッ…クッ……」

……今回は最後まで言い切れなかった。

なんか涙が止まらない。

いい加減自分が本当に情けなくて……

「私にも……あった、みたいで、す。悔しい、とか…情けない、とか…人並みの……」

仕方が無い、運が悪い、いつもそうだった。

『諦め』という呪いをずっとその身に刻み続け……

「何が、騎士（ナイト）ですかね？　結局……助けられて、ばかりで……それで浮れて…さぞ滑稽だった、でしょうね……」

そう自嘲する……今までの分も含め本当に自分が情けなくて……

「――そんなことないよ？　あなたはわたしに一歩を踏み込む勇気、そして新たな道へ進む切っ掛けをくれたもの」

「……えっ？」

顔を上げすずかさんを見上げる。

その顔はとても穏やかで、決して嘘を付いているような表情には見えない。

「あのね、アペリス君、どうしてわたしがここにいると思う？」

そーいえばここってミッドじゃん。

わざわざミッドまでお見舞い？　な、わけない、よね……？

「わたしね、今度ミッドチルダに移住することにしたの、今日はお見舞い兼ミッドチルダの下見なんだよ♪」

「……へっ？」

えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？

「どっ、どうしてですか！？」

「技術者として未知の分野は夢がいっぱいなんだよ？　今までは中々その一歩が踏み出せなかったけど……これを期に、ね？」

いや、確かに魔法技術関連に並々ならぬ関心はあったのは感じとれていたが……

「あら、アペリス君は嫌なの？　わたしとは顔も会わせたくない？」

……まじカオス。

「ふふっ、これからもよろしくね？　わたしの小さな騎士さん《マイ・リトルナイト》？」

原作時間軸～ｅｐｉｌｏｇｕｅ（後書き）

次回より新章です。

これまでと一変します。

だって≪自主規制≫なので（笑）

次回更新は１１／４予定で…

本編～偉大なる獅子（前書き）

新章開始、この章からＳｔＳ本編です。
（今回はいつもよりやたら長いです）

ここまでくるのに４か月もかかるなんて思っていませんでした…

文章書きはとても難しいです。

ちなみに新章タイトルのＤ．Ｃはディレクターズカットではありません…

本編～偉大なる獅子

幼い頃

見上げるといつも彼女は優しく微笑んでくれていた

時が過ぎ、成長するにつれ

その笑顔を見上げる必要はなくなっていった

だが、同じ目線になるにはまだまだ足りないようだ

両親は常に暴走状態な人たちだった

だから僕は早く一人前になりたいと……騎士になると言って家を出た

僕の望むものはただふたつ

すべては……

新暦７５年５月下旬、いつもの目覚ましより早く目が覚めた休日の朝、天気は快晴ではないが曇りでもない……普通の晴れの日のこと。

少しだけダルイ体を一喝し意識を覚醒、寝巻きから着替え、庭へと向かう。

軽く準備運動とストレッチをこなし、待機状態が剣の形をしたキーホルダー…デバイス（シャルティエ）を起動、美しい装飾剣を構える。

【――おはようございました坊ちゃん】

本当にデバイスなのか疑わしいこと極まりないが、いつものことなので無視し、黙々と日課の素振りと型の練習をする。

【あれっ？　スルーですか？】

今でこそ庭先で行えるが、昔は聖王教会本部の訓練場をよく使っていた……わざわざ僕のためにリフォームしてくれた叔父夫婦には頭が上がらないものだ。

【あの～放置プレイは趣味じゃないんですが……】

いや、それ以前の話か……叔父夫婦には家出をしてからずっと世話になっている状態だ。

【……ぐすん】

小一時間ほど経過し、一通りの型が終了したころ、どこからともなく拍手をする音が聞こえてきた。

いつの間にか庭先にはお客様がきていたようだ……いや、気づいてはいたが彼女なら警戒する必要などない。

逆に違う意味で少しだけ緊張してしまうが……

「どうやら今日は僕の方が早く目覚めたようだね？　暖かくなってきたから2度寝でもしてしまったのかい？」

少しだけ意地悪な口調で……だが表情も心情も笑顔で客人に尋ねる。

「もう…！　いじめないでエミリオ、この時期のお布団の魔力ってとっても凄いのよ？」

彼女も笑顔でそう返してくれた。

「ふふっ、君の場合は年中そうじゃないのかい？　あぁ、言い忘れていたね、おはようマリアン」

そう微笑みながら叔父夫婦の一人娘――従姉のマリアンに挨拶する。

「おはようエミリオ、明日は絶対に私が先に起きて、エミリオを起こしてあげるんだから！」

それならば期待して熟睡することにしようか。

そして彼女は朝食の準備のため家の中へ、僕も朝練を切り上げシャワーへ。

【マリアンと話すときの一割でいいから僕にも優しくして下さいよ……】

「黙れ」

【・。・（つД`）・。・】

さぁ、朝食に向うとしよう。

「父さんと母さんは昨日から泊まり込みで仕事みたい……ここのところ毎日忙しいのね」

朝食時にマリアンがそう呟く。

ちなみに叔父夫婦は聖王教会の騎士団に所属している。

「そうだね、近頃は各方面に騎士団が派遣されているようだし」

師であり、聖王教会騎士団の長を務めているヴァンもそう呟いていた。

色んな世界にて騎士団を派遣せざるを得ない様々なトラブルが続いていると。

おかげで修行の時間が減っている分、僕にもそれなりには弊害が出ていると言えよう。

だが……こうしてマリアンと2人で食事できることには感謝を。

叔父上たちには申し訳ないことだが……

【あの～僕の存在は……】

「なにか良くないことの前触れじゃなければいいんだけど……」

それは少し大袈裟かもしれないが、用心するに越したことはないだろう。

違和感はある、でも確信は何一つない。

「もどかしいな……」

目に見えない陰謀でも渦巻いているのだろうか……？

まぁ、それでも僕の目的（のぞみ）は変わりないだろう。

「？　どうしたのエミリオ……はっ！？　もしかして味付けがおかしかったとか！？」

僕の呟きを勘違いしたのだろう、あわあわと取り乱すマリアン。

「ふふっ、マリアンの料理はいつも通りおいしいよ、ちょっと考え事をしていてね」

そんな姿が愛おしく、ついつい笑みが零れてしまう。

「もう…！　びっくりしちゃったじゃない！」

メッ！　と指を立て注意された。

うん、僕の望みは変わらない。

僕が望むもの、それは…【あぁ！！　坊ちゃんもうすぐ占いの時間ですよ！　早くテレビの電源を入れてぇぇって窓から久しぶりのお空へぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？】

はぁ、さっさと朝食を済ませ外出の準備をするか……シャルのせいで気乗りはイマイチだが今日は出かける予定がある。

「あっ！　昨晩に下準備しておいたお菓子がもう少しで焼きあがるからお見舞いに持っていってあげてね♪」

手ぶらでお見舞いはマナー違反よ～とマリアンは言う。

「まさかそれで寝坊してしまったのかい？　アイツにそんな気遣いはいらないよマリアン」

それで寝坊させてしまうなんて……

「あらあら、そんなことを言ってはダメよ？　大切なお友達でしょ？」

「ただの腐れ縁さ……」

そんなやりとりをしながらお菓子が焼きあがるまでの間に朝食を終え、出かける準備をする。

「はい、コレ。私も今日は一旦、学院の方に顔を出してくるから帰

りは夕方になるわ」

そう言ってマリアンに渡された紙袋からは少しだけ甘い匂いがしてきた。

「僕も夕方までには帰ってくるよ、そうだ！　今日も叔父上たちが帰宅できないようだったら外食にしようか？」

「ふふっ、そうしましょうか。じゃあ、気を付けていってらっしゃいエミリオ」

「……いってくるよマリアン」

マリアンに見送られ、向う先は聖王教会本部に隣接する聖王医療院……1週間前からアイツが入院している場所だ。

アイツとの腐れ縁の始まりは6歳の時……いや、思い出すのはやめよう。

僕も随分と幼稚だったものだ。

それからは共に『色々』と腕を磨き、父の暴走に騎士カリムを含めた3人で苦労し……その後はSt．ヒルデ魔法学院に入学し……様々な経験（トラブル）の末、今に至る。

決して平穏な日々ではなかった。

だが、退屈する日々でもなかった。

そんなことを考えている内に聖王医療院に着いたようだ。

アイツが入院している病室の前まできたのだが……

【入らないんですか坊ちゃん？】

病室に入るのに躊躇しているとシャルがそう訊ねてきた。

「……これは経験上から来る『カン』なんだが、今開けると後悔しそうなんだ」

何が、とは言わない。

【……もう少しだけ寄り道していきましょうか？】

「……そうだな、確かヴァイスも入院していたな？　そちらにでも顔を出しておくか」

【そうですね……てゆーかアレはむしろ坊ちゃんが……なんでもありません】

アレは勝手に自滅…むしろ自爆か？　僕は何一つ手を出していない。

とりあえずアイツの見舞いは後回し、先にヴァイスをからかいに行くとしよう。

ヴァイスのことなので診察の時間以外はあまり病室にいないだろうと考え（本々たいした怪我ではないので）最初から喫煙できるスペースから探すことに。

「喫煙室にはいなかった……となると、だ」

【屋上でしょうか？】

なんとかは高い所が好きというしな。

そうして屋上へ向かい、扉を開けると……

「んっ？　おぉ、お前かよ……看護師かと思ったじゃねぇか……」

空を見上げながら煙草を吹かしているヴァイスがいた。

「……屋上も今や禁煙だ、大人しく喫煙室で吸うんだな。それか禁煙しろ」

「こりゃまた厳しい……最近は喫煙者に厳しい世の中になったことで……」

【商売的には良い金になるでしょうけど、人体には百害あって一利もないですからね】

まぁ、僕の知ったことではない。

「それにしてもどうしたんだ？　俺を笑いにきたのか？」

「それもあるが「おいこら！！」……（半分は）冗談だ。まぁ、それでも自業自得だろう……」

僕はあの時、後ろから声をかけただけだ。

「……忘れようぜ過去のことなんざ？　俺たちは未来という希望に向って生きていきゃあいいんだよ」

【なんかキレイにまとめようとしていますよ？】

気が済むまで放っておけ。

「ところでよ？　アイツんとこは見舞いに行ったのか？」

我に返ったヴァイスがそう訊ねてきた。

「いや、病室の前で悪寒がしてな。後回しにした」

そろそろ良い時間だろうか？

「あぁ～そうだな……行けばわかるか……よし逝ってこい」

おい……

「あと俺さ、明後日で退院だからその祝いを……」

早足で立ち去りドアを勢いよく閉める。

ヴァイスが何か言いかけていたが気にしない。

アイツの病室に向うことにする。

そして再びアイツの病室前にきた。

今回は先ほどのような悪寒はしない。

あまり良い気分もしないが……

【あっ、一応ノックしてから入りましょうね坊ちゃん！】

失礼極まりないデバイスだな？

最近またうるさくなってきた。

再度、待機状態では話せないようにしようか？

まったく……きちんとノックぐらいするさ。

コンコン、とノックしたところ「……どうぞ？」と返事が聞こえてきた。

かれこれ1週間以上は聞いていなかったがアイツの声だった。

若干疲れている声色だったが気にせず入室、そして第一声。

「……失礼した、どうやら病室を間違え「いえ、合ってますから」……そうか」

ふむ、確かにアイツの声だ……どうやら間違えてはいないらしい。

だからこそ問おう。

「――なんだその格好は？」

「……スリーパー（パジャマ）と認識して欲しい……かな」

どう見てもネグリジェだ……しかもピンクでフリフリな……

そして髪にもリボンが……

【わーお、可愛いと思いますよ？　ウチの坊ちゃんには敵いません

がどっからどう見ても美少ｚってぇぇぇぇ窓から不法投棄はダメですよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……】

少しだけ空いていた窓の隙間からシャルを旅立たせた。

今度からやっぱり黙らせておこう。

「……ナニがあった？」

問わずにはいられなかった……

「……お母様に強力な味方が付いた」

「……そうか」

僕も気を付けるとしよう。

「そもそも個室だから良いものを……その姿で出歩くのか？」

「それも込みでお世話されている状態……もうお婿に行けません」

……嫁を貰えばいいんじゃないのか？

ひゅるる～っと、窓からはなんとも言えない春と夏に挟まれた風が吹いていた……

「……それはそうと、かれこれ１０日ぶりくらいでしょうか？」

少しは立ち直った……というよりも開き直った……むしろヤケクソなのだろうか？

コイツの場合は表情（おもて）にあまり感情を出さないからわかりづらい。

ついでに妙ちくりんな丁寧言葉も相変わらずだ。

「まぁ、正確には９日だな」

「そっか、９日も顔を合わせていなかったのもけっこう珍しいですね？」

そういえば……学院では同じクラスが多かったし、休日も同じ師の元で修行していた……長期休暇ですらよく聖王教会で顔を合わせていたものだ。

腐れ縁もここまで続くと……

「……キモチ悪いな」

「失礼ですよね？」

コイツとの関係はこれくらいで丁度いいものだ。

ふん、百歩譲って『友人』とは認めんこともない、苦難も共に乗り越えてきたものだ。

そういう意味では『戦友』、『共犯者』とも言えないことはないが……

だが、『親友』ではないだろう。

そう、僕たちは互いに深く詮索せず、多くを語り合わない。

だからこそ、それなりに長い付き合いができているのかもしれない。

僕は図々しくて能天気で馴れ馴れしい奴が大嫌いだから……

「世話になっている叔父夫婦の家の従姉が焼いてくれた菓子だ、味わって食べるんだな」

そう言ってマリアンが用意してくれた菓子袋を渡す。

「えっ？　ありがとうございます」

ちなみにコイツにマリアンのことは話していない。

コイツに限ってはないと思うが色々と茶化されるのはゴメンだからだ。

リタや騎士カリムなんかは要注意だな。

「折角だからお茶を入れましょうか、少し待ってて……」

「いらん、長居はしない。そもそも足折れているんだろう？」

「ポットなどを遠隔操作すればできますよ？　まぁ、それは次の機会にでも……お菓子は後でいただくことにします」

コイツは相変わらず無駄に幅広い魔法技術＆ａｍｐ；知識を持っているな……戦闘関連はイマイチだが。

用件、というほどでもないのだが、それだけ済まして退室することにしよう。

「最近になって聖王教会が忙しい……いや、騎士団を派遣するような任務続きだというのは知っているな？」

「……お母様から聞いています。ウチも父さんが騎士ですから」

なぜ『お母様』と『父さん』なのだろうか？

コイツも存外、父親の扱いがひどいのか？

「ふん、わかっているならいい。それでヴァンも忙しくて僕たちの相手をできないそうだ」

あのヒゲは『一応』騎士団のトップだしな。

「そもそも私はこんな状態なのでアレですが……」

まぁ、それもそうだな。

せいぜいリハビリと自主錬に励むんだな。

「さて、こっちが本題だ。今話した通り聖王教会騎士団は人手不足だ」

この流れならある程度わかるだろう？

「僕も騎士見習いとして任務にあたることにした」

当初は中等科卒業後にと考えていたのが……

少しの沈黙……そして感情の読めない表情で尋ねてきた。

「……そうですか、学院の方は？」

「聖王教会関係のことなら融通がきく、何日も連続で休むわけではないしな」

今までだって割とそうしてきた。

そもそも学院での成績と素行も問題ない。

「……危険な任務ですか？」

「僕もヴァンから総合Ａランクの証明書をもらっている、それ相応の任務だろう」

すぐにＳランクまであがってやるつもりだが。

「参考までにどんな任務なのですか？」

「明後日から行われるオークション会場の警護だ、本来なら騎士カリムが後見人を務めている管理局部隊が警護にあたるのだがそちらも人手不足でな、確か場所は……」

「ホテル・アグスタ……？」

ほう、知っていたのか。

まぁ、オークション自体が極秘というわけでもないしな。

「そうだ、そこの会場警護にあたる。もちろん複数人での任務だがな」

そして続ける、むしろこれからが本題だ。

「見習いとはいえ騎士を目指す身だ。これを機に騎士としての名を持とうと思っている」

それは両親との決別ではない。

常に暴走状態な両親でも心底嫌っているわけではないのだから。

そう、これは僕の決意だ。

一歩でも先へと進む足がかり、切っ掛け、一人の男として存在の証明をしたがためのワガママ……

「――リオン・マグナス、騎士としてはそう名乗るつもりだ」

古き言葉で『偉大なる獅子』という。

まぁ、マグナスの姓自体はそう珍しいものではないが。

数年前、コイツに話そうとして結局は話さなかった僕の望み。

そう、すべては……

――彼女（マリアン）と対等な目線で交わせる一人前の男となるために

その時は少しばかり気が昂っていたのだろうか気が付かなかった。

コイツが普段のポーカーフェイスを崩して驚いていることに……

本編～偉大なる獅子（後書き）

まさかのリオンサイドでＳｔＳ本編が始まります。

主人公の座から降板したわけではないです（笑）

ちゃんと戻ってきます！

そしてリオンサイドでも一応、出番はあります、活躍はともかく。

これからも妄想の限り頑張っていきます。

本編～ホテル・アグスタ（前日）（前書き）

ホテル・アグスタ前日です。

そして久し振りにテイルズ新キャラが…今回は割と空気ですが

てかリオンサイドでギャグノリが難しい。

本編～ホテル・アグスタ（前日）

ホテル・アグスタ

クラナガン南東に位置する周囲を森林に囲まれたホテル。

そこで骨董品、合法ロストロギアのオークションが行われる予定となっている。

今回の……騎士見習いとしての初任務はそこでの会場警護……だ。

どうやら特定ロストロギアに反応する謎の機械兵器『ガジェットドローン』が誤認識してその会場を襲う可能性があるらしい。

騎士カリムが後見人を務めている管理局部隊が任務に就くようだが、あちらもこのような会場警護をできるような人数確保ができないようだ。

そこで聖王教会側に応援要請がきたというわけだ。

こちらも今回のオークションがロストロギア関連であり、聖王教会側が関わっている部隊からの要請なので騎士団の派遣は出来ないことはなかったのだが……

「ふん、騎士団は多忙で割ける人員がいない、か……いや、これは僕にとって僥倖か」

現在、各世界において騎士団を派遣する任務が多く、今回の件に

おいて教会側で出せる戦力は修道騎士が1人しかいなかったのだ。

その騎士もすぐ後に別の任務が控えているので、報告や引き継ぎ等ができない可能性があるため、補佐という形で騎士見習いに任務を当たらせることにしたらしい。

その話をヴァンからされた時に僕は迷わず答えた。

「僕を正式に騎士見習いにしてくれ、その任務は僕が当たる」

向こうも半分はそのつもりだったのだろう。

すぐにOKが出た。

僕も試験自体は受けていないがヴァンから総合Aランクの証明証を受け取っていたため、対外的にもなんとかなる。

正式にはSt.ヒルデ魔法学院の中等科を卒業後にと考えていたが、思わぬ機会（チャンス）が巡ってきたようだ。

学院と騎士見習いの二足草鞋は失礼かもしれないが、聖王教会としても人手不足でそうは言っていられない、とヴァンは苦笑していた。

「お前の実力ならSランクまで取得できるだろうが、今は時期が悪い。来年以降に受験するのだな。こちらとしてもAランク扱いの方が動かしやすい……すまんが頼むぞ？」

以前からヴァンの弟子として騎士見習いに近い扱いではあったが、正式に騎士見習いになるということはヴァンにも敬意を払っていか

なければならない。

それだけは微妙に憂鬱だ……

オークション前日の夕方、僕たちは一足先にホテル・アグスタへ到着した。

「シャル……会話は許すが冗談は一切許さない、そのつもりでいろ」

任務において『何か』を見落とす可能性はある。

シャルは丁寧なんだか適当なんだかイマイチつかみどころがないデバイスだ。

デバイスなのにつかみどころがないとか……

それはともかく経験だけはあるのだからバカにはできない。

【普段から容赦ないじゃないですか……わかりました、坊ちゃんの初任務ですもんね、僕も本気であたることにします】

「……頼りにしているぞシャル」

【……ッ！　光栄です坊ちゃんっ……！】

さぁ、先に到着しているシスタ「キュウゥゥ！！」……忘れては

いないのだがな。

【リースさんも坊ちゃんを心配しているんですよ】

「……ふん、せいぜい使わせてもらうとしよう」

「キュウゥゥ～♪」

青と白の長い胴体と頭に羽のような飾りを付けたドラゴン、『ハク』がそこにいた。

昨日、アイツの病室で伝えた僕の決意。

長い沈黙、そしてアイツは……

「――その任務、ハクを連れて行ってもらえませんか？」

そんなことを言ってきた。

「あのドラゴンを？」

「えぇ、それなりに役立つと思われますし、私の入院中に遊ばせておくのもアレなので」

確かに……敵襲が絶対にあるわけではないが、使える戦力はそれなりに多いに越したことはない。

僕も空は飛べるが空戦は陸戦ほど得意ではない。

「……いいだろう、今日の帰り預かりに行く」

「こちらも家に連絡をいれておきます……ご武運を」

「……ふんっ、話はそれだけだ、僕はもう行く」

そう言って病室を立ち去り、シャルを回収してからアイツの家に向う。

そしてドラゴン（ハク）を預かったのは良かったが、コイツのせいでマリアンと2人で外食に行くことができなかった……

そんなやりとりがあって、ドラゴン（ハク）を今回の任務に同行させた。

アイツが入院中ということなので、もし任務で使えるようだったら、その期間は僕の方で預かる予定だ。

まぁ、それはいい、とりあえずハクをホテル上空に待機させ、さっさとシスターと合流することにしよう。

フロントでシスターの部屋を確認するか「あの～」

どうやら僕に声をかけているらしい。

振り返ると白い修道服を着た青髪の女性がいた。

「……もしかしてあなたがシスターアンジュですか？」

ヴァンから貰っていたデータの人物と似ている。

「あっ、やっぱり君がグランツ団長のお弟子さんだね♪　天の巡り合わせに感謝を、私がアンジュ・セレーナよ」

件（くだん）の人物はすぐに見つかったようだ。

その後、すぐにチェックインを済ませ屋上へ。

そこには先ほどのシスターと管理局陸士部隊の制服を着た……幼女？がいた。

「……おい、今失礼なこと考えやがらなかったか？」

なるほど、そんな考えをする表情は見慣れているようだ。

「……そう思われるのが嫌ならば魔法で見た目を変える等の手段はあるでしょう？」

若干イラッときたのだが丁寧な言葉で返す。

騎士見習いとして言動には気を付けなければならない。

「はんっ！　別にいーんですけど」

なら言うな！

「まぁまぁ、軽く自己紹介といきましょう？」

シスターアンジュがそうまとめる。

「こちら騎士カリムが後見人を務める部隊、古代遺失……通称『機動六課』の前線部隊（フォワード）の副隊長であるヴィータ三等空尉よ」

なぜ略したんだ？

「……よろしく」

そして顔はよろしくと言っていないぞ？

「それで私が聖王教会から派遣された修道騎士アンジュ・セレーナ、そして私の補佐として派遣された……」

「騎士見習いリオン・マグナス……です」

面と向かって『見習い』と言うのは抵抗あるな。

「……見習い、か……まぁ、シスターアンジュの補佐ということなら良いか」

「――ッ！」

こいつは……！

僕を完全に戦力外として見ている……聖王教会側としても報告、引き継ぎ面での補佐としてしか見ていないのはわかっている（ヴァンの思惑は違うだろうが）

そしてコイツ自身が歴戦の騎士ということも纏っている空気と隙の無さから窺える。

その姿（ナリ）でも一部隊の副隊長を務めているだけはあるし、その言動はともかく見習い騎士への心配も含まれているのだろう。

理解はできる、見習いなのだからこのような形から序々に任務へ当たっていくは当たり前なのだろう……だがっ、僕は……僕はっ！！

僕が剣を振るうのは……！！

「――僕は【マスター、落ち着いて下さい】……シャル？」

いつものふざけた雰囲気など一切ない声色でシャルが話しかけてきた。

【マスターの実力はこのシャルティエが一番知っています、それにマスターの決意は『この程度』のことで揺るぐものではないでしょう？】

「――ッ！？」

【千里の道も一歩からです……まぁ、その一歩もマスターなら百里以上ですよ♪】

「……ふん、調子のいいデバイスだな」

まったく……本当に調子のいいデバイスだ。

おかげで落ち着くことができた。

「――基本的に補佐ですが必要に応じ指示を願います。見習いの身ではありますが任務のため粉骨砕身致します」

「……ふん、任務達成に全力はあたりめーだ……細かいことはシスターアンジュから聞いてくれ見習い…『騎士リオン』」

「あらあら♪」

そう言って小さな騎士は任務に戻っていった。

「……ありがとうシャル」

長年の付き合いである相棒に礼を……

【いえ、このシャルティエ、坊ちゃんのためなら火の中、水の中、マリアンのスカートｎ……ってぇぇぇここ高層ホテルの屋上ですううううょぉぉぉぉ……】

やっぱりいつも通りのシャルだった。

本編～ホテル・アグスタ（前日）（後書き）

新キャラは強欲支店長でした（笑）

今のところ空気扱いですが…

そしてリオンの方が書いてて主人公ぽかった…マジでごめん主人公

とりあえず次回ホテル・アグスタ本編です。

幕間～とある主人公の日記（前書き）

一応、主人公サイドも書いておこうかと。

てゆーか主人公なのに幕間って…

幕間～とある主人公の日記

せっかくなので入院中は日記を書くことにした。
ただし、誰かに見られたら（自分が）蒸発間違いなしなので厳重管理だ。

【入院1日目】

あと約2か月半……正直長い。
ランニングなど出来ないので体力低下が怖いところだ。
ある程度の回復が確認できたらリハビリがてら頑張るとしよう。
ちなみにいつもの担当医からは「お祓いしてこい」とのコメントをいただいた。
医者の言葉じゃないだろう……

すずかさんだが色々手続きとか準備とかで次に顔を出せるのが4日後らしい。
べっ、別に楽しみになんかしてないんだから！

そして久方ぶりの涙の味はしょっぱかった。

【入院2日目】

さっそく昨日の日記を見て後悔した。
速攻で黒歴史になるなんて思わなかった。
それはともかく、ずいぶんと暇なので魔力制御の修行でもすることに。

基礎を振り返るというのも良いものだ。

【入院３日目】

引き続き魔力制御の修行……意外と奥が深い。
なんというか、流動するエネルギーを操る感じだろうか？
ここ数年は資格試験の勉強と実践形式の修行が多かったから逆に新鮮だ。
せっかくなので明日以降はセイクリッド・スカイの能力である大気中の『水分』と『温度』操作について重点的にやってみるか。

……それとお母様？　パジャマと称してネグリジェはやめて下さい。

【入院４日目】

ヴァン師匠（せんせい）がまたお見舞いにきてくれた。
以前は報告だけだったので、正式なお見舞いは初か。
ただでさえ今、聖王教会は忙しいと聞いているのに……ちょっとだけ嬉しかった。
そしてリハビリと修行用にとアコギ（御下がり）を置いていった。
……なんの修行さ？
暇だったので弾き語りすることに。
こう見えても楽器関連は一通り奏でることができる。
なんたって師匠が音楽講師だ。
弾き語り『冒険彗☆』……みんな冒険世界の主人公なのさ！
……そう思いたいな。

結局、セイクリッド・スカイでの制御練習忘れていた。

【入院５日目】

今日はすずかさんがお見舞いにきてくれた。
最初はすずかさんの身の回りの話、なんとか周りは納得できたようだ。
ＯＨＡＮＡＳＨＩだろうか？
とりあえず残り手続きをして２カ月後からこちらに住むらしい。
勉強の方はどうするんだろう？
……気は進まないがヒューゴさんでも紹介してみようか？
まぁ、それはおいおい。

そして……あー、なんてゆうか、化学反応を舐めていた。
お母様とすずかさんが意気投合した。
……なんでさ？
そして迫りくる魔の手……もうお婿にいけません（泣）

【入院６日目】

今日からは極力部屋から出ないようにしなければと思い
トイレも人の気配を伺って気を付けて行ったところヴァイスさんと遭遇した。
とりあえず私には神さまと聖王さまの加護がないことは明白だった。

部屋に戻ってヤケクソでギターを弾いた。
もちろん防音結界は忘れていない。

【入院７日目】

今日も朝からすずかさんがお見舞いにきてくれた。

なんでも今日からしばらくはまた地球なので、しばしのお別れということ。
そして【ドキューン】に【ズキューン】をされ、【バキューン】された。
ナニがあったかは想像に任せる。

その後、エミリオがお見舞いにきてくれた。
なんか久し振りだといったら「キモチ悪い」と言われた。
……なんでこんな友人しかいないんだろう？

また、これから騎士見習いになって任務に当たるらしい。
今日はその報告だったようだ。
しかもホテル・アグスタって……そして新たな名前『リオン・マグナス』
……私の存在って何なのだろうか？
脇ｙ【削除しました】

とりあえず、私も現場の映像を見てみたかったので
ハクをそれらしい理由付けで同行させてもらうことに。
視界の共有というわけではないのだが、エレメンタルスフィアを通じ似たようなことができる。
エミ…リオンには内緒だが……

エミリオン……ぷっ。

【入院８日目】

どうやらリオンが無事にホテル・アグスタに着いたようだ。
さすがにプライベートを知ってしまうのはアレだったので
聞いていた大体の到着時間にアクセスしたところぴったりだった

らしい。
と、思ったらリオンはハクを速攻で上空待機にしやがった。
……意味ぬぇぇぇぇ。
明日以降に期待するか……

さて、どれほどの変化があるのだろうか？
私は……どうするべきなのだろうか……？

そしてまた、セイクリッド・スカイでの制御練習忘れていた……

幕間～とある主人公の日記（後書き）

スペックは色々と平均以上（てゅーか高水準）な主人公なのに…

本編～ホテル・アグスタ（1）（前書き）

書く時間がない…

とりあえずキリのいいとこまで…

本編～ホテル・アグスタ（1）

僕の望み

1人の男として存在の証明

その先にある彼女との対等な視線

この任務、そしてこれからの任務の先……必ずつかみ取ってみせる

初日は特に問題なく終了した。

敵対象である『ガジェットドローン』のデータ確認とホテル及び周辺地形の把握、色々とやることはあった。

夜間の警備自体は機動六課が担当するので、聖王教会側としては当日におけるトラブル時の戦力として控えておいてくれとのこと。

ただし、僕は補佐であるため、一応は非戦闘員扱いだ。

まぁ、非常時は任せる、とヴァンからも言われているが……

「……歯痒いな」

【仕方ないですよ坊ちゃん、扱いは騎士見習いでシスターアンジュの補佐なんですから】

「わかっているさ……まぁ、愚痴っていても仕方ない。与えられた任務を着実に遂行していくだけさ」

例え実力があり、騎士団長の弟子であろうと見習いは見習いだ。

【ほら、食事は豪華そうじゃなかったですか、僕のオリジナルの時代なんて……】

そう言って語り出すシャル……はぁ、マリアンの作った料理が恋しい。

オークション当日の昼近く。

僕はシスターアンジュと共にホテルの屋上へきていた。

ついでに上空待機させていたアイツのドラゴンも呼び寄せる。

「キュウ……」

若干だらけているな……

【そりゃあゴハンが缶詰だけですからね……】

栄養価ある、量もそれなり……なんの問題がある？

「……もしかしてリオン君は釣った魚にはエサをあげないタイプなのかしら？」

普通は釣った魚なんぞに餌なんてやらないだろう？

そもそも釣りなんてしないが。

【そうですね……昔は僕にだって……】

シャルも一体なんなんだ？

「キュウゥゥ……」

はぁ……？

まぁ、それはともかく、もうすぐ機動六課の後詰め本隊がくるらしい。

「そうね…（リオン君の鬼畜っぷりはともかく）…何事もなく無事に終わればいいのだけれども……」

「（なんだ今の間は？）…ですが逆に『何もありませんでした』の方も痛手なのではないでしょうか？」

実績は今後の体制にも響いてくるものだ。

わざわざ応援要請を出しておいて何も無かったというのはあんまりだ。

「そうなのよね～アウトプットのない業務ばかりだったら必要経費も落ちないわよね……うん、何事もほどほどがベストかしら？」

例え安全第一と言い張ろうが、それには金がかかる。

【いつの時代もそう変わりませんよ……】

いくつもの歴史を眺めてきたシャルの言葉は少しばかり重たかった。

そんな気分が滅入る話をしているうちにヘリが近づいてくるのが確認できた。

【あっ！？　あのヘリ『ＪＦ７０４式』じゃないですか！？　輸送ヘリの最新型ですよ！　カッコイイですね坊ちゃん！】

「最新型？　宿泊代まで出してもらっているから、もしやとは思っていたけれど……はぁ、お金のあるところはいいわね……」

……はぁ、デバイスとシスターのセリフではないな。

そして着陸したヘリから管理局地上部隊の制服をきた代表らしき女性が降りてきた。

「――お疲れ様です。時空管理局本局　古代遺失物管理部　機動六

課部隊長の八神はやてです。この度は応援要請に応じていただきありがとうございます」

年齢は……２０歳前後か？

想像より遥かに若い部隊長のようだ。

つまりはかなりのやり手……実力者といったところか。

……そしてイントネーションが変だな。

「――聖王教会修道騎士団所属のアンジュ・セレーナです。そして補佐のリオン・マグナス。非才の身ですが……ってイヌゥゥゥゥゥゥ！？」

ヘリから大型の犬が出てきた瞬間、シスターアンジュは凄いスピードでバックスライドしていった。

極度の犬嫌いなのか？

「早っ！？　もはやムーンウォークならぬムーンダッシュやん！？　てかなんでやねん！？　ここ普通に自己紹介の場面やん！？」

「私は犬ではない！！」

「えぇぇ！？　ザフィーラが喋ったぁぁ！？　しかもボイス渋いよティア！？」

「ええいウルサイわよバカスバル！　えっと…そうアレよ！　【ピー】犬よ！　八神部隊長専属の！！」

「ちゃうわ!?　ナニが悲しくてこんな渋いボイスの犬やねん!?　どーせなら揉みごたいのあるええ乳したねーちゃんの方がええわ!?」

「主いぃぃぃ!?　犬ではありま「イヌゥゥゥゥゥ来ないでぇぇぇぇ!?」犬ではなぁぁぁぁぁぁぁぁい!!!!」

「――みんな少し頭冷やそうか?」

「ぎゃあぁぁぁぁぁなのはちゃんが魔王化してしまったぁぁぁぁ!?」

「――魔王でいいよ。魔王らしいやり方でＯＨＡＮＡＳＨＩ聞いてもらうから」

「「「「＼（＾ｏ＾）／」」」」

「えっ、ちょっなのはちゃん!?　私は関係な……」

そして最後になぜか何も騒いでいなかった（地味な）金髪の女性も巻き込まれていた。

はぁ、何をやっているんだか……色々と気力も失せた。

そして騒ぎを尻目に眺めていると、最後（安全なタイミングを見計らったよう）にヘリパイロットが降りてきた……どっかで見たことのある奴だ。

「……まだ入院しているんじゃなかったのか?」

「言ったじゃねーか、今日退院だってな」

一昨日、聖王医療院で会ったヴァイスだった。

退院当日に職場復帰か……もしかして早くヘリに乗りたかっただけか？

「ふん、まさかお前の所属している部隊だったとはな……なるほど」

【ですね～】「キュウゥゥ～」

ふむ、この部下あってあの上司か……いや逆か？

「いや、頼むから変なとこで納得するな」

「ふん、ところでアレはいいのか？」

視界にやたらとピンクの閃光が瞬いている（ような気がする）

「……まぁアレも一種のコミュニケーション……か？」

「僕に聞くな。そもそも任務で来ているんだぞ？　いつまで遊ばせておくんだ？」

何をやっているんだか。

「……俺に逝ってこいと？」

「安心しろ、妹（ラグナ）には『お前の兄は立派だった』と伝えておいてやる」

閑話休題

ヴァイスの尊い（？）犠牲のもと『何事も無かった』かのよう互いに挨拶を済ませ、共に任務へ就くことに。

僕はシスターアンジュ、起動六課の地味…シャマル女史と共にホテル屋上で待機だ。

シャマル女史に確認したのだが機動六課の戦力は中々に異常だった。

隊長格がオーバーSとニアSランク、隊員もBランク以上、後方支援隊にも高ランク魔導師が数名……少数精鋭と言えば納得できないこともないが……

それに騎士カリムが後見人を務めているか……ふん、きな臭いこと極まりないな。

「キュウゥゥ……？　……キュウゥゥゥゥゥ！！」

そんなことを考えていると急にハクが遠くの森を見つめ唸りだした。

【……敵襲でしょうか？】

ちなみに僕とシャルはセンサー等の探索魔法は得意としていない。

こういうのはリタやアイツの得意分野だからな。

そして数秒もしないうちにシャマル女史の指輪（デバイス）が光った。

「――あっ…クラールヴィントのセンサーに反応…シャーリー！」

「あらあら、お仕事かしら？」

それにしても随分と敵感知に優れた生物だな……ふん、なかなか使えそうか。

≪はい！　きたきた、きましたよ！　ガジェットドローン陸戦？型！　機影３０…３５！　陸線？型２、３、４！≫

機動六課の後方支援隊（ロングアーチ）から敵情報が入る。

ざっと大小４０弱か……こちらの戦力的には問題ない数だろう。

「けっこうな数ね……数に応じたボーナスとかないかしら？」

シスターアンジュなぞ呑気にそんなことを言っている。

「残念ながら一律でしょう。ただ、報告書には書いておきましょうか？」

まぁ、気休めだが。

「うん、それお願いね。じゃあ、迎撃に出ます。リオン君はシャマルさんとここから私に連絡お願い……特にイヌが近づいてきたら教

えてね？　とうっ！」

そう言ってシスターアンジュは屋上から跳び降りて行った。

――さぁ、僕にとっての初任務開始だ……！

本編～ホテル・アグスタ（1）（後書き）

『何事も無かった』…うん、『何事も無かった』んだよ。
ピンクの閃光なんて見えなかったんだ。

なるべく早くホテル・アグスタ編は終わらせます。

てゆーか頑張らないと主人公が…

本編～ホテル・アグスタ（2）（前書き）

なんとか続きが書けた…

本編～ホテル・アグスタ（2）

初任務だと粋がったところで前線がニアSランクだと出番などあるわけがない。

屋上でシャマル女史と映像を眺めながら内心で溜息を付く。

事前に確認した『ガジェットドローン』のデータ及び現在の戦闘映像を見る限りは僕でも問題なく対処できる。

近づく、避ける、斬る、要はたったそれだけだ。

ＡＭＦがある以上はそれが一番堅実だろう。

まぁ、物質操作系の魔法で吹き飛ばすこともできるが。

【特に問題なさそうですね……あっ、シスターアンジュ大型2機目撃破です】

昨日確認したところシスターアンジュの実力は総合Sランク、デバイスは短剣型で、得意としている魔法は補助、治癒系がメイン。

はっきりいって単一戦力としては向いていない、とは本人談だ。

だが大型を既に2機撃破しているところを見る限り、圧倒的な経験（リア）と技術（テク）があるようだ。

【あっ、大型3機目撃破……僕たちの出番はなさそうですね】

シャルの言う通りハッキリ言って出番はなさそうに思える。

だが、運命の女神とは随分と気まぐれなようだ。

「……キュゥ？　……キュゥゥゥゥ！」

先ほどの敵感知と同じようにハクが唸りだした。

そして数秒もしないうちにシャマル女史の指輪（デバイス）にも反応があった。

「クラールヴィントのセンサーに反応？　この魔力反応！？」

【マスター！】

「あぁ、デカイな……それにこれは……召喚魔法か？」

この魔力反応……以前に見たキャロの召喚魔法と酷似している……？

その後、間もなくして前線にも異常がでてきた。

先ほどとは打って変わって『ガジェットドローン』の動きが急に良くなり、前線の攻撃を避けるようになった。

まるで自動機械の動きから有人操作に切り替わったのかのように……

それが先ほどの魔力反応……おそらく召喚魔法の効果か？

【おそらく微小の召喚獣による無機物自動操作（オブジェクト・コントロール）でしょう！】

だがそれでも前線の戦力からしたら大した問題ではない。

一番の問題は……

【マスター！　優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです！　こちらまで回り込まれるかもしれません！】

「……だ、そうです。どうします指揮官殿？」

現場指揮を担当しているシャマル女史に訊ねる。

「……ヴィータちゃんを戻して…「シスターアンジュと犬に前線を任せると？」…ザフィーラ！　最終ラインまで下がっ≪犬ではない！！≫…この際どーでもいいわ！　いいから下がって！　それとヴァイス君も狙撃の準備に…【先ほど尊い犠牲になりましたよ？】…あーもう！」

……グダグダだ。

「――シスターアンジュ、僕にも防衛戦参加の許可を」

来るものは僕が全て片付けてやる。

だがシスターアンジュからの回答は僕の思惑とは別にあったようで……

≪今、犬…じゃなかった、大型を全て撃破したわ！　これから小型を出来る限り『一気に殲滅する』から防衛戦は機動六課のメンバー

に任せていいわ！≫

犬と言いかけたぞ？

大丈夫なのかあの犬……？

≪その後、召喚師のところに向かうわ！　リオン君は途中で合流して！≫

思いがけない回答だった。

「――ッ！　私もですか！？」

≪ふふっ、リオン君の実力はグランツ団長から聞き及んでいるわ。それに相手が召喚師だとしたら護衛の召喚獣がいるかもしれないし、そもそも相手が単体とも限らないしね≫

「――了解しました！」

【マスター！】

「ああ！　指揮官殿！　シスターアンジュより陸戦？型の全機撃破報告および陸戦？型の広域殲滅に入るとの連絡です！　その後に敵召喚師と接触しますので防衛戦は機動六課にてお願いしますとのこと！」

未だ混乱気味のシャマル女史にシスターアンジュの案を伝える。

「あっえっ…広域殲滅！？　わかりました！　ヴィータちゃんも最終ラインまで下がって防衛に当たって！」

こちらは機動六課に任せ、僕も戦場に向うとしよう。

「――行くぞシャルティエ！！」

【ええ！　相手が泣いて謝るまでボッコボコにしてやりましょう！】

そう言って騎士甲冑を…いや、僕の場合はスピード重視で装甲はほとんどないから甲冑というと語弊があるのだが。

黒一色で揃えられた上下とマント、そして所々に白き意匠がこらされた逸品だ。

仮面？　あるわけないだろう？

アイツ曰くジューダスフォーム……ジューダスとはなんのことだ？

【マスター？】

「……なんでもない」

そう疑問を振り去り、ハクに跨る。

まさか僕が竜騎士の真似ごととはな……ふん、悪くはない。

「――さぁ、行くぞ！」

いざ、敵召喚師のもとへ。

敵召喚師へと竜に跨り上空を飛んでいると召喚師のいる方向から多数の生物反応があった。

【おそらく召喚獣でしょう！】

微小の召喚獣か……目障りだ。

「――蹴散らすぞシャル！」

敵影確認……銀色の虫？

……関係ない、全て焼き払うのみ！！

シャルの刀身に魔力変換させた闇色の炎を纏わらせる。

それをシャルの力で増幅させ、大きく振りかぶり……

「――塵も残さん！！　浄破滅焼闇！！」

一瞬で振り抜く！

極大の闇色の炎にて前方広範囲を焼き払う。

【――空のお掃除完了です！】

≪――了解！　今から地上のお掃除に入ります！　私の半径５００ｍ以内には近寄らないでね！≫

皆にそう告げシスターアンジュは広域殲滅に入る。

≪――天へと還る翼を、貴方に……鳳翼熾天翔！！≫

その言葉と共にシスターアンジュを中心とした半径５００ｍほどに無数の赫き羽が生まれ、まるで天へと還るように下から上へと螺旋状に吹き荒れ、その空間に存在していた『ガジェットドローン』陸戦？型２０機ほどを殲滅していった。

さりげに破壊しているのは敵のみで森が無事なのがワンポイント。

まぁ、敵の爆発で部分的な森林破壊はしているが……

≪さぁ、召喚師が逃げちゃう前に合流して叩きましょう！≫

「――相手は召喚師です、私が先行して足止めします！」

位置的にも僕の方がかなり近い、それに相手は転送魔法のエキスパートである召喚師。

劣勢と判断したのならすぐに退却され、足取りを追えない可能性がある。

例え逃げられ倒せないとしても顔くらいは拝んでやる。

≪――私が合流するまでは無理はしないで頂戴……顔を見るだけでいいから≫

「――了解しました……飛ばすぞ！」

そして数秒もしないウチに最初の魔力反応があった場所が見えてきた。

そこには既に転送魔法の準備をしている2人組の……男と少女の姿が確認できた。

【――マスター！！】

「――あぁ！　逃がすものか！　デモンズランス！！」

魔力で形成した砲撃級の魔槍を2人組目がけ投げつける！

――ぶち抜く！！

相手も転送が間に合わないと判断して転送を中断し魔槍を……男の方が片手で掴み受け止めた！？

チッ！　こちらが一瞬でも動揺してしまうなんて……

今思えばヴァンもアレを片手で受け止めていたのだ……つまりはヴァンに近い実力者の可能性がある。

それに召喚師と思われる少女の方も、最初の魔力反応を見る限り相当な実力者だ。

魔力値的にはリタやアイツ並かもしれない。

それに護衛の召喚獣がいるという可能性もある。

正直な話かなり分が悪い……そう思いながらハクから飛び降り着地、数メートル離れた位置から2人組にシャルを突き付け言い放つ。

「――管理局員のように丁寧に言うつもりはない。お前たちの手勢は片付けさせてもらった……大人しく縛につけ」

改めて男と少女を眺める。

男は大柄で年齢は４０～５０代といったところか……だがまったく隙が見えない。

鍛え上げられた肉体がコート越しでもわかるようだ。

実力は……機動六課の副隊長（ヴィータ）より上かもしれない。

少女の方は逆に戦う者には見えない……年齢は多分キャロと同じくらいか。

だが手にグローブ型デバイスを確認できた、間違いなく件（くだん）の召喚師だろう。

……服装はバリアジャケットか？

私服でアレは少し痛いな……むしろその場合はツレの男が捕まる気がする。

「――ふむ、見事な一撃だったぞ若き騎士よ」

壮年の男がそう答える。

この物言い……もしかしてこいつも騎士なのか？

「――だからこそ理解できるだろう？　互いの実力を」

「――ック！」

【マスター！】

シスターアンジュは間に合わない、僕1人では……この2人の相手は難しい。

そして立場上、僕には無茶が出来ない……

そう葛藤していると少女の方が転送魔法を再開する。

僕は……僕は……！

「――さらばだ若き騎士よ」

――僕には……無理だ……

本編～ホテル・アグスタ（2）（後書き）

ホテル・アグスタ編は次回で終了

仮面は割れませんでした…してないけど。

本編～ホテル・アグスタ（3）（前書き）

ホテル・アグスタ編終了～六課サイドは出番なし（笑）

ついでに主人公も出番なし（泣）

本当はわかっていたんだ

一人前とは『自分の行動に責任を持てる』ということを

組織に属することによって抱えるジレンマがあることを

そして……1人では出来ないことが多いことを

敵の撃破を終え現場検分に入る機動六課スタッフを尻目、シスターアンジュから引き継ぎを受ける。

彼女はこれからすぐに次の任務に向かわなくてはならないため、ここからが本来の僕の仕事だ。

大体の引き継ぎを終えたところ、機動六課の副隊長が挨拶にきた。

「お疲れです、シスターアンジュ。協力ありがとうございました。それに見習い、お前もな……おかげで敵召喚師の姿が確認できた」

「いえいえ♪　それでは私は撤収します。リオン君、報告の方お願いね？」

「……はい」

【はい、お疲れ様でした】

そう言ってシスターアンジュを見送る。

「あぁそうだ、リオン君？」

が、急に振り返り僕に話しかけてきた。

「……なんでしょうか？」

「――あまり気負っちゃダメよ？」

「――ッ！」

「うん、また天の巡りあわせがある日まで～♪」

そう言って今度こそシスターアンジュは去っていった。

結局、最後までよくわからない女性（ひと）だった……

さて、僕も報告用のデータを集めるため、現場検分の結果を……

「なぁ見習い」

まだいた副隊長（ヴィータ）が話かけてきた。

正直、今は余計な奴らと話したくない気分だ……さっさと切り上げよう。

「……なんでしょうか？　これから報告用の……」

「――悔しいのか？」

――コイツは……！！

今一番したくない話を……！！

「……」

返答は沈黙と睨み……今は言葉にできそうにない。

「だんまりか……まぁいい聞いとけ。教会側の協力で被害はザフィ……特に問題なく任務を達成できた。それに敵召喚師の姿も確認できた……その実力も含めてな」

敵召喚師……推定オーバーSランクの2人組。

顔が割れればそこから調査していき存在が割りだせるだろう……

「成果はあった。シスターも言ってた通り気負う必要はねぇ……少なくともあの場での判断にケチはつけねーよ」

お前は間違ってはいない。

そう言っているのはわかっている。

だが……だが……！

「――あなたに何がわかる……！」

わかっている、これは八つ当たりに近い感情だ。

立場上あまり無理ができないとはいえ……当初の目的である敵の確認を果たそうと……

眼前でみすみす敵を見逃した……例え敵が強いとしても。

もしかしたらシスターアンジュが来るまでは足止めくらいできたかもしれない。

だが、それも既に『ｉｆ』の話だ。

事はもう終わっているのだから……

そして紅き騎士は無言……だが僕の発言で怯んでいるわけではない。

……もういい、さっさと報告用のデータを集めよう。

「……失礼します」

そう言って脇を通り過ぎ……

「――お前さ、機動六課（ウチ）にくる気はねーか？」

そんなことを言ってきやがった。

「何も機動六課（ウチ）に所属しろってわけじゃねーよ。お前の立場ってのもシスターから聞いた。だから時間の合う時に訓練（トレーニング）に参加してみねーかってことだ」

……突然のことなので驚いて言葉が返せない。

この騎士は一体何を考えている？

【――何を考えているのですか『鉄槌の騎士』？】

そんな僕の考えを代わりにシャルが訊ねてくれた。

……ちなみに『鉄槌の騎士』とはなんのことだ？

「……なるほど、似たような見た覚えがある……真正古代（エンシェント）ベルカのデバイスかテメー？　まぁいい、他意はねーよ……ただ1人の騎士としての言葉だ」

シャルのことは後で問い詰めるとするか。

今は……

「――なら、どうしてですか？」

その真意を聞きたい。

「……あーもう、強くなりてーならウダウダ言うな！　気ぃ向いたら来い！　朝練時なら事前連絡もいらねーから来てみろ！　じゃあな！」

そう言って紅い騎士は去っていった。

「……お前の姿が重なって見えたんだよ、昔の……に……」

そして去り際に何か呟いていたが、風に流され最後までは聞こえなかった……

【……ねぇ坊ちゃん、どーするんですかあのお誘い？】

「……シャルだってわかっているだろう？」

今の僕を取り巻く環境を考えるとあの提案は正直破格だ。

師であるヴァンも忙しく、アイツは入院中……現状は自主トレくらいしかできていない。

しかも僕は騎士見習いであり、同時にＳｔ．ヒルデ魔法学院の生徒でもある。

見習いである以上、与えられる任務もたかがしれている。

それに訓練（トレーニング）の相手は歴戦の騎士。

機動六課も騎士カリムが後見人を務めている部隊なので話は通し易いハズだ。

【……そうですね】

「まぁ、よく考えることにするさ……とりあえずは現状の仕事を片付けるのが最優先だ」

さぁ、報告用のデータ収集を行うとしよう。

こうして僕の……騎士見習い（リオン・マグナス）の初任務は終わった

その中で……悔しい思いをした

自分の中途半端な立場に憤りすら感じた

……だが、ほんの少しだけ前へ進めた気がした

これからの先も色んなことがあるだろう

出会い、別れ、苦労……でも僕は決して立ち止まらない、立ち止まるわけにはいかない

いつか必ず……君の隣に立てる男になるために

本編～ホテル・アグスタ（3）（後書き）

そしてリオンが六課側に（笑）

次回からは主人公にもボチボチ出番が回ってくるかと…

本編～報告、そして日常（前書き）

最後の方、久し振りに主人公登場

もはやオチ要員だけど彼が一応主人公…なハズ

本編～報告、そして日常

ホテル・アグスタの件を終え、報告用のデータをまとめたので帰りに聖王教会へ寄り報告を済ませることにする。

生憎とヴァンは任務で不在なので騎士カリムに取り次いでもらう。

騎士カリムは執務室にいるとのことなので、執務室に向う……その途中にボロ雑巾のような物体が落ちていたがスルーすることに。

【坊ちゃん……】

違う……アレは断じて肉親ではない。

世の中には似た人が複数いるとかいないとか……そう、それだ。

【……引きずった跡は騎士カリムの執務室からのようですが？】

あぁ、マリアン。早く帰って君の笑顔が見たいよ

騎士カリムの執務室前まできて、ノックをしてから入室する。

「――聖王教会騎士団　騎士見習いリオン・マグナス、ただいま帰還し、ご報告にあがりました」

そう伝え一礼する。

「――はい、初任務ご苦労さまでした。報告の方はお茶でもいただきながら聞きましょうか♪」

何故かご機嫌な騎士カリムの声色に疑問を抱きつつ顔を上げると……

【あっ、返り血……】

……データだけ渡してもう帰りたいな。

「――以上です。敵召喚師一味に関しては機動六課…管理局の方で調査を実施するそうです。また今回の解析結果については……いえ、騎士カリムが後見人を務めている部隊なのですから向こうから『正確』なデータがくるのでしょうね」

「ふふっ、信頼できる部隊ですからね♪」

お茶をしながら騎士カリムに今回の報告を行う……最後は皮肉のつもりだったのだがな。

「――それと個人的な話で恐縮ですが、機動六課（むこう）の副隊長に暇があれば訓練（トレーニング）に参加してみないか、と誘いを受けました」

「まぁ、ヴィータに……それでどうするつもりで？」

ヴィータ……シャルの話が正しければ真正古代（エンシェント）ベルカに存在した夜天の書の守護騎士。

まぁ、そこのところは眉唾ものだが……少なくとも印象は歴戦の騎士を思わせたので訓練の相手としては申し分ないだろう。

「……悪い話ではありませんし、少し考えてみます」

別に迷っているわけではない。

ただ、今回の件での心の整理がついていない。

もう少し落ち着いてからにするつもりだ。

「そう……行く気になったのなら私に一言下さいな。こちらからも話を通しておきましょう」

「……お世話になります」

「まぁ、それはお互い様かしら？　帰りにヒューゴさんを回収していって下さいね？」

現実は非情だった……

報告を終え、残りはデータの確認で十分と判断し、お茶会を切り上げる。

「騎士カリム、そろそろ……」

「……あら、もう少しで陽も沈みますね。ここでお開きにしましょうか？」

騎士カリムに同意し初任務の報告を終えた。

データを片付け、後は帰るだけ……だが一つだけ聞いておきたいことがある。

「――最後に一つだけ、機動六課（アレ）の『本当』の目的はなんなのですか？」

そして陽は完全に沈みきった。

正直に言えばコレは完全にカマかけだ。

報告用データを眺めながら出てきた疑問……たかだかロストロギアの回収任務に当たる部隊の後見人を騎士カリムが務める？

確かに対象ロストロギア『レリック』を巡っては『ガジェットドローン』なる厄介者や今回遭遇した召喚師一味の件がある。

だが、わざわざ『聖王教会』の介入することではない。

それに少数精鋭『過ぎる』メンバー……そして騎士カリムの『信頼』できる部隊。

騎士カリムとの付き合いもかれこれ7年ほど……性格は把握しているつもりだ。

だからこそ抱いた違和感。

そしてこれらのことより考えられる結論が一つある。

「――貴女の預言（レアスキル）関連ですか？」

騎士カリムの稀少技能（レアスキル）……最短で半年、最長で数年先の未来の出来事を散文形式で書き出す預言。

その予言にあのロストロギアが関係している……もしくはそれすらも隠れ蓑にするため。

「……」

騎士カリムからの返答はない。

沈黙は肯定……無言そのものが回答になるなんてひどい話だ。

「……失礼します」

そう言って執務室を後にする。

陽の沈みきった部屋で騎士カリムがどんな表情をしていたのか…
…僕にはわからなかった。

「嫌な気分だなシャル。敵は正体不明で強大、味方も隠し事ばかり
……」

教会の廊下を歩きながら呟く。

【坊ちゃん……】

「わかってはいたさ……組織というもの、それに属する者、考え方
……」

わかっていた『つもり』だった。

【……僕のオリジナルの記憶にも似たような葛藤があります。でも
それは……それこそが……】

「――大人になる……そういうことなのかな？」

僕は……いや、それでも僕の望みは変わらない、変えるつもりな
んてない。

ならば僕の前に立ちはだかる全ては……踏み超えていくのみだ。

【坊ちゃん……非常に恐縮なんですが……足元……】

シャルの声に反応し足元を見るとボロ雑巾が……

どうやら踏み越えると決意した最初の障害物は実父（ヒューゴ）だったようだ……

……とりあえず実家までコレを届けることにしよう。

ボロ雑k…父を届け、その日は実家に泊まることに……久しぶりに寄ったのだから、と母に言われては断り切れなかった。

次の日はそのまま学院へ。

そして放課後、いち早く帰ろうと思ったのだが彼女（マリアン）もまだ帰宅していない時間であったため、アイツの見舞いでもどうかとシャルから提案があった。

ハクのこともあったので一応報告はしておくのが義理といったところか。

アイツの病室前……ノックはしたのだが返事がない。

【……気配はしますね？　この感じは……多分ですが何かしらの結界を張って気付いていない状態でしょう】

別に前回のような悪寒はしない。

「――入るぞ」

【坊ちゃんの傍若無人ぶりはさすがですね】

「……折るぞ駄剣（シャル）？」

【・。・（つД｀）・。・】

そして病室のドアを開けると……ギターで弾き語っているアイツの姿があった。

どうやら防音結界を張っていたようだ。

目を瞑り熱唱しているようで僕たちの存在には気付いていない。

服装（パジャマ）は以前よりはまともになっていたが……母親似の容姿と腰まである金色の髪、それに妙ちくりんな丁寧言葉……第一印象は１０人中９人がコイツを女だと思うだろう（全員と言わないのは僕のプライドだ）

仮に女と間違われても見た目が絶壁……どちらにしても残念には

変わりがない、とはヴァイスの言だ。

間違われるのが嫌ならとりあえず髪でも切ればいいのだが……あぁ、そういえば似合わなかったか。

それにコイツの場合、母親の趣味には強く言えないようだ。

流されている……と言ってしまえばそれまでだが、どうにも違う気がする。

感謝しているから？　それとも……負い目があるのか？

僕も母には自分勝手な理由で長年家出をしているから多少の負い目は感じているが……コイツほどではないと思う。

……まぁ、いいか。

とりあえず今は声を……かけようとも思ったがやめた。

なぜだろうか、この曲は遮りたくなかった。

結局、壁に寄りかかり聴き入ることに。

僕も初等科の頃にヴァンから教えられたが、あまりそちらの才能はなかった。

そういう意味ではコイツは僕より上だったな。

まぁ、だからどうしたというわけではないのだが。

きっと僕がいることに気付いたら驚くのだろう。

本当に間が悪いというか……とことんついてない奴だな

……むしろ憑いているのか？

そちらの方が何故かしっくりくるな。

最後のメ、弾き語りを終え、アイツはまだ目を瞑って余韻に浸っている。

折角なので色々と含みのある拍手を送ってやることにする。

「――ッ！　えっ、みりお…さん？」

ビクリと面白い反応をし、ブリキ玩具のような効果音がしそうな動きでこちらに首を回した。

そしておそるおそる訊ねてきた。

「……ちなみにいつから？」

【3分以上は前ですね】

僕の代わりにシャルがそう答えた。

3分以上、それはつまり目を瞑り熱唱しているシーンそのもの。

「はは、ははは……」

アイツは力無く笑って……沈んだ。

はぁ、何をやっているんだか……その姿を見て僕も溜息をつく。

【……あっ、坊ちゃん今笑って……】

そこにはどこか懐かしさを感じるエミリオ・カトレットの『日常』があった。

本編～報告、そして日常（後書き）

とりあえずヴィヴィオ登場までリオンのターンを予定

上手くまとめられれば残り3～4話程度…もう少しお付き合い下さい

本編～日常、されどそれは儚くて（前書き）

急に外が寒くなった…もう冬ですね…

幸せとは人それぞれだろう

だが総じて言えることは『不幸』を知らなければ自分が『幸せ』であることもわからないと思う

つまりは基準……か？

それがなければ自分の立ち位置なんてわからない……そういうことだ

だからこそ、この風景を『懐かしい』と感じた僕は……どこか変わってきているのだろうな

良い方向か、それとも……

【……坊ちゃん、このモノローグのオチは？】

「――そんなものは無い」

世の中オチがあることばかりだと思うな

「……えっと、何用でしょうか？」

まるで先ほどまでの失態をなかったことにするように、いつものような感情の読み辛い表情に戻った。

「ほう、用がなければくるな、と……」

「あっ、いえ…そういうわけでは……」

「ふん、冗談だ……まぁ、大した用ではないからすぐに帰るさ」

ただの報告だ……それも時間潰しの。

「……なら外にでも行きませんか？　私も気分転換がしたいですから……」

まぁ、辛気臭い病室よりはいいか。

……コイツの場合は先ほど失態を忘れさせたいのだろうが。

僕も用が済んだらそのまま直帰することにしよう。

「少し待っていて下さい、すぐ済みますから……」

そう言って浮遊し車椅子に乗り移り、魔法によりソレを操作し、僕の方まできた。

「ほう、なかなか器用だな……」

「……入院中は暇ですからね。魔力制御などをひたすらやっていました」

ご苦労なことだ……だが、一つだけ先に聞いておきたい。

「その格好で「今日のは一応メンズです」……そうか」

以前のようなネグリジェではなかったが、ワンピース型のパジャマだった……

僕もそのタイプを使わないことはないが……まぁ、いいか。

どうせなので医療院の庭の方へ行くことに。

道中は他愛もない世間話？

そんなもの僕たちがするわけないだろう。

ホテル・アグスタの件を簡略して伝え、あのドラゴンのことについて話す。

「まぁ、役には立ちそうだ。しばらくは僕の方で預かってやってもいい」

「そうですか……基本的に怠け者な性格をしていますので厳しくお願いします」

【いや、これ以上厳しくって……】

シャルがなにかブツブツと言っているがスルーする。

ついでなので騎士カリムが後見人を務めている部隊『機動六課』からの訓練の誘いがあった件も話しておく。

コイツは少し目を見開き驚いた表情をしていたが、すぐにいつも表情に戻り訊ねてきた。

「……どうするんですか？」

「受けようと考えている、今はヴァンも多忙で修行相手がいないからな」

「それでも修行相手ならエリオとかいるじゃないですか？」

「確かに……エリオも強くなった、近接戦闘ならお前より上だろうな。まぁ、時々やるのはいいが……後輩相手ばかりではな」

正直な話、エリオの実力は確かだ。

手合わせの相手としも悪くはない。

だがエリオは学院生活を、日々を楽しく過ごしている。

コイツは知らないだろうがエリオが話してくれた重たい過去……アイツは幸せになるべきだ。

だから幸せそうな今を僕の勝手で邪魔したくない。

「……そうですか」

そんな話をしているうちに庭まで着いたようだ。

「やっぱり外の空気の方が幾分マシですね」

自業自得で入院しているクセによく言えた台詞だな。

どちらかというと天気はぐずついているぞ？

「ふん、僕の用は終わりだ、もういい時間だしな」

雨でも降る前にこのまま帰るとするか。

「あっ、そうです。知っていたら教えて欲しいんですけど……」

「……なんだ？」

帰ろうとしたところ、控え目に訊ねてきたので仕方なく質問を聞くことに。

「ヴァイスさんはなんで入院「アホだからだ」……そうですか」

即答してやった。

妹（ラグナ）の初デートをストーキングしている際にマンホールの穴から…

…僕は不審な行動をしている知人を心配して『親切』に声をかけてやっただけだ。

本当に何をやっているんだか……自分も来年は結婚するとか言っていたクセに。

……帰るか。

「たびたび申し訳ないですが……」

まだあるのか……

「この本を学院の図書室に返却しておいてもらえないでしょうか？」

そう言って魔法で虚空から取り出したのは一冊の本。

器用なことだ……

「かれこれ2週間くらい前に借りていたのですが……」

忘れていたのか……

「明日でもいいならやってやる」

「はい、よろしくお願いします」

渡された本を見てみると古代ベルカの歴史書だった。

あの学院は教会系列のミッションスクールだからベルカ関連の本は多い。

古代ベルカ語表記の本も置いてあるくらいだ。

読める生徒などほとんどいないだろうが……

シャルも言語系が得意だったらよかったのだが……生憎とそうではなかった。

【――僕は騎士として一生涯を主に捧げ～】

とはシャルの言い訳だ。

【……って最後まで言わせて下さいよ！】

もちろんスルーした。

そんな下らないことを考えていた矢先、ふいにあることを思い出した。

コイツは確か古代ベルカ語の翻訳をしていたハズ……

そして……騎士カリムの預言書も……古代ベルカ語表記だ。

偶然だろうが……少しばかり気になったので、昨日に騎士カリムから聞けなかった預言の内容について知っているか訊ねてみた。

もしかしたら翻訳と解釈の手伝いで部分的にでも知っているかしれない。

そう少しでも知っていれば……そんな軽い気持ちだった。

だがアイツの反応は予想もしなかったほどの長い沈黙。

その後、いつも通りの読めない表情で「最新の預言は知りませんが……」と前置きし、知っている範囲を周囲には洩れないよう念話でポツリポツリと語り始めた。

――ロストロギア『レリック』から始まり、地上本部の壊滅及び管理局システムの崩壊へと至る、と思われる預言内容を……

気が付いたら僕は拳を握りしめており……預言の内容と解釈を淡々と語るアイツを……思い切り殴り飛ばしていた。

そして淀んだ空からは耳を裂くような雷鳴が轟き、僕たちに追い打ちをかけるかのように冷たい雨が降ってきた……

本編～日常、されどそれは儚くて（後書き）

エリオは強い、と

局員用の訓練とかを受けていない分、色々な経験は原作より少ないが、一対一の戦いならずっと格上と稽古してきたため、原作よりかなり上の設定です。

本編～偉大なる獅子のある休日（1）（前書き）

寒い…寒すぎる。

足が冷たい…

本編～偉大なる獅子のある休日（1）

築き上げるには多大な時間を有した存在ですら、一瞬の出来事で崩壊する

一瞬、たったそれだけで変わり果てるもの

人との関係などその典型だろう

降り注ぐ雨が、崩れ去ったものを全て流してくれればよかったのに

そして……雨が上がって空が晴れ渡ったら

新しい何かは始まるのだろうか……

人間なんてどんな出来事があったとしても腹は空くし眠くなる。

所詮はそんな存在な生き物だ。

そんな感想を抱いたのも既に十数回目。

「……もう3週間近く経つのか」

ホテル・アグスタでの初任務からもうそれだけの時間が流れてい

た。

その間に任務はなかった。

普通に学院に通い、稽古も……結局、機動六課には行かなかったが。

ヴァンも今日には任務から帰還するらしいが……あまり聖王教会には行きたくない。

騎士カリムにも、アイツにも……会いたくないから。

「まるで幼稚な子供（ガキ）のようだな僕も……」

思わず自嘲してしまう。

わかっている。

わかっているんだ。

本当はただの八つ当たりだって。

だけど……あの時

「僕はどうして……」

あんなに感情をむき出しで、ただ怒りのまま拳を振るったのだろうか？

あれは……何に対しての怒りだったのだろうか？

気が付いたら……車椅子に座り念話で騎士カリムの預言について淡々と話すアイツの頬を思い切り殴り飛ばしていた。

【坊ちゃん!?　何してるんですか!?】

「シャル！　お前は『黙っていろ!』」

殴り飛ばされた勢いで車椅子ごと転倒したアイツの胸倉を思い切り掴み上げ

「――何故黙っていた！　そんな世界の危機に関わることを!」

そう叫んだと同時に淀んだ空からは雷鳴が轟き冷たい雨が降り出してきた。

最初の一撃で口内を切ったのだろうか、アイツの口元からは血が垂れていた。

だがそんなの構わず問い続ける。

「――黙ってないで答えろ!!」

そんな僕にアイツは……

「……色々な思惑はありました……けれど……」

消え入りそうな小さな声で

「……人々の不安を煽るようなことを吹聴しろと……正気ですか？　そもそも……」

だけれど淡々と

「――問われてもいないことを教えるやる義理も義務も……ありませんから」

そう答えた。

雨足が激しくなり、ただただ……冷たかった。

「…ミリ…？　……リオ？」

アイツの答えは『問われたから答えた』だった。

そして『聞いてこない奴に教えてやる必要などない』とも言った。

「……聞いて…る…？　エミ……？」

普通に考えて、不安を煽る内容の預言など吹聴しない、させない。

おそらく騎士カリムやヴァンから口止めをされていたのだろう。

もし僕が逆の立場であっても……

「――エミリオ！」

「……えっ？　……マリアン？」

名前を呼ばれ気が付くと目の前には……少しばかり怒った顔をしているマリアンがいた。

「『えっ？　マリアン？』じゃありません！」

そうか今日は休日で……

「――ごめんマリアン！　ちょっと考え事をしていて……」

マリアンと買い物に行く途中だった。

買い物と言っても日用雑貨と食品がメインだ。

外で朝食を兼ねた昼食を済ませ、日用雑貨と食品を購入し、マリアンのウィンドウショッピングに付き合う。

そして14時を回ったところか。

なぜだろう……せっかくマリアンと2人で買い物にきているのに。

……全然楽しめていない自分がいた。

「……エミリオ？　……少し休憩していきましょうか」

そう言って彼女と近くの喫茶店に入る。

喫茶『タルタロス』……何かが激しく間違えている気がする。

内装は……いや、もう語らないことにする。

無難にコーヒーを頼んでテーブル席へ。

メニューにあった骸狩りとかもはや食べ物ではないだろう……。

「今日はありがとうエミリオ。父さんも母さんも今日は帰ってこれそうだから美味しいものいっぱい作らないと」

ヴァンもそうだが今日には大半の聖王教会の騎士たちが戻るらしい。

どうやら大きな山が終わったようだ。

「――おまちどうさまです～♪　魔界（クリフォト）コーヒーお持ちしました～♪」

眼鏡をかけた中年マスターが嘘んくさい営業スマイルでコーヒー（仮）を持ってきた。

「……どうぞごゆっくり」

コーヒー（仮）を置いてマスターは戻っていった。

そして禍々しいデザインのカップに入った液体を眺める。

見た目と香りは普通か……？

商売する以上ヤヴァイものは出さないだろうが……

「……ねぇエミリオ、ちょっと聞いてもいいかしら？」

そんなコーヒー（仮）についての葛藤をしているとマリアンが僕に訊ねてきた。

「今日の…いえ、このところずっと！　エミリオは考え事ばかりしているように見えるわ。さっきだって私が話しかけるまで全然気が付かなかったもの」

「……そうだね」

それに関しては……言い逃れはできそうにない。

「私には……相談できないことかしら？」

「マリアン……」

悲しそうな顔をするマリアンに僕もお手上げだった。

「……少し、聞いてくれるかいマリアン？」

そう言って話す……あの日のことを。

もちろん預言の内容や殴ったシーンは省くが。

「……と、こんなところかな」

「えっと……それに対してなんで怒ったかわからなくてモヤモヤしていると……？」

「……まぁ、概ねそんな感じかな」

説明したところ、マリアンはキョトンとした顔している。

そんなに変だったのだろうか？

とりあえず長く語ったせいで咽が乾いたのでコーヒー（仮）を飲む。

……カップの見た目はと名前はアレだが、意外と上手い。

僕も味には色々とウルサイ方だが……まぁ、及第点はやれる味だ。

そう思いながらもう一口飲もうとして……

「――エミリオはその子のことが好きなのね？」

「――ブッ！！」

マリアンの台詞に思いっきり吹き出した。

それでもマリアンのいる方向ではなく咄嗟に横を向いた僕はさすがだと自負する。

「――ゴホッ、ゴホッ！　いきなり何を言うんだいマリアン！」

僕がアイツを好き？

寒気がする！

そもそも僕が好きなのは……その……であって……

「まぁ、好きというのは言い過ぎかもしれないけど……エミリオはきっと心配だったのよ、その子のことが。そして自分に話してくれなかったことに対する嫉妬、というのかしら？　う～ん、それもちょっと違うかな……」

心配？　嫉妬？

この僕がアイツに……？

「……さすがにそれは違うと思うよマリアン」

「でも信頼していたのでしょう？」

信頼？

「……うん、きっとそうね。エミリオは心のどこかでその子を慕っていたのよ。きっとその子もね。けれど互いに心配させたくなかったから肝心なことは言い合わない」

僕がアイツを慕っていた？

そしてアイツも……？

「これも一つの友情なのかしらね？　きっとその子も相手がエミリオだから嘘を吐かずに答えてくれたのよ。そしてエミリオが怒ったのも無茶しているその子が心配だったから……そんなところかしら？　そもそも、そんな相手以外でエミリオは悩んだりしないでしょう？　もう何年の付き合いだと思っているの？」

お見通しよ～、とマリアンは言うが……

僕はアイツを「いや～若いっていいですね～♪　お代りはいかがでしょうか？」……このタイミングで訪れるマスターは存外鬼畜なのかもしれない。

「と、いうわけでその子に謝ってくること！　ちゃんと自分の気持ちを伝えてくるのよ……言・わ・な・い・と、今日の夕食はみんなでニンジンとピーマンのフルコースよ♪」

そう言ってマリアンはタクシーを呼び、先に帰ってしまった。

マリアンは大人しそうに見えて実は行動派だ。

有言実行しかねないだろう……せっかく叔父夫婦も帰宅するのにそれはないだろう。

さりげに自分以外の人質を取られるとは……恐れ入る。

そして時刻は……もう１５時になるくらいか。

今から聖王医療院に行って帰宅するとなると、まぁ、丁度良い時間か。

仕方ない……慕っているうんぬんはともかく、殴ったことは謝っておこう。

とりあえずレールウェイの駅まで行こうとした矢先……

「……？　今なにか聞こえたか……？」

何かゴトッというかゴリッというか……

「……あの路地裏か？」

ケンカか何かだったら放っておくが、もし犯罪だった場合は……

「ふん、準備をしておけシャル」

そう言ってシャルの封印を解く。

【――酷いですよ坊ちゃん！　僕に「また黙らせるぞ？」……ズミマゼン、グスン】

シャルの戯言を切り捨て路地裏に向う。

そこには特に何も……いやマンホールが下から開いた？

そして出てきたのは……

「――子供？」

ボロボロの布に身を包み、手には鎖を巻きつけた、くすんだ金髪をした幼子が這いずり出てきた。

……とりあえず今日の夕食はニンジンとピーマンのフルコースで確定したかもしれない。

本編～偉大なる獅子のある休日（1）（後書き）

ドブ子登場！

リオン編はきちんとまとめられたら残り1話の予定。

エリオとキャロの代わりにヴィヴィオを見つけることに成功しました。

本編～偉大なる獅子のある休日（2）（前書き）

結局まとめきれなかったので次回をリオン編のエピローグにします。

本編～偉大なる獅子のある休日（2）

【……今夜はニンジンとピーマンのフルコースで確定でしょうか？】

「冗談はあとにしろシャル」

とはいえどうしたものか……

マンホールから出てきた幼子はそのまま動かなくなった。

危険かもしれないが、放っておくわけにもいかないので近づく。

一応、脈や呼吸を確認したところ問題はなさそうだ。

おそらく疲れて気絶しているのだろう。

その証拠に足の裏はボロボロ……いったい何所から何のために……正直、疑問だらけだ。

そして手には鎖が……その鎖の先には……

「……何かの入れ物か？」

鎖が巻きついた頑丈そうなケースが『2つ』

「……シャル、わかるか？」

【ちょっと待っていて下さい、今データ照合をしてみます……該当データは……】

それにしてもボロ布一枚でコイツは一体……

【……データ照合完了、該当データ1件！　これは…！？】

「いいから早く結論を言え駄剣（シャル）！」

【グスン……このケースの中身はレリックです坊ちゃん】

「なん、だと……？」

レリック……以前にホテル・アグスタで協力した機動六課が追っているロストロギア

そしてアイツが言っていた預言の中に出てくる『旧知の結晶』

「……間違いないのかシャル？」

【はい！　以前にいただいたデータと一致しています……しかもこれは未だ封印されていません！　早く封印しないと……！】

「――ガジェットドローンか」

【……はい、市街地を戦場にするわけにはいきません！】

だが……

「僕には完全封印できないぞ……」

この手のことはアイツやリタの分野だ。

シャルの封印などはリタが作ったのだしな。

……どうする？

まずは聖王教会経由で機動六課に連絡すべきだろう。

だが、その間レリックをこのままにしておくのは危険すぎる。

ならばいっそ下水道にでも投げ捨て「……なにしてんの？」

咄嗟にシャルを構え、声のする方へ振り向く。

そこには……

「……こんな路地裏（トコ）でなにしてんのアンタ？」

「えっと……それにその子は？」

見馴れた2人組……リタとキャロがいた。

……なんだ、なんとかなりそうじゃないか。

「……レリック、ね」

事情を説明しリタにレリックの封印をしてもらう。

そして謎の幼子（仮称：ドブ子）の治療にキャロがあたる。

リタが何か意味深に呟いていたので訊ねて……

【坊ちゃん！　一段落付いたんですから聖王教会に連絡をした方が……】

「……そうだな」

シャルに正論を言われたので、色々と思うところはあるが、今は自分のできる範囲でやれることをするまでだ。

【……それにしてもこの子……似ている？　まさかね……】

そしてシャルの独り言は僕にまで届くことはなかった……

聖王教会に……いや、騎士カリムに連絡するのは少々気まずかったので、今日から帰還しているハズであるヴァンに連絡を取り、説明する。

≪――状況は理解した。騎士カリムには私から話しておこう≫

もしかしたら未だ帰ってきていないのか、と危惧もしたが問題なかったようだ。

≪――私も現場に向かうことにする、それまで待機していなさい≫

どうやら聖王教会本部には未だ帰還していなかったようで、現場から比較的近いところにいたようだ。

ヴァンとの通信を終え、一息つく。

「……とりあえず待機だ。僕が残るからお前たちは帰っても問題ないぞ？」

封印処理と治療を行っていたリタとキャロにそう告げる。

「用済みポイ？　あ～あ騎士さまは冷たいこと」

「あのっ！　この子が気になるので……お邪魔でなければ……」

「……好きにしろ」

はぁ、まったく……

【そういえばお二人はショッピングの途中だったんですか？】

シャルが２人に訊ねる。

まぁ、警戒は僕がしているし、待機中は暇だから特に文句は言わない。

「「――あっ……」」

２人揃って間抜けな声を上げた……なんだ？　何か忘れていたのか？

【えっと、どーしたんでしょう？】

「……アイツら忘れてた」

「アイツら？」

「はい、今日はエリオくんとリースさんも一緒だったんです……」

「……何だと？」

エリオはともかく、アイツは未だ入院中だろう。

……いや、もう１か月近く経つから外出許可が下りてるのか？

「ファンシーショップが気まずくて逃げたのよアイツら」

戦略的撤退だな……見事と称賛を贈ろう。

そして聖王医療院に向かわずよかったというべきか……

「あのっ、とりあえず連ｒ「待たせたなエミリオ…いや、リオン・マグナスか？」」

キャロの声を遮り、師であるヴァンが現れた。

「ふん、この際はどちらもいい。コイツが件（くだん）の子だ」

そう言ってキャロに介抱されているドブ子（仮）を指差す。

アイツらの件は一旦保留、今は現状を最優先だ。

ドブ子（仮）とレリックの入ったケースはヴァンが騎士カリム経

由で連絡した機動六課のヘリにて運搬することになり、ドブ子（仮）が気になるキャロが付添いで同乗、リタもキャロに付き合って一緒にいくそうだ。

リタの場合は帰りが楽だからとか思っていそうだが……

僕はヘリなんか……特にヴァイスが操縦するヘリなど怖くてゴメンだ。

なんというか技術うんぬんではなく、呪いじみた何か……2人にはやめといた方が無難とは言っておいたのだが……まぁ、オーバーSランクの隊長殿が護衛のようだし大丈夫だろう。

そっちは任せて、僕とヴァンは機動六課のリインフォース空曹長と共に調査にあたる。

凄く小さい……こんな人種がいるのだろうか？

だがいくら気になるとはいえ、今聞くことではない。

地下水路を辿り、何かを引きずった跡…ドブ子（仮）がきたと思われる道を検索……他にレリックと思わしき反応はないようだ。

「……ふむ、辿れそうなのはここまでか……ずいぶんと遠くからきたようだな。ここは既に廃棄都市区画ではないか」

現状、これ以上は時間がかかる……

「他にレリックの反応もないようだな……ふむ、申し訳ないが残りの調査は機動六課に頼むことにしよう。それでも良いかねリインフ

ォース空曹長殿？」

「はいです！　こちらも引き上げるようありましたので、残りの調査は陸士部隊と合同で行うです」

「ではリオン、我々も引き上げるぞ？　地上までは……ふむ、飛んでいくか」

「……いいのか？」

「なに、上は廃棄都市区画だ……少しくらい壊してしまっても問題あるまい」

「仮にも聖王教会騎士団のトップの台詞ではないな……」

「壊したらダメですよぅ！　壊さないように飛んで下さいです！」

飛ぶのはいいのか……まぁ、空戦は得意ではないが飛ぶだけなら僕でも問題ない。

結局３人揃って地上まで飛んできた。

「……解散か？」

「うむ、ここから先は任せるとしよう。越権と取られるのは面倒だからな」

結局、わからずじまいか……

「……まさか廃棄都市から歩いて帰れとは言わないな？」

「そうだな……ここでも市街地飛行に該当するか。ふむ、ヘリと合流し護衛ということで押し切るとしよう」

無茶苦茶だな……

「私もヘリと合流するので一緒にいきましょうです！」

まぁ、いい。ヘリと合流することにしよう。

3人で廃棄都市上空を飛行すること数分、ヴァイスの操縦するヘリが見えてきた。

「ヘリは無事みたいですね～まぁ、なのはさんが護衛していますから万が一敵襲があっても問題ないです！」

「ふむ、もともと問題もなさそうがな……むっ？」

【――エネルギー反応です！　これは……！？】

エネルギー反応……まさか…！？

「――ヘリを狙っているのか！？」

そして空曹長の通信より情報が入る。

≪――市街地にエネルギー反応！　……大きい！？　砲撃のチャージ確認！　物理破壊型……推定オーバーSランク！！≫

なんだと！？

それをヘリに撃たれたら……耐えられるわけがない！

ヘリにはリタやキャロ（ついでにヴァイス）も乗っているんだぞ！？

「――落ち着け！　敵はこちらを侮っている。制限のないエースオブエースならば『あの程度』問題ない！　むしろ好機だ！　私たちで敵を捕えるぞ！！」

「――そうです！　なのはさんは無敵のエースオブエースです！　グランツ騎士団長、犯人確保に協力お願いしますです！」

オーバーSランク相当の砲撃すら問題なく受けきれるエースオブエース、にわかには信じがたい……だが！

「――信じていいんだな！？」

「「――無論だ！／はいです！」」

ならば目標は……

「――エネルギー反応の地点……あのビルの上か！！」

狙うタイミングは砲撃を放った直後……自身の勝利を確信しきって油断している時！！

相手に悟られないよう、されど最速で目的地まで飛ばす。

遠くからでもわかるよう砲撃のエネルギー収束率は凄まじい。

だがヘリの護衛であるエースオブエースなら防げると味方が断言するのなら、僕たちのやることはこちら……

【――砲撃が放たれます！！】

シャルの声と同時に砲撃は赫い光を放ちながら対象（ヘリ）に向い一直線に……まるで絶望の象徴であるかのような一撃だった。

それがヘリに向い……巨大な爆音を奏でる。

敵からしてみれば例えヘリの護衛が出てこようとそれごとぶち抜くつもりだったのだろう。

だが……その考えは甘すぎた。

だから逆に……

「――今だ！　ぶち抜く！　デモンズランス！！」

砲撃級の魔槍をお見舞いしてやる！

生憎と今回の相手は殺人未遂の現行犯だ。

最初から容赦も猶予も与えない。

「――敵襲だって！？」

向こうも避け切れないと判断し咄嗟に例の砲撃を撃ったと思われる大砲らしきものを盾にしてデモンズランスを受けるが……

「――甘い！！」

デモンズランスと共に放たれた複数の大型追跡魔力弾にて爆撃する。

「アァァァァァァ！！」

「ディエチちゃん！？」

もう1人が名前を叫んでいるようだが無駄だ。

デモンズランス・ゼロ……の未完成版。

本来なら更に身体強化と自己ブーストを同時にかけ、防御力まで瞬間的に跳ね上げる攻防一体の反則技だ。

未だ習得できていないのが難点だが。

だがそれでも問題はない、なぜならば……

「――ここがお前たちの終焉だ……後悔するのだな！　滅びよ！光龍滅牙槍！！」

既にヴァンが準備を終えているからだ。

大剣（デバイス）から凄まじい極光が放たれ、それが3頭の竜を形成する。

それが犯人2人に喰らいつき……遥か上空まで吹き飛ばす。

そして……

「――市街地での危険魔法使用及び殺人未遂で現行犯逮捕です！」

それをリインフォース空曹長が空中にてバインドキャッチする。

その後、ヘリを覆っていた煙が晴れ……

≪――ヘリの無傷防御成功です！≫

それが誰の声かはわからなかったが、無傷なままのヘリが姿を現した。

本編～偉大なる獅子のある休日（2）（後書き）

ア「ヴァン師匠がなんで滅牙槍を…？」

エ「光龍槍が使えないのに滅牙槍が秘奥義になっているよりマシじゃないですか」

ア「…そうだね。そして私たちの出番がありませんでしたね…」

エ「リースさんはまだいいですよ。僕なんて名前しか出てないんですよ？　もう2ヵ月以上出演していないんですよ？　作品内の時間ですと3年くらいですよ？」

ア「それを言ったら私なんて一応主人公なのに…そもそも私が射撃で砲撃の軌道を逸らしたり、メガネを氷漬けにして捕まえたりの予定だったらしいのに…まぁ危ない目に合わなかったと思えば悪くはないけど…」

エ「だってリースさん車椅子じゃないですか…それを言ったら僕も『来たれ雷　裁きを受けよ！』とかいいながら雷槍斬撃を放っていたハズだったのに…」

ア・エ「ｏｒｚ」

エ「…それはさておき、なんで僕たちはサードアベニュー（Ｆ－２３）付近まできていたのでしょうか？」

ア「それはねえーりん…」

エ「誰がえーりんですか」

ア「ヴィヴィオを保護するために先回りしていたのですよ！」

エ「…結局ヴィヴィオはここより手前、むしろ違うルートを歩いていて、違う地点から地上に出た、と」

ア「なのでレリックのケースも落す前、むしろ落とさなかったから２つあったというわけですよ」

エ「つまり僕たちの行動はまったく無駄だったんですね？」

ア・エ「ＯＴＬ」

本編～物語の始まり、それは…（前書き）

リオン編これにて終了

本編～物語の始まり、それは…

その後のことは割愛して話そう。

何故かって？

ここから先について僕は何も手を出していない、ただ『見て』『聞いた』だけだから。

最初に犯人2人組の救援と思われる存在が超高速で接近してきた。

だが僕とリインフォース空曹長はその存在をまったく感知できなかった。

気づいたらヴァンが大剣（デバイス）を振るっており、一撃で返討ちにしていた、という状況だったのだ。

ヴァンに弟子入りして4年、いい加減近づいたかと思われた実力に未だ越えられない壁を感じさせられるような一撃だった。

そして管理局に送られるより先にヴァンと騎士カリムの連名にて、些か強引ではあるがその3名の身元調査を実施したようだ。

その内容について僕は知ることができなかったが、敵アジトの場所が判明したため、任務を終え大半が戻っていた聖王教会騎士団にて数時間後に電光石火の奇襲作戦に出たらしい。

結果、ガジェットドローンの製作者であり広域次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティが逮捕された。

それに伴い、スカリエッティと裏で関与していた管理局地上本部のトップであるレジアス・ゲイズ中将の逮捕、更に時空管理局における真のトップであった最高評議会の権限?脱と解散…ｅｔｃ

どうやら一連の事件を巡る騒ぎはこれにて一旦の終息を見せたようだ。

もちろん事件が残した爪痕は無視できるものではない。

しかし、永遠に癒せない傷痕でもない。

なんだかんだで世界は回っている。

いずれは過去の出来事と割り切り、先へと進むだろう。

結局、人間なんて生き物は先に進むことしかできないのだから……

ドブ子（仮）の件の翌日、事件の後片付けと称し学院を休み、聖王医療院へ向かう。

あの子のことが気になるのもあるが、一番の目的はアイツに会うこと。

【……昨日の夕食はニンジン＆ａｍｐ；ピーマンオンリーの野菜炒めでしたからね】

叔父夫婦は電撃奇襲作戦に参加のため不在、マリアンと２人で苦しみながら夕食を食べるハメになった。

僕だけならばまだ耐えられる。

だが、彼女（マリアン）まで苦しそうな表情をさせるのは見ていて非常に辛かった。

「……エミリオがきちんと話し合ってくるまで２人ともずっと同じメニューです」

と、心中宣言までされてしまったのだから行くしかない。

それに叔父夫婦まで巻き込むわけにはいかないのだ。

彼らは長い任務を終え、ようやく帰宅できたのだから。

今朝方帰宅した叔父夫婦の話によれば電撃奇襲作戦は成功し、主犯である広域次元犯罪者のジェイル・スカリエッティを逮捕したらしい。

また、ホテル・アグスタでの召喚師も捕まったが一緒にいた騎士らしき男は見つからなかったようだ。

そしてスカリエッティと裏で繋がっていた管理局のお偉いさんも近く捕まるらしい。

まぁ、その辺は僕の知ったことではない……そんな回想をしている間に聖王医療院に到着したようだ。

【さぁ坊ちゃん早速病室に……あれ？　どこに向かってるんですか？】

僕はアイツの病室には向かわずある場所を目指す。

なんとなくだが病室には居ない気がするのだ。

こういう勘はよく当たる方だと自負している。

アイツとの付き合いも長い。

だから……大体の予想はつく。

「……今日はよく晴れているからな」

ここで一番空に近い場所へ向かう。

そして屋上のドアを開けると……

【……ホントにいました】

「ふん、何をしているんだか……」

屋上の中央。

そこには仰向けで両手を広げ寝転がって青空を眺めているアイツがいた。

松葉杖は律儀に並べて置いてあるあたりアイツらしい。

「……入院患者は大人しく病室で療養していたらどうだ？」

いつまでもここで時間を潰すわけにもいかないので僕から切り出す。

アイツも僕が屋上に来た段階で気付いていたようで……

「……リハビリの一環です。そもそも怪我人を殴った上に雨の中に放置する人には言われたくない台詞です」

こちらを一目もせず、珍しく嫌味が含まれた返しをされた。

「ふん、悪かったな……それだけ、言いに来た」

そう言って隣に座り込み、僕も空を見上げる。

「……そうですか」

そして互いに空を見上げながらポツポツと語り出す。

「……晴れです、雲ひとつ見当たらないほどの」

「……ふん、だからどうした？」

「……何処にも目に見える変化がない、比較対象がない、進んでいるのか戻っているかもわからない……」

「……それで？」

「……今まで私は何をやっていたんでしょうか、って」

「ふん、僕の知ったことではないな」

「まぁ、そうですね」

「だから……」

「……だから？」

コイツの語る言葉の意味も意図も僕にはわからない。

でもコイツのことだから、どうせ今まで空回りしまくっていたの

だろう。

いつものことだ。

ならばいっそ……

「……忘れてしまえ」

それ以上の言葉は互いになかった。

――見上げた空は雲ひとつ見当たることのない快晴だった。

「……はぁ、そんな風に割り切って生きられたら楽なんですけどね」

ようやくいつもの溜息をしてから、よくわからない表情でそう呟く。

「ふん、別にどんな人生(みち)を歩もうとお前の勝手だ」

「……そんな末路(みち)に少しくらい手を差し伸べるつもりはないんですかね？」

ふん、思ってもないことを。

隣を横目で見下ろし、そう思いながら立ち上がる。

「……ほら、さっさと立て」

そう言って未だ寝転がっている入院患者（おろかもの）に手を差し伸べる。

それに対する反応は……

「……えっ？」

なんとも間抜けな声だった。

何が「えっ？」だ。

お前が手を、と言ったんだろうが……

まるで何が起こったか理解できない顔をしている。

誰が誰に何を……おそらく頭の中は疑問視でいっぱいなのだろう。

だが、僕にいつまでこんなポーズをさせておくつもりだ。

だからもう一度だけ、だけどハッキリと

「――早くしろアペリス」

そう伝える。

今度はキチンと伝わったようで

「……はい」

声には少しばかりの戸惑いを、だけど手はしっかりと握り返して

「……ありがとうエミリオ」

そう呟いた友人（アベリス）の表情は……どこか嬉しそうに見えた気がした

幼い頃

見上げるといつも彼女は優しく微笑んでくれていた

時が過ぎ、成長するにつれ

その笑顔を見上げる必要はなくなっていった

だが、同じ目線になるにはまだまだ足りないようだ

両親は常に暴走状態な人たちだった

だから僕は早く一人前になりたいと……騎士になると言って家を出た

僕の望むものはただふたつ

すべては彼女（マリアン）と対等な目線で交わせる一人前の男となるために

……だけど、もうひとつくらい付け加えてもいいかもしれない

僕自身の歩んできた人生（みち）での出会い、紡いできた絆

それらを切り捨てて進む強さではなく

……すべてを抱えてでも進める強さを

ちなみに僕の行動を【ツンデレ乙ゥゥゥゥ！！】と絶叫した駄剣（シャル）

は雲ひとつない青空へと散っていった。

本編～物語の始まり、それは…（後書き）

次回からまた主人公サイドです。

まぁ、ヴァン師匠は強すぎたと…一応はかつてのラスボス（笑）

ちなみにＳｔＳは未だ終わっていません。

ゆりかごは頑張って攻略せねばなりません（笑）

序々章～グレードショップ（笑）（前書き）

今回は序章にも満たない非常に短い話（？）です。

序々章～グレードショップ（笑）

「――グレードショップをようこそ♪」

なんかよくわからないが目の前には金髪で虹彩異色（オッドアイ）なお姉さんがいました。

昔、どこかで逢った気がするが何故か思い出せない。

てゆーか誰かに似ているような……

「――ここでは今まで貯めてきましたＧＰを特典に変えることができます♪　以下があなたのＧＲＡＤＥです♪」

こっちの疑問なんてお構いなしに話が進んでいく。

もう、どうにでもなれ……とりあえず見てみようか。

～～下記ＧＲＡＤＥを取得しました～～

・称号ボーナス　……３００

・スキルボーナス　……７０

・フラグボーナス　……５００

・サブクエストボーナス　……６００

・エアーボーナス　……４０００

～～～～～～～累計ＧＰ：５４７０～～

おいこら、エアーボーナスってなんだよ！？　それだけ群を抜いて高いぞ！？

「――それでは下記特典より選択して下さい♪　ご利用は計画的に♪」

こっちを完全無視してお姉さんは話を進めていく。

とりあえず掲示された特典とやらを眺めることに……

～～～～～～特典（１／４）～～～～～～

【スキル？】無限の？製　……６００

【スキル？】？の財宝　……７００

【スキル？】？？の魔眼　……５００

【スキル？】伏字解放　……５０００

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

……眩暈がしてきた。

なんて言うか……時と空を隔て過ぎた感ＭＡＸだ。

しかしチートがお手頃ポイントだ……だが肝心のところが伏字になっていて怖い。

そしてその伏字解放に５０００って……まぁ、チートなんてあっても逆に生き辛くなるだけだ。

伏字の内容は気になるが、どれを選択しても後悔しそうなので、この項目は完全無視することにする。

さて、次の項目は……

～～～～～～特典（２／４）～～～～～～

【キャラ追加】砕け得ぬ闇　……２０００
【キャラ追加】闇統べる王　……１０００
【キャラ追加】星光の殲滅者　……１０００
【キャラ追加】雷刃の襲撃者　……１０００
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

……誰さ？　はい、次いこう。

～～～～～～～特典（３／４）～～～～～～～
【アイテム】マスターボール　……３０００
【アイテム】すごいきずぐすり　……１０００
【アイテム】むしよけスプレー　……５００
【アイテム】わざマシン？？　……５０００
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

はい次、ってもう最後の項目か。

～～～～～～～特典（４／４）～～～～～～～
【スキル】秘奥義取得　……２５００
【スキル】最大魔力値アップ　……５００
【スキル】身体能力アップ　……５００
【スキル】幸運アップ　……５０００
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「――幸運アップ一丁お願いします！！」

「……まぁ、夢オチですよね」

ピロリーン！

【リバースクルセイダー】の称号を得ました！

序々章～グレードショップ（笑）（後書き）

年内完結は難しいので開き直ってゆっくり書くことにしました。

年度内完結は目指したいところですね。

序章～巡り巡ってＲｅｓｔａｒｔ（前書き）

本当はリオン編中の主人公サイドを回想しようとしましたが長くてメンドくさくなり封印されました。

その分また短くなりましたのであしからず…

序章～巡り巡ってＲｅｓｔａｒｔ

【リバースクルセイダー】

説明：２重の意味で再誕を冠する称号
条件：脇役からの主人公への復活
効果：リミッターを外させてもらう！
備考：もしかしたら同名のＢＣが使えるかもね☆

ピロリーン！

ちょっぴりだけ運が上がったかもしれません！

えっマジで！？

ピロリーン！

ただし幸運とは限りませんのであしからず。

チキショー！！

人生（みち）に迷っていたら、原点（はじまり）を思い出していた。

ハッキリ言って暴力は未だ嫌いだ。

それでも必要だと思って身体を鍛え、魔法技術を磨いてきた。

将来の選択肢を多くするために。

もちろん何もかもが順風満帆にはいかない。

むしろ上手くいかないことばかりとも思える。

それでも……今まで頑張ってきたと（無い）胸を張って言える。

だから……

……だから……

……だけど！

「――私はもっと≪は～いアペリス君～診察の時間ですよ～≫……

はい」

……人生いつもこんな感じです。

最近になって…いや大分前から薄々とは気付いていたのだが……

私って幸運（ラック）値低いんじゃね？

いや、悪運うんぬんは散々言われてきたけどさ。

……だって初等科の入学式に全治1年の大怪我するし、でっかい災害に巻き込まれるし、実験台にされるし、よくわかんない遺跡で化け物と遭遇するし、スイーツを食べに行ったら警防署に行くハメになったし、カリムさん怖いし、知り合いは死亡フラグ乱立するし、自分なりに預言対策考えたら異世界だし、お猫様を助けようとしたら全治4か月の怪我だし、主人公から脇役に降板するし、他人にまで何か悟られているし、顔面（頬）を思いっきり殴り飛ばされた挙句雨の中放置プレイだし、ヴィヴィオの件でヤヴァイと思い行動したがハズレだったし、数の子が捕まってその情報から聖王騎士団の電撃奇襲作戦、そしていつの間にか事件解決していたし……

……私のここ数年の葛藤はなんだったんだろうか？

「……今まで私は何をやっていたんでしょうか、って」

謝罪に来たらしいエミリオと屋上から憎たらしいほど快晴な空を眺め、ついつい呟いてしまった偽りのない言葉（ホンネ）。

しかし、まぁ…こんな私にでも手を差し伸べてくれる友人（？）がいるだけ有り難いと感謝するべきか。

とりあえずここ数年の悩みであったＪＳ事件が未然に防がれただけでも良しとするべきだろう……シャルは☆になったが。

……エミリオは用事があると言って屋上から去っていった。

シャルの回収にでもいくのだろうか？

私も午前中から黄昏るのは厭きたので、リハビリがてらの散歩を再開、生憎と天気が良かったので聖王医療院の庭に向うことにする。

……そして忘れていたのだ。

多分ＪＳ事件が（いつの間にか）片付いたことで色々と燃え尽きていたのだろう。

――花咲く庭で私たちは混沌（ヴィヴィッド）な出会いをした

序章～巡り巡ってＲｅｓｔａｒｔ（後書き）

キャ「…リースさんは出番があるだけ幸せ者です」

ア「…その出番も内容によると思うんですが？　てゆーかそもそも主人公という立場なんで」

キャ「わたしなんて久し振りの台詞場面なのにたった３５文字ですよ！？　しかも４年（４か月）以上ぶりの台詞が！！　メールとか名前ではいっぱい出ているのに！　な　ん　で　す　か　この格差！」

ア「いや、ＤＣ本編での台詞がなかったエリオよりは…」

キャ「それはソレ、これはコレです！」

ア「――ちょいちょい出番のある脇役【現状維持】と完全な体を張ったオチ要員【ギャグキャラ】どちらがいいですか？」

キャ「…世間って本当に冷たいよねフリード？」

フ「キュルクゥゥ…」

真・本編～晴れ時々、桜吹雪（前書き）

暑いのよりは寒いほうが好きです。

と夏はいつも思っていますが、やっぱり寒いのも嫌いです。

早く布団に篭りたい。

真・本編～晴れ時々、桜吹雪

……これからどうしようか？

聖王医療院の中庭まで散歩（リハビリ）がてら歩いてきたのだが特に目的があるわけではない。ここ数年の悩みだったＪＳ事件もいつの間にか片付いてしまったので、何というか暇なのだ。いや、今までも悩んでばかりで大きな行動をしていたわけではないのだが……

たどり着いた中庭は綺麗に整えられてはいるが緑一色で花の一つも咲いていない。見る人によってはなにか寂しい印象を与える風景だ。

それでも季節は６月終わりの夏間近、時間帯も午前なのでちらほら散歩や日向ぼっこをしている入院患者の姿が見受けられる。

最初に述べた通り目的があるわけではなかったので適当に歩き片隅に設置してあるベンチに腰掛け、再び空を眺め溜息をついた。

見上げた空は相変わらず雲ひとつない快晴。

「……はぁ、これからどうしましょうかね」

いつまでも引き摺っていても仕方無い。むしろ懸念事項が勝手に消滅しただけ『幸運』だったと認識するべきだ。そう考えられる程度には落ち着いてきた。

しかし、急に消えた懸念事項のウェイトは大きかったようで、何

か喪失感というか物足りなさというか……色々とモチベーションが上がらない状態だ。

「それにしても今日は暖かいですね」

気温湿度共に快適、この後は病室に戻って魔力制御の訓練（トレーニング）とも思っていたのだが……

「ふわぁぁ……少し……休んでいきますか……」

そっと目を瞑り、身体を休ませ心を落ち着かせる。

せめて夢の中では……そして目が覚めたら少しは……いや、確実に未来（まえ）へと進めるように。

「……まぁ、夢オチですよね」

何か不思議（カオス）な夢を見た気がする。具体的にはこれから周回プレイが始まるような……それにしても夢の中に出てきた誰かは……思い出せない。昔どこかで見た気がするのだが……

まぁ、思い出せないならどうでもいい。特に悪夢でも吉夢でもなかったと思うし、予知夢なんて類のものを見れた試しは……ない。

そんな下らないことを考えながら、ふと横を眺めてみた。

その行動に何か意味があったわけではない。何かを感じたわけでもない。本当にただ何気なく自然に……むしろ寝起きだったので少しは寝ぼけていたのかも。

そこには何かがあった、いや……いた。

「「……」」

鼻の先５ｃｍ、眼に映ったのは私を見ている一対の瞳。そして序々にハッキリしてくる輪郭……眉、鼻、口、前髪……3秒くらいたってそれが人間のものだと気付いた。

「「……」」

……なんだろう、声をかけるタイミングを逃した。今更驚くわけにもいかないし、このまま見つめ合っているわけにもいかない。傍から見たら絶対におかしい一コマだろう。

「……ママ」

「えっ？」

と思っていたら隣の子から声を上げてくれた。よく見たら小さい女の子だった。うん、この子は将来空気の読める器のデカイ人間になれるよ。

そしてこの子の台詞からして迷子だろうか？　だがこの子の服装は入院着だ。入院患者なのだろうか？

それにしても『虹彩異色（オッドアイ）』なんて珍しいね。紅と翠（ロート　グリューン）の鮮やかな瞳が神秘的に感じる。この子の金髪に良く映える色合いだ。

……うん、そろそろ現実逃避はやめようか。

「……うっ、ふぇぇ…まぁまぁぁ……」

ここは聖王医療院、時期は件のレリック発見の翌日、そして中庭……すっかり忘れていた。

……聖王の存在を。

とりあえず今は眼前で泣く子をなんとかせねば……こんな場面を見られたら嫌過ぎる。まるで私が泣かせているみたいではないか。いや、無言で見つめ合ってたけどさ。

ハンカチ……ない。
ティッシュ……ない。
パジャマの袖……半袖だった。
あるのは松葉杖のみ……

役にたたねぇ……我ながら本当に使えなかった。

しょうがないので……

「……よくわかりませんが泣かないでください」

そう言いながら頭を撫でてみる。

「……ふぇぇん…ママぁぁ……」

結果、余計に泣きだした。逆の意味で効果はバツグンだった。何これ私が悪いの？　なんかこっちも無償に泣きたくなってきたんですけど……

……仕方無い、奥の手を。バレたら後で怒られそうだから極力使いたくはなかったのだが……

プチＯＶＬ（オーバーリミッツ）！　衝撃で吹き飛ばさないように最少の力で身体に魔力を漲らせる。

入院生活中に磨いた魔力制御の成果、病室内で気軽に使用することのできたこの魔法……それの集大成、今ここで披露することにしよう。

「――無垢な魂よ、癒しの庭に集え」

その言葉と同時に足元と頭上から魔法陣が出現する。それが次第に大きくなっていき……弾け飛び光の粒子になる。そして私を中心に空中から光の雫が降り注ぐ。

「――煌めけ、イノセントガーデン」

降り注いだ雫を浴びた地面からも光が溢れ、その光の中から彩鮮やかな幻想の花々が咲き誇る。そこには地域も年代も気候も季節もなにもかも関係なく花々が咲き乱れ、無垢なる庭を形成し緑一色であった中庭を一つの楽園へと変貌させる。また、周囲の木々からも桜色の花びらを咲かせ、ヒラヒラと宙に舞わせ優しく降り注ぐ。

「……ふぇぇ？　あっ……わぁぁ……」

足元に咲き乱れる花々と空より降り注ぐ桜色の花びらにこの子も泣きやんで驚いている。そして降り注ぐ花びらを浴びている姿はま

るでこの世の全てに祝福された者のようでもある。

「……涙は拭えましたかお姫様？」

満開に咲き誇るこの庭の主役（ヒロイン）に微笑みを浮かべ問いかける。

我ながら中々に厨二感ＭＡＸの言動だが、あのまま泣かれるよりはマシ……と思いたい。そもそも、これで泣きやまなかったら、まさに無駄な労力（まりょく）だ。実はこれだけで消費量は全魔力の２／３以上なのだ。絶対零度とかより魔力消費が激しい実効果がなにもない幻術って……回復？　ダメージ？　本当になにもありませんよ？

でもまぁ、こんな魔法もいいかなって思い作ってみて良かった。本来はただの観賞用みたいなものだが。

とりあえずこれで大丈夫かな？　そう思ってもう一度頭撫でながら幼子に訊ねる。

「――お名前教えていただけますか？」

そう、それは物語が始まる最初の一言。

「……ヴィヴィオ……ふっ、ぐっ、ふぇぇぇぇ……」

また泣き出したぁぁぁぁ！？　何なの！？　私が撫でると泣き出すの！？　ナデポならぬナデナキって技能（スキル）なのか！？

「――ままぁ……ママァ！！」

と、思いっきり私に飛び込んできた……主に肋骨当たりに。

あっ、今なんか『ボキッ』って音が聞こえた気がした。

ピロリーン！

【イノセントガーデン】を習得しました！

真・本編～晴れ時々、桜吹雪（後書き）

肋骨と一緒に色んなフラグもばっきばき。

幕間～無垢なる庭の畔にて（前書き）

酒は飲んでも呑まれるな…生ビールは嫌い。

…今回はすずかの話です。

幕間～無垢なる庭の畔にて

出会いは偶然、何気ない日常の１ページだった

それ以降は必然、色々な思惑はあったけれど、わたしは選んだのだから

――自分自身の未来を

こちらでは新暦という年号を使用しているみたい。その７５年６月末、現在わたしは地球から隔たれた世界『ミッドチルダ』まできています。

以前にも何度か訪れているため目的地までは迷いません。

言語は不安だったけれど公用語は難しいわけじゃなく、翻訳する手段もあるから問題はなかった。

なぜわたしが地球を離れ遥か遠い異世界まで来ているかというと、理由は２つ。

1つは魔法技術について学ぶこと。
わたしはお姉ちゃんの影響で幼い頃から機械弄りが好きでした。
そして将来はその系統の仕事をしていくと思っていた……魔法を知るまでは。
それに関しては語ると長くなりそうなので割愛するけど正直に言うとわたしって知識欲が強かったみたい。色々考え、悩み、そして……

「――今度ミッドチルダに移住することにしたの」

前々から考えてはいたけど踏ん切りがつかなかった案を実行したの。
事前にエイミィさんやリンディさんには相談したこともあったし、お姉ちゃん達もあからさまな反対はなかった……まぁ、こっそりだったけどね。
アリサちゃんには溜息を吐かれたけど……だけど応援してくれた。

あら？　考え事をしているうちに聖王医療院に着いたみたい。
目的地である聖王医療院、今日はそこに入院している子のお見舞いにきたの。
わたしに未来（みち）を決心させてくれた子であり、わたしの弱気な発言のせいであの猫（こ）が怒って飛び出したのを助けようとして……川に落ちて……人工呼きゅ…コホン。
全治4か月はかかる大怪我を負ってしまった子のお見舞い。
母親似で女の子のような容姿と丁寧な言葉使いをする年下だけど優しい男の子、名前はアペリス君。
そう、名前と言えば……まぁ、今は置いておきましょうか。

アペリス君の病室まで着いたのでノックして所在を確認したのだ

けれど返事がなくドアを開けてみると誰もいなかった。

「……リハビリかな？」

車椅子は置いてあるのでおそらく松葉杖で移動していると考えると散歩（リハビリ）かなと思った。

それなら中庭方面かなと思ってわたしも中庭に向うことにした。

そして中庭に向う途中で……

「――えっ？　すっ…すずか…ちゃん？　なんで…ここに？」

久しぶりになのはちゃんに会いました。

うん、軍服姿が決まってるね。

なんでなのはちゃんが驚いているのかというと……

「――フェイトやはやてはともかく、なのはにはギリギリまで黙ってなさい。アイツだって魔法のこと黙っていた経歴があるんだから」

とはアリサちゃんのお言葉。

昔のこと相当根に持っているみたい……

とりあえずなのはちゃんに説明したながら中庭へ向かうことに。
なのはちゃんも入院している女の子がいなくなって探している途中みたい。

「……そうなんだ。海鳴の件は聞いていたけど、まさかすずかちゃんが……それにしてもアリサちゃん、まだ根に持ってたなんて……」

どよ～ん、とした擬音が似合いそうな落ち込み方をしちゃった。

「……ところですずかちゃんは何処に住む予定なの？」

でもすぐに立ち直り、そう質問された。

「知り合い…というのも少しおかしいかもしれないけれど、最初は知人宅にホームステイみたいな形でお世話になることにしたの。エイミィさんにも最初はその方が良いって勧められたから」

その知人というのが実はアペリス君のお母さん。
わたしのことを聞かれ、住むところを探すと言ったところ、それならウチを使えばいいと勧めてくれた。実際、来月からお世話になる予定、アペリス君の退院日からとしている。

最初は話すにも緊張したけれど『似たような趣味』を持っていたのですぐに打ち解けることができた。色々と着せ替えとかごめんね

アペリス君♪
あっ、なのはちゃんと話している間に中庭に着いたみたい。

聖王医療院の中庭は綺麗に整えられてはいるけれど、緑一色で少しだけ寂しい印象に感じられた。
少しでもお花があればいいのに……あっ、もしかして花粉症対策とかなのかな？
それにしても……

「……晴れているのに人がいないね」

パッと見た限り人影が見えなかった。

「あっ、うん。今探している子の関係で基本的にみんな部屋に戻るよう放送があったの。避難とか閉鎖とかおおげさなものじゃないんだけどね」

なのはちゃん曰く、当初は教会シスターさんがそこまでやろうとしていたところ、なんとか止められたみたい。

「……あの子は、っと……いた！」

なのはちゃんの声に反応して中庭の片隅に設置してあるベンチの方を見てみる。

そこにはなのはちゃんの探し人である小さな女の子と……

「……アペリス君？」

わたしの探し人が一緒にいました。

ここからは少し遠いので声は聞こえないけど状況からして、泣きそうな女の子を慰めようとして頭を撫でたら泣かれたみたい。

「あらら……泣いちゃった」

なのはちゃんと苦笑いしながらベンチに向おうとして……

「――魔力反応!?　大きい!?」

なのはちゃんがそう反応した。
おそらくだけどアペリス君が何かしようとしているみたい。
なのはちゃんが咄嗟に手を出して止めようとしたけど、わたしがなのはちゃんの手を押さえた。

「――えっ、すずかちゃ「信じよう？　多分、大丈夫だから」

わたしはアペリス君を信じることにした。
優しいあの子ならきっと……泣いているあの子を笑わせてあげられるなにかをするんだって……
そして……

「――煌めけ、イノセントガーデン」

中庭に光が溢れ、わたしたちを幻想世界へと誘った。

「――キレイ、まるで絵本の中の世界みたい」

辺り一面は幻想の花々で覆われ、桜色の優しい雨はここにいる者たちを祝福しているみたい。そう、無垢なる楽園そのものと言える光景が目の前には広がっていた。

先ほどまで泣いていた女の子もその光景に驚いて泣くのをやめている。

「――わたしは傷つけずに制圧する力が……守るためと救うためにあるんだって……そのための魔法使いなんだってずっと思ってた。けど……」

この光景を見てなのはちゃんがそう呟いた。

アペリス君のこの魔法は、なのはちゃんの魔法使いとしての在り方とは異なるものであり……

「……こんな魔法もあるんだね」

「……ちょっと悔しいかな」

清々しいまでにキレイで、まるで童話のような『魔法使い』の在り方だった。

あっ、でも現実は厳しいみたいで……

「「……あっ」

女の子が再度泣きだし、今度はアペリス君に飛び付いた……肋骨当たりに。

アペリス君は目を開けたまま……気絶した？

もしかしたら完全に折れたのかも……

「……とりあえず助けようか？」

「……そうだね、大丈夫かなアペリス君……」

そう言ってなのはちゃんとベンチに近づく。

わたしの時も大概だったけどアペリス君って色々と運が良くないみたい。

前はソレで泣きかけてたっけ……少し可愛かったけど。

でもおかげで出会えたのだから、感謝しなくちゃ。

――アペリス君の女運の悪さとかにね

「……もう1つの理由、わたしに勇気と切っ掛けをくれた責任、ちゃんと取ってね？　わたしの小さな騎士さん《マイ・リトルナイト》」

幻想の花咲く庭にてわたしは小さく微笑んだ。

幕間～無垢なる庭の畔にて（後書き）

す「人工呼吸は人命救助だよ」

フェ「…気を付けてね？　すずかを逮捕とか嫌だからね？」

す「わたしたちも大きくなっちゃったからね…気を付けて頂かないとね」

フェ「…いいのかなこれで？」

真・本編～そして魔窟へ（前書き）

称号「時を駆ける男（笑）」が発動しました。

いつの間にか約1か月半の時間が流れました（笑）

真・本編～そして魔窟へ

――それはきっと、どこかの昔話

――1人の優しい王様の悲しい物語

幻想の花々が咲き誇る小さな庭での語り部

――大切な存在(ひと)を失い、全てをなげうって武の道に打ち込んで……

――その結果、一騎当千の力を得たが真に望んだものには届かず……

「……のぞんだもの？」

首を傾げて訊ねる幼子に優しく微笑みかけ、続きを語る

――本当の強さ

――守るべきものを守れない悲しみをもう繰り返さない強さ

「つよさ？」

――そう、だから……

「要するに努力しても報われないという喩えだな……それにしてもお前が言うと妙な説得力を感じるな？」

「努力の方向(ベクトル)じゃないの？」

突如現れた存在に、とある王様の一生涯を全否定されました……
もっとオブラートに包め！
てゆーか言いたいことはそういうことちゃうわ！？

「……がんばってもだめなの？」

悲しい口調で幼子は訊ねて……って泣きかけてるぅぅ！？

「後世の評価なんて知ったこっちゃないわ。少なくとも自分の好きに生きれば後悔はしないわ……たぶん」

いや、この王様の場合は後世で評価され、本人は後悔の海で溺れているお話で……しかも未だ物語の途中なんですが……

「自分自身の意思で選択し、足で歩く。ただそれだけの話だ」

あれ？　何か綺麗にまとめられようとしている？

えっ、ちょ…なんかそれ違うんだけど……

「……わかんない」

「ふん、今は漠然と覚えておけ。いつか迫られる選択肢から逃げるな……それだけだ」

「まっ、自分の好きなように生きれば？　じゃあね～？」

そう言って人間暴風供（エミリオとリタ）は去っていった

そして一過してしまった嵐の後には……

「「……」」

生暖かい空気と沈黙が残され、幻想の花々も心なしか萎れて見えた気がした……

新暦７５年８月半ばのこと、２週間ほど前には予定通りの期間で無事に聖王医療院から退院することができた。

途中、肋骨がクラッシュするアクシデントもあった気がするが問題なく快調へ……んなわけがない。

種明かしは自己強化と自動治癒、実はセイクリッド・スカイに自動発動型として術式が組み込んであったのだ。

どうりで全身打撲とか肋骨に罅が入っているのに思いっきり熱唱できたハズだ。

それに思いっきり顔面（頬）を殴り飛ばされてもすぐに回復していたし……

ちなみにそんなことができる人物は２人ほど思い当たるが、どち

らも特に語りはしなかった。
まぁ、入院生活も懲り懲りなのでありがたい……いや、そもそもあの場面でデバイスがあれば無問題（モーマンタイ）だった気がしないでもないが、そこは割愛。
そして無事に退院して懐かしき我が家に戻ると……

「あっ、おかえりなさいアペリス君。食事にする？　お風呂にする？　それとも「とりあえず片付けからやります！」……そう？」

何故かすずかさんがいらっしゃいました。
なんでもここの文化に慣れるまではホームステイのような形をとるらしい。
帰宅時における常套句（やりとり）では一瞬ドキッとしたようなゾクッとしたような不思議な感じだったのは胸の内に仕舞っておくことにする。
しばらくはこっちの文化に慣れつつ資料での独学、いずれは優秀な師の下で学び、研究者へ……まぁ、管理局所属を目指すと言わないだけ少し安心した。
リタみたいな待遇とは言わないが聖王教会側で支援してあげたいものである。

さておき、その聖王教会だが……割と大変みたいだ。
おそらくだがカリムさんの義弟であるヴェロッサさんの稀少技能（レアスキル）で数の子思考を読んでアジトへ奇襲したのだろう。
しかも読んだのが『４番目』の思考……スカさん陣営筒抜けで本人も逮捕（タイーホ）され、計画の裏付けを取られた。
つまり聖王教会側はかなり早期にヴィヴィオが聖王陛下のクローンと知ってしまったのだ。
しかもゆりかごは一応健在……聖王教会も一筋縄ではいかないので色んな派閥ができて揉めているようだ。
具体的には話してもらえなかったが推測はできる……賛成・反対・

中立の三竦みが。
それもあって当の本人は機動六課で保護されている。

「ある意味でそのままですか……政治的立場うんぬんはともかくとして」

ちなみにヴィヴィオの件で聖王教会も慌ただしいが、管理局はもっと悲惨だ。
何しろ地上本部のトップが広域次元犯罪者と繋がりがあり逮捕、そして時空管理局のトップである組織『最高評議会』もこの件に関わりがあり解散と権限？脱……信頼問題とか治安維持とか、大事件自体は未然に防げたが問題が多々出てしまった。
穏便に済ませればここまで混乱しなかったかもしれなかったが、組織の膿を取り除く好機（チャンス）でもあったため、実行せざるを得なかったのだろうか？
その辺は推測になってしまうので、なんとも言えないが……

「こちらが立てば、あちらが立たず……どうにもままならないですね」

これ以上は時間的解決を待とう。
自分の中でそう結論を出し、割り切ることにした。

そして……

「……えっと大丈夫？」

「……ええ、申し訳ありませんが少し待って下さい。都合3か月近く乗っていませんでしたから」

心配そうなすずかさんにそう答えバイクのメンテナンスを行う。

「それにしても機動六課…はやてちゃんの部隊か……どんなところなんだろう？」

そう、今日は遂に（決して念願ではない）機動六課に向うのだ。

もう2か月以上前の話だが海鳴でのロストロギアの事件について報告を聞きたいという『建前』で呼び出しをもらったのだ。

どうせ地上本部も混乱中なので叩かれる心配もないと……ある意味でやりたい放題だな？

ちなみにフェイトさんもくるようなので、その後の話も聞いておきたかったため、こちらとしても問題はなかった。

すずかさんも現地関係者という名目で一緒に行くこととなった。

それに関しては部隊長の権力乱用な気がしなくもないが……

「……それにしてもミッドではその年齢（とし）で免許取れるんだね？」

「魔法技術で比較的安全に運転が可能ですから……それに陸では必需品な部隊（ところ）もありますから、それらの点も含めて年齢を低く設定してあるのかもしれませんね……よし、オールコレクト！　こちらは準備できました」

ごめんよヴァイク（ヴァイスさんから買い取った中古のバイクの略）……ずっと放置してしまって。

機動六課（あっち）に着いたらヴァイスさんに診てもらうな？

運転と後部の邪魔にならないように髪を束ね結いあげる。

ゴーグルを装着しバイクに跨りエンジンを回す。

「うん、こっちも準備は大丈夫だよ」

「では行きましょうか……目的地は機動六課隊舎です」

バイクの後ろにすずかさんを乗せて目的地に向い私は風となる。

背中から感じる柔らかい感触は役得ということで……コホン。

機動六課に着いたら真っ直ぐにガレージに向った。

ヴァイスさんには事前に連絡しておいたのでヴァイクを預けるのだ。

「メンテお願いしますね？」

ヴァイスさんにヴァイクを預けそう告げる。

「おう、任せとけって！　それにしてもお前も隅に置けないな～」

ニヤニヤしながらそう突いてくる歩く死亡フラグ男。

だがここで時間を消費するのも、何か言われるのも癪だったのでヴァイクを押し付けてさっさと隊舎に向うことにする。

「はぁ、行きましょうすずかさん。申し訳ありませんが帰りまでにお願いしますねヴァイスさん……では」

「あっ、えっとお願いしますね？」

すずかさんを促し、束ねていた髪を解きほぐしてガレージを後にする。

それにしてもこんな形をはいえ、まさか機動六課に来ることになるとは……

「人生何があるかわかりませんね……いや本当に」

「……？　どうしたの？」

「いえ…ただ、色々と感慨深いというか……」

良くも悪くも……だ。

「……なんでもありません。さぁ、行きましょうか？　あまり先方を待たせるのもアレですから」

「そうだね……じゃあ少しだけ急ぎましょうか？」

そう微笑みながらすずかさんが手を差し伸べてきた。
それを拒む道理も理由も持ち合わせていないので、その手を取り少しだけ歩調を早め私たちは隊舎に向う。

真・本編～そして魔窟へ（後書き）

次回内容はギャグ回なので区切りました。

外伝～魔窟？（前書き）

本作品の今年最後になる投稿です。

本編だけど外伝です。

外伝～魔窟？

「久しぶりだねアペリス君、３年ぶりくらいかな？　シャーリーだけど覚えてる？」

機動六課隊舎に向うと懐かしき御前様（シャーリーさん）にお出迎えされた。

「はい、お久しぶりですシャーリーさん。貴女のツッコミは私たちの心に「そこは忘れてね！？」

うん、なんかとっても懐かしい。

結局、予定時間より早く到着したため、フェイトさんは未だ来ていないそうだ。

忙しいそうだもんねあの人は。

そしてなのはさんたちも新人の訓練中らしい。

フェイトさんが到着するまで時間があるため、訓練を見せてもらうことに。

ちなみにすずかさんははやてさんとお話してくるとのこと……部隊長ヒマなのか？

シャーリーさんに案内され、訓練場に行くと……

「「――グランドダッシャー！！」」

地面…いや大地が激しく隆起して互いを串刺しにせんと、しかし同等であるため互いにぶつかり合い消滅していく。

残されたのは激しい災害のような爪痕のみ……ひとつ言わせてくれ。

なにしてんのおまえら

エミリオとリタ、ツンデレ2人が訓練場を破壊する勢いで争っていた。

確かエミリオは以前に機動六課からスカウト（？）されて一緒に訓練（トレーニング）に誘われたとか言ってた。

そしてリタはおそらく今回の呼び出しの件で来たのだろう。

そこまではわかった……いや、そこまでしかわからなかった。

この2人が争うなんて……そういえば割と下らないことで殺り合ってたっけ。

「今回は何が原因なのでしょうか？」

「えっ？　これって日常茶飯事なの！？」

隣で騒ぐ「無視しないで！？」周囲を見渡すと……うつ伏せで倒れている2人の存在。

「――良き来世を」

合掌しておく。

「スバルもティアナも死んでないからね！？」

それにしてもなのはさんはどこ「ガン無視ですか！？」……あっ、上空にいた。

しかも何か魔力を集束させていらっしゃいますよ？

「――少し落ち着こうね？　スターライトブレイカー・マルチレイド！！」

貴女が落ち着け、そして集束砲（ブレイカー）をこんなとこで使うな。

そんな思いも虚しく、天からはピンク色の分割多弾砲（マルチレイド）……もはや極光の奔流そのものが地に降り注ぐ……既に倒れている2人にすら容赦なく。

「スバルゥウティアナァァ！？」

吹き飛ばされ宙を舞う2人を眺め、眼鏡（シャーリーさん）が絶叫する。

そして本来の標的（ターゲット）はというと……

「――その程度の光で」

ＳＬＢ－ＭＲの極光がエミリオの周囲で捻じ曲がって収束されていき

「この闇を照らせると思うか！！」

エミリオの頭上に現れた黒き球体に完全に吸収される。

「――ブラックホール！！」

今度は当たり一面を黒き極光で飲み込んだ。

ちなみに宙を舞っていた2人も当然巻き込まれる。

「スバティィィイ！？」

酢飯（シャーリーさん）が再び絶叫する。
しかし悲劇はまだまだ続く。
「――宙（そら）に放浪せし無数の粉塵、驟雨となりて大地を礼賛（らいさん）す！」
ＳＬＢ－ＭＲを転移で避け、なのはさんより更に上空で準備しているリタの姿が見えた。
さりげなく目を瞑って下を見ないようにしているところはご愛敬。
でもさすがにそろそろこの辺も危ない気がしてきた。
命中補正とか目瞑っているからできないだろう……転移魔法を発動して隊舎付近まで逃げる。
「あっ、シャーリーさんの回収忘れてた……」
そして間もなく逃げてきた方向から何度も轟音が響いてきた。
とりあえず向こうにいた人たちに全てに合掌しておいた。
「どっちが強いだとか下らないことでも争っているんでしょうかね？」
きっと誰かに「どっちが強いのか」とでも問われあそこまで発展したのだろう。

本当に下らない……まぁ、誰が最強かと問われなかっただけ戦火を広げずに済んだとも言えるか。

「……ママ？」

その声に反応し振り向くと、以前に私の肋骨をクラッシュして下さった魔王女（ヴィヴィオ）と……

「キュウゥゥ！？」

長ヒョロイ生物（ナマモノ）がいた。

うん、こっちも退院してからずっと忘れていた。

そういえばエミリオに預けそのままだったっけ……

「……ウルルン？」

しかも勝手に改名されていました。

まぁ、いいか。思う存分ヴィヴィオの遊び相手になってやるが良い。

「こんにちはヴィヴィオ？　もう1か月以上ぶりなんだけど覚えているかな？」

「……うん」

「そっか、皆さん忙しいみたいだから、少し遊んでましょうか？」

「……ウルルンもいっしょ？」

「キュウゥゥ～」

「ええ勿論……後で覚悟しなさい駄竜（ハク）」

「キュッ！？」

「では……煌めけ、イノセントガーデン」

以前と同じように、だけど小規模の幻想庭園を創り上げ、虚空から一冊の本を取り出し語り始める。

「――それはきっと、どこかの昔話……」

とある覇王の戦記、選んだのは偶然だが聖王と縁深い物語でもある。

ふぅ、別に現実逃避ではないのだよ、現実逃避ではね。

後に外の状況を確認した部隊長（はやて）は荒れ果てた訓練場を眺め絶望する。

そして傍らに咲き誇った幻想庭園（イノセント・ガーデン）にて眠りにつく。

「これは夢なんや、ごっつい悪夢なんや。ほら見てみぃ？　ここには荒れ果てた大地やなくて彩り豊かな花々が咲いとるやん……」

「はやてちゃん、そっちが幻想なんですよ」

「あはは～妖精さんが何か囁いとるぅ～」

「ダメですねこのマイスター」

「私は狸王（タヌキング）になるんや……」

「ところではやてちゃん知っていますか？　機動六課が今まで目立った功績を上げていないこと」

「もう嫌や……なんで私の人生に終焉の笛が鳴り響いてんねん（泣）」

外伝～魔窟？（後書き）

所詮は外伝です。

それでは良いお年を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6126u/

私のリリカル・まじカオスな転生記

2011年12月18日06時47分発行